九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

戦後北部九州のサークル運動における文学 ： 「サークル村」を中心として

茶園, 梨加

https://doi.org/10.15017/1440990

出版情報：九州大学, 2013, 博士（比較社会文化）, 課程博士
バージョン：
権利関係：全文ファイル公表済

九州大学大学院比較社会文化学府　博士論文（甲）

戦後北部九州のサークル運動における文学
―「サークル村」を中心として―

茶園　梨加

目次

序章
第一節　本論文の目的と問題設定……2
第二節　先行研究―戦後文化運動の再評価・再定義……3
第三節　炭鉱と文化運動……5
第四節　サークル運動の可能性―一九六〇年前後の議論……8
第五節　本論文の構成……11

第一部　サークル運動における文学の役割

第一章　日炭高松におけるサークル運動
第一節　日炭高松のサークル誌を対象とする理由……16
第二節　日炭高松の文化運動の諸相……17
第三節　職場機関紙の特徴……22
第四節　「労働藝術」から「高松文学」を経て、「炭砿長屋」まで……25
第五節　「月刊たかまつ」「文芸誌たかまつ」……33
第六節　「ガリ版文化」と炭鉱労働者……36

第二章　文学サークルの展開と、その表現―「山田文学」の場合
第一節　はじめに―森田ヤエ子「がんばろう」……41
第二節　掲載作品―故郷・労働・占領……43
第三節　木村日出夫の詩とその評価……48

第四節　誌上議論と「発禁」……50
第三章　労働闘争のなかの文学―三井三池と文化運動
第一節　「サークル村」を端緒として……55
第二節　戦後大牟田における文化運動……56
第三節　組合機関紙からみる文化運動の広がり―文学とうたごえ運動……59
第四節　機関紙「みいけ」に寄稿する作家たち……61
第五節　外部からの批評……63

第二部　サークル運動の内と外

第四章　上野英信「あひるのうた」におけるサークル運動と朝鮮人
第一節　はじめに―問題設定……68
第二節　作品の舞台と登場人物の特徴……69
第三節　日炭高松における「アリラン峠」の存在……71
第四節　掲載誌「地下戦線」の特徴……73
第五節　五〇年代における「国民」・「国民文化」という概念……75
第六節　文化としての紙芝居……78

第五章　森崎和江作品にみる聞き書きと詩―「まっくら」と「狐」の関連から
第一節　はじめに―問題設定……81
第二節　「まっくら」の成り立ちについて……82
第三節　詩における対話表現―「狐」……84

第四節　「無名通信」と「狐」―同人の反応……89
第五節　『第三の性―はるかなるエロス』へ……90

第六章　石牟礼道子『苦海浄土―わが水俣病』成立の過程
第一節　はじめに―石牟礼道子研究史……93
第二節　問題設定と作品書誌……96
第三節　物語の構成・語りの特徴……97
第四節　一九五〇年代の記憶の消去―「サークル村」と「苦海浄土」……99
第五節　「熊本風土記」と「苦海浄土」……102
第六節　「ルポルタージュ」から「文学」作品へ……103

終章……108

資料編
A「月刊たかまつ」解題・総目次……116
B「山田文学」目次……130
C「辺境」・「兄弟」解題・総目次……153

注……196
参考文献一覧……223
謝辞……237
初出一覧……239

序

章

第一節　本論の目的と問題設定

本論文は、「サークル村」とその周辺の文学集団、運動体に所属する同人たちの作品を取り上げて彼らの創作方法を調査することで、彼らがいかなる背景のもとで創作を行ったのかを考察しようとするものである。戦後文化運動は一九五〇年以降全国的な広がりをもった運動であった。文化運動を支えたのは、作家として活躍する同人だけではない。掲載された小説や詩、短歌、生活綴り方は、所謂「無名」の書き手によるものである。それらは二〇〇〇年以前まで、文学研究のみならず、その他の研究領域においても、まともな考察対象になってこなかった。しかし、そうした人々の表現活動の評価と位置づけは、文化運動総体の把握においても、戦後文学史、思想史を把握する上でも、きわめて重要である。庶民による数多くの創作がなされ文化が形成された点に文化運動の性格がある以上、そうした人々の表現活動にこそ、本質的な考察の意義があると考え、資料発掘を行い検討を行う。

これまで文化運動、サークル誌研究は、サークル誌（発表媒体・運動）自体の意義を把握することと、個々の表現の再評価の二方向からのアプローチによって行われてきた。そのなかで、一九五〇年代から六〇年代の炭鉱におけるサークル研究は等閑にできない。当時のサークル誌の豊かな実践に対し、サークル研究が十分になされているとは言い切れない。

例えば、上野英信は上田博、国上伸雄、山崎喜与志らとサークル誌「地下戦線」[1]「炭砿長屋」[2]「月刊たかまつ」[3]を刊行し、自らも絵ばなしやルポルタージュのかたちを採り、炭鉱の現実を創作、記録する。また、森崎和江は炭鉱町の女性たちを集め、河野信子、阪田さかえ、森田ヤエ子らと女性交流誌「無名通信」[4]を創刊。詩を創作しながら、聞き書き「スラをひく女たち」を連載する。その後、「無名通信」での交流は『第三の性―はるかなるエロス』[5]の創作へと繋がっていく。当然ながら各々の対象や視点は異なる。だが、虚構をもたせる創作と、記録性のあるルポルタージュや聞き書きの、双方向から炭鉱の現実を表現しようとした点において共通している。これは、発表媒体の動向と個々の表現を把握することで初めて得られる手触りであった。

一方、一九六〇年前後はサークル論が発表された時期でもある。一九五九年一〇月の雑誌「文学」では、「文化運動における創造と組織」というテーマのもと、サークル論がまとまって掲載された。そのなかで、谷川雁のサークル論を「アジア型共同体の再生を夢みる独特なサークル論であり「個性没却」の思想をきわめて個性的に語る加害妄想のごときもの」[6]と批判するものもあった。また、炭鉱労働者のサークル運動について「行動と思想のサケメが横たわっているというのが」、否定できない現状[7]と表現の困難さを指摘するものもある。当時、サークル運動はどのように捉えられ、どのように捉え損ねられてきたのか。サークル誌と中央誌の往還でみえてくるように思う。

ここでは、まず、これまでの戦後文化運動に関する先行論を「サークル村」[8]を中心に概観するとともに、研究史の広がりを確認したい。そのうえで、あらためて炭鉱という場所におけ

る文化運動の様相を捉える。さらに、一九六〇年前後に中央誌に掲載されたサークル論を確認し、どのような論点で議論が行われていたのか、そしてサークル運動の可能性はどこにあるのか、整理したい。

第二節　先行研究―戦後文化運動の再評価・再定義

「サークル村」研究史については、坂口博の「『サークル村』復刻の射程」[9]に詳しい。重なる部分もあるが、「サークル村」や戦後文化運動に関する主な先行研究を中心に紹介しておきたい。

先行研究のなかでその後の研究に広く示唆を与えたものとして、まず一九七一年の大沢真一郎「戦後サークル運動の到達点は何か―「サークル村」の展開過程に即して（集団の戦後思想史）」[10]を挙げることができよう。この論文は、その後『共同研究　集団』[11]に収録された。谷川雁の「創刊宣言」にみられるサークル理論、「サークル村」の発端、創刊号の内容と性質、労組との関係や、大正行動隊へと移行する過程で、文化創造運動としての集団の意義を深めることができず解体に至ったことが論じられている。

二〇〇一年四月に発刊された松原新一『幻影のコンミューン―「サークル村」を検証する』（創言社）では、「サークル村」誌上に発表された各々の作品を、生活記録、坑夫たち、故郷、聞き書きというキーワードのもとにとりあげている。またその一方で、集団の交流理論や共産党との関係悪化の過程にも触れながら、「サークル村」の独自の共同体理論を論じている。

同年一一月には、水溜真由美が「同化型共同体の拒絶―森崎和江と炭坑」[12]を発表した。森崎が大正行動隊へと活動の中心が移行するなかで、「労働者集団が権力の二重構造に再統合されていく過程を幾重にもたど」りながら、『サークル村』を初めとする戦後の炭坑労働者の運動が、同質的な集団原理を持ち、また権力の二重構造の中で機能する伝統的な共同体のあり方を否定し得なかったこと」を批判したと論じる。また、水溜は、「サークル村」から「派生」した「無名通信」について「森崎和江と『サークル村』―一九六〇年前後の九州におけるリブの胎動（戦後六〇年）」[13]で論じている。九州の炭鉱地帯に先駆的なフェミニズムの視点が生み出された理由を、①ユニークな「交流」の理念を掲げ、労働者・民衆の間に潜在する様々な断層を積極的に浮かび上がらせようとしたこと、②戦後いち早く近代的な家族制度・ジェンダー規範の受け入れを強いられたという炭鉱の特殊事情が、近代的なジェンダー規範に対するリブ的な批判の視点を生み出したこと、③同人たちが関与していたサークル運動・労働組合運動は、その家父長制的性格によって、フェミニズム的な告発の視点を芽生えさせたこと、以上三点にみている。

こうした成果のうえに、雑誌「サークル村」復刻版[14]が刊行された。復刻版の解説として、松下博文「「はさまれる」思想―『サークル村』解説にかえて」、坂口博『『サークル村』創刊前夜」、井上洋子「『無名通信』をめぐって」が発表され、各々「サークル村」と「無名通信」の創刊と終刊に至る経緯が詳細

にしめされた。

サークル誌の復刻が相次ぐなかで、大阪在日朝鮮詩人集団による文学サークル誌も復刻された。宇野田尚哉「『ヂンダレ』『カリオン』『原点』『黄海』解説」[15]は、その解説であり、戦後サークル運動のなかで、在日朝鮮人による文学運動がどのように成立していたのかを論じている。五〇年代に全国的に注目されていた東京南部（大田・品川・港区）のサークル誌復刻にあたっては、道場親信の解説「無数の「解放区」が異なる地図を作りだしていた時代」[16]が詳しい。道場は、「「文学」なるものと「政治」なるものの接合を果たそうとしていった」彼らの活動は、「「政治」か「文学」かという二者択一の中で設定された論争の枠をはみ出すものであり、制度的「文学」に再定義を迫る可能性をもった関心」であると、サークル誌を対象とする意義を述べる。

一方、これらの運動のなかで共通するテーマとなったのが、反核・反原爆であった。「〈広島／ヒロシマ〉をめぐる文化運動再考」が特集となった「原爆文学研究」八号[17]では、文化運動が特定地域の現象ではなく、全国的にひらかれたものであったことが確認されている。

「サークル村」に関する議論としては、佐藤泉「共同体の再想像―谷川雁の「村」―」[18]も挙げることができよう。「谷川雁のサークル論の読解」を行いながら、「文化運動がなぜ、どのように集団主体の創出を企図したのか」を論じている。「人々のエネルギーはある場合にファシズムの表象と結びつき、他の局面では社会変革の組織によって方向付けられることもあり」え、「だからこそ、人々が表象され代表される客体の地位にとどまるのではなく、自らの表象を創りだす運動が重要なのである。文化運動の重大な意味、その存在理由はなによりこの点にかかっている」という。「党派組織に代表されるのではなく、人々が自らに働きかけ、それによって自己をうみだしていく」。「サークル村」は、「個人主義の対立物として語られてきた古典的な共同体ではなく、戦後の思想布置そのものを組み換えることによって想像可能となった新たなコミュニティである」と論じている。

二〇一一年二月に刊行された新木安利『サークル村の磁場　上野英信・谷川雁・森崎和江』（海鳥社）は、いわば『幻影の コンミューン』以降からそれまでの、「サークル村」に関する成果の現状を読み込み、ひとつの物語として提示したものである。「サークル村」までの経緯、その後大正鉱業に対する合理化闘争であった大正行動隊の活動、大正鉱業退職者同盟への展開のなかで生じた対立の様子やその後を綴る。特に、「7大正行動体と大正鉱業退職者同盟」では、退職者同盟の書記であった河野靖好による「注釈」が随時引用され、運動の展開、対立、谷川雁が東京へ去る過程が丁寧に記されてゆく。一方、森崎和江への聞き取りも行っており、証言記録にもなっている。

水溜真由美は、二〇一三年四月に刊行された『『サークル村』と森崎和江―交流と連帯のヴィジョン』（ナカニシヤ出版）においてそれまでの「サークル村」に関する論文をまとめ、成果を発表している。書き下ろしの序章では、一九五〇年代における労働運動の状況が述べられている。炭鉱では労働者が分断さ

れる傾向にあったこと、それは企業ごとの分断だけでなく、大炭鉱と中小炭鉱における労働者の分断、格差であり、そのなかで「サークル村」は、企業間の断層、本工・臨時工、下請け工など労働者の身分間の断層に関心を向けていたことが指摘されている。さらに、谷川、森崎、上野が「サークル村」終刊後も、ヴィジョンを共有していたことを各々の著作をもとに丹念に可視化している。そのヴィジョンとは、異なる立場の者の分断を強調することによって、統一をみる、という『サークル村』創刊宣言に見られるヴィジョンであった。

以上の研究成果の他に、研究の背景として戦後文化運動研究の地域的、分野的ひろがりが指摘できる。戦後文化運動の最盛期であった一九五〇年代という時期に注目し、ルポルタージュや生活綴方としてあらわれた「記録」の表現方法を広く捉えたものに鳥羽耕史『１９５０年代―「記録」の時代』[19]がある。鳥羽には、「人民文学」とその後継誌「文学の友」について論じた「解説『人民文学』論　「党派的」な「文学雑誌」の意義」[20]もある。美術としてはJustin Jesty、徳永恵太による「千田梅二論」[21]、山口洋三「九州派とサークル村―その関係性をめぐるノート」[22]、黒ダライ児「九州派　都市のなかの「民衆」」[23]がある。うたごえ運動については、水溜真由美「一九五〇年における炭鉱労働者のうたごえ運動」[24]、演劇については石川巧「敗戦後の福岡における演劇・芸能復興年表」[25]がある。また、時代を五〇年代に限らず、戦前から行われていた生活綴方運動や、女性表現に注目したものに中谷いずみ『その「民衆」とは誰なのか　ジェンダー・階級・アイデンティティ』[26]がある。一方、文学館では企画展の開催が相次ぐ。福岡市文学館では二〇一一年一一月三日～一二月一一日、企画展「サークル誌の時代　労働者の文学運動1950-60年代福岡」を開催、図録を発行。北九州市立文学館は翌二〇一二年一〇月二〇日～二〇一三年二月一一日、企画展「働き、書いた―北九州の職場雑誌展」を開催、図録を発行した。その他、上野英信や森崎和江の書籍にその作品を掲載することで、共同創作をおこなっていた山本作兵衛の絵画作品が、二〇一一年六月にユネスコ世界記憶遺産に登録されている。世界記憶遺産への登録は、筑豊炭田における庶民の芸術を捉え直す一例であるといえる。

第三節　炭鉱と文化運動

さて、戦後文化運動の盛り上がりは一九五四、五年だと言われている。炭労（日本炭鉱労働組合）主催の雑誌「月刊炭労」は、五三号（一九五四年六月）から「学習雑誌」を宣言し、サークル運動を広める雑誌へと姿を変える[27]。毎年文芸コンクールを開催し、炭鉱のサークルの書き手によって書かれた作品をたびたび掲載した。「月刊炭労」において、取り上げられたのは、筑豊や杵島、長崎、山口県の宇部、福島県の常磐、北海道などの炭鉱サークルの書き手たちの作品であった。その中には、日炭高松のサークル誌「地下戦線」「炭砿長屋」「月刊たかまつ」で創作を発表していた山崎喜与志、大正炭鉱「裸像」の歌人・沖田活美、古河目尾（しやかのお）炭鉱「萌芽」「やまの音」「短詩型」の山本詞、山口県の宇部興産で発行されていた「まきやぐら」の詩

人・花田克己などがいる。

炭鉱の記録作家として知られている上野英信は、主に日炭高松のサークル運動で活躍をしていた。炭労が発行していた「炭労新聞」紙上には、一九五五年一月から五六年まで上野の「せんぷりせんじが笑った」、「はじめての発言」、「みんなで書いたラクガキ」、「親と子の夜」、「ひとくわぼり」が連載される。また、炭労の教宣部は「せんぷりせんじが笑った！」[28]、「ひとくわぼり」の幻灯を制作した。「せんぷりせんじが笑った！」は二〇〇六年にポレポレタイムス社よりＤＶＤ化[29]されている。

文芸コンクールの開催の他、毎号のように眞鍋呉夫や西野辰吉がサークル誌紹介の欄[30]を担当。各地にどのようなサークル誌があり、そのような作品が掲載されているのかが読者に知れわたるのである。だがこのような情報交換は「月刊炭労」誌上のみで行われていたわけではない。サークルの同人たちは、互いのサークル誌を交換し合うことで直接の交流を図っていた。例えば、大正文芸サークル「裸像」誌上の受贈誌一覧をみると、「振子」（中間町文学サークル）「炭砿長屋」（高松文芸学習会）「月刊たかまつ」（日炭高松文学美術サークル協議会）「山田文学」（山田文学サークル）「北九州文学」（新日本文学会北九州支部）「まきやぐら」（東見初文学サークル）「ひろば」（古河雨竜文学サークル）「火山脈」（雄別火山脈文学会）といった名前が挙がっている。また他サークルの作品が転載されることもあった。「山田文学」二六号は「各地サークル誌の作品」を特集とし「まきやぐら」の花田克己や「裸像」の山野てつをの詩を転載。「月刊たかまつ」では宮本正義「ボタヤマ」（三井田川労組機関紙「たがは」より）、大正鉱業労働組合歌「夜あけの歌」歌詞と楽譜を掲載している。

炭労が講師として作家たちの派遣を行っていたことも忘れてはならない。『ノリソダ騒動記』[31]の杉浦明平、『真空地帯』[32]の野間宏、『機械のなかの青春』[33]の佐多稲子らが九州に講師として来鉱している。杉浦明平の来訪は、「山田文学」で森田ヤエ子が「炭労文化講師として来山したルポルタージュ作家、杉浦明平に逢って」[34]に記している。野間宏については「高松文学」[35]のなかで記している。野間が座談会をひらいたのは一九五五年二月二〇日。これは、「高松文学」創刊よりも五ヶ月前のことであった。講師の山元訪問により、サークル運動がより活性化され雑誌創刊に至ったのである。野間に関しては、同年二月一五日に三井三池炭鉱でも座談会を開催[36]、長崎芽だち文学サークルでは、同年二月一一日に野間の講演と映画「真空地帯」の上映を行っている。野間が五五年二月の中旬から下旬にかけて北部九州をまわり、各々の場所で講演や座談会を開いていたことが分かる。

一方、佐多稲子は五二年三月に日炭高松を訪れた[37]他、六〇年一月に総評（日本労働組合総評議会）の文化オルグとして三池を訪問している。その際に主婦会と懇談会を開いていた[38]。

三池闘争が終盤にさしかかるにつれて、他炭鉱のサークル誌でも三池関連の記事が散見される。三池を訪れた様子がオルグ日記や、短歌、詩作品として発表された。例えば、山本基志は、「やまの音」二号[39]に「三池オルグの記（1）」を発表してい

る。同じく「やまの音」では、山本詞が「三池の人々」と題する短歌群を発表。そのなかには闘争で亡くなった久保清について詠んだ一首がある。

刺殺されし一人を葬る場に満ちて新しき怒りとなりゆく嗚咽ぞ

前述の「山田文学」には同人に、森田ヤエ子がいた。うたごえ運動で活躍することになる。三池製作所の合唱団のリーダー荒木栄作曲、森田作詩の「がんばろう」の歌が、後に三池闘争を象徴する歌として発展する。一九六〇年八月には、第二回西日本のうたごえ祭典が三池炭鉱ホッパー前で行われ、合同曲として「炭掘る仲間」、荒木作曲「三池の主婦の子守歌」が選ばれた他、「がんばろう」も歌われた。参加者は約六〇〇〇名であったという[40]。この数には驚かされるが、皆に知れわたった歌を、共に歌い上げることが闘争における連帯を高めたのである。

このように炭労を介して、直接的にサークル間、個人単位で交流が行われるなかで、より広い母体が求められていた。一つの端緒として、「第一回筑豊文学サークル懇談会」の開催があった。九州採炭のサークル誌「あしおと」一号[41]に掲載された草笛健作の文章によると、五七年一〇月二〇日上山田の労働会館において、筑豊地域の文学サークルの書き手たちが第一回筑豊文学サークル懇親会をもっている[42]。参加したのは、上山田、山野、二瀬、九州採炭、日炭高松、大正、田川、木城の同人。上野英信が中心的に画策した会であった。これは、筑豊地区における文学サークル協議会の設立計画を念頭においた集いであったという[43]。会の開催が文学サークル協議会の設立を目的としていたのである。また、杉浦明平を迎えての「第二回文学サークル代表者会議」も開催されている。参加したのは、古河目尾、山野、杵島、大正、高松、上山田、三池、九採、岩屋、大辻、新入炭鉱のサークル同人であった。

直接は繋がらないにしても、以上のような個々のつながりの総体を基に、五八年、九州サークル研究会「サークル村」の創刊が位置づけられる。他産業も交えた九州・山口のサークルを母体とする集団であった。六〇年六月に発行された「サークル村」三巻五号の特集は、「三池から吹いてくる風」。そこで谷川雁は「反暴力」という文章を寄せている。三池の労働者たちが、上からの組織化をひとつずつ剥いでいく過程を通過しようとしている、という。炭鉱労働者の地金をとおして民主主義に探りを入れられつつあり、われわれの文化運動においても、「坑夫の地金を食いあらしているのがわれわれの文化活動ではないか。それは坑夫の地金を鍛え上げるどころか、触ってもいはしない」と自己批判的に述べていた。「反暴力」とは、組合という組織から自立した自己による、下からの文化創造によって初めて抽出されるものであるだろう。

五〇年代末頃から六〇年代前半にかけて、炭鉱における文化運動は衰退の一途をたどる。運動の過程で解散を余儀なくされたサークルも存在した。労組と、独立して活動をしようとするサークルの間に軋轢が生じたこと[44]や、六〇年代に入って石炭

から石油へとエネルギー転換が行われ、各地の炭鉱が閉山していったことが大きな理由として挙げられる。だが「サークル村」に至る過程として各々のサークルを見るならば、広くまとまりながらも個をつぶさない集団が創造されていったことは一つの「成果」としてみることができるのかもしれない。党や組合といった枠組みではなく、さらに広い媒体へ、集団的創造主体の形成へと歩みを進めようとしていく。そしてその中で文学が一つの表現方法として選択されていたこと。現在の文学の限界を超えるものが、サークル運動のなかに探れるのではないだろうか。

第四節　サークル運動の可能性―一九六〇年前後の議論

「サークル村」が同時代、そしてそれ以降に与えた影響は小さくなかった。一九五〇年代後半には、サークル論が数多く発表されるようになる。終戦直後、GHQによる占領により「与えられた」解放と民主主義という「大きな輪」と、同心円である「大衆の実情」の「小さな輪」の間には空間が存在した。この「小さな輪」から空間を埋めていこうとした試みが戦後サークル運動であったといわれる[45]。五九年六月「文学」において、谷川雁は「サークル運動の現在地点」と題し、サークルの現状を論じている。「去る三月二十九日、国民文化会議が主催した文化活動者会議」において日高六郎が文化運動の現状についての報告を行ったことを基調としている。谷川の文章のあとに添付された日高の「〈資料〉文化活動地方代表者会議における問題提起（三月二十九日）」によれば、サークルの「独立王国主義」を打破するために、より「大胆な交流」「異質のものの交流によって交流するもの」が必要であるという。そのために計画されたのが「国民文化全国集会」と全国交流誌であった。同年九月に、「サークル村」が全九州サークル交流のための会員誌として創刊されるに至る。

同年一〇月の「文学」では、「文化運動における創造と組織」というテーマのもと、サークル論が纏まって発表されている。そのなかで、「政治的志向と芸術的感覚が統一され、集団的志向と実存的発想とが統合される方向へむかって努力すればよいという、道徳教育的解決法は、サークルの活気を喪失させるものだ」、「「政治主義」的偏向を指摘されたならばサークルの政治的領域での自己表現が、「政治主義」の名に価しないほどに、陳腐なものでしかないことを恥じるべきだ」（日高六郎「サークル的姿勢について」）といった言葉とともに、本章一節で挙げた、いいだ・もものの批判や、眞鍋の指摘が掲載された。

もう一つ、議論の場として、雑誌「民話」を挙げることができる。「民話」は、「サークル村」とほぼ同時期に創刊された雑誌である[46]。日高六郎は、「谷川テーゼをそのまま肯定するかどうかは別として、知識人と大衆とをそれぞれ否定的に媒介する「工作者」の発見は、「大衆」の意味を深化させていく第三の時期のめじるしだと思う」と谷川の「工作者」の概念を評価する[47]。ここでの日高の言葉は、大衆に対しては知識人であり、知識人に対しては大衆であるとする、谷川の「工作者」の概念が下敷きになっている[48]。一九五〇年代末は、そもそも全国的

に見て、サークル運動が下火になっていた時期であった[49]。サークル論への批判／賛同というかたちでサークルに関する議論は存在していたのである。

では、谷川自身は「民話」誌上でどのように述べていたか。九号[50]に発表された「観測者と工作者」において、谷川は、工作者の概念を観測者を例に挙げ説明する。大衆論や組織論にとりくむ者は、まず観測者でならねばならない。それは、自分の立ち位置に対する的確な認識を持つ必要があるからである。だが、観測する行為は、「一面において冷たく見る行為」ではあるが、「単に客観的な運動のなかの一粒子であるだけでなくみずからの決意によってかすかに自身の運動を開始している」のだという。「見るという行為が見る前の自分をすでに変化させてしまう事実をどのように計算するか―このことをぬきにすれば、観測者は観測者でなくな」る。つまり、観測者は、見ることによって見る前の自分を変化させるのである。ここに、「観測者の大衆をつなぐ媒介項は」ある。しかし、ここで労働者が自分自身を見ようとすると、「観測者が観測者でなくなったように、もはや労働者でなくなるという現象が起る」のである。ここに、プロレタリア文学の最終的錯誤があるという。

> プロレタリア文学の最終的錯誤は、労働者のイメージを肉眼的にとらえうると前提しているところにあるのではないか。現代の民話を描こうとする、衝動もまたこの錯覚の所産ではあるまいか。／（略）／観測者であり、かつ労働者である存在と、労働者であり、かつ観測者である存在の間には微妙な緊張関係ができてくるのは当然です。私はいまその戦いをたたかっています。この相互戦闘の範疇にはいる人々を私は工作者と呼んだのです。

ここでの観測者の例は、労働者を肉眼的にとらえ、表現（記述）でき得るとするプロレタリア文学の問題点を浮上させる。労働者を肉眼的にとらえられないこと、表現（記述）でき得ないことが前提となれば、果たして、観測者はいかに表現すれば良いのか。見る行為が、見る前の自分を変化させるとする「観測者」の考え方は、定まった自己を前提としない。そこにあるのは、変化可能な主体である。この場合、観測者でありながら、見る対象としての労働者でもある存在、ということになる。逆に、サークル運動において労働者自身が、自らが置かれた状況を言説化しようとするとき、その主体は観測者でもある存在へと変化している。この二者の間でゆらぎ、闘う者を谷川は「工作者」と呼んでいる。つまり谷川の「工作者」の概念とは、観測したものによって自分自身が変化することに自覚的になりながら、いかに言葉として表現できうるか、という表現の問題を必然的に孕むものなのである。

さらに、この観測者の考え方を突き詰めたものが谷川の「政治的前衛とサークル」（「文学」一九五九年一〇月）であると言えるだろう。そこでは、いかなる論戦も、対立を思想の内部にとどめる限り、必然に対話をよびおこすのだと綴る。相手に勝利するためには、自ずと「相手の範疇に沿って自己を表現しなければならなくなる」。

> 思想の勝利は対立者の記号を組み変えて自己の記号に従属させる過程としてあらわれてくるのだが、この組み変え作業が進めば進むほど、勝利者はますます敗北者に似てくる。いや、敗北者よりも一層深く敗北者の立場を理解することによって、勝利者の思想が勝利するのだ。したがって思想の勝利はオリジナリティの放棄に近づく。／いわば対話は両者をともに勝たせ、ともに負けさせる機能をもっている。（略）まず政治的前衛がサークルへの対話の姿勢をもち、現在の理論的、実感的潮流の二種類を活発にかみあわせ、相互の問題意識を組み変える回転速度をはやめ、それに沿って確乎とした運動軸を発見しなければならない。

実践的な運動論であれば、統一した一つの集団を作り上げた方が効果的なのだろうが、そのような方法はとらず、サークルが一つの文化生産機構であるように考えられている[51]。そのため、対話し、対立しても、そこから一歩進んで作り上げていく、という一見矛盾するような方法が提示されている。立場や考えの異なる者が対話を通して、つまり言葉を介していかに諒解し得るか。自ずと選択される対話という方法にこそ解決策があることを証明しようとする。

さて、こういった谷川雁の論に対し、批判を行ったのが吉本隆明であった。吉本は、谷川の言う、知識人と大衆の対立を「観念的な設定」とする。「表現意欲（文化意欲）となる思想」がある一方、「生活過程にかえってゆく思想もある」ことを指摘する。そのことを突き詰めていない文化人たちは、「観念と行動のあいだに断層や対立を設定せざるをえない」[52]。つまり、谷川の述べている表現の問題を、吉本は表現意欲（文化意欲）と解し、それだけでは不十分だと指摘しているのである。このことを、砂川基地闘争を視察した文化人たちを例に挙げている。彼らが、現場まで出かけながらなぜ大衆になってしまわなかったか。それは「生活過程にかえってゆく思想」を突き詰めていないからだ、というのである。

吉本はその後、「「大衆」が、『話す』から『生活する』（行為する）という過程を、みずから下降し、意識化するとき、権力を超える高次に「自立」するものとみな」している[53]。このことについて、同時代にサークル論を読んでいた大沢真一郎は、吉本の議論は、「大衆を生活そのものととらえることによって」、「「書く」方へ上昇させるのではなく、生活そのものの方へ、生活としての民衆のことばや論理の思想的な意味を掘り下げる方へ、突きかえす」と述べた[54]。文化人が大衆の生活を「書く」こと、もしくは大衆が自分自身の生活を「書く」ことが、上位にあるわけではない。生活そのものへ「民衆のことばや論理」を掘り下げることに重きが置かれている。

では実際に、「民衆のことばや論理」を掘り下げる作業はどのように結実したのだろうか。言葉と生活の問題をテーマとして議論を行っていたのは、女性交流誌「無名通信」であった。特に、「無名通信」第一九号（一九六一年六月）には、「女のことば―その開拓の方向について」と題する座談会の様子が記されている[55]。議論は、表現したいものと、実際の表現する言葉

とのずれを中心に展開していた。森崎は、私たち女性の発話は、肉体的表現と知的表現とに挟まれている、という。肉体的反応をとことんみることで、単なる生活語としての表現ではなく、その中に知的表現を探りたいのだが、その過程が浅いのだと言う。これは生のままで表現することで伝達しうると考えるのとは違う。生活語でそのままを表現するのでは足りないのである。

座談会での議論は、聞き書きを行う際の書き手の立場をも示唆するものである。語り手の語りをそのまま記録するのではなく、聞き手による編集を経て、作り上げられる聞き書きという方法。それこそが「サークル村」や「無名通信」が集団創作の場として取り組んだ表現方法であった。森崎和江が「スラをひく女たち」[56]で、石牟礼道子が「奇病（水俣湾漁民のルポルタージュ）」[57]で採用した方法である。「スラをひく女たち」を例に挙げれば、元女坑夫たちの話をそのまま文字化し、雑誌に載せるのではなく、書き換え、編集し、自らの対置することばを書きこんでいく作業こそが、「表現できない部分に自分の核を迫らせていく運動を」自分の内側にもつことだったといえないだろうか。それが聞き書きの方法であり、観測者／労働者の間の、あわいにある自己をひきうけようとする態度が示されている。

つまり、同時代の「文学」や「民話」でのサークル論の文脈で指摘されていた知識人と大衆の問題、またそれに関する表現の問題に関して、具体的に議論の俎上にのせていたのが「無名通信」だったのである。「サークル村」や、その周辺のサークル運動の主な担い手が男性であったなかで、女性による創作の場を創ったという意味で、「無名通信」の持った意義は大きい。ただ、彼女たちの活動は、代替物としてその存在意義があるだけではない。当時のサークル論への一つの答えとして、実践として「聞き書き」の方法を中心に据えたことに特徴がある。あくまでも抽象ではなく具体的生活のなかで示そうとした彼女たちの活動は、同時代のサークル運動を相対化させ、また攪乱させる存在として再評価できるのではないだろうか。同時代言説の中に置いたときに、その可能性はより拡がっているように思う。

第五節　本論文の構成

以上の先行研究、同時代の議論があるなかで、論者は「サークル村」、もしくはその周辺のサークル誌に発表された作品を読むことで、サークル運動と、そこに現れた表現の関連を明らかにしたいと考えている。そのため本論文は、サークル誌の変遷に注目する「第一部　サークル運動における文学の役割」（第一章～第三章）、文学表現に注目した「第二部　サークル運動の内と外」（第四章～第六章）、資料の目次、解説である「資料編」（A～C）から成る。

まず、第一部では、三つの地域におけるサークル運動・文化運動について言及する。第一章「日炭高松におけるサークル運動」では、「サークル村」創刊の母体となった日炭高松のサークル誌を取り上げたい。同時に職場機関紙や会社側・行政側の機関紙「日炭高松」や「広報水巻」などの紙面に散見される様

々な文化団体の存在をもとに、炭鉱における文化の諸相を重層的に捉えたい。

第二章「文学サークルの展開と、その表現―「山田文学」の場合」では、山田文学サークルのサークル誌「山田文学」について論じる。第一章で対象とする日炭高松の文化運動の一方で、嘉飯山地区の炭鉱におけるサークル運動がどのようなものであったのか把握する必要がある。「山田文学」は、三池闘争以降、広く歌われるようになった「がんばろう」を作詩した森田ヤエ子が所属していた文学サークルである。森田や、おなじく同人であった詩人・木村日出夫は後に「サークル村」に参加するようになる。誌面に発表された詩作品の傾向や、サークルという単位で表現活動を行う上での彼等の葛藤を確認する。「山田文学」は、労働組合幹部の批判ととれる文章を掲載したことにより、組合によって発行を禁止され、活動は終息に至る。この、労組とサークル間の軋轢は当時のサークル運動の特徴の一つであった。

第三章「労働運動のなかの文学―三井三池と文化運動」では、戦後労働運動におけるメルクマールとしての三池闘争を対象とする。三池における文化運動の諸相を踏まえながら、なぜ、「サークル村」に三池の労働者が参加していないのか、という点を端緒とし、三池内部と外部でどのように闘争が語られていたのかを論じる。集団創作の方法が探られていると同時に、組織と個人の問題が未解決のまま存在したことを明らかにしたい。

以上、「サークル村」の母体となったサークル運動（日炭高松）、会社や労働組合との軋轢を「サークル村」誌上で発表していたサークル（「山田文学」）、「サークル村」と関係を持つことのなかったサークル運動や機関紙（三井三池）を取りあげることで、「サークル村」とその周辺の文化運動を重層的に捉えることを試みる。

第二部では、三名の作家を取りあげ、彼らがサークル誌に発表した作品を対象とすることで、実際の作品内容と掲載雑誌との関連を論じたい。第四章「上野英信「あひるのうた」におけるサークル運動と朝鮮人」は、上野英信による短編「あひるのうた」を対象としたものである。上野は、「サークル村」に繋がる日炭高松のサークル誌を発行、編集した。彼は、炭鉱離職者、朝鮮人問題、部落差別問題を書き綴った記録作家として評価されている。一九五〇年代半ばからは上野の文、千田梅二の版画で成り立つえばなし「せんぷりせんじが笑った！」「親と子の夜」「ひとくわぼり」などを発表。一方ルポルタージュ作品に取り組み始めるのもこの時期である。五八年からは「サークル村」創刊に関わり、小ヤマを歩き続けて六〇年八月には『追われゆく坑夫たち』（岩波新書）を刊行している。第四章では「あひるのうた」の分析をもとに、炭鉱とその周辺に存在した「アリラン租界」の関係、ひいてはサークル運動と朝鮮人問題について明らかにする。サークル誌に朝鮮人たち〈他者〉の存在が稀薄であることが当時の国民文化運動の特徴と繋がることを提起したい。

第五章「森崎和江作品にみる聞き書きと詩―「まっくら」と「狐」の関連から」では、森崎和江の作品を対象とする。一九二七（昭和二）年、朝鮮の慶尚北道大邱府で生まれた森崎は、

日本の敗戦の前年に一七歳で初めて日本の土地を踏む。その後一九四九年に、丸山豊の「母音」に参加し、本格的に詩作を行うようになる。五八年からは「サークル村」を結成。一方で、炭坑町の女性たちを中心に「無名通信」を発行する。この雑誌に発表されたのが、「スラをひく女たち」、後の「まっくら」である。同時代に「見事な観察者の目によってとらえられた、すばらしい記録」（河野信子）といわれた『まっくら』は、「サークル村」「無名通信」に初出を発表、聞き書きのかたちをとる。論者は、森崎の創作全体を見渡すためには、聞き書きとテーマを共有する詩作品の関連をみる必要があると考えている。第五章では、研究の新たな試みとして、聞き書き『まっくら』とダイアローグ型の詩「狐」との類似性を指摘し、森崎の、対象との距離の取り方を考察する。

第六章「石牟礼道子『苦海浄土―わが水俣病』成立の過程」は、石牟礼道子に焦点をあてたものである。石牟礼道子は、一九六〇年代から水俣病闘争を患者やその家族、全国の支援者と共に闘い続けている。彼女もまた「サークル村」同人であった。「サークル村」の存在がいかに石牟礼道子の創作過程に影響を及ぼしたのか、単行本の『苦海浄土―わが水俣病』が刊行されるまでの改稿の過程と評価を追ってみたい。

終章では、これまでの各章を概観し、まとめをおこなう。また、今後の展望と課題を述べる。文化運動は、戦前から戦後にかけての庶民の主体化、労働観の形成などを考える格好のフィールドである。九州外の動きも同時に把握しながら、「サークル村」やその周辺の文化運動が持ち得た問題意識を考察することで、戦後日本が抱えた民衆運動がいかなる変遷をたどり、現在にいたるのかという問題を考察する。

資料編として、A「月刊たかまつ」、B「山田文学」、C「辺境」・「兄弟」の目次・解説を収録する。Aは、第一章で論じる日炭高松のサークル誌である。第一章で取りあげる日炭高松の他のサークル誌（「労働藝術」「地下戦線」「炭砿長屋」）は、すでに復刻され、総目次も発表されている。よって、ここでは復刻・総目次が未だ発表されていない「月刊たかまつ」の総目次・解説を収める。Bは、第二章で論じた山田文学サークルのサークル誌である。Aのようにやはり復刻されておらず、これまで目次も明らかとなっていなかった。Cは、本編で直接言及のない雑誌であるが、「サークル村」後、「サークル村」の複数の同人が参加した雑誌である。彼らがその後どのような問題意識を持っていたのかを把握できると考え、総目次と解説を収録する。

第一部

サークル運動における文学の役割

第一章　日炭高松におけるサークル運動

第一節　日炭高松のサークル誌を対象とする理由

九州サークル研究会「サークル村」復刻版（不二出版、二〇〇六年六月九日）、「現代思想十二月臨時増刊号戦後民衆精神史」（二〇〇七年一二月一五日）、大阪朝鮮詩人集団機関誌「ヂンダレ・カリオン」複刻版（不二出版、二〇〇八年一一月二五日）の発刊などにともない、戦後を中心としたサークル誌の資料価値が見直されている。そうした研究の流れの中で、「サークル村」に関わった各人が所属していたサークルへ目が向けられつつある。今改めて戦後のサークル運動、文化運動における文字資料（主にサークル誌）を研究対象とする意味は、まず既存の研究の枠組みを問い直すことにある。「民衆」の表現活動は、「日本文学史」、「日本文学研究」において対象となってこなかった。しかし、商業的にではなく、文化運動の一つの手段として行う文学はどのようなものであり、どのような意味があったのだろうか。私たちはそれらの文学が発表されたサークル誌を改めて評価し、読解することで、一九五〇年代の文学がもった意義を広義に理解することが可能となるだろう。それは、同時に彼らの文学を「日本文学」として括らない既存の研究の枠組みを映し出すにちがいない。

本章で論者が対象とするのは、「サークル村」の母体の一つとなった日炭高松（日本炭鉱高松坑）の文化運動である。「サークル村」は、上野英信、木村日出夫、神谷国善、田中巌、谷川雁、田中和雅、花田克己、森一作、森崎和江を編集委員として始まったサークル誌である。発行所を福岡県遠賀郡中間町（現福岡県中間市）におき、九州・山口各県の無数のサークル[1]に所属していた人々がそこに集った。つまり、「各分野にわたるサークル活動家を結集した、それ自身が一個のサークルであるべきおおきな会員誌」[2]であった。その中でも特に当時、また後に全国的に名の知られることとなる谷川雁、森崎和江、上野英信、石牟礼道子などについては、現在も頻繁に取り上げられて議論されている。しかし、「サークル村」が、無数の無名な人々で成り立っていた雑誌（＝「村」）であるのならば、そこに集った人々の姿を捉えずして、その全体像を捉え得たとは言い難い。無名のサークル活動家の各々が所属したサークルの様相を捉える必要がある。

また、このことは「サークル村」という九州・山口における、単なるローカルな問題にかぎったことではない。一九五二年のＧＨＱからの占領の終焉にともない、「国民」の多くが自らの文化を創ろうとする国民運動が全国的規模で行われたという同時代的状況があった。その中で、大きな位置を占め全国に連帯の輪を広げたのが、炭鉱労働者による労働組合傘下のサークル運動であったとされている。特に、炭労主催の全国誌「月刊炭労」における文化運動の様相は、たとえば文芸コンクールを度々開くなどして、労働者の表現の場として広く知れ渡っていた。「月刊炭労」において、取り上げられるサークル名は、筑豊や杵島、長崎、また山口宇部、北海道の炭鉱サークルなどもあり、同時に「サークル村」に集った同人たちが所属するサークルでもあった[3]。だが、九州で刊行されていた「サークル村」が特異な点は、炭鉱労働者だけではなく、同時に他業種の労働者や、

「南九州」の農民たちによるサークル運動をも射程にいれていた点である。五八年九月に産声を上げた「サークル村」という「奇妙な村」（「さらに深く集団の意味を」）は、創刊から二年後の六〇年五月の第三巻第五号をもって休刊となり、同年九月に再刊、六一年一〇月の第四巻六号で事実上終焉となった。つまり、足掛けわずか三年間の活動だったわけだが、序章でみたように、「文学」誌上などでたびたび掲載されていたサークル論のなかで、「サークル村」の活動が議論の的となることもあった。

本章では、サークル活動家たちの交流がどのようにおこなわれていったのか、実際に「サークル村」以前のサークル誌を中心に見ていきたい。まず、「サークル村」創刊に至る基盤の一つになった日炭高松における文化運動、サークル運動の様相をみていくこととする。その際、「サークル村」に加入することのなかった地域の文化運動の諸相もみていきたい。当時の文化運動の多重性を把握した上で、労働者たち自身のサークル運動との差異をも捉えたいと考えているからである。

第二節　日炭高松の文化運動の諸相

「労働藝術」「地下戦線」「炭鉱長屋」「月刊たかまつ」（「文芸誌たかまつ」）といったサークル誌は、日炭高松労組の下にあった文芸サークルによって刊行された文芸誌である。これらの雑誌は、あとで詳しく述べることになるが、サークル運動家であった上野英信が中心同人の一人だったこともあり、後の「サークル村」に繋がっていく集団の一つであった。上野と谷川雁が手を結び、九州サークル研究会の構想に至ったことはすでに知られているとおりである。しかし、日炭高松のサークル運動が「サークル村」に至る大きな要因となったのは、上野の存在だけではないだろう。もちろん、上野が他の労働者たちを主導したことにより、サークルの発展と労働者の意識改革が広まったことは疑いもないことである。だが、それだけではなく水巻町の文化運動がその後の九州におけるサークル運動に影響を与えたことは等閑視できない。

水巻町は、「福岡県北部、遠賀郡の東端に位置」し、「北は同郡芦屋町と、東は北九州市、南は中間市、そして遠賀川を挟み、西は遠賀町との二市二町に隣接」[4]している。これら隣接する地域の特徴としては、北の芦屋町には戦後占領期に米軍芦屋基地があり、東の北九州市には、八幡製鉄、南の中間市には大正炭鉱が位置していた。大正炭鉱は、「サークル村」の谷川雁、上野英信、森崎和江が共同生活を営んだ地であり、そこが「サークル村」の発行所となった土地である。そもそも日炭高松は、「明治三十九年（一九〇六）、頃末炭坑が三好徳松の所有となって三好炭坑と名を改めたころから、日露戦争によって石炭の需要が高まり、当町域内の人口も著しく増加しはじめた。これらの集落は炭坑の坑口近くに集中し、古賀、　、頃末、立屋敷、吉田に炭鉱住宅、いわゆる「炭住」が形成されていった」[5]。非常に大規模な炭鉱であったことが分かる。

では、このような特徴を持つ水巻町で、戦後どのような文化運動があったのだろうか。『増補水巻町誌』によると、一九五

〇年代当時の「文化活動」は、一九五一年三月、水巻町制一〇周年に水巻町公民館から刊行された「蟻塚」と、日炭高松の活動として、機関誌「蹠趾」「文芸教場」がある。これについては、「文化面においては、絵画、合唱、謡曲、舞踊などの芸術・芸能や、俳句、短歌などの文芸の同好会があり、機関誌（蹠趾、文芸教場）も発刊されていた」という記述から、他にも多くの文化集団が存在していたこと分かる。「蟻塚」については、拙稿[6]にて少し触れたが、水巻町公民館にて発行された文芸誌であり、その内容は地域発展の意図が強いものであった。このことは、「蟻塚」第一集（一九五一年三月）に掲載された水巻町長、水巻町公民館長、大貝五十三の「創刊を祝して」のなかで「近年著しく発展しつゝある我が水巻町」から「平和と自由と真理との旗を掲げ、文化水巻の先駆者として、水巻文学サークルが、」機関紙「蟻塚」を創刊することを「心から祝して」いることからも窺える。終戦後文化国家建設が唱えられるが、その「文化」こそ、「一国の発展を、只その武力や富の力のみに頼ることの愚かしさ」から救う「唯一のものであり」、水巻町の功績と努力を「本誌に期待している」とも述べられている。また、「編集後記」には、機関誌の意図は、「この一冊から水巻町の発展が生れ、インテリゼンスが育ち音楽や絵画が論ぜられ」ることであり、「こうした意味で近く誕生する音楽サークルや絵画、映画サークルの人達」からも意見が積極的に出ることを期待する旨が記されている。

一方、「文芸教場」は、一九六五年二月一五日に発行された第二号[7]のみを現在確認することができる。それは、四頁の小冊子となっており、発行所は文芸教場新社[8]、主幹は持永虹村となっている。句誌としての特徴をもつこの冊子は、河野静雲、持永虹村の俳句を一面に掲載する。二、三面は、「各地句会」として、「杁（えぶり）（高松ホトトギス）句会河野静雲選」、「（小倉）企教野句会河野静雲選」、「北九州ホトトギス句会（於小倉）河野静雲選」の俳句が掲載されている。このことは、機関紙「日炭高松」において、戦後から掲載された「句会」欄と見事に一致する。

「日炭高松」[9]とは、発行所が日本炭鉱株式会社遠賀鉱業所（水巻町頃末）の毎月二回発行されていたタブロイド版である。当時八千部が発行され、会社の情勢が主で、町の話題、スポーツや映画案内なども掲載された[10]第二次世界大戦前から続く機関紙である。そこでもやはり、ホトトギス派河野静雲の選による作品が毎回五から一〇句紹介されていた。例えば、竜茶煙という俳人は、たびたび「日炭高松」新聞、「句会」欄にてその俳句が紹介されていた人物であるが、この「文芸教場」第二号においても、「杁（高松ホトトギス）句会河野静雲選」の中で、「生みたての紅ほのかなる寒卯」という一句が紹介されている。また、同時に「文芸教場」には、「杁句会」のような高松ホトトギス句会、つまり日炭高松を母体として行われた句会とともに、「（小倉）企教野句会」「北九州ホトトギス句会（於小倉）」のように、北九州市内で行われた句会で詠まれた句についても、同じ河野静雲選ということで掲載されていることが指摘できる。もちろん、ホトトギス派の広がりも考慮すべきだが、一九六五年という時期から考えると、「日炭高松」紙面にて「句会」

が掲載され始めた一九四五年という早い時期から度々行われてきた句会が、他の同派の句会と繋がる場の一つとして「文芸教場」があったものと思われる。また、冊子の特徴として、ホトトギス派俳人で、前日本炭鉱ＫＫ常務取締役の坂本見山、「日本炭鉱育ての親、元同社常務取締役」の興梠友兼など、日炭高松のいわゆる会社側の重役の名が散見されることは、発行所が「杁」であることと無関係ではない。

当時、日炭高松の「炭鉱社宅」には、「鉱員社宅」[11]と「職員社宅」があり、「職員社宅」は、杁、宮ノ下、頃末大西、頃末、緑野、赤池の六カ所にあった。職員社宅があった　地区には、さらに「職員（管理職）以上の社交の場」であり、「来客者の接待や労働組合幹部との団体交渉の場」でもある「杁クラブ」があった。「杁クラブ」は、「昭和十二年（１９３７）に、折尾から杁の高台に移築された三好本邸の横に建てられ、「クラブを囲んで部長社宅があった」という[12]。つまり「杁」が、炭鉱の「職員」たちが集う場所としてあったのならば、後に説明を行う組合のサークル誌が炭鉱労働者自身による雑誌であった点で、雑誌刊行の意義が異なる。

日炭高松においてどのような文化集団が存在したのかを把握するため、機関紙「日炭高松」の記事のなかからいくつかの文学、文化関連のものを拾い上げてみたい。

まず、戦後すぐの昭和二〇年代初頭の記事から見てみよう。昭和二一年には、いくつかの文化団体、文学同好会、機関誌の名が散見される。第二〇一号（昭和二一年六月二七日）の、「文化団体紹介」の欄、「オンガサロン　アンサンブル生る」と題された記事によると、「大庭寿雄氏を主催とする音楽同好の士集まり、オンガサロン、アンサンブルを結成、近く従業員並に家族慰安の夕を催す予定で毎週火、木、土の午後五時半より　ホールに於て、練習を始めてゐる、御期待を乞ふ／なほ同好の士は（男女を問はず）鉱業所庶務課佐竹氏宛申し込まれるよう希望してゐる。」とある。また、同じ紹介欄に「フエニツクス文学同好会」についても紹介がある。「同人相互の勉強のために既成のモラルに止まることなく文学の純粋を絶叫し続け月刊誌フエニツクスを発刊してゐる。／先に募集した懸賞短篇小説は編輯部で予選をすゝめてゐる。作品原稿は直接福利課新聞編集部杉江宛送られたし。」と記述されている。杉江とは、杉江勇のことであり、「後に福岡市の夕刊フクニチ新聞社に入社し、多彩な文筆で活躍」、「『福岡連隊史』などがある」人物であった[13]。さらにこれらの団体が結束する形で、同年八月に高松文化集団が結成される。「高松文化集団（仮称）の結成　輝かしい太陽が焼土を照らし、明るい希望を投げてゐる時、自由の芽は若い世紀の情熱によりぐん〳〵育くまれつゝある。高松もその恵みにもれず若い知識人の手によつて幾つかの文化グループが成長しつゝあるが、いまのところ皆孤立し連絡もない状態なのでこれ等のグルプに呼びかけ同志的結合により大同団結して真の民主文化を確立するため日炭高松文化集団が結成されることになり、その準備会が近く教習所で開かれる」（「回覧板」、「日炭高松」第二〇四号、八月二五日掲載）と紹介されている。発起人として古岡康治や杉江勇の名が挙げられており、機関紙発行の計画があることも記載されていた。実際に、その翌月の九

月一日第二〇五号では、「高松文化集団発足」と題し「芸術を愛し文化の普及に尽くす会員一同が情熱を傾けて真摯な討議のうちに準備会を重ねてゐた高松文化集団も愈々機関誌〝足跡〟発行（九月二十日頃）を第一声に健全な鉱山文化の確立を目指して誕生することとなつた。／石炭の重要性と共に之が生産人の文化向上は亦大きく、新日本の文化建設に力強い足音であり、歴然たる足跡である。尚同集団は近くレコードコンサート、映画鑑賞の夕、カメラ、生花、書道会等多彩にして新鮮な行事を実シする。」とあり、実際に次号（第二〇六号、同年一〇月一日）では、九月二八、二九日に「朸」にて開催された「映画音楽鑑賞の夕」の模様が記述され、音楽は先に挙げた「オンガサロン、アンサンブル」と「青い鳥」という団体による合同演奏であったようである。高松文化集団が機関紙を発行しつつ、且つ他の文化団体と協力し行事を行う試みのあったことが分かる。また、同じく第二〇六号（昭和二一年一〇月一日）には同年九月二八日に発刊された「高松文化集団機関誌　蹠跡」の広告が掲載されている。「日炭高松」紙面をおっていくと、「蹠跡」はその後「たかまつ」に改題されていることが分かる。原稿募集も同紙にて行っており、投稿規定は、「評論三五〇〇字／創作、戯曲、童話三〇〇〇字／コント一〇〇〇字／随筆五〇〇字／詩、童話二〇行／短歌（五首）俳句（五句）」（第二〇七号、昭和二一年一〇月一五日）であった。だが、昭和二二年になると、高松文化集団に変化が訪れる。「鉱山文化の向上を目指して華々しくスタートした高松文化集団は機関誌〝蹠跡〟を出版して以来さしたる活動もなく、また所内文化団体への連絡強化も成果を挙げ得ぬまゝに半年余を経過してきたが、本年四月から高松鉱が直方地区鉱業文化連盟の幹事鉱になつたのを期に再び文化活動の重要性が提唱され、文化集団も自己批判から立ち上がつて面目を一新、機関誌も〝高松〟と改題して〝蹠跡〟の同人雑誌的のものから綜合雑誌的なものとなり、集団自体も高松文化連盟へと発展した。／よって四月十二日所内各文化団体の委員集合して種々懇談し、越えて六月十日午後一時よりエブリクラブに於て吉田幹事長出席のもとに次の具体的要項を審議した」（第二一九号、昭和二二年六月二〇日）。その要項としては、「1．クラブ使用の件／エブリクラブの空席を連盟の綜合的な研究所として使用するため庶務課と交渉／2．連盟と福利課の関係／連盟と福利課を直結し行事予算を各坑企画委員で計画し厚生事業の文化面を今後は連盟で実施する／3．連盟と組合の関係／連盟会員即ち組合員であるかた組合の文化部即ち連盟ということになり、文化を狭義に解釈してセクト主義におちいらぬよう意見一致／4．講師招へいの件／近く音楽、洋舞踊、合唱、短歌、演劇、詩、科学等の講師を招へいする／5．連盟経費の件／連盟の行事に要する予算は充分支出して今後の文化向上に費やす／6．文化会館建築の件／全会員の情操をたかめ活溌な運動を展開するため古材を使用して室内体育、芸能発表会集合等に広く使用出来る文化会館の建築を考慮」の六点である。つまり、終戦後すぐの昭和二二年に広義の文化運動の試みがあったことが分かる[14]。

また、昭和二二年六月二〇日発行の第二一九号には、俳誌「青蘆」の創刊が紹介されている。「九州各鉱山、工場俳句の中で

ホトトギス調として知られている高松句会は毎月河野静雲氏を迎えてたゆまぬ精神をつづけているが、この活動をより活発化するため初心者の入門もかねて左記投稿規定により俳句専門誌〝青蘆〟を七月創刊する／一、雑詠　河野静雲選　五句／一、団扇　吉田むつを選五句」。投稿先は、鉱業社庶務課の龍茶煙であった。なお、昭和二四年四月一五日の第二五〇号「文化新刊」欄によると高松炭鉱文化連盟が発行所となっている。その他、昭和二〇年代初頭に限るが、「日炭高松」紙上では「文化新刊紹介」というコーナーもあり、例えば、松本信也、高野智らによる綜合誌「凝視」や、塚邊光春、中山正實らの詩誌「れとると」、労組第四支部文化部発行の週刊壁新聞「黒ダイヤ」（第二三二号、昭和二三年三月一〇日）、石本蒼天子などによる俳誌「ふるうめ」「ひばり」（第二四一号、昭和二三年一〇月一〇日）、今村一年ら高松いざよい会による短歌誌「いざよい」、の活動があったことが窺える。このいざよい会については、「高松文學」でもその名を確認することができる。松本信也が編集兼発行人を努めた「高松文學」第二号（昭和二四年一一月一五日）「あとがき」には、「いざよい短歌会の皆さんが、高松文学の会員になられましたので、本号から短歌の選は、今村、中川の両氏にお願いすることになりました。（松本）」とあり、近刊として「いざよい歌集第一集」の広告も掲載されている。歌集についての紹介記事には、会員は五〇数名だと紹介されている。

また、いすず・みちひこ（上野英信）や千田梅二、黒井修らの温雅荘文化部による「労働芸術」は、第二四四号（昭和二三年一二月一五日）の「文化―各寮めぐり―」においてその名が紹介されている。しかし、編集人の名前など詳細は明記されず、管見の限りでは、その後も上野、千田、また上田博らの文学運動が同紙面上にて紹介されることはなかったようである。

その他、講演会等も頻繁に開かれていた。例えば昭和二八年六月一五日の第二二三号には、「童話の久留島さん来る」と題し、久留島武彦の講演の模様が紹介された。「福利課では四坑、浅川、高尾の各若松関係の公民館および水巻町教育委員会との共同主催で、世界的な童話家久留島武彦先生をむかえ六月一日から五日まで所内各所で〝親と子〟のための講演会をおこなつた。／各会場とも満員の盛況であつたが氏の力説した論点は子供の立場から親と成人にたいする弁護で、大人は子供や青年をしらなすぎる、その結果社会に順応されない少年が続出している。／子供や青年の発育過程を知らなくて青少年の不良化防止など絶対にできないとむすんだ。／氏は一度演壇に立てば数千の聴衆の前でもマイクを使わず、場内をひきつけ独得の話術で聴衆を完全に魅りようした。」と綴っている。

一方、日炭高松の労働者たちが頻繁に目にしたであろう文字媒体は、機関紙「日炭高松」だけではなかった。水巻町役場から発行されていた「広報水巻」も少なからず人々に多くの文化的情報を供給したはずである。この「広報水巻」は、戦後発行された新聞である[15]。住民の文化活動の様子を伝えたもののなかで、例えば昭和二六年三月一日の二九号では同年二月二一日に開かれた演劇サークル座談会についての記事がある。それによると、日炭太陽座、頃未くわのみ会、古賀青年会の有志約二〇名が参加し、「深い愛情によつてサークル結成の実を結んだ」。

その中で、「自立劇団の経費はどうおぎなわれているか。自立劇団を社会ではどう見ているか。女優の不足はどうすればよいか」等が話題に上ったという。これについては、後に見るサークル誌においても問題となった劇団の課題である。また三一号（昭和二六年四月五日）では、「盛んになつたサークル活動」と題し、音楽サークルとしては水巻音楽サークルが、文学サークルは「蟻塚」が、そして謡曲サークルが紹介されている。共通しているのは、公民館と関係が深いということである。公民館でレコードコンサートが開催予定であったり、「蟻塚」の発行所は公民館であったことは前述のとおりだが、謡曲サークルもまた公民館において練習を行っていた。

以上見てきたように、「日炭高松」「広報水巻」、そして「蟻塚」は、炭鉱の会社側もしくは町役場側が積極的に発行していたものである。では、一方で炭鉱労働者が自らの手で発刊していた文字媒体には、どのようなものがあるのだろうか。また、その特徴とはいかなるものか。

第三節　職場機関紙の特徴

一節で述べたように、論者はサークル誌を中心的に取り上げるが、サークル誌の一方で各々の労働の職場において機関紙が発行されていたことをまず指摘したい。論者が今回確認することのできた資料[16]のなかから、幾つかの機関紙名を列挙してみよう。

「しくり」（日炭高松労組第二支部仕繰機関紙）、「しくり」（日炭高松労働組合第一支部仕繰協機関紙）、「坑山（やま）」（日炭高松労働組合第一支部坑外協議会機関紙）、「萌友」（日炭高松労組第一支部青年部機関紙）、「仕繰新聞」（四支部）、「さいたん」（一砿採炭協議会機関紙）、「ぜんりょう」（日炭高松全寮機関紙）、「内間協」（日炭高松第一支部仕繰協内間協議会機関紙）、「せいさんきょう」（五支部生産協議会）、「せいねん」（第四支部青年部事務局）、「こうがい」（第二支部坑外協機関紙）、「せいねん新聞」（日炭高松労組第二支部青年部）、「つどい」（日炭高松主婦会）、「くっしん」（高松労組第一支部）、「さいたん」（第二支部採炭協議会機関紙）、「さいたん」（第四支部採炭協議会機関紙）、「どりる」（掘進協機関紙）、「支部だより」（高松労組第一支部機関紙）、「五朋」（五支部青婦会）、「採協新聞」（三支部採炭協議会機関紙）、「仕繰しんぶん」（第四支部仕繰協議会）、「仕繰新聞」（日炭高松第一支部仕繰協）、「日炭職組」（日本炭砿職員組合）。

機関紙のタイトルを見るだけでも分かるように、炭鉱の労働現場で各々の組合機関紙が発行されていた。日炭高松は、一鉱から五鉱まであったが、そのそれぞれの現場における採炭、掘進、仕繰、坑外、など炭鉱独自の労働部署名を用い機関紙名とした。またその他、青年部、青年婦人会や、労働者たちが住んでいた寮の機関紙も存在していた。この機関紙の特徴としては、B４版二面のうち一面に組合の活動方針や行事内容、役員決定の記事などが掲載されている。二面は、主に詩、短歌、サークル紹介、職場交流にあてられている。もちろん、機関紙については一面に小説やエッセイの連載をおこなっているところもあ

る。例えば、「地下戦線」や「炭砿長屋」、「月刊たかまつ」そして、「蟻塚」にも原稿をよせた山崎喜与志は、五支部生産協議会機関紙「せいさんきょう」二号（発行責任者柴崎弥一郎、編集責任者瓜生金男、一九五八年一二月三日）において、一面に「親と子　廻転焼」という小説を連載した。また、山崎は七号（一九五九年六月三日）において、詩「反省」とエッセイ「視力」を発表している。その他、一砿採炭協議会機関紙「さいたん」では、八木善二がエッセイ「若き友への手紙」を連載（管見の限りでは、二八号、一九五八年一〇月一三日から、三六号、一九五九年七月一一日まで7回連載している）している。また、同じく連載ものでは、「よみもの　高松十年史より」という組合結成の小史が「さいたん」二〇号（第二支部採炭協議会機関紙、一九五九年七月五日[17]）から掲載される。その後第二回は、二一号（一九五八年七月三〇日）、第三回は二二号（一九五八年八月二九日）、第四回は二三号（一九五九年一〇月九日）にと続いている。同じ頃「坑外新聞」二号（一九五九年七月二六日[18]）でも、「よみもの　高松十年史より」という同じタイトルの記事が存在する。日炭高松労組が創立したのは一九四五年であるが、一〇年経った一九五五年に機関紙「たかまつ」の編集企画として「組合十年のあゆみ」が連載されたという。このことから始まって、一九五九年五月の『日炭高松組合十年史』[19]の発刊に至っている。

この組合史は斗争の歴史を中心として編集したもので、専門的な立場からみれば、内容に不充分な点はあろう。だが、わが組合の斗いと、労働運動の歴史を集録したこの組合史が、いま組合の中核として、活動をつづけている職場の活動家に、生きた学習図書として充分役立つことを目標として、組合員各位の期待に応えるため、とぼしい智慧をしぼって編集にあたった。（有吉富造「あとがき」七七〇―七七一頁）

結成一〇周年と『日炭高松組合十年史』の発刊によって、前述の「さいたん」や「坑外新聞」においても、自分たちの組合の歴史を綴る磁場ができていたと言えるだろう。

このように、炭鉱労働者たちは、自分たちの会社や労働現場を、書く（記録や描写の）対象としてまなざしていた。だが、同時に書く対象は外へも向けられている。それは、他の炭鉱との交流や平和運動への関わりとして表出されていた。紙面の関係上記事タイトルのみ挙げることとする。

▽他炭鉱との交流

●「萌友」七号（日炭高松労組第一支部青年部機関紙、発行責任者吉住善明、編集責任者香月一三、一九五八年七月二五日）の一面「手をとり合って仲良く進まう各地より便り来る！」

●「さいたん」二七号（一砿採炭協議会機関紙、発行責任者串田花王丸、編集責任者今田重雄、一九五八年九月五日）の二面、「自由討論会三池労組出身灰原書記長をお迎えして」

●「事務協」一号（発行責任者二木宗興、黒河晃、一九五

八年）の二面「平和の祭典　九州の唄声」
●「せいねん」四号（第四支部青年部事務局、発行責任者高橋利晴、編集責任者白石繁夫、木村和昭、一九五八年一〇月六日）の一面「九州の〝うたごえ〟開く」（水巻混声合唱団）
●「萌友」九号（第一支部青年部機関紙、発行責任者吉住善明、編集責任者香月一三、一九五八年一〇月二〇日）の一面「早良青年部訪問　好感もてる炭ほる仲間」
●「せいねん」五号（第四支部青年部事務局、発行責任者高橋和晴、編集責任者白石繁夫、木村和昭、一九五八年一一月四日）の「九州のうたごえ開かる」
●「せいねん新聞」二〇号（日炭高松労組第二支部青年部、発行責任者三浦隆男、編集責任者岸本明、一九五八年一一月一五日）の二面、「日本のうたごえ」、「サークル案内　水巻混声合唱団」「青年隊結成へ」
●「しくり」五号（日炭高松労働組合第二支部　仕繰協議会職場機関紙、発行責任者植木弘、編集責任者高木方男、一九五八年一二月一日）の二面「職場交流をさかんにしよう」
●「せいさんきょう」二号（五支部生産協議会、発行責任者柴崎弥一郎、編集責任者瓜生金男、一九五八年一二月三日）の二面、「平和の祭典日本の唄声へ」
●「萌友」一五号（日炭高松労組一支部青年部機関紙、発行責任者吉住善男、編集責任者原野富士男、一九五九年三月一七日）の二面、文鳥「短歌『製鉄の仲間』と交流して」（四首）
●「しくりしんぶん」一七号（一支部仕繰協、編集責任者真方、編集責任者柴田、一九五九年三月二〇日）の二面、「協議会ニュース◇真方議長杵島炭砿へ」
●「さいたん」三三号（一砿採炭協議会機関紙、発行責任者串田花王丸、編集責任者今田重雄、一九五九年三月二〇日）の一面、「職場交流　杵島炭砿を訪ねて」
●「せいさん」四号（五支部生産協議会、発行責任者柴崎弥一郎、編集責任者瓜生金男、一九五九年五月三日）の二面、「仲間（杵島）の歌、詩、川柳、短歌紹介」、「杵島炭砿労働組合歌」
●「くっしん」一五号（高松労組第一支部、発行責任者松江安則、編集責任者坂本栄、一九五九年発行月日不明）の二面「杵島労組職場交流に行く」
●「萌友」一八号（日炭高松労組第一支部青年部機関紙、発行責任者吉住善明、編集責任者原野富士男、一九五九年六月二七日）の二面、香月一三「筑豊のうた声に参加して」
●「坑外新聞」三号（発行所不明、発行責任者森安照喜、編集責任者杉原・茂谷、一九五九年八月三〇日）の二面、花田克己（興炭労支部）「鉢巻とリボン」

▽平和運動

●「せいさん」七号（第五支部生産協議会、発行責任者深崎弥一郎、編集責任者瓜生金男、一九五九年六月三日）の一面「安保条約改定に反対し平和を守ろう」

●「どりる」八号（掘進協機関紙、発行責任者福田政弘、編集責任者夫富左沙男、一九五九年七月一六日）「安保改訂のねらい」
●「支部だより」一号（高松労組第一支部機関紙、発行・編集責任者第一支部執行部、一九五九年七月一八日）「広島へ!!堀さん中岡さんを送ろう」、「安保条約改訂版反対運動はじまる」、「国民平和大行進・県道通過！」
●「五朋」号数不明（五支部青婦会、発行責任者西岡渉、編集責任者坂本昇、一九五九年七月二〇日）の一面、二木宗興「感動!!そして涙あり　平和大行進の水巻町通過に臨んで」、「平和友好祭　内容と企画について」
●「坑外新聞」二号（発行所不明、発行責任者森安照喜、編集責任者杉原、茂谷、一九五九年七月二六日）二面「原爆許すまじ（安保改定反対署名、原爆禁止平和大行進）」、「平和キャンプの集い　青年部」
●「萌友」一九号（日炭高松労組一支部青年部機関紙、発行責任者吉住善明、編集責任者原野富士男、一九五九年七月二七日）の二面「ヒロシマへ、広島へ　国民平和大行進は進む」、
●「さいたん」二一号（第二支部採炭協議会機関紙、発行責任者大石溢美、編集責任者馬場春一、一九五九年七月三〇日）の一面、「原水爆禁止大会」
●「しくり」一一号（第二支部仕繰協議会機関紙、発行責任者植木弘、編集責任者樋口安太郎、一九五九年七月三一日）の二面「原水爆禁止大会」
●「せいねん」一〇号（第四支部青年部事務局、発行責任者高橋利晴、編集責任者白石繁夫、油布己千夫、一九五九年八月）の一面「被爆から十四年」
●「さいたん」八月号（第四支部採炭協議会機関紙、発行責任者川島弘、編集責任者吉武勉、一九五九年八月）の一面「原水爆禁止世界大会」

このように、職場機関紙では限られた誌面のなか、詩や短歌、小説の連載に加えて、自らの職場の歴史を綴る記事の一方で、他の炭鉱との交流や、うたごえ運動、平和運動など炭鉱の外に題材を求めている記事も存在していた。

第四節　「労働藝術」から「高松文学」を経て、「炭砿長屋」まで

前節では、労働者の手によって発行されていた機関紙の特徴を述べた。では、これに対しサークル誌はどのような意義をもっていたのだろうか。まず、日炭高松におけるサークル誌の一連の流れをおさえておきたい。「労働藝術」[20]、「地下戦線」[21]、「炭砿長屋」[22]、「月刊たかまつ」[23]という順序で上野英信が積極的にかかわったサークル誌の流れが存在している。

「労働藝術」は、創刊号（一九四八年七月）のみが現存している。編集・発行・印刷は、日炭高松の温雅荘文化部による。祝詞四編、四編の詩、四編の随筆、短歌三首、俳句四句が掲載された。この雑誌には、上野英信がいすずみちひこの名で随筆

「曙」を掲載している。

一九五三年五月には「地下戦線」が筑豊炭坑労働者文芸工作集団によって創刊される。発行責任者は黒井修、編集責任者は上野英信であった。創刊号の「編集後記」の中で編集部は、「原稿を書かれる方へ。どうか固くならないで、小学生が綴方を書くような気持ちで、思ったままを書いてください。この機関誌は、ヤマの綴方教室なのですから。うまい文章をつくろうなんてゆめにも考えないでください。」と述べている。ここで必要なのは小説を書くことの技術ではなく、より多くの労働者が自分の言葉で、文章を書くこと、それ自体にあった。

例えば、毎号のように作品を投稿した同人に、山崎喜与志がいる。創刊号掲載の作品「蚤」（西之浦公志郎の名で発表）では、炭鉱労働者が妻子と川の字になって眠ろうとするのだが、無数の蚤が自分たちの周りを這っていることに気づき、なかなか眠れない炭坑夫が描かれている。ついには全部殺してしまおうと思いつき、夜が明けるまで蚤を殺し続ける。主人公は、かつて父も同じように蚤に苦しんでいたことを思い出す。彼ら炭鉱労働者たちを悩ます蚤は昔も今も変わらない。疲労困憊の身体に、明日も同じ労働が待っている。少しでも長く、深く睡眠をとって回復しなければならないという焦りから、更に睡魔が遠のく。相変わらず彼らの労働状況が改善されないことが読みとれる。そして自身の、蚤のような「はかない運命」を嘆く。かつての炭鉱労働者たちも、ましてや自分の仲間たちも同じように、炭鉱労働者としてのはかない命を生きている。

一方、同号に載った「女」は、炭鉱労働者を夫に持つ、三人の子どもの母親が主人公である。「毎日労働でぐったり疲れて帰る夫」と「一日中をコマのように」家事に追われて働く妻は、休養を兼ねて「隣町のお宮の祭」に子どもたちを連れて行く計画を立てる。そのために妻は長女に「可愛いリュックサックを買って」やる。しかし、当日の朝、今日のために買ったリュックサックが見当たらない。妻は短気な夫から怒鳴られながら必死に部屋中を探し回る。その時、「何気なく、行李の横につんであるお客用の布団に手をかけ」ると下からリュックサックが見つかる。その翌日から、また彼女は「わずらわしい家庭の雑事」に追われる日々をすごした。「そうして、一寸したことでも、子供の世話をやいているうちに、忘れてしまったり、おき忘れたりすることは以前と変わらなかった」。炭鉱長屋に暮す炭鉱労働者の妻がいかに忙しい毎日を過ごしているかが、ユーモアを交えて描かれている。物語の中心は部屋中を探し回る妻の姿である。雑誌を手に取る読者は何も炭鉱労働者たちだけではない。同号「編集後記」では「女の人の参加が少いのが残念です。ひまもないでしようが、それだけにより切実な生活のうったえをこの紙上に吐露して下さい」（傍点原文）と書かれていた。つまり、炭鉱労働者を夫にもつ妻たちもまた、機関誌を読んでおり、彼女たちも想定された読者であったことが分かる。女たちが自分の生活を書くこともまた求められていた。「女」を一つの例として、女たちも共感できる機関誌作りが考えられていた。

上野が関わったわけではないが、「労働藝術」以前には先の二節で触れた「高松文學」[24]が位置していることになる[25]。さ

らに、時期としては「地下戦線」と「炭砿長屋」の間に位置する一九五五年七月一日発行の「高松文学」（創刊号のみ）が存在した。これは、先の松本信也による「高松文學」とは関係がなく[26]、発行所は日炭高松労組内の高松青年婦人連絡会議となっている。編集責任者は鎌田勉、発行責任者は庄田明であり、日炭高松文学サークルという名前で発行された。見開きの頁には、山口県宇部市の東見初詩サークルによる『詩集まきやぐら』の広告[27]、上野英信、版画千田梅二による『ひとくわぼり』の広告[28]がある。「発刊のことば」（四頁）には、

高松にも終戦後、文学サークルや同人雑誌が労働者の間に於いて刊行されて文学運動が行はれて来ましたが、ほとんどのものが永続きせず創刊から停刊し、又一年余りして創刊、停刊と云う形をとってきました。／これには色々理由があつて、ひどく苦しい労働でクタクタになつて坑内から昇るともう何もしたくなくなる。これは労働者がみんな体験していることである。その中でガリを切り製本をし、配布し集金すると云う事は、体力的にも精神的にも甚だ苦痛と忍苦を背負はされている事が、停刊の大きな理由となつていました。／私達は今日程、苦しい生活と戦争の危機に直面している時はありません。／私達は今迄の文学運動の「あやまち」をなおし、永続性のあるものにする為には、小さなサークルや個人では行きづまりの来る事がわかりました。／そこで、全鉱的な文学サークルをつくり組合の暖かい協力と援助のもとに立派な労働者らしい文学をつくることに、意見がきまりました。／この「高松文学」は労働者の生活を中心にして起つたことを、綴り方、作文、集団創作等、書いてきている人は勿論、今から書こうとする人や、書いた事のない人に、大いに書いてもらう様に努力して、みんなの「高松文学」にすることを目標としています。／労働者が一日々々成長していく如く「高松文学」も一日々々と労働者と共に成長する「高松文学」になる様に皆さんの協力を御願いします。

表紙には、千田梅二の版画「ボタ山風景」が刷られている。「創作」として、山下千代「感情」、江夏茂一郎「なやみ」、高田松平「炭砿もん」、遠藤百合雄「ある文学青年の日記」、南契（※「契」に、さんずい）「俺の一日」、風間力「正男と三人男」、志羽田和間「暗影」といった短篇小説が並んでいる。また、短歌・俳句は石松弄涯らが作品を掲載している。詩作品にはきよし・あが、盛山国義、川島まさし等のものがある。この中で、山下千代、石松弄涯、きよし・あがは「炭砿長屋」でも、また、川島まさしは「労働藝術」と「炭砿長屋」でも作品を発表している。このことから、「高松文学」と「労働藝術」、「炭砿長屋」との一種の連続性を確認することができるだろう。

誌面には他サークルとの交流が確認できる記事がある。それは、「水巻映画サークルの御案内」と題するもので内容は以下のようになっている。

映画の好きな人同志が一つの集りをもつて、自分達の見た

い映画を―よい映画、おもしろい映画を―安く、どんどん観ることができ、スターと話し合いができ、しかもそれらの映画の集りが、水巻文化をたかめてゆくことができればこんなに美しいでき事はありません。毎日の激しい仕事の疲れを鑑賞会批評座談会などで吹きとばす事ができればどんなに楽しいでしよう　入会される方は組合本部内映サ事務局へ（「高松文学」創刊号）

二節で述べたが、文化団体が交流する動きは高松文化団体の事例をもって確認済みであるように第二次世界大戦後数年から見られていた。だが、各々の文化サークルがどのように関わりを持ち、影響しあっていたのかについては不明瞭な状態が続いていた。本稿でとりあげるサークル誌は主に文学サークルが発行しているものであるが、なかでも「高松文学」は、労働者自身による文学サークルと他の文化サークルとの関わりが窺える早い資料として注目すべきである。「高松文学」以前の「労働藝術」では、詩、随筆、短歌、俳句、千田梅二の版画、黒井修のカットなどで成り立っており、千田の版画はあるが、例えば美術サークルとのつながりは明確に記述されていたわけではなかった。

「労働藝術」の同人でもあった川島まさしは、随筆「フィクションについて」の文章の後に「（文学作品を単に娯楽品としてのみ、思ひ込んでゐられる人々のために、又おこがましくもみちびきのために。これは映画や演劇についても同様です）」と付記している。

創作には大別して、既成の事実や体験を基礎として作られたものと、まるきり空想から発しているものとの二通りがありますが、最も多いのはこの二つを折衷したものではないでせうか。（略）まして創作の場合、事実に対して正確を期さなければならない特別の制約があるわけではなく、「話上手」の話と同じく、要は作者の意図がその作品にどのやうに生かされて、どれだけ読者にアツピール（訴へ）するかゞ問題なのです。（略）ところで、既成事実から素材を得た作品を幾つも書いてゐるうちには、自然、身近な周囲に書くべき材料が種ぎれになつたり、作品内容が偏つてきたり、また素材に厭いたりするのは己むを得ないことです。こんなとき、職業作家とか、生活に余裕があつて、しかも面倒を厭はぬ足まめの人だとかなら、多額の費用なり時日なりを費つて、探索の旅行を試みるとか（たとへば最近論争を起した「ダム・サイト」だとか、またはその他のルポルタージュのやうに）または市井の巷を歩き廻つて「犬も歩けば棒にあたる」式にエサを嗅ぎまはることも可能なわけですが、「サークル誌」に関係する人たちの特殊性として、殆んどが日々の生活の糧としての生業をもつてをり、しかも肉体的な疲労と経済的な困難、時間的な貧困とで、とても以上のやうな真似はできないことです。（略）技術的に上手な作品は商売人に委せておけばよいので、吾々は下手でもよいから、アツピールと主張の強さの上で、恥しくない作品を書きたいものです。（略）／こゝで吾々

が創作するときに強く銘記しておかねばならない最も大切なことは、（略）社会に無関心な市井の一主婦と云へども、実に密接に社会との連関性のなかに日常を生活しているといふことを、作者は重要視しなければならないといふことです。好むとも好まざるとも、社会に住んでゐる以上、どうしてもその影響から無縁であることは不可能なことなのです。（略）吾々が書かなければならないのは、心理を辿つて人間を描くことから、人間をとおして社会を描写し分析することに迄高められなければならないと思ふのです。

（「高松文学」創刊号、傍点原文）

川島の言う、社会に訴えるための創作の在り方は、この文章のすぐ後に掲載された「新日本文学会北九州支部結成さる」の紹介文とも共通している。そこでは、北九州支部[29]の工藤憲男が「新日本文学会は、みずからの創作、批評、研究によつて平和を守り、民族の解放と民主々義のために積極的に活動する文学者の集まりである」と述べている。ここでの「文学者とは、文筆を職業とする者というような狭い意味のものでなく、文学ということが出来るような作品や評論を自分の手で創造する者」を意味している。「北九州支部はこのような文学者になろうとする者、自分で考えたことや、どうしてもうつたえたいこと等を書こうと思つている者も共に集まつて」、自分たちの「文学を作り出していきたい」と展望を綴っている。

同じく「高松文学」創刊号の「編集後記」（「(K)」による文章）では、生活記録や綴り方、手紙、また落がきのようなものならば誰でも書けるのではないかと述べられている。だが、会話の中で相手を説得する際の言葉の表現力はあっても、いざ文章を書くとなるとすぐに言葉が出てこない。「そこに、文学運動やサークル活動の困難性があるのではないか」。またそれは、文章を書こうとする際「美しい文章や、空想ごとを書こうとする意識や、都合の悪いことは書いてはわるいと思うから」だという。だが、労働者たちでも書くことのできる綴り方や日記、メモのような、「私たち働く者の生活の中から」生まれ出る「日常の言葉」によって、「いま日本中の多くの文学者がとりくんでいる国民文学」を創り出している。「私たちの目の前には多くの文学遺産がある。新しいわれわれの芽はその遺産につながつている。私たちのサークルは書くことゝあわせて、もつともつと学習運動と共に進まなければならない。」、働く私たちには書斎はなく、「忙しい二十四時間の実践の中がわれらの書斎だ」と読者たちを書く運動へと導く。この、拙くとも自らの言葉で書き、同じ働く仲間たちに訴えるというものは、「高松文学」の前に発行された「地下戦線」から繋がる雑誌の目的であった。

特に、「高松文学」が「新日本文学」の作家がとりくんでいる国民文学と結び付きが深いのは、この雑誌が野間宏の座談会「文芸講演会」開催にともなって結成されたサークル誌だったからである。

野間宏さんが、二坑の労働クラブで、文芸講演会をやつたとき、無数のやまの文学者達がそこに集つた。／（略）／みんなに同調を求めるようにいつた。／一人の青年は一段

と声をはり上げて、／『みんなが今発言しているように、書きたくてうづうづしている。それを結集して正しく発展させる指導者が当地にいないんです。今までにそのような指導者が当地で、育てられてないことは、全国的な文学運動の指導者である野間さんたちの責任だと思います』／／これらの、代表された発言は、何を物語つていますか。多少でも文学活動をやつてきた者たちは恐らくこの大衆の燃えるような文学的要求を聞いて良心がうずき顔もあげられなかつたでしよう。／自然発生的な文学的盛り上がりといつた言葉ではもう生ぬるい現象で、高松の労働者の中に、ある力がわき上つております。／この熟しきつた果実をそのまゝ放置することはいたずらに頭のクロいカラス共をよろこばすことになります。ふれゝば、はじく状態になつておるのに指導者ウンヌンで、みすごすことは、われわれはできない。／日炭高松青年婦人連絡会議は、この大衆の声を結集して、文学サークルの結成を提案した。組合の機関紙、青婦会議の活動等の中で全坑的な文学サークルの運動実践にとりかゝったが、われわれの熱意だけでは解決できない多くの問題がつぎつぎとでてきたのです。／青婦会議の中にも色々な文学グループを指導してきた人たちがいます。／同人雑誌的な傾向のもの、進歩的な文学の主張をもつている人、短歌俳句部門における伝統派を固守する人。／いわゆる文学に対する考え方（文学の政治性）の相違をどのように結集克服するかの問題。／運動をもつと広い大衆のすみずみまで浸透させるための組織とのむすびつき。それと文学サークルの自主性の問題。／雑誌を実際に出すに当つての活動家の発見、金銭の問題。／餘りにも大きな問題が山ずみされて、世話人一同はちよつと、しゆんじゆんした形になつた。どうだ、創刊号はもつとも金のかゝらない方法で、手ずりでやろうじやないか、一番世話人の多かつた一坑から、まず発刊のトツプをきろう。原稿募集の方法も確立できないでいるが、現在創作活動をやつている人たちの手持の原稿で、こんどはだそう。そのように話し合がきまり、それぞれ分担の活動がはじまりました。／集まつた原稿を前にして、われわれは、実は満足できなかつた。炭坑労働者の現実の姿を浮彫した感動的な作品があまりにも少ない。／素朴でたどたどしい表現の中にも、まだまだ文壇的な悪い部面の雑物がまじつている。プチブル的な臭いを発生しかねない作品集になるだろうが、わが日炭高松文学サークルの生長を物語る記念すべき号になるかも知れない。われわれ世話人一同は、みんなの、みんなの大きな力を信じておるのであります。（「編集室から」二一頁）

野間宏が日炭高松で座談会を開いたのは一九五五年二月二〇日である[30]。その後一九五五年三月と四月には文学サークル準備会が開かれた。同年四月八日付け[31]で高松文学サークル準備会、日炭高松青年婦人連絡会議から出された「御案内」には、「先般九州講演中、高松で開かれた作家「野間宏」を囲む座談会の席上で「働く人の文学は働く人の手によつてつくられる」事が話され、高松の文学サークルを皆の作品で埋めて誰にでも読ま

れるサークルとしてつくろうと云う事になりました。」とあり、座談会において出された問題について話し合い、準備会が度々開かれていたことが分かる。このように野間の座談会を基にして、文学愛好者が集い「高松文学」の発刊につながっていった。

一方で、日炭高松または水巻町以外のサークルとのつながりもある。受贈雑誌として「まきやぐら」（東見初文学サークル）六～一一号、「詩集まきやぐら」（東見初文学サークル）、「詩集にぎりめし」（山梨中銀従組文化部）、「はまなす」（与謝の海療養所文学サークル）、「わかば」（日炭山田青年行動隊）、「まど」（発行所不明[32]）、「新日本文学北九州支部会報」一、二号の名が掲載されている。交流は九州の炭鉱のサークルに留まるものでなかった。

「高松文学」が創刊号のみで休刊となった後、登場したのが日炭高松文芸学習会が発刊した機関誌「炭砿長屋」である。「炭砿長屋」第一号（一九五六年一月一日）には、工藤憲男による『高松文学』創刊号の読後感」という文章がある。このなかで工藤は「高松文学」に掲載された作品を一つずつ批評している。同様に「新日本文学」同年一〇月号でも当間嗣光が「サークル誌めぐり」において「高松文学」を、「実生活から離れてしまつた、古風な文章や「感情」みたいに余裕のなかに文学を見出そうという気配など気になるが七つの小説と多くの詩、短歌、俳句などでうまつており、働く人々がとにかくかいてやろうという気概に満ちてきたのに打たれた。」と評価し、二つの批評は同頁に収められた。このことについて編集部は「あとがき」で「新日本文学北九州支部長の工藤憲男さんから、「高松文学」一号の各作品についての批評と、文学サークルのありかたについての意見が送られてきました。高松文学編集世話人との共同研究を行うため、資料として無断掲載しましたことを筆者にこの場をかりておわびをします」と述べている。つまりこの時点では、「高松文学」が終刊したわけではなく、それとは別に「炭砿長屋」が発行されていたことが分かる。先に述べたように、重複する同人も少なくないことから、発行所の違い以外には両雑誌の傾向に特別な相違はなかったと見て良いだろう。

「炭砿長屋」は、「高松文学」より他のサークルとの交流が盛んに行われていたようである。それは、まず受贈誌が多い事からもそう言えよう。「月刊炭労」（日本炭鉱労働組合）、「北斗」（中国文学会）、「炭鉱地帯」（三池労組文学サークル協議会）、「まきやぐら」（東見初文学サークル）、「山田文学」（山田文学サークル）、「鉱石船」（八幡市文学集団鉱石船）、「郷土と美術」（郷土と美術、京都）、「創雲」（芦屋町青教文化教養委員会）、「こだま」（三井山野合唱団）、「武生文学」（武生文学会、福井武生）、「にこよん文学」（にこよん文学、京都）、「心像」（心像同好会、水巻中央区）、「生活美術」（八幡生活美術）、「日本とソヴエト新聞」（日ソ親善協会）、「せいねん新聞」（水巻古賀青年部機関紙）といったサークル誌名、機関紙名が並んでいる。また、日炭高松版画サークルが結成され、千田梅二や上田博が表紙を担当していたことや、二号（一九五六年二月五日）では「うたごえ通信」と題しうたごえサークルに所属していた早野暉雄が、他のうたごえサークルのメンバーと往復書簡の形で意

見交換を行っていることも他サークルとの交流が分かる点である。さらに、「炭砿長屋」二、三号では、「読者通信」の欄を設け、全国の読者から寄せられた感想を掲載している。例えば、二号の「読者通信」では、「まきやぐら」から花田克己が、「まきやぐら16号をお送りします。御批判や御感想がありましたら、是非送つて下さい。／高松文学の創刊を心から喜んでいます。先日僕たちのサークルの栗森君がもらつて帰つた「地下戦線」をよんで非常に感動しましただけに非常に期待して読みました。／「地下戦線」の鋭どさと違つてはいますが、今度の「高松文学」の豊かさは非常にうらやましいと思いました。今月13日に僕たちの組合で文芸大会を開いた時、上野さんにお無理を願つて来て話してもらいました。本当に労働者階級の立場に立つと云うことの大事さとむつかしさを痛感しています。／高松文学の一層の御発展をお祈りして。握手。／高松の仲間のみなさんへ」という手紙を寄せた。宇部興産の花田克己は、先にあった機関紙のように日炭高松労組と交流をもち、「サークル村」にも参加するようになる。この「読者通信」の手紙文面から、「地下戦線」の時期、つまり一九五〇年代前半から日炭高松と交流があったといえる。「読者通信」には他に、同じく第二号では東京全生園「広場」の田島康子、第三号には山口県南陽町「月刊明鏡」の山時隆信、東京都渋谷区の日本文学学校連絡事務局、北海道空知郡三笠町新幌内の秋好昌夫、嘉穂郡三井山野三坑の山本行進、北海道雄別炭山火山脈文学会の石田政治、東京都の高島穣からの通信が紹介されている。他サークルの読者から寄せられた手紙を掲載する手法は、「サークル村」の「消息」欄として引き継がれているといえる。そこでは、鶴見俊輔や山代巴などといった名前もある[33]。

また、「原子症による慢性脾腫」により山口県で静養中の上野英信を救い、再び日炭高松に帰ってきてもらうため闘うことを主旨とした「えがたい労働者作家上野英信を救へ！」（「炭砿長屋」第一号、一九五六年一月一日）という記事も掲載されている。この中で、「アカハタ」（一九五五年九月二四日号）より「上野英信氏原子病悪化」の記事が転載されている。上野の簡単な紹介や病状、援助を望む文章とともに、休養先の山口県吉敷郡阿知須町の住所が記されている。さらに以下のような「上野さんからの便り」が紹介されていた。

自分たちがうけた原爆の恐怖とギセイを再びくりかえしたくない。そして本当に戦争をふせぎ平和をまもるためには、労働者階級の力をつよめること以外にはないと考えて、私なりに一生懸命努力してきたつもりですし、これからも努力をするつもりでしたが、どうも体のほうが危くなつて空しくひきあげねばならなくなつてしまいました。残念でなりません。でも、もう一番元気になつて再び皆さんと一緒に斗いたいと思つています。（略）ともあれこうして手紙など書かねばならないということは不幸なことです。ヤマバトでチヤンポンをつつきながら菊千代マダムをひやかしながら、膝をつきあわせて語りあいたいものです。こんなことを書いていると目のまえに浮かんでくるようで、どうもいけません。／毎日〳〵夜もひるも、バカみたいに眠つ

てばかりいます。家族のものがあきれかえつています。とにかく眠つてさえいれば体の調子がいいようです。そのせいか、近ごろは食慾もおきてきました。他事乍ら御放念ください。一番いい季候で創作が書きたくて仕方がありません。でも、ちよつと無理をするとガタッときますから、当分自重します。あなたの云われるとおり、必死に療養します。

編集部からは、「上野英信の救援運動が各地で起つています。高松でもヤマの版画家千田梅二氏の「版画個展」を開きカンパ活動がおこなわれ、香月町でも若い人が中心にカンパがなされています。東京では中野重治などの作家が大きく救援活動を始めています」とある。その後も、「炭砿長屋」第三号（一九五六年三月一五日）において石田政治（北海道、雄別炭山、火山脈文学会）から見舞いの言葉とカンパが送られるなど、救済活動がサークル誌をとおして広く行われていたことがわかる。

第五節　「月刊たかまつ」「文芸誌たかまつ」

「炭砿長屋」は一九五六年五月発刊の第五号で休刊となった。その後、同年一一月に日炭高松文学・美術サークル協議会を発行所とした「月刊たかまつ」が創刊される。発行編集責任者は上田博、事務局は日炭高松労組教宣部内[34]、印刷所は、折尾印刷所[35]であった。「月刊たかまつ」は、「サークル村」へ直接に繋がっていくサークル誌としても評価されている[36]。「月刊たかまつ」は、一九五六年一一月一日に創刊され、一九五八年三月八日の一一号が終号となった。九号からは「文芸誌たかまつ」と雑誌名が代わり、また一〇号からガリ版から活字に変更になっている。労働組合より資金面での支援をうけるようになったからであった。誌面では、江夏茂一郎、早野暉雄、高野智、山崎喜与志、上田博の名があり、「炭砿長屋」からの連続性が感じられる。発行編集責任者は日炭高松版画サークル会員の上田博であったが、実際に雑誌をとりまとめていたのは上野英信であった[37]。サークル誌の内容から読みとれる特徴を以下に挙げる。

まず特徴の一点目は、サークル協議会としての性格をもっていたことである。誌面から文学サークル、映画サークル、うたごえサークル、写真サークル（もぐら・サークル）、演劇サークル（つくし座）などが参加していることが分かる。

> この機関誌と各サークル誌との関係についてよく質問をうけるが、あくまでも運動の主体は、自由な独立したサークル誌にある。多くのサークルが、それぞれのジャンルで、またそれぞれの性格や主義主張をもって、大いに競いあうことこそ望ましい。しかしその為には、書く運動をもっと広く組合員大衆のなかに燃えあがらせ、不断にその創造的なエネルギーを解放し吸収する努力を怠ってはなるまい。
>
> （二号三二頁、「編集後記」）

とにかく従前のような甘い考えでは、大衆のまえで歌唱指

導なんかできないということだね。すすんだサークルでは、もう創作にも手をのばしておる。創作の行われている所なんか、さっきも云ったように文学サークルとの結びつきがしっかりしていることだ。即ち文学活動者が直接うたごえ活動の中に入ってきている。うたごえ活動者自身も、文学活動にたずさわっている、という事実だ。（四号九頁、井手貞三「日本のうたごえに参加して」）

「文学・美術サークル協議会」という名からも分かるが、様々な文化サークルが結束した協議会となっていた。そして、例えば文学の創作的性質をうたごえ運動にとりいれようとする井手の言葉にみられるように、すでに述べてきた「高松文学」や「炭砿長屋」でみられた他サークルとの繋がりよりも、同人たちの創作上において各々の文化運動の連結を具体的に意識し、理論化しようとするにいたっている。

創刊号では、早野暉雄が「つくし座とともに」（一五―一七頁）のなかで演劇サークルについて述べている。早野は、第七号掲載の「サークル運動の課題（演劇サークルの巻）これからの〝つくし座〟」（一七―二一頁）と題する文章で演劇サークルが直面している問題について綴っている。

まず第一は問題は〝つくし座の性格〟と私たちは云つておりますがどんな形で今後活動してゆくかということです。／最初、つくし座は高松青婦人会議の演劇部として組合員とその家族で構成していたのですが、その後、組合とは全然関係のない一般の人たちも入るようになりました。／何故かというと、組合員の中から女優さんとして入つてくる人が少い、というより全然入つてこないので、いきおい家族の中からか、それでもなければ一般町民の中からでも入つていたゞかないとお芝居ができないからです。／（略）／ところが一般の人たちは組合事務所に出入りするということがわかると勤務先からどんな圧力がかゝるかわからないそういう心配があるために、新聞などにのせる場合は水巻町の自立劇団ということにしてもらつてきた。又、事務所は水巻演劇協会として教育委員会においている。私たちとしては形はどんなでもかまわないから面白く楽しんでもらえる演劇活動をやつてゆきたいと思つているのです。ですから組合の職場劇団でも水巻町の町民劇団でもいゝわけです。／（略）／しかし困つたことに演劇にはいろいろと沢山の金がかゝるので組合から援助してもらわなくてはならないし、町の方からも出来るだけ財政的な援助をしてもらつた方がよいので、あまりその性格をはつきりさせてしまつたのでは困ることになります。／（略）あいまいな形ではなくもつとスツキリとしたものにしようということになりました。それは今のつくし座は組合員と家族を中心に職場劇団としてそのまゝ残し、別に水巻町民の劇団をつくろうということなのです。

組合員と一般町民が一緒になって文化団体を創った場合、組合から支援をうけているということが問題となる場合があっ

た。つまり、所属する集団の名義が問題となる例である。以前の「炭砿長屋」でも同様の問題があった。俳句創作をおこなっていた新日本文学会会員でもある石松弄涯は、第一号（一九五六年一月一日）の「公民館俳句に就て」の中で、水巻町では高松炭鉱を含めて「サークル活動の分野よりも公民館活動により多く取りあげられて来た」という。これは、二節で挙げたように、機関紙「日炭高松」紙面でホトトギス派の句会欄が頻繁にもうけられていたことからも分かる。石松は、「しかし、プロレタリア文学を提唱されてゐるサークル活動の指導者の人々は、公民館俳句会は民主的、進歩的な俳句のたちあがりを抑圧しようとする反動勢力を持つてゐて、それらの選者の多くは花鳥諷詠派の結社宗匠でありその指導も保守的な伝統に縛り付けたものであると批判をなしてゐる」、とサークルにおける俳句運動と公民館で行われる句会が相容れないという事実があることを指摘する。石松の考えは、このような批判を否定し、実際に「句作する人々が皆、一人一人労働者である事を無意識の中にも自覚してゐるし、また公民館の運営も労働者自らの掌によつてなされてゐるからなのであらう。すくなくとも反民主的な、反進歩的な気持で句作し、選句してゐる人はゐない」、優れた「俳句は階級意識の過剰から現はれるものではなく、やはり無意識な日常生活の労働者の戦慄の中からはき出る詩情である」、「俳句は、サークルの誌上に於ても俳句であり、決して、標語やプラカードの様であつてはなるまい」というものである。このように、演劇の所属団体の問題の一方で、作品の性質の問題により、サークル運動と他の文化団体の間に壁が生じることもあった。

雑誌の内容については、これまでの日炭高松の文学サークル誌よりもさらに充実したものとなっている。版画、詩、短歌、俳句、小説、随筆、エッセイ、聞き書き、マンガ、うたごえ運動の報告、映画批評、写真と今まで以上に多岐に渡っていた。さらに、組合幹部による投稿があることも大きな特徴だと言える。

第六号では、主婦会の二木寿子による「生活つづり方　風呂で」（二―三頁）、詩「痕（あと）」（四頁）が掲載されている。同号の「編集後記」では、「忙しい中を、主婦会の二木さんが原稿をよせて下さった。いわゆる「組合のお偉方」といわれる人たちというものは、人には書け書けと要求するが当人はペンをとらないものと相場がきまっていたが組合の教宣部長や主婦会の文化部長が率先して原稿をよせてもらえるようになって、こんなにうれしいことはない」とある。サークル誌は労働組合からの資金面での支援があるが、労組幹部についての批判記事が掲載されることがある。その一方で、「月刊たかまつ」で組合幹部による記事も載せていることは、サークル誌が意見が相違する者同士が互いの綴った文章を介して交流する場ともなっている一例である。

また、「炭砿長屋」と同じように他地域の文化サークルとの広範囲のつながりも指摘できる。誌面上に掲載された「受贈雑誌」一覧から引用してみよう。

●九号→「詩のつどい」七号、「火山脈」四一号、「萌芽」

三、四号、「三池文学」一五号
●一〇号→「芽生え」八号、「山野文学」五号、「ぼたはら」六号、「裸像」一四号、「まきやぐら」二九号、「断層」一〇号、「労働文化」八、一一号、「月刊炭労」八九号、沖田活美詩集『斜坑』、「福岡作詞作曲の会」、「舞台の青春」（北京）

また、受贈一覧とは別に、記事として出てくる他サークル誌、もしくは他炭鉱名もあり、これまでの交流が更に熟され各々のサークルもしくは労組の状況を見知ることができるようになっている。

三井田川労組「たがは」、大正炭坑「青空コーラス」、日鉄二瀬「山のコーラス」、杵島炭坑のうたごえサークル、日炭山田、高島、崎戸、常磐、道炭労、雄別炭坑、岩田屋デパート労組・臨時職員労組、上山田の木城炭坑の青年たち、京の上炭坑（上野英信「１０１日めの太陽」）

これらは、「日本のうたごえ」に参加し他サークルと交流した体験を綴った井手貞三の文章（第四号）や、大正鉱業労働組合歌「夜あけの歌」の紹介（第二号）、岩田屋労組らくがき帖、花田克己の「炭山の娘」の紹介（第七号）などによる。

第六節　「ガリ版文化」と炭鉱労働者

これまで、北部九州の炭鉱町水巻における炭鉱労働者の文学作品の発表の場について、各々の機関紙、サークル誌の特徴をみながら論じてきた。ここで、改めて論を簡単にまとめておきたい。

日炭高松には、主に①会社側が発刊した機関紙「日炭高松」、町役場の「広報水巻」、②公民館で行われていた句会や「文芸教場」、「蟻塚」、③労働組合のもとで作られた機関紙や、「労働藝術」から「月刊たかまつ」（「文芸誌たかまつ」）にいたるサークル誌が存在した。①では主に炭鉱における文化団体の記事を掲載し、ホトトギス派の俳句が紹介された。それは、②の公民館で行われていた句会とほぼ同じメンバーであった。また、労働者のサークル運動における俳句とは、創作の面で一種の「隔たり」があった。「蟻塚」では、水巻町の文化発展を目標とし技術面での向上を目的とした文芸雑誌作りがおこなわれていた。その一方で、③においては労働者自身がガリを刷って雑誌をつくり、他の文化サークルや、他地域のサークルとの交流を行っていた。そして、その交流が手紙の紹介、サークル誌の紹介、うたごえ運動での交流、他の炭鉱についてを題材としルポルタージュを書く、そして、問題を共有する、というように、徐々に交流の密度が深まっていったことが誌面から判明した。日炭高松の問題から、他の地域の問題へと繋がっていたことが分かる。

その中で特に③の資料は、そのほとんどがガリ版刷り（謄写版、謄写印刷）のものであった。つまり、機関紙やサークル誌は、一方でガリ版という印刷方法に支えられていたことも忘れ

てはならない。ガリ版自体の歴史は古くここでは割愛するが、本章で対象とした戦後、特にＧＨＱ占領後から一九五〇年代後半は職場新聞が全国的に広まった時期であった。金子徳好は、『ガリ版文化史―手づくりメディアの物語』[38]のなかで、当時の職場新聞は二つに大別できると述べている。「一つは、名前は職場新聞でも、実質的には共産党の細胞新聞であり、そのガリ版刷りの内容は、右傾化した組合幹部への批判が中心」であった。「もう一つはサークル新聞であり、映画や文学の同好者の集いの新聞だった。しかしこのサークル新聞も、活動家たちの一種の抵抗としての文化運動の一面があった」。朝鮮戦争が始まる一九五〇年、日炭高松でも労働者たちは敏感に現状を感じとっていた。それは、二節で述べたように、芦屋基地や八幡製鉄所が近くにあったためであるが、そのため「地下戦線」などでもそのことを題材とした作品が掲載されていた[39]。全国的にも「ガリ版の反戦ビラを配布して逮捕される青年が」多く、「ガリ版こそが反戦・平和の運動の唯一つの武器だったような時代」だったという[40]。五八、九年においても、反核、平和行進の記事が掲載された労組の機関紙が多かったことを三節で触れた。つまり、朝鮮戦争から「六〇年安保」に至るまでは、一方で労働者とガリ版との蜜月であったといえる。金子は、一九五六年に日本機関紙協会の事務局に入り、六四年に事務局長となる。日本機関紙協会は、一九四七年に創立した「労組を中心とする民主諸団体の宣伝センター」[41]であり、労組の機関紙の編集指導をおこなう「編集講座」を開催していた。九州にも支部があり、森一作が一九四九年に日本機関紙協会九州連絡所をつくったことから始まる。森自身もさまざまな労組教宣部へ機関紙の編集指導にまわった経験を持つ。特に九州支部が当時、折尾印刷所内に事務所を借りていたこともあり、折尾が水巻町と隣接していることから、森は日炭高松の労組と交流を頻繁にもち、上野英信、千田梅二「地下戦線」、宮下明、早野暉雄、国上伸雄などを直接知るようになったという[42]。彼は後に、「サークル村」結成時に編集同人として名前を連ねている[43]。日炭高松は労組が強く、機関紙製作にも慣れていたので、他の炭鉱の労組が学んでいたところがあった。労組から資金面で援助があり、サークル誌を作る環境が他の炭鉱のサークルよりも整っていたと言える。また、日本機関紙協会のように、労働者の機関紙向上のため講座が開かれたこと、そして機関紙協会と労働者との出会いが、ガリ版文化を支えていたことは忘れてはならない一要素であった。

　各々の職場の機関紙とサークル誌の大きな違いは、まず形態が異なる点である。ページ数が異なるため、より多くの人が記事を載せる機会があり、長編小説も掲載することができる。そして分量の多い分、読ませる文章、より文学的な創作意識が求められる。また創作や編集に時間がかかってしまう。よって、労組教宣部のなかでも、さらに有志が集い作られるのがサークル誌であるといえるだろう。ただ、機関紙を作る際のガリ版、編集の技術はサークル誌にも活用されていたといえる。また、今までみてきたように、職場機関紙において交流をおこなった杵島炭鉱など他の炭鉱は、サークル誌においても交流があった。そういう意味において、両者の共通点は多く、サークル誌を考

えるとき機関紙もまたさけては通れないだろう。

では、このように戦後の一定期間、労働者たちが自らの手で作品を創り、ガリを刷り、作った機関紙やサークル誌を他の労組やサークルと交換していたという現象を、私たちはどのように総括すべきなのか。「文芸誌たかまつ」第九号に掲載されたあが・きよしの詩には、炭鉱労働者がサークル誌を創る過程が如実に表現されている。

こいつら一字一字が生きているように／感情をこめ／誰にでもうったえる事ができるように／身の廻りの出来事や／いま起きている闘いを書きつけていく／／坑夫はゴツッとこぶしをうち／子供たちはワァーッとかんせん（ママ）をあげ／おばさんたちは、大声でしゃべりはじめる／そんな字を一字ずつ書きつけていく／寒い室は暖かくなり／破れた窓はひとりでにふさがり／飢えた子供には／パンがツバメのように飛んでいく／／石炭のような文字がなすりつけられ／つぎからつぎえと廻され／ひとりひとりうなずき／スイッチはひとりでに切れ／ベルトコンベアはとまり／踏みにじられた雑草が／むくむくとおきあがる／／職場のすみから長屋え／となりえ　またとなりえ／一瞬にして知らされる／／そいつは活字でない／ガリ刷りでもない／恋人たちのように抱きあって／語られる／ひとの体温でぬくめられた文字／悲しいしらせ／こみあげる怒り／ひとりで泣いたこと／みんなで笑ったこと／／ゆがんでいたり／カタカナであったりまっくろいやつが／いっぱい書きつけてある／ひえないうちに／読んでくださいと書いてある／それがわたしの仕事でありたい（あが・きよし「パンがツバメのように」）

この詩には、炭鉱労動者によって作られる機関紙、もしくはサークル誌が、同じ炭鉱労働者たちや子どもたち、また女性たちの関心を惹きつけてやまないものとなるよう、作り手の願いが綴られている。三連目では、印刷の過程が、炭鉱労働の過程と二重写しになっている。「石炭のような文字」が「一字一字が生きているように」擬人化されているが、あたかも労働者たちが「ひとりひとりうなず」き労働に従事する姿として読むことができる。そして四連目では、刷られた文字列が、自由に動き出し文字以上のものへと変形し人々へ届けられる様が描かれる。「ひえないうちに読んで」ほしいその文字列は、二連目にあるように、飢えた子の空腹を満たすような文字列なのである。だが、それはあたかもパンがつばめのように飛んでいくように、一方では絵空事でもある。それゆえに、最後の「それがわたしの仕事でありたい」という言葉は想像以上の重みを読者に与えている。記事をつくり文字を刷る作業に、炭鉱労働を見ている作者は、サークル誌や機関紙の可能性とともに、炭鉱労働が身近な人のためとなって欲しいという想いも綴る。そこには、常に自分以外の誰かへ向けられる想いを伴っている。

サークル誌ではたびたび「手紙」が紹介されていた。しかし、そもそもサークル誌自体が「手紙」としての役割を果たしていたといえる。そこにはつねに読者が居り、応答があるのである。見てきたようにサークル誌には、サークルでおこなった行事や

職場闘争のルポとともに、詩、俳句、小説など創作が行われていた。事実のみを伝えるルポなどの記事だけでもよかったかもしれない。しかし、実際に文学がそこにはあったのである。書き手は、読者を想定して創作を行うが、サークル誌や機関紙の場合、その読者は同じ職場の労働者や家族たちであり、また他の地域の労働者、ときに職種の異なる労働者たちが主であった。サークル誌の交換によるサークル間交流のなかでは、名も無き書き手ではなく、名前を持った「作家」たちがいたのである。そして、他の書き手の作品が賞に選ばれれば、自分ももっと興味深い作品を書こうとする意識があったはずである。そこには、文学を分かち合う仲間が居り、作品が往還する場があったのである。それは、自らの手で創作をし、誰かを楽しませ、感動させ、時に共感を持たせ、奮起させたいという、欲望である。これは決して自己満足というものではなく、確実に顔の見える相手に届けたいという強い想いであったはずだ。各々の作品は暗いものであったり切迫した実情を描いたものもあるが、雑誌全体の印象からは、集団が閉じられたものではなかったことが分かる。それは手紙があり、通信があり、他サークルとの交流があり、開かれた空間があったからである。人と人との往還が、文化運動にとって大きなエネルギー源となっているといえるだろう。サークル誌や機関紙、さらには五〇年代のガリ版文化は、炭鉱労働者たちに文学を語る場、文学作品が往還する場を創り出した。

第二章　文学サークルの展開と、その表現
――「山田文学」の場合

第一節　はじめに―森田ヤエ子「がんばろう」

がんばろう　つきあげる空に
くろがねの男のこぶしがある
もえつくす女のこぶしがある
たたかいはここから
　たたかいはいまから

がんばろう　つきあげる空に
輪をつなぐ仲間のこぶしがある
おしよせる仲間のこぶしがある
たたかいはここから
　たたかいはいまから

がんばろう　つきあげる空に
国のうちそとのこぶしがある
かちどきをよぶこぶしは一つ
たたかいはここから
　たたかいはいまから[1]

作詞活動に取り組んでいた森田ヤエ子は、一九五九年に筑豊の炭鉱の悲惨さを描いた「どんづまりの歌」を作詞した。九州のうたごえ運動の草分けである荒木栄が作曲を担当し、以降交流が始まるようになる。これが大きなきっかけとなり、三池で労働歌を指導していたうたごえ行動隊から新しい歌の創作支援を頼まれる。一九六〇年五月一〇日に書き上げられたのが「がんばろう」の曲である。

後に流布する歌詞では、「燃えあがる女のこぶしがある」となっている。この部分は、前記のようにもとは「もえつくす女のこぶしがある」であった。荒木栄は、作曲したものを「三池労組のワキにつくられたトタンぶきの部屋に車座になって」歌ってみた。その時、「もえつくす」の歌詞について、「三池の主婦の気持は決して、そんなんじゃない。これからもっともえさかってゆく巨大な火だ、火のかたまりだ」とうたごえ行動隊から変更を求められたという。荒木は、森田の意図を説明しながらも、行動隊の意見に賛同する。これに対し、森田は抗議。荒木は合唱メンバーに歌詞の変更を求められたことを伝え、数時間かけて説得した。ヤエ子には「燃え上がるでは全然不足。女は「もえつくす」ほどの気持ちで闘っていたのだから」という想いがあった。前掲のとおり、森田の著書ではオリジナルの「もえつくす」のままで記載され、「私も、はじめての要請に応えたものの、あまりいい気分ではなく、若さとはいえ激しい怒りさえ覚えた。栄は、うたごえ運動と私とのはざまで悩み、苦しんだという手記を残し」た、と綴られている[2]。その後、「がんばろう」の歌は三池闘争の場で歌われ、広く知れ渡るようになる。

ヤエ子は指宿海軍航空隊施設部の事務員として終戦を迎えた[3]。二〇歳の時に指宿の職業安定所で手渡された「炭鉱労働者募集」のビラを見て、筑豊炭田へ移住する。福岡県山田市の筑紫炭鉱で二ヶ月ほど坑内に下がった後、樋口炭鉱での勤務を経

て、三菱上山田炭鉱の購買部に採用された。組合指導のコーラス部に入り、演劇活動にも参加した。幼いころから短歌や詩が好きだったヤエ子は、サークル誌「山田文学」に詩を発表。後、一九五八年「サークル村」、翌年「無名通信」に参加するようになる。

この「山田文学」は、三菱上山田炭鉱（旧・山田市、現・嘉麻市）の文学サークル、山田文学サークルより発行されていた。三菱上山田炭鉱労働組合より資金援助を受けている[4]。一九五四年五月に創刊され[5]、日炭山田炭鉱、筑紫炭鉱、木城炭鉱で働く者も参加し、確認できるかぎりで三四号まで発刊されている。

一九号には、会についての説明が記されていた。

山田文学サークルは／同好者だけの集いではない、働く者と働くものが集って、共に苦しみ、共に考え／光を創り出すグループです。

会誌山田文学はひたぶるな魂のもえる火どこ／それは誰も消すことの出来ない／たかめられた魂の／自由な発言の場所なのです。〈将精〉

大江将精の名によって記されたこの文章は、毎号ではないが巻頭や奥付に時折掲載された。「自由な発言の場所」という言葉は、後に見るように金銭面で援助をおこなっていた労組の幹部批判も掲載することにも確認できる。

募集していた原稿は、創作、コント、詩・短歌・俳句、小曲・歌謡・川柳、ルポルタージュ、戯曲、表紙画・カット、写真・グループ短信である[6]。その他、他サークル同人による作品批評や、他サークル作品の転載というかたちで、外部とも交流を行っていた。山口県宇部炭鉱のサークル誌「まきやぐら」同人の花田克己は、二〇号「通信」欄において、うたごえサークルでも活躍していた村上（森田）八重子「母」（一六号）などの批評を行っている。二六号は、「各地サークル誌の作品」特集となっており、山野てつを「ショウチュウ」（「裸像」五号）などが転載された。同号「編集後記」によれば、他サークルとのより一層の交流は、上野英信の助言によるものであった。上野は当時日炭高松で「月刊たかまつ」の編集にあたっている。さらに二七号（一九五六年）の「あとがき」には、筑豊地区における文学サークル協議会の設立計画が記されている。一九五七年一〇月に開催された第一回筑豊文学サークル懇話会は、文学サークル協議会の設立を目的としたとみられており、そのような文学サークルをめぐる連なりのなかに「山田文学」も存在していた。

会発足当時は、大江将精、木村日出夫、村上八重子の三人が編集委員であった。労組の堤書記や、教宣部の協力に依って発行は続けられ、一三号を契機として、更に村上幸夫、小川雅正（三菱上山田）、土田末広（日炭山田）、坂下忠（筑紫）の計七名を編集委員とし、ガリ切をこの中の一人が受け持つことになる。編集方法は枠を設けず無審査に、原稿そのままを印刷した。発行後に批評会を持ち、同人同士で作品の批評を行っていたという[7]。

誌面上に確認できるのは、「大衆」と労組の架け橋としてあろうとしたサークルの葛藤である。森田ヤエ子も参加した「山田文学」にはどのような作品が掲載され、どのような議論が生まれ、またどのように終刊していったのか。以下、具体的に追ってみていきたい。

第二節　掲載作品―故郷・労働・占領

文学サークル誌である「山田文学」には、詩作品が多く掲載された。そのなかでも、炭鉱労働を素材としたものが最も多い。例えば、一〇号に掲載された大江正照「筑豊炭田」は、筑豊で生まれ育ち、現在もそこで働く「私」の故郷への思いが綴られていく。

ねむれなかった朝
目を覚ますように
私は筑豊炭田の真只中に生れ
周囲（まわり）を見廻した

飲んだくれの親爺と
勝気なお袋との汚しい争
夜の闇のなれ合いと
拒絶とのひしめきに
涙と共にヘドを吐き
甘やかな　軽い両親の愛情に
薄ら笑いを浮かべ
殺風景な嘉飯を
吹き上げる川風寒い冬の遠賀を
黒ぼこり舞い立つ田川を
又、暮れて行く両岸の山裾に
砿山の灯の群が漂いきらめく直鞍と
転々として育ち
乱費と無秩序と
ハネ上った虚栄にみちた家庭に
年毎に極貧の沼にのめり込み乍ら
焦躁と嫌悪と虚無に
幼い私は何度も雑踏する街中に
放り投げ出されたように
立ち停っていた。

（略）

選炭機の騒音の中
鉄車はチープラでめまぐるしく
回転する
朝、共に話して下った
五人の落盤死
タンカーの黒くしたゝる血
青白い皮膚

（略）

苦しめられた生活に
お袋の静かな怒りの目
道化じみた親爺の的外れの憤懣は
やっと足を地面に下ろした。

私は死ぬ迄生きよう　私の中に
住んでいる色々な人と共に
社会での最下層の、さげすまれ
笑われ、苦しんでいる
沢山の人達と共に生きよう
そうする事が私の唯一つの事だ

安定と、重量と、鋭さと、確実さと
熱と、力強さと、大地を圧して
大円錐形のボタ山は
筑豊炭田の青空にそびえ
濃褐色の水は
山田、嘉飯、田川を流れ
直鞍、遠賀をひき入れて
軍事基地葦屋（ママ）を圧倒し
波荒い
玄界灘えそゝぐ。

大江は、炭鉱町の景色を描きながら、その細部をみようとする。最後の数行には、山田、嘉飯（嘉穂・飯塚）地域、直鞍（直方・鞍手）地域、遠賀地区、さらに田川をながれる遠賀川とその支流を描きながら、米軍基地のあった芦屋へ石炭産業によって濃褐色に染められた川の流れが行きつくことをうたう。自らの故郷である筑豊と、家族との記憶、そしてそれを大きく包み込むように鳥瞰的に描かれる濃褐色の川は、その汚濁であるゆえに軍事基地を圧倒する。玄界灘へそそがれる流れは、朝鮮戦争が勃発した朝鮮半島へと向っているようだ。詩「筑豊炭田」を端緒として考えたいのは、働く場として、生活している場としての炭鉱町の表象と、戦争の記憶と密接に結びついた米軍基地へのまなざしである。

「サークル村」の作品を読む時、「故郷とは何か」という問いが読む者に否応なしに迫ってくると述べたのは、松原新一であった[8]。松原は、「サークル村」に掲載された大野隆司「凹」[9]や、山崎喜与志「身売り」[10]、「つぎ目」[11]、椋田修・石道子（石牟礼道子）「南九州のサークルの根」[12]などに言及しながら、故郷の暗さが描かれていったことを論じている。これは「サークル村」誌上に現れたものだけでなく、誌上には現れないその背後の事象としても当てはまる言葉である。「サークル村」創刊の母体の一つとなったのが、北部九州のサークル運動とその表現であったことを考えると、それらのサークル誌を読む際に、私達は「故郷」なるものに考えを巡らさざるを得ない。大江の「筑豊炭田」に見られるように、北部九州のサークル誌には、自らが生まれた土地、そして働く土地に対する思いが記されて

いる。それら無数のサークルは「サークル村」誕生の母体となった。

「筑豊炭田」の他にも、例えば、「ハモニカ長屋」の朝の様子や小炭鉱の地底での労働などを描いた大江将精「卓上会議」（一六号）、落盤事故の瞬間を描く土田末広「落盤」（二一号）、「かいならされた牛や馬に等しい」坑夫の悲哀を描く、大江将精「坑夫の言葉」（一八号）、椎葉寅生「俺達は炭坑労働者だ」（二六号）、などに、炭鉱長屋の生活や、坑内労働の様子が描かれている。これらの作品は、かつて多くの炭鉱が存在した北部九州の、ひいては日本の高度経済成長を陰でささえ、消えていった風景の表象としてそれ自体、存在意義のある作品群である。ただし、これらの作品はやや表現が単調であり、決して私たちが持つ炭鉱のイメージを超えるものではない。炭住の生活や労働の悲惨さという炭鉱のイメージの類型が確認できるのも事実である。そのなかで、たけだ・たけし（武田武）[13]「坂道」（一四号）は働くということを普遍的に捉えようとした詩である。

ぼくらが、わたし達が
汗のかたまりのようになって働らくのは
五十年分の米を貯えるためでも
百年先の幸福を築こうという　そんな
夢のような野心からでもない。
たゞ毎日を生きぬいて行くため
太陽が地球を一回りする二十四時間
そのたった一四四〇分という短い時間の
壁をつき破るためなのに
それさえ邪魔する「手」がある

そいつは　ぼくらの　わたし達の
腰に肩に頭の上に重石をのせて
ぐい　ぐい　おさえつけ
日干されたみみずのような血管から
なおも血を
しぼりしぼった肉体からなおもエネルギーを
取ろうとするのだ

それはまるで闇焼酎をしぼる違法者のようだが
その闇屋には監視の目が厳しい

だけど　ぼくらを　わたし達を
圧制するすぶとい「手」には
どんなトリックが仕かけてあるのか知らないが
机の上におる監察官の目をくらまし
ゆうゆうと陽をあびている。

のぼり坂はきっと下り坂に続いている
だから荷物を引く牛も決して
へこたれないのだ

あの砂の世界　沙漠にさえも
清水のふき出すオワシスがある

しかしぼくらには　わたし達には
ちょっとの下り坂も
一つのオワシスもない

だがぼくらは、わたし達は
坂道をどこまでものぼってゆくのだ
それは意地であり反駁である……が
それはたった一つの慰めでもある
頂上には見えないが　あえぎ乍らも
一歩　一歩　のぼってゆくのは
或る一点に近ずいているのだ

一日を、一四四〇分と捉えた時に、果たして働くとはいかなる意義を持つのか。一四四〇分という短い時間の壁を突き破るにも、「ぼくら」「わたし達」には、それを邪魔する「手」がある。下り坂もオアシスもない坂道をただひたすらに登り続ける。状況は甘くはない。登り続ける先に、頂上は見えないのだが、「或る一点に近ずいている」という確信のみがあるだけである。「ぼくら」「わたし達」にとって、「坂道をどこまでものぼってゆく」こと自体が「たった一つの慰め」である。何か明らかな目的があるのではなく、苦行そのものが目的となっている。だからこそ、到達すべき頂上は「或る一点」と、抽象的にしか表現されない。労働や生活の苦悩によって疲弊した人々が、「或る一点」としか言えない何かに向って生き続ける姿が描かれているといえる。だからこそ彼らの苦悩が、簡単には解消されない様子が切実に表れている。それは彼らのことではなく、常に「ぼくら」「わたし達」のこととしてあるのだ。

土地に対する思いは、米軍の占領への反抗として表現されてもいる。例えば、「引き裂かれた祖国の／血のしたゝり、被弾地の／木々のざわめきはやまない」と綴った村上（森田）八重子「富士をかえせ」（一三号）や、木村日出夫「戦艦大和」（二〇号）などである。「戦艦大和」では、作品自体の題名にもなっている映画を観て、「群がり寄せる艦載機になぶり殺しにされる」その姿に「目を覆いた」い気持ちになる「私」が描かれる。彼は、かつて憲兵であった友人と、戦争に負けたことを「お父さん負けたんか、弱虫だなあ」という息子ともに、帰途、米軍の高塀に放尿する。「バシッ　バシッ　はね返」る尿は、そうすることでしか占領軍への反抗を示せない「私」の心情を哀しく響かせる。

戦争の記憶は、原爆の描写としても表現されている。河田圭助「屍体収容―ヒロシマの記憶に―」（二六号）は、他サークル誌「谺」三一号（山形県酒田市、こだま詩の会）に掲載されたものを再掲したものである。「腹をかえした魚のように　ぶよぶよの裸かのぬるんと赤剥けの　生ゴム色に膨れあがった屍体が　むんむんと異臭をのせて河面を浮遊し」ている。屍体のなかで「僕等は仕事をしていた」。

「人が泥かわからぬ　これらの死者たちにむかい／／僕らに

は　問いも答へもなかった／すでに殺戮されていた僕らには／問いも答へもあらうはずがなかった」。その後、一五号では平和特集号が組まれ、表紙には、柳原白蓮の短歌「原爆のみたまに／誓ふ人の世に／浄土をたてむ／みそなわしてよ」が記された[14]。被爆地に対する思いは、同号掲載の「表紙について」に記されているように、「原子戦争反対の署名」運動などを発端として問題化されるようになったことが推測できる。

さらに、炭鉱と原爆が重なる地点として、坑内事故をとらえたルポを確認することができる。松岡保文の手記「坑内では死にたくない！」（三四号）は、一九五八年九月二五日、山田市の熊ヶ畑池本炭鉱で起きた爆発事故が素材となっている。就業中に事故に巻き込まれた、松岡自身の体験が綴られている。一四人の仲間の遺体の描写で、松岡は以下のように言葉を続ける。

おそらく最後のあがきであろう、苦しまぎれに塊炭をシッカとにぎりしめた焼けただれた手、焼けちぢれた頭髪の異臭。落盤を顔面にうけてむざんな形相に変形した顔。爆風でおそらく炭塵にたたきつけられたのではあるまいか、手足の関節がバラバラになり、片ほうの足首が背より後頭の耳のあたりに曲り、グワッと目をひらいた悪鬼さながらの形相。二度とみるにしのびない地獄絵図だ！正しくヒロシマの図と同じではないか！

このような、坑内事故と原爆被害の類似を指摘した表現を前に想起されるのは、上野英信の言説である。ルポルタージュ「裂」（「支部報」第三、四号、日本機関誌協会九州支部、一九五八年八月）は、江口炭鉱（長崎県松浦市）の水没事故（一九五八年五月七日）を綴ったものであった。遺体を目にして、「「まるでヒロシマだ」／同行した日本機関紙協会共同デスクの人たちが、呻くようにつぶやいた。そう、ヒロシマだ。まさに地底のヒロシマだ」と上野は記している[15]。上野が原爆と炭鉱を重ねた表現には、それ以前に一九五七年二月発表の散文詩「田園交響曲」があった。日炭高松文学・美術サークル協議会「月刊たかまつ」第四号に掲載されたものである。「男」は、広島で被爆していた。「さびついた鉄道の枕木をつたつて、炭坑に入った」「男の心は、坑道よりも暗く、空虚であつた。」だが、坑内で「男は目をさま」す。「男は旗をたてた。／男は、ここが俺の広島だ、と旗に誓つた。／男は、ここで俺は俺の広島を生きるのだ、と決心した」。

松岡の手記が池本炭鉱での爆発事故を綴ったものであること、そして何よりも遺体の様相の後に、「正しくヒロシマの図と同じではないか！」と語られていることから、「裂」が参照されている可能性は高い[16]。直接の影響関係が語られてはいないが、「月刊炭労」や、筑豊文学サークル懇話会などを契機として上野やその作品が「山田文学」の同人たちにも知られていたことは容易に想像できる。自分の目でみた池本炭鉱の爆発事故の遺体が、数ヶ月前に起こった江口炭鉱の事故を綴った上野のルポにあるように、まさに「ヒロシマの図」だったこと。上野の表現の強さを物語っている。当時の第五福竜丸事件、原水爆反対運動、そして自らの炭鉱労働の現場、といった同時代の

要素が重なった地点に二人が居合わせたこと。その表現として「ヒロシマ」が選ばれざるを得なかったことを立証するエピソードだともいえる。

第三節　木村日出夫の詩とその評価

さて、以上のような詩作品が並ぶ中で、毎号のように作品を発表し、運営の点でも同人を引っ張った人物が木村日出夫[17]である。炭坑労働を素材とした「バンゴウ」（二五号）は、「坑夫番号」をがモチーフとなっている。

430 番　これが僕の坑夫番号
429 番　とつけかけて
「待てよ　シニクか　エンギが悪いな」
そして 430 番と労務係がつけてくれた
それからは
死と背中合せの 430 番が入坑する
穴の塵の腐った闇をたらふくのんで
430 番が昇坑する

バンゴウ
「囚人みたいだね
牢獄よりひどいかも知れないね」
バンゴウ
「憎たらしい班長の顔を思いだすね
軍馬より安い消耗品だらうかね」
僕は父、僕は夫
だが　僕は 430 番
くやしかつたら独立してみろとね
働く者は数でしかないのだらうか
だれにでもつけかえられるとね
それが嫌さに 430 番は入坑する
太古の植物達の黒い返り血をあびて
430 番が昇坑する

だが　皮膚についた炭塵なら洗いおとすこと
もできよう
一日八時間ふかぶかと吸い込んだ炭塵は
象形文字になつて
肺にくいこみ
僕の内部にふりつもる毎日は
無数の活字になつて
身体を埋めつくし
僕を生きた字引きにして行く

労務係がつけてくれた坑夫番号。番号とは本来、固有名と違って取り換え可能な記号でしかない。「働く者は数でしかないのだらうか」。牢獄よりもひどい環境で、軍馬よりも安い消耗品として働かされる、死（429 番→屍肉／死に逝く）と背中合わせの僕（430 番）。

だがこの詩は、過酷すぎる状況を悲観的にうたうだけでは終わらない。取り換え可能な430番は、差し出された労働をただ型どおりに行っているのではなく、数でしかないこと、「それが嫌さに」入坑する。炭を掘り黒く汚れるのは、「太古の植物達」の黒い返り血をあびたから。皮膚についた返り血なら洗い落とすことができる。だが、肺の中に吸い込んだ返り血は決して流されることはない。番号でしかなかった「僕」は、番号でしか扱われない労働のまさにその過程で、「僕」という個人になるのである。肺に入った炭塵は内部から字引きとなって、「僕」を形成する。

坑内労働を素材にした木村の詩には他に、「機械類」(二二号)がある。この詩では、首を切られた労働者たちの代わりに機械が導入される様子が記される。

首を切られた仲間の替りに
機械が入坑して来た
ゴジラの様に巨大な奴
むかでの様に這う奴
傲然として天盤を支える奴
これは廿万円
これは百万円
これは五百万円もすると云う

此処にまんまんと満ちている闇は
自分の行動すらも計りつくしていないものだ
だがこの機械類
坑夫とは違う
ボタをかぶっても掘り出せばケロリと生き返る
此処に坑夫達は
激しい息づかいを仲間同志の合言葉として
一日一日を作品の様に仕上げて行く
だがこの機械類
坑夫とは違う
痛いともかゆいとも云わない
とりわけ賃金を要求しない事がぞくぞくする程嬉しい奴がいる
ローダー、チェンコンペアー(ママ)、カッペ
鉄の腕が石炭をかき集め
製作意図通り石炭を運び忽ち炭車を満載する
能率の上るこの事実俺達は喜んで良いはづだ(ママ)
だがこの機械類
五人を三人に、三人を一人に
一人をゼロに消し去る
どの様な薬品を振りかけても
この機械類からは
丹念にそろばん玉をはじき続け
摩滅した指紋が浮び上るばかり
ただ
全く貧しい事が悪かった様に
子供が親を殺し、親が子供を売り飛ばす

狂った犯罪を地上に充満さして
俺達をガタガタ機械ぐらいにしか思わぬ
奴らが
切り取った首を祭壇に祭り
やっと見附けている地底の職場から
尚も俺達のえりくびひつ摑み
地上に引きづり出そうとして
次々に機械を入坑さして来るのだ

機械化に伴い、職を追われる坑夫の悲哀が現れた詩である。だが一体、本当の敵は誰なのか―。それはおそらく坑夫を首に追いやる機械では無いはずだ。

当時、木村の作品は「現代詩」でも好意的に受け入れられ、掲載されていた。ただ、中村卓美が書いている[18]ように、吉本隆明は前掲の「機械類」を、「この詩の限りでは敗北の方向にむいている」と批判した。

『現代詩』（一九五七（ママ）年七月号）の月評で、村松剛の主として技法上の批評に対し、吉本隆明は「しかし基本的なことで、機械が入ったからクビになるのではなく、その外の本質的なところにその原因があるわけです。現象的にはこの通りだが、この詩の限りでは敗北の方向にむいている。人間と機械を対立させるのはまちがいですよ。」と指摘し、政治的にはマイナスの価値しかないとの判断を与えている。（茶園注・一九五七年七月号は一九五六年七月号の誤り）

「機械類」の、機械とは対照的に、仲間たちの採炭作業が「作品の様に仕上げ」られるという表現には、「バンゴウ」の、吸い込んだ炭塵が象形文字となり身体を埋め尽くす様が重なる。「機械類」が集団としての労働者を描くのに対し、「バンゴウ」は飽くまで個人の内面を描く。他でもない自分自身にとって労働がいかなる意義をもつのかじっと寄り添う静けさが作品を漂う。その先に初めて仲間同士の「合言葉」が成立するのであろう。そこに詩作の意義があるように思えてならない。詩「バンゴウ」は、坑内夫が労働を引き受け続け、現実を乗り越えようとする言葉がある。炭鉱労働を描く際の典型を超える作品だといえる。

第四節　誌上議論と「発禁」

前述した表現の類型は、他同人が批評するところでもあった。二五号に掲載された柿迫襄の短歌作品の質をめぐって書かれた、田中均「柿迫氏の短歌作品をめぐって―木村日出夫氏へ―」（二六号）がある。二五号掲載の柿迫の作品は、以下の四首であった。

・すみぞめの尼僧の衣に散るさくらうすくれないの色のわびしさ
・家計簿の赤字いくらか消しといふソロバン見つめて安らかな

妻は
・洗髪さしたる櫛もあだめきてあやしく見ゆる春とはなりぬ
・自衛機の日の丸しみる目に哀しいくさの想い出あらたにうつり

まず田中は、同じ二五号に掲載された木村日出夫の「歌ごえサークルと文学サークル」について言及する。木村は過去に「俳句短歌から離別して詩の世界に入った」原因を、「俳句短歌が基盤とする七五調の甘さを嫌った事にあったことを今にして自覚した」と述べていた。このように言い切った編集委員の一人である木村が、先の柿迫の短歌を掲載したことに「奇異の感を深くする」というのである。田中は、「ただ三十一の文字をならべたにすぎなく、僕らはこれから何を感じとればよいのだろうか？」と強く批判する。それに対して、吉田一雄の「一つ水道の水をつきつぎ来り飲みまた汗あえて鉄を削るか」や、清水正男の「坑木をひしぎ崩るる岩の音迸るるときにありありと聞きし」を引き、「七五調を目盤とする甘さ」とは言い切ることのできない作品もあると述べている。さらに、作品のレベルを向上させるために作品を厳選して掲載することも考えるべきだと提案。また、時々みかける組合運動のスローガン的な文章などもあまりに拙いと指摘する。

それに対して森田ヤエ子は、サークルの同人はほとんどが労働者であり、自分達の「日常のたゝかいの姿が、はっきりと反映されこれまでに見られなかった、文学の方向を示しだしたものではない」かと反論した[19]。

一方大江将精は、働く者の立場から書かれたものであっても、「レベルの低いものであってはならない」と述べる。参加した第二回文学サークル懇談会の場で飛び交っていた「常に素朴リアリズムを讃え、労働者である我々の詩はこれでなければならぬ」、「皆にわかる詩を書かなければならない」という言葉に疑問を呈している[20]。サークル内では、炭鉱労働者としての立場から言葉を紡いでいくことに積極的意義があるとする者、その一方で表現技術の向上を訴える者がおり、決して一枚岩ではなかったことが分かる。

同人たちはいわゆる商業誌とも、中央誌[21]とも、組合の機関誌ともちがうところでサークル誌の存在意義を模索していた[22]。その過程で、資金援助をうけている労組からも自由になろうとしたことは想像に難くない。「自由な発言の場」である「山田文学」は、労組幹部批判ととれる記事を掲載するようになる。

それまで多少の遅れを挟みながらも、月刊として存続していた「山田文学」であったが、三二号が五七年に、三四号は二年後の五九年に発刊となっており、これまでのペースを大きく遅らせる。要因は、三三号が労働組合から発行禁止のクレームをうけたことにあった。一九五八年の暮、掲載を予定していた労組執行部批判の記事を変更するよう求めてきたのである。

事件の内実は、「サークル村」に掲載された。岩田まき「労組から発禁をくった山田文学」（一九五八年一二月）、森田ヤエ子「発禁」（一九五九年一月）、木村日出夫「発禁その後」（一九五九年二月）といった記事がそれである。それらによると、木村や森田らが組合執行部と数度にわたり討議をおこなった。

執行部は作品四編の書き直しを指摘したが、サークル側は頑として認めず、結局三三号は発刊しないことを決断する。

山田文学33号が発禁された、五ヶ月がすぎようとしている。／今の時代に発禁という事件が発生した。／何とすばらしいことではないか！／私たちは、あえて、山田文学史上に、33号を墓穴として残す／その空白の号数を埋めることなく。／墓穴におちこむものは、発禁した労組か、文学サークルか、または、本当の敵、資本家か、／それは、先祖の血の色をした赤土の山肌に、あんぐり口をひらいて、転落してくる死体を待つ、墓穴だけが知っている。（「巻頭詩」、三四号）

木村は綴る[23]。埋もれた大衆のエネルギーを引き出すためには、未だ組織されていない「内面を組織していくこと」。そのためには、「一番身近かなものとして組合員が感じている自分たちの労組を批判していくことがまず最初にやるべき仕事であ」った。さらに「山田文学」は山田市の地域サークルとしての性格をもっている。にもかかわらず、三菱労組から資金援助を受けていることで、三菱以外の者が入会を躊躇っている現状もあった[24]。このことは、「サークルの者が自己の組織の中でぬくぬくと温もり、他の山田地区にある多くの中小鉱や、失業者の身にもなってみない」という現状を生み出した。

斯くして労組執行部と山田文学サークルとの対立は深まった。しかし、問題はそればかりではない。事件以降サークル内の分裂が明らかとなり、問題作を書いた者はサークルを去ったという。木村、森田は「サークル村」の指導によるものと断定した。

この労組批判を掲載したサークルの問題は、「山田文学」のみにおこったことではなかったのである。一九五八年の夏、江口炭鉱水没事故のルポである上野英信「裂」が、「月刊炭労」に掲載された。その際に、幹部批判とみなされる部分が何の予告もなく削られ、挿入されていた事故の写真が不掲載になっていた。「サークル村」は記事の全文と写真を掲載することで抗議し、大正炭鉱文学サークルも抗議の声明を発表した。その後に、「山田文学」の「発禁」問題が起きたのである[25]。

労組執行部とサークルの衝突[26]は、さらに続く。その後の一九五九年、嘉穂郡の稲築町長選挙の際に、三井山野炭鉱労組が自民党系の候補者を推薦した。対立候補として出馬していた社会党候補者を応援する三井山野の文学サークルは圧力をかけられ、文学サークルは後退のやむなきにいたった。幹部は、対立候補に投票すれば、首を切られることになるからそのつもりでいるようにと、組合員に発表したという。このことについて、「山田文学」は事実上の最終号となった三四号で、木村日出夫「ルポ　くたばれ！三井山野」、マツオカヤスフミ（松岡保文）詩「シンワデハアリマセン」[27]を掲載し批判している。

三三号の「発禁」問題、そして、さらに三四号での稲築町長選挙にともなう三井山野サークルと労組との軋轢の記事が終刊にいたる引き金となったことは否めない[28]。三四号の奥付には、それまで発行所として表記されていた労働組合の記載はなく、

「福岡県山田市三菱鉱業所三区一四」とのみ記されている。労組から支援を求めずに「再出発」した「山田文学」は、石炭産業の斜陽化にともない、閉山へむけて終刊されていったことが推測できる。各地の炭鉱の閉山は多くの労働者を失業に追いやり、社会問題にまでなる。一九五九年一二月、「炭鉱離職者臨時措置法」が成立するに至る。

その頃三菱上山田炭鉱では、深部での採炭が不可能になったとして正田誠一を招き、再三にわたって調査を重ねていた。その結果、地底を火山脈が通り、石炭がすでにコークス化し採掘がむずかしいということが分かったのである。結果として会社側との労働協約により、三菱上山田炭鉱は一九六二年五月三一日をもって閉山された[29]。その時の様子を、森田は次のように綴っている。

> 五月三一日の三菱上山田炭鉱の閉山式は、わずかに残った者だけが、「がんばろう」を歌い湿った空気のなかで、ささやかな記念品を手に、あっという間の幕切れとなった。私は、ふたたび敗戦を迎えたように、空しい日々を過ごすこととなった[30]。

第三章　労働闘争のなかの文学
――三井三池と文化運動

第一節　「サークル村」を端緒として

戦後の一九五〇年代から六〇年代は、各地で文化運動が盛んに行われた時期である。職場や地域でサークルが形成された。文学サークル、うたごえサークル、映画サークル、美術サークルなど、その種類はさまざまである。たとえば文学サークルではサークル誌を発行し、他地域のサークルと雑誌の交換などを通して交流を行っていた。そのような各地域での文化運動の中で、一九五八年創刊の「サークル村」は、谷川雁、上野英信、森崎和江、石牟礼道子が参加していたことで知られている。既存の文化運動に対して、「サークル村」は、党にも労組にも依存せず、独自の意思で集い行動する集団という特徴をもつ。集った者たちは、北部九州の炭鉱労働者たちや、「南九州」からは鹿児島の農民たちなど、九州・山口各県の無数のサークルに所属する同人であった。「各分野にわたるサークル活動家を結集した、それ自身が一個のサークルであるべきおおきな会員誌」-である。つまり、単に会社や労働組合、党のくくりではない広い共同体をつくることが理想とされていた。前章までみてきたように、独特な共同体のあり方や、職業作家ではない労働者が大部分をしめていた文化集団の存在自体に、今日にはない「文学」の姿がある。

では、以上のような「サークル村」と三井三池はどのような繋がりがあるのだろうか。実を言えば、「サークル村」には、三池の労働者の参加が確認できない。「サークル村」は、九州全域と山口県を含めた大きな村であると、創刊宣言を書いた谷川雁は述べているが、そこに三池の労働者たちが参加していないのは不思議にも思える。なぜならば、三井三池に携わる大牟田・荒尾地域の労働者の数は、決して少ないものではなかったからだ。多くの労働者がいる中で、それでも「サークル村」に参加する者がいなかったことには、特別な理由があったからだと言えそうである。

「サークル村」は、福岡県中間市に発行所をおいていた。炭鉱に限って言えば同人は、上野英信が働いていた日炭高松や、後に大正闘争において大正行動隊、退職者同盟が結成された大正炭鉱、そして飯塚や山田、田川などの嘉飯山地区の炭鉱労働者たちが入会していた。この筑豊と呼ばれる地域には、中小炭鉱が数多く存在した。その中小炭鉱に焦点をあてたのが、「サークル村」であり、また上野英信によるルポルタージュであった。つまり、筑豊炭田と深く関わっていった「サークル村」が三池をどうとらえているかを見ることは、筑豊から三池をみる視点を考察することでもある。今回は、三池闘争がどのように語られてきたのかを、一九六〇年前後の文化運動のなかの文学から見てみたいと思う。論じる手順として、まず三池の戦後文化運動をサークル誌や組合機関紙から確認し、そこで求められていた文学の姿がどのようなものだったのか検討を行う。そして、「新日本文学」の作家たちによる寄稿や、「新日本文学」、「サークル村」での三池に関する記述を踏まえながら、そこで共通して議論されていた集団創作のあり方を考察したい。内と外からの三池への視点を改めて確認することで、私たちが今日、三池闘争を語る際の意義をもさぐることができればと考えてい

る。

第二節　戦後大牟田における文化運動

「サークル村」同人がいないからといって、大牟田や荒尾地域にもともと文化運動がなかったというわけではない。『大牟田文化史・年表』（発行大牟田文化連合会、編集大牟田文化史・年表編集委員会、一九八六年七月）掲載の大牟田創作協会野口晋一郎による「創作・詩概説」、「創作・詩年表」には、多くの文芸雑誌名が挙がっている。戦後に創刊されたものを一九七〇年まで列挙してみると、「炉塵」[2]「炭都文化」[3]「緑地帯（ぐりーん・べると）」[4]「灯影」[5]詩誌「シビンチャ」[6]「ピオネ」[7]純文芸誌「新樹」[8]文芸誌「貝群」[9]「詩精神」[10]「三池文学」[11]「荒尾ペンクラブ」[12]「地方」[13]「文学ひろば」[14]詩誌「死角」[15]第二次「三池文学」[16]「天使魚」[17]「斜莫」[18]「るびこん」[19]「叙説」[20]「ばがぼん」[21]「塔」[22]文芸誌「土壌」[23]第三次「三池文学」[24]「反存在」[25]といった文芸誌が存在していた。

なかでも第三次「三池文学」では、早い時期に戦後大牟田周辺の文学運動に関する座談会が設けられ、第一六号に議論の内容と、座談会の中心人物であった内田博による「座談会記事補足」が掲載されている[26]。そこでもやはり、数々のサークルが存在していたことが指摘されている。上記以外では、「干潟」[27]「光源」[28]「つどい」「抵抗線」「芽生え」[29]「炭鉱地帯」[30]「文学建設」[31]といった名のサークル誌が発行されていたという。また、「三池文学」については第一次から第三次まで分けられているが、内田によると第一次は「全市の？（ママ）文学人の綜合的なものとして出された」という。一方、第二次は新日本文学会大牟田支部発行であった。

一言に文学運動といっても職場サークル的なもの、文学愛好者が集まったもの、地域サークルなどさまざまであった。なかには現在は手に取れないものも含まれており、ここでは一つ一つを検討することはできない[32]。だが、これほど豊潤な文学活動の磁場があったということができる。さらに、労組のもとで発行されていたサークル誌としては管見の限りで、「いっく」[33]「ていぼう」[34]「協風」[35]「かつら」[36]「坑」[37]「円虹」[38]といったものが確認できた[39]。

まず、三川鉱文学サークル「坑」一号（一九五九年一月）に掲載されたきたむら・ちまを「「文学サークル」のこと」では、五〇年代後半に文学サークル運動が抱えていた問題が吐露されている。

> 三池炭鉱には短歌や俳句のサークルはずつと戦前から、いくつもあつて、一つがつぶれてもみんな絶えるということがない。／だが、小説・詩のジャンルでの、いわゆる文学サークルは育ちがたい。かつて「三池文学」があつたが、それはいまでいうサークルとは、やや異質であつた。それは多分に中央文壇の方をむいていた。／「炭鉱地帯」が一九五五年のはじめに出て、そこでかなり広い範囲で、文学をやる人びとを結集したが、短命だつた。職場だけでなしに、地域を基にした「文学ひろば」などがあつて、炭鉱や

東圧や市役所や染料などの労働者を結びつけた時期もあつた。／いづれにしても、根を張り、新しい、はたらくものの文学を実らせることはなかつた。（略）／労働組合は、年間の行動方針にサークル活動のことを採りいれ、サークルを指導援助すると書いている。しかし労働組合と各サークルの結びつきも思うようにいかないでいる。（略）組合はしかし、直接効果を求めてばかりいて、サークルの自主性を理解せずせつかちだと反撃される。注意していかねばならぬ（双方が）ことだといわれながらもこういう事になり勝ちなのである。

文学サークルでは、当時資金的に援助をうけていた労働組合との軋轢に悩まされていた[40]。六〇年を一年後に控え、合理化闘争も本格化しつつある時期に発表された記事である。闘争を前にして、組合から援助を受けていた小集団であるサークルは独自の意思で活動を行うことが困難となっていた。きたむらは、自分たちが文学サークルを立ち上げる意義を、「独占資本の植民地的な搾取」にたいして、「ほんとうの民族文化」というものを生み出さねばならないことに見ている。「ほんとうの民族文化」というものはもちろん「独占資本」の下では実らないが、同時に今のままでは労組幹部の指導の下でも実ることはないのではないか、と問うているようにもとれる。やや穿った見方かもしれないが、文学サークルが労組から自立しようと動き出す萌芽をもここから見ることができるだろう。きたむらは言う。文学サークルの生み出す創作は、「ほんとうに労働運動と結びつき、日本民族の解放と運動と広くふかく交流」することで実る。警職法改悪反対の闘いで勝利を得たことを挙げながら、当時の労働運動において一つのトピックスでもあった原水爆問題にも触れていた。そのために「文学の場においてもたたかつていかねばならないのである。ぼくらの文学サークルこそすべての意味でヒューマニズムに依拠した集りである」と綴っている。警職法改悪反対運動や原水爆禁止運動などを共有の問題意識としながら、外部のサークルとどれだけ連携し、労働者自らの手による表現の場が形成できるかが課題であった。そして、それらの難問に直面する際の一つの方法として「文学」創作が考えられていた。

きたむらは、それまでのサークル誌について「根を張り、新しい、はたらくものの文学を実らせることはなかつた」と批評していた。では、以前のサークル誌においてはどのような文学が望まれていたのだろうか。数年遡って記事をおってみたい。一九五三年二月発行の「文学ひろば」創刊号では、出海渓也が「魂の解放をうたう文学を―さいきんの大牟田の文化運動をめぐつて―」において、他の文化運動に比べると文学は遅れていると指摘していた。ＧＨＱの占領が解かれた五二年、大牟田の文化運動は一つのきっかけを得る。大牟田映画サークル協議会が同年六月に結成されたことが大牟田の文化運動の事実上のポイントになった。同年一一月に大地評[41]、平和委員会、学生自治会、婦人会など約五〇団体共催のもと行われた赤松俊子、丸木位里共作の「原爆の図展」に大牟田映画サークルも関わっていた。約三万人の市民が来場したと言われている[42]。これに端

を発し、働く者自らが文化運動を行う機会が増えるようになる[43]。文学はというと、今までも職場や地域でサークルが作られ雑誌が出されてきたが、狭い範囲でのことであった。そのような状態のなか、三川鉱、製作所、三池合成、東圧、三池染色、高等学校の教員、新日本文学支部、人民文学支部などのメンバーが集まって、「大牟田の市民大衆の共通の文学広場をつくつて、文学運動をおしすすめてゆこう」ということで作られたのが「文学ひろば」である。つまり、映画サークルやうたごえサークルなどが活発になるなかで、文学サークルでもまた、個々のサークルが連携し、より大きな運動体として再結成されつつあったのである。大牟田という地域特有の状況を言えば、「三井の植民地」つまり「文化的不毛地」と言われてきたが、先に挙げたように五二年ごろより、「ひとびとが表現の解放ということを要求しはじめたことが（略）今後の文学活動の前提」であった[44]。

特に、その中で新たに試みられたことが集団創作であった。「文学ひろば」では、五三年八月以降の一一三日の首切反対闘争に取材した編集部集団創作「ルポルタージュ　怒れる炭鉱労働者」が創られた。首切状が届いた際の個々人の様子や、デモを行う炭婦協の女たちの様子が綴られている[45]。この「文学ひろば」の後に続くサークル誌であった「炭鉱地帯」では、「文学ひろば」での集団創作以降、数々の集団創作が生まれたことが指摘されていた。同人は、劇団はぐるまのメンバーとともに集団創作した詩をメーデーやうたごえなどで朗読するといった活動をおこなっていた。

それでは、集団創作の重要性はどのようなところにあったのだろうか。同号に掲載された大牟田詩研究会による集団創作詩「平和を守れ―平和の夕大会（敗戦記念日）の朗読―」[46]をもとに見てみよう。この詩は、掲載誌四頁にわたる長い詩となっている。まず最初に日本の敗戦の記憶が語られる。その後、方言で「おつどん百姓」から「大牟田の働く仲間たち」に、自分たちもまた平和の希望を叫ぶ存在である、と詠われる。そして、今度は炭鉱労働者のほうから応答の形で、労働と生活の苦しみが詠われる。続いて炭鉱労働者の語りで、反原爆、反戦争が叫ばれ、最後に、標準語に戻り、「大牟田の皆さんよ／日本のみなさんよ／そしてアメリカの友だちよ／世界の仲間たちよ」、「戦争をなくすために／おたがい／生命のことばを交わしあおう」と呼びかけられている。方言交じりで表記されているのはここまでである。最終部分は、平和運動で読まれる詩の典型的とも言える表現になっておりやや単調だが、中間部分はそれが「平和の夕大会」で朗読されたことを考えると、この詩自体が集った者たちへの呼びかけになっていることが分かる。雑誌掲載の文字として綴られた詩とは違い、集会での朗読用に創作されたそれは、声に出して読まれ、またそれを受け取る聴衆がいることで、うたごえで歌われる詞／詩と同義の役割を果たしたであろう。つまり、サークル誌に詩を掲載した作者と、頁を開き文字をおう読者の関係とは異なり、朗読詩は詩が詠まれる空間を共有することに力点が置かれる。

第三節　組合機関紙からみる文化運動の広がり
―文学とうたごえ運動

以上見てきたように一九五二年から五五年にかけては、文学サークルが発行していたサークル誌において、集団創作が一つの鍵となっていた。一方、他の媒体ではどうであったか。三池では、サークル誌とは別に三池炭鉱労働組合発行の機関紙も存在していた。機関紙「みいけ」[47]誌上に掲載されていた「みいけ主婦会」（三池炭鉱主婦会）では、たびたび詩や短歌などが掲載され、文芸特集が組まれることもあった[48]。「みいけ」第五八六号（一九五九年八月一六日）、第五八七号（一九五九年八月二三日）「夏季文芸」は、創作（荒木精之選）、詩（出海渓也選）、短歌（岩本宗二郎選）、俳句（後藤是山選）、川柳（速水真珠洞選）、感想文、写真、児童つづり方の上位入賞作品が掲載されている。例えば、短歌入選一席の山西光一の歌「徹夜して積みたる石炭二十函吐きても吐きても出づる黒き痰」は、坑内労働の過酷さを黒い痰で表現する。「吐きても吐きても」出てくる「黒き痰」は、同時に一晩で「二十函」も採れる石炭にも重なっている。掘られた黒い石炭の代償として、「黒き痰」は底なしに出てくる。しかしそれ自体は何かのエネルギーに代わることはない。坑内労働者の職業病ともいえる塵肺が連想される一首だ。二席に選ばれた藤本盛登の歌「賃金遅払に憤るわれら腕組みて低音にうたふ三鉱労組のうた」、秀透の永松運造「会社前広場をうめしデモ隊の「団結頑張ろう」と拳つき上ぐ」など、デモの様子を題材とした歌もある。

各々のジャンルの掲載作品を挙げればきりがないのだが、なかでもここで注目したいのが、創作入選一席の左藤臣芳「赤いばらのコーラス」である。メーデー前夜祭で吉村をリーダーとしたY鉱青年行動隊コーラスは自分達のうたごえを披露する。だが、「声のコントラストが乱雑で」失敗に終わる。アコーディオンの坂本はそれ以来活動に参加しなくなっていた。「三井三山、六千名の人員整備案が提出され」ていた時期でもあった。争議は一七日間のストで終止符をうち、首切りは「あくまでも希望退職となり各山で協議交渉という新段階」となる。争議の間、「組合員に元気をつけろ、歌声運動でよゆうを持たせろ」という想いから「コーラスに馬力を賭けるのだが、楽器がないのが致命傷だつた」。吉村は思う、「やはり労働歌も音楽である以上、その魅力は旋律である。怒鳴りたてゝばかりいてもあきがくるのは解りきつたことだ」。だが、坂本からは「吉村さん、あんなコーラスは子供だましですよ」と言われ口論となる。その数日後、坂本が坑内で負傷し入院することになった。坂本は罰があたつたと考えるようになる。坂本の改心後は物語の展開が早い。退院の前日に見舞いに来てくれたコーラス部員の前で久しぶりにアコーディオンを演奏してみせる。「やはり美しい旋律だつた」。感動のまま物語は終わる。予定調和的なありふれたストーリーであることはいなめない。だが、ここで問題にしたいのは、うたごえ運動に関わる者が、うたごえは単に「怒鳴りたてゝばかりいて」はならず、歌の技術を向上していかなければいけないと自覚している点である。運動の手段としてだけでは捉えることのできない、うたごえ運動の民衆芸術、集団

芸術的な側面を指摘している。そしてその中での、サークル員達の葛藤が描かれていた。

他にも、うたごえ運動の様子が文芸作品の題材となる事例はある。詩の分野で「佳作四」に選ばれた稗島廣「一本の赤い糸」もまたうたごえ運動を素材にした詩である。

歌の中の歌を想う／オタマジャクシマークの／忘れて往つたどうこく／五線譜の中の白い空間に／聞こえる／断章と不協和音の吐息／フオルテ　フオルテ／レクレツセンド／そして沈黙／／だが歌声は響き／こだまはこだまし合う／黒い恐怖と怨さの炎を／十四年のテクニツクで歌うのだ／島は今風土病の季節／かぜを引いた連中は／エレヂーを喜悦のリズムで唱う／というのだ／そいつは誰／麦飯の替りにドルを喰う男たち／奇妙だと思う？／そんな事は職業安定所じや常識／／激しい憤怒を起せ／歌声は常に初まつたばかり／今こそ歌の中の歌を想う／歎きをつむぐ一本の赤い糸を想う。

歌の中の歌、つまり歌われる詞がうたごえ運動のなかで歌われるときに溢れ出す「嘆きをつむぐ一本の赤い糸」を大切にしたいという作者の想いが伝わる作品である。ここでの「嘆きをつむぐ一本の赤い糸」は、上記の「赤いばらのコーラス」を踏まえれば、詞の力強さとともに旋律の重厚さからも生まれるものであるだろう。そして集団で歌うことで「こだまがこだまし合」い互いの嘆きを「一本の赤い糸」につむぐ。そこから集団芸術としての美しい旋律が生まれる。つまり、これらうたごえ運動を題材とした作品から言えることは、まず個々のサークル、もしくは文化運動の各々の分野が繋がりをもちながら運動が形成されていたということである。さらに、うたごえ運動を素材とした文学作品が機関紙に掲載されることで、うたごえ運動の意義、そしてうたごえ運動をする者の葛藤を広く伝える意味もあったと言えるだろう。

よく知られているように、三池のうたごえ運動家荒木栄の歌は、他地域の炭鉱ではもちろん全国のうたごえの祭典でも歌われていた。一九五八年の第六回九州のうたごえは、大牟田市体育館で開催され、五〇〇〇名の参加があったという。合同曲は「砂川」と荒木作曲の「子供を守る歌」である。一九六〇年八月には第二回西日本のうたごえ祭典が三池炭鉱ホッパー前で行われ、合同曲として「炭掘る仲間」、荒木作曲「三池の主婦の子守歌」が選ばれた他、「がんばろう」「守れホッパー」「俺たちの胸の火は」なども歌われた。参加者は約六〇〇〇名であった[49]。水溜真由美は、当時全国的に展開していたうたごえ運動について以下のように指摘している[50]。

炭鉱におけるうたごえ運動は一九五三年頃開始され、一九五五年にかけて飛躍的な発展を遂げた。これは、全国的なうたごえ運動の展開とほぼ歩調を合わせた動きであった。各炭鉱に組織されたうたごえサークルは、全国あるいは各地のうたごえ祭典への参加を主要な契機としながら発展した。（略）うたごえは様々な文化運動の中でも、

とりわけ労働運動と関係の深い運動であった。

うたごえ運動が広範囲に、しかも一定の耐久性をもった運動として浸透したことを踏まえると、文化運動のひとつであった文学に及ぼした影響は大きかったに違いない。その影響とはおそらく、先に挙げたようにうたごえ運動を題材とした文学作品の創作と、朗読詩が受け入れられる磁場の形成であっただろう。特に大牟田における文学サークルでは、五二年ごろから集団創作について議論がなされていた。水溜が指摘したように五三年からうたごえ運動が盛んに行われたことを考えると、文学サークルにおける集団創作は五三年のうたごえ運動の高まりをとおして発展したものと言える。

第四節　機関紙「みいけ」に寄稿する作家たち

このような集団創作の議論は、新日本文学会に所属していた作家たちの言説においても確認することができる。三池闘争が本格的に盛り上がりを見せる一九六〇年には、機関紙「みいけ」紙上に野間宏、佐多稲子といった作家名が散見されるようになる[51]。

野間宏は、「〝危険な条約〟の調印　さらに強く阻止・廃棄の闘いを」[52]の中で、調印された新条約について、発効を防ぐために批准を阻止することを主張する。「この可能性如何にしてもさぐり出」すためには、「新安保条約阻止の道が、日本の繁栄に通じていることを具体的に明らかにすること」、「政治の領域に於てもこの具体的な進行のプログラムを出して行」くことが重要である。そして、「これらすべてをすすめる日本人の思想の領域におけるプログラムが明らかにされなければならず、それによって新条約阻止の運動は「日本の繁栄を約束するものとしてひろく国民全体の力を集めることが出来る」、と述べた。三池の炭鉱労働者たちにとっても重大関心事であった新条約調印に関して、文学者として野間が述べた言葉は、同時に文化運動が行われる際の一つの意義とも繋がっている。前述の「赤いばらサークル」、「赤い糸」のように、聴く者も巻き込むような旋律（＝歌の中の歌を想うこと）を習得することは、「日本人の思想の領域」にある国民文化を明らかとし、「国民全体の力を集める」という壮大な意義にも結びつけられる。

実際に野間は五年前の一九五五年二月、三井三池炭鉱を訪れ、大牟田の文学文化団体と座談会をもっている。この時野間は、約二〇日間にわたる九州巡回講演を行っていた。大牟田では、一四、一五日両日に市民会館で約一〇〇〇人の聴衆の前で講演会を開催し、大地評（注41に同じ）や東圧労組青年婦人会、文学・文化団体などで座談会をもったという。サークル誌「炭鉱地帯」編集部では、「雑木林」「つどい」、映文協などと共催で約四〇名が集まり座談会を行った[53]。長崎、佐賀、柳川を巡り、大牟田へ来た野間は、「一番大牟田で動き、息吹といゝますか文学的な力に触れることが出来たと感じている」、「全国的にこういう状態をもたらし得るというような希望が持てゝ来た」と語る。

小説の場合の集団創作というものは非常に難しく思うが、その前に映画のシナリオ等に出てくる紡績の女工さんたちが今一番沢山やつている生活記録を書いてゆこうという会が職場で出来る。そうするとみな作品を書いて読み上げるその書いたものを全員が意見を出して間違いを正しく直してゆく。そうすると批評された意見に従つてまた書直す。そして全体の意見で高まつたものになつている。それは一人で書いたものではなくて全体で書いたものになる。そんなやり方が出てきている。集団創作の欠点は、一人々々に話合う時に自分の欠点を隠して意見だけだして、その上で作品が出来上るかも知れない、こうなると本当のものは作れない。例えば自分が今家庭の中で悩んでいることがある、そういうのは恥しい、それを隠して意見だけ出しているというものが集団創作の今までの欠点として出ている。

前述のようにうたごえ運動とは異なり、文学作品を集団創作する場合はある困難をともなう。小説が書かれたものであり、その文字を書く主体は一人であるという特徴をもつ。だが、書く行為を集団の中においた時、「読み上げる」という動作が必然的に必要となる。実際的な意味においての「読み上げる」行為を介して、新たに物語が紡がれ、集団創作が行われるのである。また、大牟田詩研究会による集団創作詩「平和を守れ―平和の夕大会（敗戦記念日）の朗読―」に見たように、「読み上げ」られる（＝朗読される）ことで完成する作品もある。特に、文化運動における文学のあり方を考えたとき、この「読み上げ」の行為が重要な意味をもったと言えるだろう。だが一方で、個人の体験、つまり野間の言葉を借りれば「欠点」としての体験をどのように集団創作の場で出していけるのか、という問題も依然残る。集団になった際に消される個人の体験をどのように、昇華すべきか。そのためには、自己の体験を隠すことなく意見する、つまり単なる批判ではなく、批評する力が必要とされたのである。同時に国民文学を提唱していた野間にとって、「炭鉱地帯」への訪問はその実践だったとも言えるだろう。

三池を訪れた作家として、佐多稲子の名前も挙げることができる。佐多は一九六〇年一月に総評の文化オルグとして訪問し、主婦会と懇談会を開いた。「現地にいつて闘いの実態を直接見て勉強したいということで来山した」[54]という佐多は、翌月の二月二一日の機関紙「みいけ」第六一二号の「みいけ主婦会」で、「力づよい主婦たちの闘い　三池の闘いをバックアップするもの」を寄稿した。当時、指名解雇を受けていた一二〇〇名は通達状を返上して拒否していた。「三池炭鉱四ツ山」でも四三名が就労を拒否して座り込んだ。警察との衝突をさけるために就労強行は避けていたのであるが、その隙に他の場所から配置転換者が会社の業務命令で入り込んできていたのである。配置転換者と一緒に就労すれば会社のやり方を認めたことになるとして座り込んだのであった。

三池一万五千名の労働者に対し千二百名の指名解雇が通達され、それを拒否する全体の闘争である解雇拒否の闘

争は、解雇を受けたものだけのことではない。残るものの問題なのである。このことが主婦会の奥さんたちの座談会でもはつきりつかまれている。（略）自分というものがここでは全体との関係で広く正しくつかまれているのに感動した。／だから主婦会でも、解雇拒否者と、全体の人との間に何の感情のちがいもないという。

ここで言われている、「自分というものがここでは全体との関係で広く正しくつかまれている」ということは、もちろん就労拒否問題について述べた言葉である。しかし、それと同時に文化運動について述べている文脈でも当てはまる。つまり、集団で創作活動を行う文化運動は、「自分というものが」「全体との関係で広く正しくつかまれてい」なければ、破綻をきたす。このような中央作家との「対話」を通して、地元の文化運動家たちが一層奮起したことは想像に難くない。当時、一九五〇年代半ばから新日本文学会が注目していたリアリズムの手法、そしてルポルタージュとしての文学のあり方と呼応し、炭鉱労働者のサークル運動と新日本文学会という中央文壇の蜜月の時期であった。これまで見たように三井三池では、集団で自分たちの思いを伝える際に、言葉を紡ぐ作業である「文学」が多くの役割を担った。それまで個人の表現活動として認識されていた「文学」を、集団創作として表現するために必要とされたのが、「読み上げる」作業であったのではないだろうか。集団のなかで読み上げ、他者からの批評を受けること。佐多の言葉を借りれば、指名解雇反対闘争が「自分というものがここでは全体との関係で広く正しくつかまれ」ることを要したように、集団創作自体も個人と全体との関係を正確につかむことが必要とされたのである。

第五節　外部からの批評

一方、「新日本文学」誌上では、三池労組に対する批判もなされていた。「三池」を訪問した針生一郎は、組合とサークル運動の関係について以下のように記している[55]。

組合直営の限界ということでは、文学サークルのリーダーだったKさんのふともらしたことばがうかんでくる。「三池には昔から組合至上主義みたいなもんがあってね、サークル活動の育たんところですたい。」（略）学習サークルでも概していえば、少人数で自主的に発足し、ある期間つづいたものの方が、柔軟な感覚に裏づけられた、早産でない思想をつくりあげている。「歌ごえ」をのぞくこれらすべてのサークルがつぎつぎに閉塞し、組合公認の思想の特効薬だけが普及した、―といえば言いすぎになるが、これは大企業の比較的つよい組合が、この二三年共通にたどってきた道程なのである。

三川鉱文学サークルのきたむら・ちまをは、「「文学サークル」のこと」[56]で、サークルと組合の関係が上手くいかないと綴っていた。それは約一年半以上前の一九五九年発刊の雑誌記事で

あった。針生の言葉から判断すれば、三川鉱文学サークルから出されていた「坑」はおそらく後に休刊になったと想像できる。針生は、続けて新港社宅についても述べている。「もっとも戦闘的」だとされる「新港社宅」では、長い間沖仲仕の仕事を負わされてきた与論島出身労働者たちのコミュニティーでもあるという特徴を挙げ、その独自性を指摘している[57]。さらに、活動家層の基底には、屈折した心情をまだ十分に論理化しえない多くの下積みの人びとがいる、そこにふくまれた抵抗のエネルギーをどう理論と組織に媒介するかがひとつの問題であると言う。三池の闘いが組織的な抵抗の条件さえうばわれている中小炭鉱の労働者や、炭鉱を追われた多くの失業坑夫の問題と、結びつく通路でもあるが、それをうまく行うためには、「文化運動のプログラムが必要」だと指摘している。というのは、「味方の内部のさまざまな矛盾をきめこまかに吸いあげてゆくスタイルが、新しく工夫されなければならない」。つまり、大企業の組合とサークル活動の関係から、具体的文化運動のプログラムが必要とされており、そこから、味方内部の矛盾をも抽出すべきだと指摘する。まさに、機関紙「みいけ」では記されない「三池」の現状であった。自分たちの集団内部をも批評する力こそが必要であったのである。

針生の述べたことは、谷川雁が記した「ミイケはどこへ行ったか」という文章とも連鎖していた。一九六一年つまり、三池闘争終結後の文章である。「ミイケ」とは、「安保とならんで全戦線の矛盾の焦点であるとともに、それゆえに憤怒を結集することがある程度可能となった労働者階級の実力闘争の、戦後十五年間における最高の表現であった」。だが、筑豊の各炭鉱では合理化闘争がことごとく敗北に終わり、なおも「闘えと上部に迫っている」余力を残した大衆がいるにもかかわらず、「つねに炭労中闘と山元幹部の人工的操作によって闘争がうち切られている」。「さらにこの敗北の原因がなんら冷静な検討を経ることなく、敗北と判定することすらどことなく憚られるような、あいまいな論理で包みかくされていること」は、すべて三池闘争の終結のしかたにあると述べる。このように、「三池」闘争から派生して、他の中小炭鉱でのそれぞれの闘争を谷川は「ミイケ」と表現した。そして、いわゆる三権である争議権、交渉権、妥結権を中央闘争委員会に「集約」している労働組合というものが必然的にうみだす罪悪をも指摘する。「もし合理化闘争にあたって山元に完全な三権が与えられ、したがって山元幹部の責任が炭労をかくれみのにしない形でむきだしにされていたならば、三池以後の合理化闘争のいくつかはもっと強靭な抵抗を示したであろう。さらに妥結か否かの意志決定が全組合員の直接投票によってなされるならば、事態はいっそう変化したであろう」。つまり、谷川は、労組からも自立して闘うことの必要性を指摘しているのである。この指摘は、筑豊炭田という外部から「三池」を見た際に可能となった視点であった。

その少し前の一九六〇年六月に発行された「サークル村」第三巻第五号では、「三池から吹いてくる風」という特集が組まれていた。そこで谷川が「反暴力」と題し述べていることは、三池の労働者たちが、上からの組織化をひとつずつ剥いでいく過程を通過しようとしている、ということであった。炭鉱労働

者の地金をとおして民主主義に探りを入れられつつある。だが、「坑夫の地金を食いあらしているのがわれわれの文化活動ではないか」と自己批判的に述べている。「坑夫の地金」をどのように「受容し、かつ拒絶するか」。「サークル村」は、自己の二重性に自覚的であろうと努めていた。

これまで述べたように、三池には数々の文化運動が存在していた。求心力をもったうたごえ運動の盛り上がりと共に、文学サークルでは集団創作が試みられていた。つまり個人ではなく集団を主体とする文学が試行されていた。そして個人の意見をいかに複数人の経験として昇華するかという議論からは、批評する力が必要とされていた。だが、労働者たちによる自らの文化運動は、三池闘争という大きな渦のなかで、労働組合に吸収されたかたちで存在していたのである。労働組合の強い三井三池では闘争が先に立ったために、労組から自立した運動を行っていた「サークル村」とは関係を持ち得なかったのである。

一九六〇年の三池闘争とは何だったのか考える際、炭鉱労働者たちを一面的に捉えることは危険性を伴う。だが、針生や谷川が述べたことを踏まえればこう言えるのではないか。集団の内部が実は重層的で複雑にあるということを自覚し批評する力を持ち得るならば、「私」は三池闘争で持ちこされた課題に応えることができる、と。何かしらの組織に頼るのではなく、自立し自己の表現をもったところで初めて闘争の主体となりえる。各々が自立した主体を獲得しえたとき、集団創作の主体もまた、おのずと立ち上がってくるのである。

第二部

サークル運動の内と外

第四章　上野英信「あひるのうた」におけるサークル運動と朝鮮人

第一節　はじめに―問題設定

「サークル村」[1]は、いくつかのサークル活動が母体となっており、そのうちの一つが、上野英信が働いていた福岡県遠賀郡水巻町の日炭高松であった。上野は、日炭高松労組のサークル誌「地下戦線」[2]第五号（一九五四年三月）に青木信美の名で「あひるのうた」[3]を発表する。

この物語は、炭鉱町周辺にある「アリラン租界」が舞台となっている。ある日、どんじゅう婆さんのあひるが瀕死の状態で発見される。朝鮮人のギリ少年の母親がやってしまった事故であった。それを知ったどんじゅう婆さんの同居人である紙芝居の小母さんは、いつもの気性の荒さで彼の母親を殺すと口外してしまい空気銃の朴との言い合いへと発展する。物語の最後で、ギリ少年に味方をするどんじゅう婆さんに紙芝居の小母さんはいらだたしい気持ちになる。そして、朝鮮人への報復として紙芝居の小母さんは、彼らに明日から紙芝居をみせないことを思いつく。

川原一之は、『闇こそ砦　上野英信の軌跡』（大月書店、二〇〇八年四月）のなかで、「炭鉱の陥落地帯であえぐ人びとの中で、さらに落伍者の烙印を押されていた」どんじゅう婆さんとギリ少年が、「深い思いやりの絆で結ばれたとき、まるで救いのなかったこの物語が一編のメルヘンへと昇華していくのである。」と述べている。しかし、「あひるのうた」は暗黒に生きる人びとを主人公にした作品ではあったが、その人びとに読んでもらえる作品ではなかった」と述べ、一方で、後に続く「せんぷりせんじが笑った！」「ひとくわぼり」などの「えばなし」については、「産みの苦しみをへて上野英信は、これまで見られなかったまったく独創的な文学の創造に成功した」と高く評価している。また姜竣は、『越境する近代４　紙芝居と〈不気味なもの〉たちの近代』（「序章　境界と両義性を超えて」、青弓社、二〇〇七年八月）において、「あひるのうた」は「一羽のあひるの死をめぐる朝鮮人と日本人の確執と友情を通して、最底辺に生きる人々の哀歓と泥臭いドラマを描いた作品」であると述べる。そして、炭鉱町で紙芝居が盛んであったのは、「子どもが小遣いを現金でもらうからであり、炭住街があるから」と言い、「労働者運動によって炭鉱の住人たちを悲惨な状況から真に解放することはできないことを上野は知っていた」からこそ、彼の文学が「そもそも炭坑夫たち自身を読者として、独自な試みを生み出すところから出発」した、と述べた。さらに、「あひるのうた」の後に続く「えばなし」の紙芝居的要素を指摘している。だが、「あひるのうた」の世界がいかなる現実世界における問題と呼応し、またいかなる相異があるのか、という疑問が残る。「えばなし」に対し、「あひるのうた」は未だ評価が定まっていない作品だといえる。

前述のように物語の最終部分で紙芝居の小母さんが報復の手段として考えついたのは、紙芝居をみせない、ということであった。この紙芝居をみせないという報復は、一見適切な手段には聞こえない。なぜ彼女は紙芝居をみせないという手段を選ぶのか。紙芝居をみせないこととは、どういった意味があり、どのように解釈できるのだろうか。本章では、まず作品の舞台と

登場人物の特徴をおさえながら問題を提起する。そのうえで、「アリラン租界」が炭鉱町の周縁に位置していることから、当時の日炭高松とその周辺の状況を記録した文献を比べることで現実との呼応を確認する。さらに作品が発表されたサークル誌の特徴から、一九五〇年代半ばから後半にかけてのサークル運動の一側面へと論じていく。そして最後に再び作品世界へと戻り、問いに答えるかたちで「あひるのうた」の新たな位置づけを行ってみたい。

第二節　作品の舞台と登場人物の特徴

まず、作品の舞台となっている「アリラン租界」について確認しておきたい。「アリラン租界」は、「朝鮮人たちとの間に朝晩の挨拶みたいに」、「いざこざ」が繰り返される場所として描写されている。

下罪人たちが、土地をうばわれた農民や工場を追われた失業者たちが、あるいは侵略植民地からの強制徴用者や異国の捕虜の群れが、あるいはまた、命から〴〵戦火をのがれた戦災者や引揚者たちが、それ〴〵の不幸の烙印と時々の世相の傷痕をふかく刻んだ肉体と魂をひきずりながら、荒浪にうちあげられた流木さながらにこの島にただよいつき、きびしい鉄の鞭にむちうたれながら、みみずのように地底に坑をほる。そしてやがて、重い岩と岩とにはさまれて、ぺしゃんこになって死んでしまう……。しかし、みみずは、地の底で殺されるばかりではない。もっと沢山のみみずが、太陽の照るところで死んでいく。もはや岩を噛む力のなくなった老坑夫、父や夫や息子を地底にうばわれた娘や妻や年老いた母たち、手足をもぎとられたり背骨を折られたりした若者たち……、（略）こうした人間たちが、たがいの不幸の傷口を擦りあい、ぶっつけあい、なめあい、つゝきあいしながら、もつれあい絡みあって団子みたいにころがりまわっているような部落が、炭坑の周囲には必ずいくつかはある。／どんじゅう婆さんが住んでいるのも、当然そのような部落の片ほとりであり、そして彼女の午後が、あちこちのゴミ捨場ですぎるのも又やむを得ないことであろう。

「不幸の烙印と時々の世相の傷痕」を刻んだ肉体が流れ着いた炭鉱町の周辺には、地の底で働けなくなった人々が集まる集落が存在する。作品では、そこを「アリラン租界」であるとし、炭鉱とは異なる居住空間として描かれている。しかし、引用のように、もはや炭鉱で働けなくなった者や、家族を炭鉱で失った者が暮らす「アリラン租界」は、そもそも炭鉱がそこに存在することによってできた集落なのであり、炭鉱と離して考えることはできないし、炭鉱と完全に切れた空間ではないのである。そこで暮らすどんじゅう婆さんは女坑夫として「鬼のように働いた」過去をもつ。親ゆずりの「川筋の意地と度胸」をもっていたが、今では変わり果てた姿となっている。「アリラン租界」には、炭鉱で働く人々は登場しない。だが、例えば、「夜勤の

坑夫たちに入坑の時刻を知らせる十時のサイレンが、黒い尾をながくひいて鳴りわたった。ねむい目をこすりながら坑夫たちは、さむい夜風のなかを、くらい地底へと急いでいく……。」という描写のように、炭鉱が背景の一つとして描かれている。

どんじゅう婆さんは、「炭坑の社宅を追いだされて」、「よるべもない老いの身を、気は荒いが心やさしい紙芝居の小母さんに拾われた」のであった。「ぼってりと肥えて頭も体も鈍重な者をよんでこの地方の人たちは「どんじゅうさん」とい」うことから彼女はどんじゅう婆さんと呼ばれていた。もはや彼女の本当の名前を呼ぶ者はひとりもいなかった。これに対して、紙芝居の小母さんには「ツネ」という名前がある。「空気銃の朴」は朴という苗字をもっている。しかし、「どんじゅう婆さん」には名前がないのである。同じことが「ギリ少年」にもあてはまる。「日本人たちは彼の名を知ら」ず、「左まき」を意味する「ギリという変な名が、この薄幸の異国の少年の呼び名になってしまっている」のである[4]。本当の名前を呼ばれないという二人の共通点は、物語の最後でどんじゅう婆さんがギリ少年によりそい、味方する場面へと結びついている。

ギリはどんじゅう婆さんの寝床のなかで、死んだようにぐったりとなって眠っていた。時々どんじゅう婆さんは、そっと手をのばして、少年の顔にあてがった濡れ手拭をかえしてやっていた。／「どんじゅうさん」と不意にツネは、いきどおりにふるえる声で叫んだ。「あんた、一体ギリをどげするつもりな？」（略）どんじゅう婆さんは暫くだまっていたが、やがてはじめて顔をあげて紙芝居の小母さんのほうにふりむいて、さみしくほおえみながら答えた。「しょうがねえ……、盗人でもして養うてやらな……」／紙芝居の小母さんの体が電気にかゝったようにふるえた。これまで、どんじゅう婆さんがこの家に来てから五年あまりの間、一度だってツネのどんな言葉にも罵りや怒りにも口ひとつ返したことのない婆さんが、さっきからどうしたわけか口返答するのが腹だたしくて、ツネはやりばがなかった。

紙芝居の小母さんは、どんじゅう婆さんのあひるが殺され、また、その後の朴との言い争いで、散々脅されたため、「チクショウ！チクショウ！」といいながら朝鮮人たちへの報復を夜中考える。そして、最後に思いついた報復の手段は、物語の最終部分の言葉、「明日からは紙芝居を見せちゃらせんけ！　絶対に見せちゃらせんけ！」の言葉にみられるように、紙芝居を見せないということだった。

ここでなぜ紙芝居を見せないという手段が出てくるのか、という疑問が生じる。まず、当時紙芝居が人々にとってどのようなものだったのか簡単に確認しておきたい。鈴木常勝『紙芝居がやってきた！』（河出書房新社、二〇〇七年二月）によると、「敗戦後、娯楽と食物に飢えた子どもたちは紙芝居に群がり、紙芝居は再びブームを迎え」、「みんなでいっしょに紙芝居を見る喜びを感じさせた」という。さらに、「紙芝居の思い出は紙芝居屋のおっちゃん（おばちゃんもいた）の印象と切り離すことができない」とも述べており、物語の世界へと子らを誘う紙

芝居屋の存在は、非常に大きなものであったことが分かる。テレビの本放送が一九五三年であり、その後徐々に一般家庭にも普及していったことを考えると、「紙芝居は昭和二十年代（一九四五～）の後半、戦後復興期の一九五三年（昭和二八）頃が最盛期だった。そして、高度経済成長の陰で衰退した」ということも充分理解できる。紙芝居は、テレビ以前の身近な娯楽の一つであった。

紙芝居は作品のなかで、「トン・トン・トントンコ・トントン……ツネのうちならす太鼓の音は、平和なうたごえのようにのどかにはづみながら、硬山に抱かれた炭坑町のほうへと消えて行った」と表現されている。身近な娯楽であり、且つ平和でのどかな気分を人々、特に子どもにもたらすようなものが紙芝居なのである。紙芝居の小母さんツネが出した答えである、紙芝居を見せない、ということが持つ意味は一見、非常に素朴で単純なことのようである。しかし、一方で紙芝居屋が「うちならす太鼓の音は、平和なうたごえのよう」であるという記述を見るとき、そのような存在である紙芝居を見せないということは等閑視できない。また、ここでは紙芝居の小母さんが「アリラン租界」から、紙芝居を子ども見せるために炭鉱町へ向かうことから、紙芝居が炭鉱の周縁から炭鉱内にもたらされるものとしても位置づけられているといえる。

第三節　日炭高松における「アリラン峠」の存在

炭鉱町とその周縁の「アリラン租界」を往来する紙芝居の存在を考える際に考えておきたいのは、実際の炭鉱町周辺の様子はどうだったかということである。論者は、サークル誌における「あひるのうた」の意味、ひいては戦後のサークル運動、文化運動という歴史性の中でこの作品を論じていきたい。その過程において、「アリラン租界」が虚構なのか、それとも現実にあったのかという問いを避けることはできない。そこで、作家自身の言説と、その他の記録を比較することで作品の設定と現実との呼応と相異を確認しておきたい。

『上野英信集1　話の坑口』（一九八五年二月）の「あとがき」で上野は、「アリラン租界」は、当時住んでいた集落をモデルにしていると述べている。

> 当時、私はこの短い物語の舞台となっている「アリラン租界」に住み、家主のとめばあさんの家に身を寄せていた。三人の孫の勉強をみてくれれば部屋代は不要、借家人が家賃代わりに納める「アリラン焼酎」は好き勝手に飲んでよろしい、という好条件である。その好条件にもまして私を酔わせたのは、狭い前庭で日夜演じられる、泣きたくなるほど人間くさいドラマのかずかずであった。一羽のあひるの死にも、なんと切ない思いの人間模様が塗りこめられていたことか。私もそのあひるの死に立ち会い、その肉をたべた一人である。生まれて初めて朝鮮人の家に招かれ、山羊のアバラ肉や肝サシをごちそうになったのも、やはりここである。炭鉱の内部に住んでいては、もはや見ることができなくなったもう一つの炭鉱があることを、私はここで

教えられた。戦争中は奴隷のように酷使され、敗戦後は忌むべき「第三国人」として人権をふみにじられた「アリラン租界」の住人たちは、いまどこでどう生きているのだろう。そして、あの、雪のような純粋な魂をもったギリ少年は……。

作者の記述を読む限り、「アリラン租界」は現実に存在しており、ギリ少年にはモデルがいたことが分かる。ここで注目したいのは、雑誌「地下戦線」が発刊された当時上野のまわりには、雑誌に投稿する労働者たち（その多くがいわゆる日本人労働者たち）と、その一方で、「もう一つの炭鉱」の人々がいた、ということである。「もう一つの炭鉱」には、上野が述べているようにもはや炭鉱の内部とは異なる空間があった。

日炭高松のなかでの「もう一つの炭鉱」の存在は、上野の言説でのみ記録されていることではない。たとえば、林えいだいは、『強制連行・強制労働　筑豊朝鮮人坑夫の記録』（現代史出版会、一九八一年一二月）のなかで、元朝鮮人労働者たちの証言を綴っている。そのなかに姜雲基の証言がある。「一九四三（昭和十八）年、朝鮮の済州島から、百二十六人と一緒に遠賀郡水巻町の日炭高松炭鉱第一坑に強制連行されてきた。（略）第三訓練所は、済州島出身者が大部分で、中には大学出のインテリが数人きていた。」と記述されている。また、林は、『地図にないアリラン峠―強制連行の足跡をたどる旅』（明石書店、一九九四年七月）でも、「筑豊の炭鉱地帯には、現在無数の通称アリラン部落があり、地図にはないアリラン峠がある」と指摘している。昔からあったわけではなく、彼らは「炭鉱の近くにバラック建ての掘っ立て小屋をつくり、一種のスラム街を形成」、それらが発展してアリラン部落となった。「何処の炭鉱も採用を拒否した」ために、「止むなくドブロクや焼酎など密造酒をつくったり、町へ行って残飯を集めて豚を飼っ」て生計を立てた。「そのうち東京や大阪など全国から、帰国しようと下関や博多にきた。船待ちの間に持ち金を使い果たしてしまい、筑豊の炭鉱に行けば同胞がいるという話を聞いてどっと流れ込んだ。現在、アリラン部落に住んでいる大部分の朝鮮人は、その時に移住してきて住みついた。／すぐ近くの稲築町、水巻町、川崎町など、筑豊には二十八カ所のアリラン部落が残っている」といった戦後の状態を表す記述がある。朝鮮人たちが自分たちの集落を形成し、戦後は炭鉱で働くことが困難となり密造酒などで生計を立てていた点は作品の記述と呼応しているといえるだろう。

また、日炭高松の「アリラン峠」の様子を写した山口勲は、『ボタ山のあるぼくの町　山口勲写真集』（海鳥社、二〇〇六年四月）の中で、一九六〇年ごろに「「アリラン峠」を撮影した写真を掲載している。当時「アリラン峠」の人々は養豚業で、炭鉱で働いている人はいなかった。「マッカリやらどぶろくを売って」いたという。「高松で働いとる人たちも、よう買いに行ってました、もちろんヤミで。（略）／ぼくも高松産業で働いとった高校生の頃から、よく買って飲んだりしてたんですよ。仕事場の野球クラブの監督の家が、アリラン峠の道を挟んだ前にあって、試合に勝っても負けても打ち上げで、監督の家で一

杯やってたわけです。そんな縁で撮らせてもらえたということなんです。」と、撮影当時の様子を語っている。

これらの記述をみる限り、日炭高松周辺には確かに「もう一つの炭鉱」としての「アリラン峠」が存在していた。炭鉱の内部から完全にみえないものではなく、そこに確かに存在していた。だが、その空間とそこに住む人々が上野の述べた言葉でいうと、「炭鉱の内部に住んでいては、もはや見ることができなくなったもう一つの炭鉱」という言葉であらわざざるを得ないのは、炭鉱内部とその周辺には各々が属する共同体の隔たりのようなものが存在していたからだと思われる。ただ、ここで注意したいのは「あひるのうた」の「アリラン租界」に住んでいるのは、朝鮮人だけではないことである。そこには、炭鉱内部では暮らせなくなった日本人もまた生活していた。この点では、林や山口の記述とは異なっていることになる。もちろん、三者の「アリラン峠」の記述が全く同じ集落のことを指しているとは断言できないが、上野の作品には朝鮮人と日本人が混在していた「アリラン租界」が描写されている。作品では、炭鉱内部とそのその周辺の問題は、単に日本人と朝鮮人の問題としてのみで語ることができないものだということになる。では、上野の「あひるのうた」は、炭鉱内部と、「もう一つの炭鉱」をどのようにつなぐものだったのだろうか。掲載誌の特徴を踏まえながら、次節以降見ていくとする。

第四節　掲載誌「地下戦線」の特徴

以上のような特徴をもつ「あひるのうた」は、炭鉱内部で発行されていたサークル誌に掲載されていた。ここでは、作品が掲載された雑誌「地下戦線」の特徴をみることで、どのような言説空間のなかでこの作品が読まれていたのかを探ってみたい。

「地下戦線」は、一九五三年五月に日炭高松の筑豊炭坑労働者文芸工作集団によって創刊された雑誌である。第一号には、「職場ルポを書こう」という編集部からの記事が掲載されている。そこには、「生死の竿頭ともいうべきこの時に於て我々一人一人の生々しい職場記録を報告しあって互の直面している現実を理解しあうことは、階級的友愛と団結を強めるためにも極めて大切なことです。どうかふるってあなたの記録を報告して下さい。（略）生々しい真実のルポを待つ！」と綴られており、労働者同士の団結を深めるために、職場のルポルタージュを書くことを呼びかけている。同じ第一号の「文工集団アッピール働く者の文芸を！」では、「わたしたちのこの愛する祖国は、この美しい郷土は、刻一刻と植民地化され、侵略戦争のための基地化され、それと同時にわたしたち働く者の、生活は、労働は、加速度的に苦しくみじめなものになって行くばかりの現状です。（略）／わたしたちは、今こそ悲しみを怒りにかえて、胸いっぱい叫ばなければなりません。『祖国を俺たち働く民衆の手に奪還しよう！』と。」と書かれていた。ここでの「侵略戦争」とは朝鮮戦争のことで、「基地」は日炭高松近くの米軍芦屋基地のことを指す。この呼びかけの文句のなかに、「祖国」という言葉が使われていることが分かる。敗戦、そしてＧＨＱ

による占領を経て、朝鮮戦争開戦へと向かう状況の下、日本という「祖国」の概念が強固なものとなっているといえる。これは、他の記事においても共通している。やまの新聞九州総局の記事「メッセージ　大衆の信頼と支持のうえに」（「地下戦線」第一号）には、「みなさん！　現在うばわれた民族の主権、ふみにじられた民族の自由と民主、けがされた民族の文化と芸術に対する国民のいかりは荒野をやきつくす火のようにひろがっています。／この国民的ないかりの真っ只中に於いて闘う全国民の指導階級としての労働者、その中でも最も勇敢にして戦闘的な炭坑労働者の中から、文工集団が結成されることは当然であり、その意義は実に大きいと思います。」と、「民族」そして「国民」という言葉が用いられ、さらには、国民の指導階級として特に勇敢な炭鉱労働者とも表現されている。その一方で、労働の体験を書く、国民の指導といっても、硬くなる必要はなく、「小学生が綴り方を書くような気持ちで思ったままを書いてください」とその表現方法が、「編輯後記」で呼びかけられている。

このような状況のなか、第二号（一九五三年七月）では、子どもたちによる記事を募集している。募集したのは、「小供の綴方・詩・短歌」であり、「題材は自由」だが、「なるべく炭坑の生活につながりのあるものがほしい」という。その理由として、子どもたちが「特殊な炭坑の生活を、都市や農村の生活とくらべてどう考えているのか、（略）それぐ〳〵の年令と環境のなかから描きだされる童心の姿を知ることは、きっと私たち大人にとって深い意義のあることと信じます。」と記述している。次の第三号（一九五三年八月）では、「ヤマの童心は訴える！―小・中学生の作文集―」と題されて、実際に子どもたちの作文が掲載された。なかでも「A・戦争を題材としたもの（九編）（その一）」に掲載されたある小学校五年生による投稿に注目したい。

> ぼくは朝鮮をみたことがないがやはり自分たちのこきようがいいと思います。この戦争が早く独立して平和な国に早くなればよいと思います。きん（金日成）につせは、おたがいに助けあっていこうでわないかとゆうところがえらいと思います。りしようばんは、もう一度せんそうをさせようとさせる悪い心とアメリカとくんでお金をもうけようとしている悪い心がすかない。ぼくが大きくなつたらわがこきようをりつぱにつくつていきたいと望みます。戦争であれた地をりつぱになおし巣（住）みやすい国をつくりあげたいと思います。（略）／（作者は朝鮮人）[5]

最後の「（作者は朝鮮人）」という記述は、編集部によるものだが、この記事のみに「（作者は朝鮮人）」という説明が付されている。例えばこれに対して、同号掲載のもりもとひろしの詩では、「北九の大工場地帯から／筑豊の炭坑地帯から／扇のカナメの地点／ここ芦屋の軍事基地めざして／一せいに大小の赤旗が▌▌▌▌（※文字不明）の姿勢をとるのだ。／もうこの道路は／カービン銃に殺された青年の／血のしたたりをふくみ／朝鮮人民のいかりの声がみちみち／デモ隊は／はりきつたロープの

ように突進するのだ。」と、朝鮮戦争反対運動のデモを描写した作品となっている。「朝鮮人民のいかりの声」とは、朝鮮戦争における米軍への怒りであり、「いつまでも俺たちの祖国ニッポンにいずわろうとするのだ」という言葉と一緒に表現される時、朝鮮戦争で米軍と闘う朝鮮人の祖国への思いと、日本に居座る米軍にたいして日本人が抱く祖国への思いが重なり、「ゴーホームヤンキー」という同じスローガンに回収されているように読める。先の朝鮮人の小学五年生の言葉にあるように、「戦争であれた地をりっぱになおし巣(住)みやすい国をつくりあげたいと思います。」といっているのは、彼がいまだ見た事のない「こきょう」朝鮮であり、決して今彼がいる日本ではない。しかし、祖国への思いということでは、日本人の労働者や子どもたちと同じであるという共通意識として読むことができるのではないか。

上野は最終号となった「地下戦線」第五号（一九五四年三月）に、「あひるのうた」とともに、「前進のために―文工集団結成一年を迎えて―」という文章も寄せている。そのなかで、運動としての文学の意義について述べている。「民主民族統一戦線の革命的前衛部隊である炭鉱労働者である組織の強化と、前衛的な闘争のうえに、すゝんで役立ち、役立てることのできる文学であってこそ、はじめてわたしたちの文学と文学運動の意義がありうる」という。「わたしたちの文学が、組合的になることによって文学ではなくなりはしないか」と恐れる人がいるけれども、「真に人間的であるためには真に民族的であらねばならず、真に民族的であることこそ真に国際的である」。先にあげた引用からも読み取れるように当時、「民族」「国民」「祖国」の概念から他の民族との連帯の可能性をも示唆されている。しかし、上野の「民族的」という概念は、果たして他の同人たちに浸透していたのだろうか。先ほど挙げた朝鮮戦争への反応や、労働者が国民の指導階級であるという表現には、一方では否応なくもそこから日本人による日本人のための連帯が浮かび上がってくる。

第五節　五〇年代における「国民」・「国民文化」という概念

以上述べたように、国民や祖国などの言葉でサークル運動、文化運動が行われていたのは、日炭高松だけではない。鎌田定夫は、「五〇年代記録運動と上野英信―筑豊とナガサキで―」（『追悼　上野英信』上野英信追悼録刊行会編集、裏山書房、一九八九年一月）のなかで、当時の文化運動について回想している。まず鎌田は、当時「中国や朝鮮、ヨーロッパの抵抗文学が次々に紹介され、反戦・反ファシズムの新たな国民文学や国民の科学、国民文化運動が提唱されて、各地のサークル活動は空前の活気を呈しつつあ」ったと述べる。そして自らが一九五四年春以降、九大文芸部や詩会、民主科学者協会等で文化運動に参加し、「同年秋の学園祭で取り組んだ文学同人誌展では、全国各地の同人誌約三百点を展示したが、その中には表紙に版画を刷りこんだ筑豊の『地下戦線』や宇部の『まきやぐら』等もあった」という。翌年の六月には「東京での民科全国大会や日本平和大会に参加したが、このとき日炭高松からきた活動家

と一緒にな」り、「地下戦線」や「せんぷりせんじが笑った！」などの「筑豊の地底から生まれた新しい民話文学誕生の報告を聞いた」。それらは「当時の国民文学や国民文化運動論のみごとな成果の一つとして、みんなの強い共感をよんだ」のだという。

この国民文化運動とはどういったものだったのか。さらに国民文化会議が発刊した「国民文化」創刊号掲載の記事からみてみよう。

国民文化会議は、いまから三年前昭和三十年七月十七日に創立大会を開いて発足した、働く人々を中心に芸術家や学者や学生や家庭の主婦もふくむ、明るい健康的な国民の文化をつくるための協力の場です。／そのころ、都会でも農村でも、うたごえ運動や勉強会、生活記録運動のようなサークル運動が活発になりはじめていました。また、政府からは「教科書国定化」の動きが放送法の改正などの文化統制とともに前面に出てきはじめていました。働く人びとの集団である労働組合の運動も、基地問題も、原水爆禁止の運動も前進するためには、ひろくいろんな職業や階層の人びとと協力しなくてはならないという気持ちがもたれるようになっていました。そういう機運のなかで文化統制に反対して、タイハイ的な文化をしりぞけ、働く国民の手で、健康的な国民の文化をつくろうということが叫ばれるようになり、労働組合を中心にみんなが集って話しあいはじめました。（「国民文化会議と国民文化全国集会」「国民文化」第一号、国民文化会議機関紙、一九五八年八月、一六頁）

働く人や労働組合が中心となった「明るい健康的な国民の文化」をつくるための組織、というのが会の概要である。「国民文化会議創立の趣意書」には、「一切の文化は、その理想をおしすすめるように創られることが、何よりも必要であり、私たちはそうした文化を正しい明るい国民文化とよびます。そのためには国民の中に育てられ、親しまれてきた文化の伝統を正しく受けつぎ、発展させながら、文化専門家が、国民全体と結びつくことがとても大切であります。」と記述されている。つまり、敗戦とＧＨＱの占領を経て、いま改めてわれわれ「国民」の文化の伝統を、「上から」ではなく、国民が自らの手で継承していこうというのである。国民文化会議の会長である上原専六の「〈挨拶〉サークルに世界的視野を」（第一〇号、一九六〇年五月、九頁）においても、各々がサークルにいながらも、日本や世界の動きを捉える広い視野での国民文化を創る重要さを述べる文脈で、「サークルを尊重するということは、人類が現実に当面している世界的な問題に、日本民族として、日本人として、いかに取り組んでいくかによって、人類の生活をよいものにしていくことができるかということとのつながりでなければならない。」と述べており、もはやここでは、呼びかけの対象が日本人、日本民族に限られた意味での「国民」となっていた。

このことは小熊英二が五〇年代の日本の思想的状況について「革新ナショナリズムの思想が、意図しないうちにはらんでいた問題。それは、「日本人」を単一民族として描いていったこ

とだった。」（『〈日本人〉の境界』新曜社、一九九八年一〇月）[7]と述べていることと呼応しているといえる。そもそも戦後日本における在日朝鮮人運動は、日本共産党の指導の下にあった。しかし、一九五五年の日本共産党の方向転換によって、「単一民族」への闘いへと転換していったのである[8]。在日朝鮮人の存在と照らし合わせてみることで浮き彫りとなる、サークル運動、文化運動の「革新ナショナリズム」的一側面である。

ではこのような問題を、九州のサークル運動ではどのように解消したのか、またしえなかったのか。在日朝鮮人たちによるサークル運動でいえば、福岡県朝鮮人文芸同好会によるサークル誌「荒波」[9]が、在日朝鮮統一民主戦線の支援のもとで発行されていた。五〇年代半ばから佐賀の杵島炭鉱でサークル誌「窓」「杵島文芸」を発行し、共産党員として活動を行っていた中島博明は、当時「荒波」を受け取っている。おそらく、民戦は日本共産党の指導下にあったためにその繋がりから手元に残っていたのだろうと推測できる[10]。その他、福岡県鞍手郡小竹町の古河目尾炭鉱の文芸サークル誌「やまの音」第八号（一九六一年七月）[11]に掲載された西川孝一郎の「前夜祭から」において、メーデーの前夜祭で「各町の舞踊」が催されたがそのなかで「北朝鮮の人達の協力によって、美しき異国舞踏に私達にも親愛なる人間関係がよく判った」との記述がある。これらは北部九州における労働運動と在日朝鮮人の繋がりが、皆無ではなかったことを表す事例である。

一方、九州サークル研究会「サークル村」ではどうだったか。谷川雁は「創刊宣言　さらに深く集団の意味を」（「サークル村」第一巻第一号、一九五八年九月）において、文化創造運動が個人ではなく新しい集団的主体を登場させなければならぬと述べ、「労働者と農民の、知識人と民衆の、古い世代と新しい世代の、中央と地方の、男と女の、一つの分野と他の分野の間に横たわるはげしい断層、亀裂は波瀾と飛躍をふくむ衝突、対立による統一、そのための大規模な交流によってのみ越えられるであろう。共通の場を堅く保ちながら、矛盾を恐れげもなく深めること、それ以外に道はありえない。」という。論者は、ここで日本における日本人と朝鮮人の問題が言語化されていないことに疑問をもつ。しかし、言語化されていないながらも、まさに日本人と朝鮮人間の問題こそ「大規模な交流によってのみ越えられる」断層の一つとして、その集団理論に位置づけられるべきものだったのではなかったか。

「サークル村」の記事で唯一、朝鮮人の問題を取り上げたものとして千々和英行の「差別の国日本・その一・朝鮮人　韓国の友への手紙」（「サークル村」第三巻第一号、一九六〇年一月）という文章がある。これは、朝鮮半島の故郷へと帰還した幼馴染から来た手紙に返事をするかたちで綴ったものであった。

> 金さん、あなたと過ごした期間は短かったし、異民族としての隔たりはあったにしても、私にも幼馴染という感じでしかありません。けれども、あなたが問う軽蔑感に、そこにあなたが日本で受けた、差別視され軽蔑されたことが簡単に消えるとは思いません。抗議することもできず、その存在を何らはばかることなく認めている日本人の意識構造

をさらけだした所で何になるでしょう。また単なる同情や仲間になるということによって解消するとも思いません。（略）その頃、北九州一帯にアメリカ軍が来れば日本の男はアメリカに連れていかれ、女はアメリカ軍人の妾にされるという流言が伝わったとき、私はあなたたち同胞が日本で受けていたような状態になるのかと想像しました。そしてそのとき程、私は日本民族というものを、日本人が一つになることのできる、連帯感を強く感じることができました。

アメリカ軍の基地問題を目の当たりにし、千々和が感じた「日本民族」としての連帯感は、皮肉にも労働運動、文化運動が激しくなればなるほど、強固なものとなった側面がある。千々和の思いは、先のもりもとひろしの詩のように、朝鮮戦争での米軍にたいする朝鮮人の思いと、日本に居座る米軍にたいして日本人が抱く祖国への思いが重なったものといえる。ただ、そのとき「日本民族というものを、日本人が一つになることのできる、連帯感を強く感じ」た、と言うとき、日本民族のためのみの運動を推進することと紙一重であるのではないだろうか。「国民文化」の概念が浮かび上がっていったという背景を表しているといえるだろう。

第六節　文化としての紙芝居

これまで作品世界の設定と、当時の時代状況に即して「あひるのうた」とその周辺の文化運動をおってきた。「アリラン租界」は炭鉱の周辺に位置し、炭鉱で働けなくなった朝鮮人と日本人が住んでいる場所であった。林えいだい『地図にないアリラン峠―強制連行の足跡をたどる旅』や山口勲『ボタ山のあるぼくの町　山口勲写真集』には、「アリラン峠」と呼ばれる地域が実際に存在していたという記述がある。だが、それらは朝鮮人の集落として記されており、作品の「アリラン租界」の設定とは若干異なっていた。また、「あひるのうた」が炭鉱内のサークル誌に発表されたことを考えると、他の炭鉱労働者からすれば自分たちの生活とは異なる空間が描かれており、読んだ者はある種の違和感を抱いたのではないだろうか。というのも、初出雑誌「地下戦線」は自らの生活や労働を綴り記述しようと呼びかけられていたからである。同時に、当時「祖国」や「国民」という言葉を用いて文化運動が行われていた状況を考えると、その想像の共同体から否応なく（意図的ではないにしても）排除される在日朝鮮人の存在が立ち現れてくる。朝鮮人労働者の存在が結果的に前景化されえない国民文化運動の革新ナショナリズム的側面である。だが一方で、北部九州の文化運動においては日本人と朝鮮人の間での文化運動を介する交流が少なからずあったのではないか。論者は先に挙げた「荒波」や、「やまの音」の記述からそのように考えている。これらは小さな事例にすぎないが、資料から我々は新たな解釈の可能性を与えられているように思う。そこには支配と被支配の単純な図式は成り立たない。

はじめに論者は、作品のなかで紙芝居を見せないということ

が何を意味しているかという問題を提起した。紙芝居の小母さんが朝鮮人たちへの報復として紙芝居を今後見せないという手段をとるのは、「平和のうたごえ」とともにやってくる紙芝居＝「文化」を内にのみ提示する、つまり朝鮮人たちとの共有を拒む態度と読みとれるだろう。それは、当時の思想状況と照らし合わせると、あたかも国民文化という言葉で民衆の手による文化構築の在り方と朝鮮人の問題として解釈できるのである。だが、今一度、紙芝居の小母さんの性格を思い出したい。紙芝居の小母さんは毎日のように啖呵をきるが、すぐに時間がたてば興奮が収まるいわゆる「川筋気質」をもつ人物として描かれていた。どんじゅう婆さんの言葉にもあるように、「実は心やさしい」人物なのである。作品は紙芝居の小母さんの、「紙芝居をみせちゃらせんけ！」で終わるが、おそらくツネはまた時間がたてば興奮が冷め、普段どおりに朝鮮人たちやそこに暮らす人たちと罵り合いながら、団子のようにくっついて生活する毎日が続くだろうと想像できる。「単なる同情や仲間になるということによって解消する」（千々和）のではなく、見えない「もう一つの炭鉱」でもなく、そこに、たしかに存在している者同士として、あたかも存在を確かめるように毎日喧嘩をするのである。

その一方で、「アリラン租界」の位置する空間について考えると、もう一つの問題に気づかされる。それは、「アリラン租界」と炭鉱内部との関係である。炭鉱から追い出された彼らはもはやその内部に戻ることはできず、周辺で暮らすしかない。だが紙芝居屋の小母さんツネは、仕事のために紙芝居＝「文化」をもって、炭鉱町に入っていく。紙芝居は周辺から炭鉱内部にもたらされるものなのであり、炭鉱とその周辺をつなぐものともなっている。ツネは、「アリラン租界」に住む人々とは喧嘩をするが、炭鉱内の者とは決して喧嘩をすることはない。紙芝居をみせないことで、繋がりが無くなるのはむしろ「アリラン租界」と炭鉱内部との関係なのである。このような問題を抱えた物語が炭鉱内部のサークル誌に掲載され、労働者やその家族に読まれる時におそらく生じる、自分たちの姿が描かれていないという感情は、新たな「断層」の発見ともなりえたはずだった。上野英信が「あひるのうた」のなかで提示したのは、衝突することで統一を生むという後の「サークル村」の理論にも通じる、一つの集団の在り方だったといえるのである。

第五章　森崎和江作品にみる聞き書きと詩
――「まっくら」と「狐」の関連から

第一節　はじめに―問題設定

森崎和江は一九五〇年代の終わりに、雑誌「サークル村」、女性交流誌「無名通信」に関わり共同創造の場をもった。旧植民地朝鮮に出生し「日本人」としての「原罪」意識、日本社会への違和感に苛まれたことが大きな要因であった。この共同創造の場で綴られたのが、「スラをひく女たち」、後の「まっくら」[1]である。

一九二七（昭和二）年、朝鮮の慶尚北道大邱府で生まれた森崎は、日本の敗戦の前年に一七歳で初めて日本の土地を踏む。植民二世として戦後日本と邂逅し、「わたし」なるものを探していく。一九四九年、丸山豊の「母音」に参加し、本格的に詩作を行うようになった。その後、五八年からは谷川雁、上野英信、その他サークル運動家たちと九州サークル研究会「サークル村」を結成。一方で、炭鉱町の女性たちを中心に「無名通信」を発行する。元女坑夫たちの聞き書きを行っていたのもこの時期である。一九六〇年前後に、九州の炭鉱町で女性によるサークルを創り出したことは、現在から考えても斬新だったと言える。自らの坑内労働を誇らしげに語るかつての女坑夫たちの聞き書きを残す一方、炭鉱町で暮らす女性たちが自己表現できる場を創った。

第二次世界大戦の前頃から筑豊地帯の人びとは、石炭産業のうえに生活していたといわれている。特に一九五九年以降、ドラスティックな破壊が進んだにもかかわらず、物質的にも精神的にも石炭を基盤とする生活を送っていた[2]。この相反する状況で、森崎は集団のなかで文学表現を探っていった。それは、合理化が押し寄せ斜陽化の一途をたどる炭鉱の実態を、「過去」と「現在」の両方から攻めた試みであった。このことは同時に森崎が植民二世であり、自分自身の姿を探し求めていたことと深く結びついている。彼女にとって炭鉱の風景や人々、そこで織りなされる文化と出逢ったことは、「わたし」を獲得する過程に無くてはならない要素であった。

このような意味において、元女坑夫たちの聞き書きを綴った「まっくら」は、森崎和江の表現を読み解くうえで重要な位置を占める。「まっくら」はまず同時代に河野信子によって評価された。河野はヤマの女たちを「地表でその形を把握することは、極めて困難な仕事」であろうと述べ、だからこそ「見事な観察者の目によってとらえられた、すばらしい記録」と評価した[3]。このような高い評価は、近年にも共通している。ただし、聞き書きという表現方法に注目しているという特徴がある。例えば加納実紀代は、聞き書きの問題点を聞きとる段階とそれを書きおこす段階で二重に著者の人間がためされるとし、「語り手の思いと著者の意図がずれ、それを無視して著者の描いたストーリーにはめ込めば、「知の搾取」という問題も出てくる」と指摘する。そのうえで、後に「まっくら」に収められる「赤不浄」を書いた森崎が、『からゆきさん』（朝日新聞社、一九七六年五月）においても、自らがからゆきさんを描く際の危険性について意識的であったことに触れ、「おかげで〈無告〉たちは二度殺されることなく、歴史に声を刻むことができた」と評価している[4]。ここでは、日本人の加害責任を問う文脈におい

て、他者の声の聞き方、記録の仕方が焦点になっていた。佐藤泉も聞き書きに注目して論じているが、集団創造としての表現の在り方に注意を向けている。元女坑夫たちの存在は「圧倒的であり、その言葉に寄り添うことはできてもその経験のくまぐまを理解しつくすということは、最後のところで不可能であ」り、『まっくら』での言葉の協働は、共通分母ならず、こうした隔たりによって可能になって」いる。このことが『まっくら』の聞き書きの基本的構図だと論じている[5]。

以上の評価があるなかで、論者が考えたいのは聞き書きと他のジャンルとの関連である。森崎はこれまでに、聞き書きだけではなく、詩作品、エッセイ、ラジオやテレビ脚本を発表している。彼女の創作の全体を把握するために、聞き書きと他の表現方法との関連を位置づけることが、今後の必要な作業であると考えている。加納や佐藤が論じた、他者の声、集団的声を聞くことは、詩作においてもかなり意識されていたものであった。本章ではこのことを、「まっくら」と詩「狐」の関連から考察したい。さらに二作での問題意識が『第三の性―はるかなるエロス』でも維持されながら、変遷していく過程を指摘したい[6]。

第二節　「まっくら」の成り立ちについて

まず、「まっくら」の成り立ちについて確認しておきたい。初出は、三つの媒体で発表された。まず、「スラをひく女たち」というタイトルで、九州サークル研究会「サークル村」に六回（一九五九年七月～一九六〇年四月）にわたり連載される[7]。その後、「無名通信」一四号に、「ヤマばばあ」を発表[8]。以上が、一九六一年六月に理論社から『まっくら―女坑夫からの聞き書き』[9]と表題を変えて刊行される。一九七〇年八月には、再刊『まっくら―女坑夫からの聞書き』（現代思潮社）が刊行されることとなる。その際に、装幀は山本作兵衛となり、本文中にも二一葉の画が掲載される。山本との共同創作であったといえる[10]。

さらに、改稿は続く。一九七四年四月に大和書房より刊行された森崎の『奈落の神々　炭坑労働精神史』に「赤不浄」という節がある。この「赤不浄」を追録し、新装版『まっくら』（三一書房、一九七七年六月）が刊行されている[11]。つまり、森崎和江の「まっくら」は、初出、初刊、再刊のそれぞれで、改稿を行い刊行され続けた経緯がある。

では、どのような点が改稿されていったのだろうか。すでに佐藤泉が述べているように、単行本化にあたり、聞き書きの後に森崎の文章が加筆されている[12]。これはすべての章にあてはまることである。その他、初出連載の順番どおりではなく、初刊では新たに章順序が構成され、特に連載第五回と第六回は、初刊の第二話「流浪する母系」に再編され収められている[13]。また、順序だけでなく内容についても若干の異同がある。例えば、初出第二回は初刊では第六話「セナの神さま」に対応するが、単行本に収められるにあたって、元女坑夫が当時赤ん坊を坑内に下げていたことが削除されている。初出第三回は、第九話「地表へ追われる」として編まれる際に「部落民」差別についての一文が加筆されている。同様に、「ヤマばばあ」もまた、

初刊の第七話「ヤマばばあ」では「部落民」の坑外労働についての記述が加筆されていく。

一方、内容自体の改変はないのだが、微妙な言い回しの変更は頻繁に行われている。例えば、初出「スラをひく女たち」第一回には次のような元女坑夫の語りがある。

そんころはあんた、五平太舟ちゅうてな。わたしが十七でしたでっしょ。たしかそんくれえじゃったち思うがな。

（「スラをひく女たち」第一回）[14]

これが、初刊『まっくら―女坑夫からの聞き書き』になると次のように改稿されている。

そんころはあんた、五平太舟といってな、石炭舟が川をのぼりくだりしよったばい。わたしが十七でしたでっしょ。たしかそんくらいじゃったと思うがな。

（第一話「無音の洞」）[15]

文末の方言が分かりやすく書き換えられていることが分かる。また、初出ではなかった五平太舟の解説が、初刊では書き足されている。つまり、炭鉱町以外の人が読む際の利便が図られていたといえる。

先ほど触れたように、初出から初刊へと編まれるにあたっての大幅な改稿は、所謂、森崎自身の文章が加わることであった。そのなかでは、聞き書きの対象が誰からどのように紹介されたのかが記されている。第二話「流浪する母系」[16]では、「サークル活動家でもあるその青年」のことが書かれている。彼の母親も坑内労働をしており、「前からおふくろの一代記を書こうと思って話ば聞きよるとたい」という。だが、「これはやおいかんばい（容易じゃない）」。森崎が元女坑夫の聞き書きを行っていると知った彼は、「おれのおふくろに逢わんの。逢うてよか。あげな経験はちっとやそっとじゃ書けんたい」と言って、「はじめて母親のことを知らせてくれた」。この人物は、後に「彼と共に人形劇などをする若い妻と、彼の両親や妹をともなって、私の住む町へ移って」くる。この部分から青年は、「サークル村」や「無名通信」に参加していた阪田勝と推測できる。

また、第七話「ヤマばばあ」では、うたごえ運動を行いながら山田文学サークルに所属し、「サークル村」同人でもあった森田ヤエ子が、「あんたのよろこびそうなおばあさんを紹介してあげるね。このまえ仲良しになっといたけど、そりゃ立派な話しぶりをするよ」といって元女坑夫を紹介してくれたことが綴られている[17]。その他、第六話「セナの神さま」の元女坑夫は、上野英信が坑内労働をしていたときの下宿先のおばあさんであったという[18]。これらは初出では明記されていない事象であったために、書き加えられることで、書き手とその周囲の人々との創作の場を初刊の読者により立体的に意識させるかたちとなっている。おそらく初出掲載時に、行間から伝わる聞き書きの背景をサークル誌の読者たちはある程度知り得たであろう。単行本化にあたって、まるで空気のように漂っていた記述の背景までも、森崎は再現しようとしているのである。

一方、このような森崎の地の文は、対象との距離感をより明確化させているともいえる。必ずしも彼女が対象にぴったりと寄り添い、共感したうえで記述を行ったわけではなかった。それは、第六話「セナの神さま」に顕著である。元女坑夫たちのもっている「攻撃的な明るさ」は、「家父長的な圧力もふくめて、一切の権力への反撥からうまれでてくる」ものである。だが、第六話で記される元女坑夫には、「性的疎外に対する敏感な対抗意識」はあるものの、「それが権力のすりかえへむけられているところに」「閉鎖性がある」ようだ、と森崎は言う。「圧制で名高い三好炭坑の、炭坑直轄納屋の娘」であったこの元女坑夫には、「息づまるような権力維持が、後山をしていたこの婦人の視野をやせさせているのを感じさせ」、「ちょっとしたずれがこうも大きく女たちの意識を傾けてしまう、そのポイントがつむじ風のように私をおそってきた」と述べている[19]。この森崎の地の文から言えるのは、かつて坑内労働に従事した女たちを無条件に賛美するのではなく、個別の事象として彼女たちの多様性をみてとろうとしていることである。改稿にあたり、対象との距離が明確になったとともに、元女坑夫の多様性が文字上に表れ、読者に届けられていく[20]。

以上のように、「まっくら」は、聞き書きという枠組みを持ち、評価されながらも、言葉の表現を変容してきた。書き手の明確な意思や、背景の記述は読者が「語り」を受容する時の梯子のような役割を果たしており、より「分かりやすい」。ただ、決して対象である元女坑夫と森崎が一枚岩となってはおらず、元女坑夫たちのなかでの差異をも表す構成となっていった。

第三節　詩における対話表現―「狐」

では、他者との対話を端緒とする聞き書きと、詩表現とは一体どのように結びつくだろうか。

森崎は、「詩人」として、自己を積極的に語ってきた[21]。「作家」でも、「随筆家」でもなく、自らを「詩人」だと言う森崎の立場を把握するために、詩集の「あとがき」をたよりとしたい。

これまで刊行された詩集は以下のとおりである。①『さわやかな欠如』（国文社、ピポー叢書74、一九六四年九月）、②『かりうどの朝　森崎和江詩集』（深夜叢書社、一九七四年五月）、③『風　森崎和江詩集』（沖積舎、現代女流自選詩集叢書②、一九八二年九月）、④『森崎和江詩集』（土曜美術社、日本現代詩文庫12、一九八四年八月）、⑤『地球の祈り』（深夜叢書社、一九九八年五月）、⑥『ささ笛ひとつ』（思潮社、二〇〇四年一〇月）、以上六冊である。このうち、④『森崎和江詩集』以外は、「あとがき」が収録されている。本章で取り上げるダイアローグ型の詩「狐」が掲載されているのは、①『さわやかな欠如』、②『かりうどの朝　森崎和江詩集』、④『森崎和江詩集』である。以下、①と②の「あとがき」から引用する。

①私の詩の発想は、いつもことばの内外にある欠如感からですし、創作過程は、予期しない打撃で私の欠如をぶちやぶってくる異質の欠如性との作用反作用を要求し仮定しま

す。（略）それは私の詩というより、私たちの詩、もはや固有名詞から自立した詩自体でありたいというようなものです。（略）文字に依存したことばの機能の一部は、意識交換の直接性から間接性へあるいはまたダイアローグの開花よりもモノローグ的結実の美へとことばの間接性の効用をふかめました。（略）／一九六四・三・五　廃山あとの宿にて

②私は、詩とは、本来、他者とのダイアローグであると考えていた。自分以外の、自然や人々との。（略）（一九七三年末）

森崎は、いわゆる形式からそれと分かるダイアローグ型の詩だけでなく、詩すべてが本来ダイアローグであると考えていた。モノローグではなく、外界と対話するダイアローグとしての表現の在り方を理想としていた。そのことが一九六四年の第一詩集の時点で確認できる。つまりダイアローグとしての詩のあり方が、森崎の創作の根幹にあるといえる。

森崎が採用したダイアローグ型の詩のなかに、「スラをひく女たち」連載の約一年半後に発表された「狐」がある。この詩は、初め「無名通信」第一七号（一九六一年五月二五日）に発表された。この際放送詩「狐」として発表されている。初刊『さわやかな欠如』（国文社、一九六四年九月）以降は「放送詩」が削られ、「狐」となった[22]。

初出には、戯曲のようにト書きがある。しかし、「詩」になると削除されている。ト書き部分には、炭鉱の病院が舞台であることが説明されていた。その説明が削られることで、読み手にとってより限定されない世界で二人の対話が続くこととなるのである。この曖昧性は、ト書きの削除だけにみられるものではない。初出で「ふさ」と名が記述されていた桐江の伯母は、初刊では「伯母」とのみ記されていることにも表れている。また、初出では年齢が、桐江は「三十七、八才」、ふさは「五十五、六才」と書かれていたが、初刊ではその説明はない[23]。

後に掲載誌「無名通信」について触れるため、初出の放送詩「狐」の内容をまとめながら、問題点を確認しよう。作品は、たびたび子を身ごもるけれども中絶をする桐江と、伯母ふさの対話の形式をとっている。桐江は、「もう十二回もやってきた」と言う。ふさは、かつて女坑夫であった。坑内労働に五五年も従事し、石炭を掘り出してきた。それぞれが、中絶と、坑内労働を語るが、二人の語りが、読むにつれ重なって響いていく。桐江は、「何かわからん塊りが、狐のごたるもんが、うちの体のなかに入りこんどるとばい。（略）／茶碗いっぺの血の塊ばかきだいて、それでうちは何ばしたとじゃろか？」という。それに対し、伯母であるふさは続ける。

知ったこつの、おれが。／おまえは茶碗いっぺの血じゃろうばって、おれは五十五年ばい。／七つのときから坑内さがって、おれはいっぱい、いっぱい、ひりだした。（略）おれは石炭に、見ちょれ見ちょれ、といいつづけて、何かいっぱいひり出した。／茶碗いっぺの血かい！

桐江が、子宮から「掻きだし」た「茶碗いっぺの血の塊」を、ふさは、たったそれくらいかと言う。かつて自らが坑内で「ひりだした」「いっぱい」の石炭は、そんなものではない、と。

だが、桐江はこの血の塊と、ふさの五五年とどう違うのか、納得できずにいる。男は坑内で事故に遭い、血が出れば金になるが、女は血を出しても金にならないという。桐江が成長し、働けるようになったころは、坑内に女が入ることは禁止されていた[24]。だから、「好いてもおらん男と遮二無二こすりあって十二回も掻き出した。それだけがうちの現場じゃ」。この現場に「見えん狐がおる」。この狐は「おるのに、ない」。見えない狐とは一体何なのか。ふさが応答する。

> 桐江、／おまえちゃまちごうとるごたるばい。／人間につく狐ちゅうもんは、もともと見えんもんばい。それはまんまるいまま出せるもんじゃなか／おれは、何にもなかところさへ入っていったおなごばい。叩き殺されるごたる穴の中で、つるはしの柄についとる瘤ぐれえにも思われんずく五十年たった。

坑内での労働は、常に死と隣り合わせのものであった。それゆえ、自分の存在は「つるはしの柄についとる瘤」のように取るに足らない[25]。坑内で使用するツルハシの柄についている瘤として自分自身を認識するこの表現は、炭坑労働者がおかれた状況の非情さを物語る。それが無くては困るが、一度使い物にならなくなれば、物のように捨てられてしまう。

この後、女たち（二～六）が会話に加わる。桐江とふさの二人の対話としてのみでなく、その他の女たちの声も挿入されている。彼女たちは、やはり桐江のように中絶手術をした患者たちのなのだろう、次のように語っていく。「桐江／非常であるもんの。お祝いばい。／おなごだけが知っとる。おなごだけがさわっとる。生きるんでもなし、死ぬんでもなしたい。生かすでもなく殺すでもなくくさ、そればってんそこに何かあるとばい。かあっと青空のごと、ある」。桐江は、「死ぬ」のでもなく、「生かすでもなく殺すでもな」いところに、大切な何かがあるに違いないと考えている。しかし、ふさの言う「裂け」た状態の、役立たずのものではないのだ、とくり返す。女五は、弁当をつめてきたといって皆でわけて食べようと言う。「女五／おなごはこげな時でなけらな腹いっぱい食べられんもん。それでも家ん中で食べるわけにいくまいが。こけに来とるもんと食べよう思ってうんと持ってきた」。さらに人数が増えていく。「女六／あんたもかたらんの。ヤマもしまいじゃけ腹いっぱい食うこともなかけんの。今日ぐらい食べていかな。ほら。」と、閉山が示唆されている。閉山間際の炭鉱町の病院で、桐江や、女たちは、中絶しつづけている。だが、女たちが集まれば、ト書きで書かれる「一同どっと笑う。」や「笑声」（四箇所）にみられるように、悲しみではなく、明るさをたたえた存在として描かれる。

そして、桐江とふさの二人の対話に戻り、ふさはある理念にたどり着く。それは、労働をとおしてわかったもの、「何にも

ない」ということであった。きっと桐江のいう「狐」は、ふさが労働をとおして知り得た「何もない」ということと似ているのではないかと、ふさは考えている。この「何にもない」「まっくらくら」の思想は、役に立たないものである。「人間の体が生めるもんはそんなもんばい。裂けとるから宝たい。」という彼女の言葉からは、「何もない」という負の要素を肯定的に捉えなおす試みが示されている。命の存在が地表と比べはるかに軽いこの地底のなかで、それでも、自分自身の存在を肯定するために、ふさにとってこの思考の転換が必要であったのである。

石炭のごたるもんが、どっさりあると思わんか。／おれは穴の中で「何もなか」ちゅうこつば知った／それがどげん美しかもんか、固かもんか知った。／おれがでけたとはそこまでたい。／おれは、あるものとなかものの境に立っちよった／ばってん、そのむこうに、もっともっとようけかくれとるもんがある。（略）死にようが足らんばい、おまえは。

ふさに対し、桐江は、「おばさん、そげんいわんでくれんの。待っちょってくれ。」と言う。放送詩「狐」は、次のふさの言葉によって終わる。

おれがいうたこつを忘れるな。裂けとるけん宝たい。／どれ、昼ままども喰わじゃこて。

以前にも一度語られた言葉、「裂けとるけん宝」が最後に再び発せられることで、この言葉に作品全体が収斂されて終る。最終部分のト書きでは、「選炭機の音、ふさの会話の途中から次第に大きくなる。／下駄をつっかけて出ていく。／昼のサイレン。」と、ふさが桐江との対話を終え、病院から出て行く場面が説明されている。

初刊でも、表現の違いはあるものの作品の内容はほぼ同じである。ただ、前述のとおりト書きが削除されていることに加え、最終部分の伯母の言葉が異なることは等閑にできない。

桐江／おばはん／みていておくれ／待っていておくれ
伯母／ごめんだね／どれ　昼ままどもくわじゃこて

一度目の「裂けとるから宝」の部分は、方言の用い方に若干の違いはあるものの、引き続き採用されている。しかし、最終部分で「裂けとるから宝」を、伯母が繰り返すことは無く、代わりに「ごめんだね」と、拒絶ともとれる言葉に変わっている。つまり桐江と伯母との間に、対話を始める当初から存在していた「分りあえなさ」を響かせながら詩が終る。主題とも読めた「裂けとるから宝」という言葉が、繰り返されないことで読者にとっては、より内容の「分りにくい」ものとなっていることは否めない。

放送詩から詩への改稿のなかで、特にト書きの部分が削除されること、最後の伯母の言葉に違いがあったことは、読者の読

みの便宜を図った改稿ではなく、むしろ容易に読解することを拒否する表現となっていた。なぜ、あえて曖昧に、二人の対話が容易に了解できないものへと改変されたのか。

「狐」には、「まっくら」と重なる部分がある。ここで、「まっくら」との共通点を媒介とすることで考えてみたい。例えば、第一話「無音の洞」では、元女坑夫が坑内の様子を以下のように語っていた。

> そこらじゅう、しいんとしとるけんなぁ。二尺ばっかし厚さの石の層を、ツルの柄のとどくしこ腹ぼうて奥のほうまで掘ってな。（略）函に石を移して、こんどは空になったスラにたすきをかけて四つんばいになって坑道をあがらんならん。その重さね。濡れしとった木箱を引きずって梯子をのぼるようなもんじゃけ、肩があかくなって紐がくいこんでな。そんな自分の音ばっかりじゃ。水もどこやらでぴちんぴちんいうて。だあれもおりゃせん。さみしいとこたい。[26]

坑内の様子は、「狐」のふさも語っていた。「何もない」「まっくらくら」であること、それが共通する坑内の特徴である。坑内労働は常に死と隣り合わせの過酷な現場であった。そのため様々な迷信があったことが現在でも伝えられている。犬神を山の神として奉っていたこともその一つである。坑内に下がる前には犬の吠え声を気にし、「ゆんべは犬が高吠えしよったの」、「どっち向いて吠えたとじゃろうか」、「坑口のほう向いて吠えとったら悪いばい、死人の出るちいうばい」と言い合っていた[27]。

動物に対する禁忌としては、狐に関するものも多い。再刊である『まっくら―女坑夫からの聞書き』（現代思潮社、一九七〇年八月）の装幀を担当した山本作兵衛は、「ヤマと狐」という作品を数点遺している。その一つが「まっくら」再刊にも収められていた。坑内事故に遭い全身に火傷を負った坑夫の家を、医師や看護師の格好をした狐と、着物を着た多くの狐たちが見舞っている場面である。狐たちは人間の格好をしていたためか、家のものたちは気付かず、その医師の、焼けただれた皮を除去しなければなおらないという言葉を信じ、見守っていた。夜が明けるまでに一人また一人と去り、全員が居なくなったとき、眼を覚ました妻が眼にしたのは冷たくなった夫の姿であった。狐はガス焼け患者の火傷の皮が大好物で、その皮をとるためには、どんなひどいことでもするのだという[28]。この記述は、明治三三（一九〇〇）年頃に、幼少期の山本の隣家で起こったことが元になっている。だが、明治末期より炭鉱は電化し、坑内の狐の姿を見たという人の数は徐々に減っていく。

「狐」の初出が一九六一年であるから、当時は、電化はもちろん、石炭産業が斜陽化し、閉山が増えていく時期であった。閉山した炭鉱の病院を舞台に明治期の炭鉱の禁忌である狐を題材と選ぶことは、中絶し続ける桐江と、眼に見えぬ狐が巣くう坑内で働いた伯母ふさとの対話を、歴史的背景として描き出している。閉山間際の炭坑で、まさに明治期から発展してきた町の風景が滅んでいこうとしている。生み、育てることのない桐

江の姿には、閉山の風景が投影されている。ふさがかつて掴んだように「何もない」ことを肯定的に捉えなおすことは、桐江にとっても、閉山に向かう炭鉱町にとっても必要であったのである。

第四節　「無名通信」と「狐」―同人の反応

放送詩「狐」が掲載された「無名通信」は、森崎和江が中心同人となって創刊された女性交流誌であった[29]。「サークル村」の活動のなかで、女性たちの集いが必要だと感じた森崎は、「サークル村」誌上で呼びかけを行う。当初は、「サークル村」と発行所が同じであり、両方の同人である者も少なくなかったが、後に発行所名が変わり名実ともに自立した活動となった。第一八号（一九六一年五月二八日）、第一九号（一九六一年六月三〇日）には「まっくら」の広告が掲載されている。放送詩「狐」が発表されたのは、前述のように第一七号（一九六一年五月二五日）であるが、次々号である第一九号には同人であった古賀のぶ子からの反応が掲載された。

> こういう世界をつかみ出して訴えかけねばおれないあなたの気持ちが、手さぐりながらわかるような気がします。けど、その形の中で、あなたが言おうとしてらっしゃることはまだはっきりつかめない、わかるようでいてわかったとは云いきれない。（略）自分の世界に根をすえろとあちこちから云われながら、私にはまだどうにもそれがつかめないのです。あせっていながら、まだ―これとは又別なことですが、こういう生活語（あえて方言とは云いません）を使って作品を作ることに、私はこの頃少しカイギ的なのです。[30]

古賀が指摘するのは、方言が伝わるか、伝わらないかではなく、生活語としての表現を一度、一歩下がって考えたい、ということであった。ここで生活語と対義語になっているのは、共通語である。表現する際の、ことばの問題は「無名通信」で度々行われていた座談会でも論議されている。同第一九号掲載の座談会のテーマは、「女のことば―その開拓の方向について」[31]である。議論は、表現したいものと、実際の表現する言葉とのずれを中心に展開している。森崎は、「私達の要求は、私たちに肉体的反応を起させると同時に知性を緊張させる」、私たち女性の発話は、肉体的表現と知的表現とに挟まれている、という。

先の古賀の言う生活語と同義で語られているのは、座談会での言葉に置き換えると、「肉体的表現」（森崎）であり、「自分たちの言葉」（豊原）である。一方、共通語にあたるのが、「知的表現」（森崎）、「通用語」（豊原）、「外在的な言葉」（原田）である。肉体的反応をとことんみることで、単なる生活語としての表現ではなく、その中に知的表現を探りたいのだと言っている。けれども、自分はその過程が浅い。これは生のままで表現することで伝達しうると考えるのとは違う。古賀の指摘での、生活語でそのままを表現するのでは足りないことに、森崎も気

付いている。

このことを聞き書きの手法に移して考えてみたい。元女坑夫たちの話をそのまま文字化し、雑誌に載せるのではなく、書き換え、編集し、自らの対置することばを書きこんでいく作業こそが、「表現できない部分に自分の核を迫らせていく運動を」自分の内側にもつことだったといえないだろうか。元女坑夫たちが何もない坑内の世界から、自らの言葉でその半生を語ったことを、「更に細かく擬似化していくことを積み重ね」ることによって、「表現できない部分に自分の核を迫らせ」る作業。それが、森崎にとっての聞き書きであった[32]。

そもそも聞き書きは、明確な方法があるわけではない。もちろんオーラル・ヒストリーとして学問的方法がある程度確定されたものはある[33]。だが、森崎の作品に則せば、体系化された聞き書きの方法としてみるよりも、話し手と場を共有することから始まる対話の一形態としてみる方が捉えやすい[34]。聞きとったものをいかに編み直し、文字化するかは、聞き手の判断に委ねられる。その際、聞き手の立ち位置や自己の姿が唯一の物差しとなる。他の誰でもない話し手が、炭坑での労働や生活をいかに、いま、ここで語るのか。聞き書きの場を共に創ったこの緊張感を引き連れて、聞き手は文字化する。

これは森崎と元女坑夫たちとの間で築きあげたものだけではなく、座談会にみられるように「無名通信」における同人間の対話をとおしてもさらに重層化していったとみてよい。これらの対話が、「まっくら」での聞き書きの方法や、詩「狐」の表現に影響を与えていった。その方法は、違う立場の人間が、対話し、分かり合う、という安易な結末を導くものではない。「狐」の桐江と伯母が分かり合えないこと、「まっくら」で元女坑夫と書き手である森崎が一致していないことは、単一の表現者としての主体を解体し、複数性での表現を可能たらしめている。更に、再刊の過程で作品を改稿し続けたことは、その時々の自分自身をも、複数性の一要素として織り込んでいく行為であったといえる。容易な結末によって収斂されないからこそ、作品は開かれたまま終り、読者という新たな対話者へと届けられている。

第五節　『第三の性―はるかなるエロス』へ

「まっくら」と「狐」で共有された女性の多様性の問題は、その後、やはりダイアローグの形式をとる『第三の性―はるかなるエロス』（三一新書、一九六五年二月）にも引き継がれている。二人の女性のノートの交換という形式をとる『第三の性』は、奇数章が子を産んだ女である沙枝、偶数章が生んでいない女である律子の記述である。森崎自身も語っているように「無名通信」に参加した友人とのノートのやりとりが元となっている[35]。異性愛的な対関係の可能性の拡大が目指されている[36]。

作中では立場の違いを端緒とした、律子の沙枝に対する分かりあえなさが吐露されている。律子の語りである八章で「あなたの話をきいて思ったの。ちがうな、わたしとは。」[37]と綴られる分かりあえなさが、決定的になるのが一四章である。

そしてわたしは、それにかてて加えて、聖家族的な男持ちからもおっぽりだされている。二重になっているわけです。そしてそのため湧き上る裸形を、これは誰からものぞかれまいとする。（略）子供を生んだあなたには分らない。性をその対象者と共に生き得る沙枝さんには分らない。[38]

注目したいのは、この後に二者が分かり合えないまま作品が終結してはいない、ということである。沙枝は、律子との接点を何とか導き出せないかと模索していく。二一章で沙枝は、今日の対の概念の閉鎖性について指摘する。そのなかで、自分が掴みたいのは「複数にして単一であるもの」であると綴る。「個と群との関連の、その内的模索が、今日の創造の原理へむけてそんなあだ花を咲かせたっていいではありませんか」[39]。この言葉に律子なりの開眼があったのだろう、次の二二章では、「やっとはっきりわかった」と、これまでとは一転して律子が喜びを表している。

わたしはいまやっとはっきりわかったんです。満ちるということは湧かせることなんだと。（略）そのなかから、どれをわたしは選ぶのか、どれに惚れたら真実、みちるのか、どうしてもとらえようのなかった感覚が、さっぱりと消えたんです。[40]

既存のものから選びとり、自己表現をするのでは群に絡め取られてしまう。そうではなくて、何もないところから「湧かせ」「にじみ出」すこと。無からの表現の結実を掴み得た瞬間の様が、二二章では表現されている。

『第三の性』は、女たちの隔たりについて、いわば接点を探る実践である。男女の対（異性愛）を前提としながら、同伴者との限定的、閉鎖的な関係ではなく、女・男の総体としていかに止揚できるか。つまり、個人と個人の対話（個別の事象）から、いかに共同体の問題へと敷衍させ得るか、という問題を提示していた。立場の異なる者が接点をさぐる契機となったのは、二一章と二二章で表現されたように、既存のなかから探すのではなく、自らがゼロから出発して、表現方法を掴むこと、であった。「まっくら」、「狐」であらわれた、女たちの対話形式と、何かあるけれど、分からない、掴めていないという捉え方を『第三の性』でも持ち続けていたといえる。

一九六〇年代の森崎の「対話」を軸とした表現のあり方は、聞き書き、放送詩、詩、散文のかたちをとり、展開されていった。「まっくら」「狐」『第三の性』を一連の女性対話の作品群として捉えることができる。だが、それだけではなく、『第三の性』での新たな到達点は、これまでの問題意識を保ちながらも、さらにその地点から脱却する。「何もない」ことを肯定的に捉えなおす思考の転換は、『第三の性』では、表現方法を掴む女の姿を描くことに新たな可能性を見出したところにあった。

第六章　石牟礼道子『苦海浄土―わが水俣病』成立の過程

第一節　はじめに―石牟礼道子研究史

二〇〇四年四月から刊行が始まった『石牟礼道子全集　不知火』[1]は、二〇一二年七月に本編が完結した。自伝、年譜、著作リストを収めた別巻も二〇一四年初めまでに刊行予定だという。二〇一一年に完結した『石牟礼道子詩文コレクション』全七巻[2]には、詩作品、エッセイがテーマ毎に収録されている。さらに、池澤夏樹編『世界文学全集Ⅲ-04　苦海浄土』[3]も刊行された。作品へアクセスしやすくなり、研究の資料的土台も整ってきている。

石牟礼は一九六〇年代から水俣病闘争を患者やその家族、全国の支援者と共に闘い続けている。その点で、東日本大震災に伴う福島第一原子力発電所の事故後、改めて注目されている作家の一人と言えるだろう。水俣と福島の環境をめぐる人々の生存に関わる諸問題の共通項を、例えば、高橋源一郎は『非常時のことば　震災の後で』[4]において言及し、石牟礼は藤原新也との共著『なみだふるはな』[5]において語っている。岩淵宏子が「原発事故と水俣病―石牟礼道子『苦海浄土―わが水俣病』から」[6]で述べているように、海が汚染する事態や食物への不安は、水俣病を思い起こさずにはいられない。

さて、石牟礼道子の名を世に知らしめたのは、『苦海浄土―わが水俣病』(以降『苦海浄土』と表記)である。この作品が「文学」として評価されるに至ったのは、渡辺京二の言葉を端緒とする。「石牟礼道子の世界」[7]で渡辺は、「実を言えば『苦海浄土』は聞き書きなぞではないし、ルポルタージュですらない。(略)石牟礼道子の私小説である」と述べた。これについて、近年の井上洋子による研究展望「森崎和江・石牟礼道子研究の現在」[8]によると、『苦海浄土』を「公害企業告発の書、社会派のルポルタージュという読みから最初に解放した」のが渡辺の言葉であったという。しかし「「聞き書き」という名称は、最終稿に引き継がれており、渡辺の指摘にもかかわらず「聞き書き」は、『苦海浄土』の重要な方法の一つとして、石牟礼に充分に意識されているのである」という。井上は「サークル村」の集団のなかで作品が編まれたことを指摘する。「石牟礼にとって、患者との一体化された関係を、言葉による協働によって表現してゆく、きわめて具体的な方法」だったのである。

一九八〇年代には、羽生康二が『近代への呪術師・石牟礼道子』[9]において「きき書き」、語りの様態などについて作家来歴をもとに分析し、石牟礼道子の世界には、現代文明の恩恵にありつきたいというわたしたちのエゴイズムを打ちくだく思想の芽があると評価する。また、新井豊美『苦海浄土の世界』[10]は、巫女や呪術師として石牟礼道子をとらえることに反論し、「むしろ巫女性そのものを方法化した石牟礼の作家魂を見るべき」だと述べる。石牟礼にとって対象の言葉を語ることは「対象と一体化し、対象を〈のみこむ〉こと」だとする。新井が指摘するように、評価軸として「呪術性」や「憑依性」が指摘されるのは、『苦海浄土』の「私の故郷にいまだ立ち迷って死霊や生霊の言葉を階級の原語と心得ている私は、私のアニミズムとプレアニミズムを調合して、近代への呪術師とならねばならぬ」という作者自身の言葉によるものと考えられる。以後も、

論じる手付きや分析方法は異なるが、「呪術性」や「憑依性」、聞き書きか私小説かという論点は、石牟礼道子研究においてキーワードとなっていく。

一九九〇年代には、河野信子、田部光子『夢劫の人―石牟礼道子の世界』[11]や下村英視『もうひとつの知　石牟礼道子に導かれて』[12]が刊行されるなか、『苦海浄土』の成立過程に注目した論として、井上洋子の「「ゆき女きき書」成立考―石牟礼道子とフェミニズム―」[13]、「石牟礼道子初期短歌のころ（四）―『苦海浄土』へ―」（「ガイア」一九九三年七月）がある。初出「水俣湾漁民のルポルタージュ　奇病」について「愛情論」との関連を踏まえたうえで、作家の詩的幻想が生み出した『苦海浄土』の「〈語り〉」を高く評価している。改稿箇所については、「おもちゃのトラック」から「紙の舟を曳いて歩く姿に改稿」されていることを指摘し、ゆきが目ざしたのは、「受難の生を包む〈苦海〉のかなたに、一瞬の至福として現れる〈浄土〉」であり、「石牟礼の詩情とはそのような〈浄土〉の顕現の中を流れている」と論じている。また、『苦海浄土』の成稿は、高群逸枝の夫である橋本憲三に提供された「森の家」で書かれた。「高群逸枝が〈母性〉と呼んだ生命の始原のイメージを、石牟礼は豊穣な不知火の海のイメージに置き換えて、それをゆき女の夢みる幻の〈浄土〉として語った」と論じている。

『苦海浄土』における言葉・方言に注目したものに、川村湊「風を読む　水に書く　1　潮の橋の上で―石牟礼道子論」[14]がある。「良くも悪くも」、作品の特質は「石牟礼道子という文学者の巫女的な憑依能力にあるというべき」であり、現実の言葉をただ「記録」するのではなく、その魂の言葉を記録している点に、「政治や経済や学問などの社会的な言語、書き言葉として鍛えられてきた近代日本語（標準語、標準文体）に拮抗（あるいは凌駕）しうる文学の言語を」生み出したと評価した。「語り」の表現に注目したものとしては岩淵宏子「表象としての〈水俣病〉―石牟礼道子の世界―」[15]を挙げることができよう。『苦海浄土』の第三章「ゆき女きき書」や第四章「天の魚」は、当初「たんなる聞き書きと捉えられたり」、作家が「憑依して語ると解されたり」したが、「この絶妙な語りは」、「改稿によって内容的に凄みと深さが増した」ことを、「語り手の複数表記（「私」「わたし」「わたくし」）などから分析する。

二〇〇〇年代に入ると、自然、風景描写や環境問題、エコクリティシズムとの関わりで捉えた論が頻出している。結城正美「〈風土の肉声〉―石牟礼道子『苦海浄土』のサウンドスケープ」[16]、『苦海浄土』とともに『天湖』について論じた高橋勤「ことばの近代　石牟礼道子における文学と風土」[17]、「失われゆく世界の消えゆく記憶の中から喪失の痛みに耐えつつ紡ぎだされることばによって再構築される世界」として『椿の海の記』や『あやとりの記』などの風景描写を論じた松家理恵「石牟礼道子の魂と記憶の風景」[18]、風景を語ることで、埋もれた土地の記憶が継承されうることを論じた松家理恵「空間の経験としての風景：イーフー・トゥアンから石牟礼道子へ」[19]などがある。野田研一、結城正美編『越境するトポス―環境文学論序説』[20]には、石牟礼道子に関して、生田省悟「覚醒する〈場所の感覚〉―人間と自然環境をめぐる現代日本の言説」、結城

正美「環境文学のエコ＝ロジカルな試み―テリー・テンペスト・ウィリアムスと石牟礼道子を中心に」、ブルース・アレン／相原優子、相原直美訳「石牟礼道子『天湖』にみる多次元的世界」が収録されている。結城正美は、単著『水の音の記憶　エコクリティシズムの試み』[21]所収の「水俣、物語、希望　石牟礼道子『苦海浄土』を読む」において、石牟礼が方言にこだわるのは、「「言葉の汚染」にさらされるなかで活字社会が失ってきた」「関係性においてある個という存在の位相をあぶり出す唯一の方法であるから」と述べる。同書には、「風景のおとづれ　石牟礼道子『あやとりの記』と『天湖』を中心に」も収められている。

時代背景とテクストの関連を丹念に考察したものに、水溜真由美「石牟礼道子と水俣―ゆらぐ〈共同体〉像」[22]がある。高度経済成長末期の言説の一つとして『苦海浄土』を再検討し、水俣と「周辺世界のイメージの重層性を、石牟礼のテクストに内在する共同体的世界の相対化の契機として、同時に石牟礼の作品世界の豊穣さとして位置づけて」いる。石牟礼の諸著作にあるのは、「必ずしも「近代社会」と「伝統社会」、「中心」と「周縁」といった二項対立的な図式に回収される」世界ではない。石牟礼は「伝統的な共同体社会に対する批判的な視点を提起して」おり、「また漁民の共同体的世界が近代化・産業化の動きに根強く浸食されていたことに自覚的であったこと」を論じている。

『苦海浄土』三部作が完結したのは、二〇〇四年四月であった。金井景子は「「償い」を問う―「水俣病」と石牟礼道子『苦海浄土』の半世紀」[23]において、『苦海浄土』の全容が明らかになった現在、「「きき書き」文体の評価だけで『苦海浄土』を語り終わらぬ、新たな歩みを始めること」が重要だとした。水俣病問題に行政機関が示した施策が「一貫してチッソ寄りのものであった」ことを確認し、この「「償い」は問われ続けている」と論じる。

佐藤泉「『苦海浄土』のさまざまな「栄耀栄華」―「聞き書」の主体とはだれであるのか」[24]は、先鋭的なものである。六〇年代高度経済成長期を大きな転換点として進行した文化と文学の政治、「中央文壇の象徴闘争」を概観し、これまでの『苦海浄土』の「聞き書／私小説という分割、単なる記録／詩人による創造という分割」を、「「成長」と同じ平面に浮上してきたものとさえいえる」ことを示す。また、「声が交錯共鳴する場の総体を」、「私小説」と呼ぶ時、「それまでの「私」の尺度を超えるものとなって」いる。「人間的生と言語活動の集団性のレベルを体現し、そのためにこそ、「個人としての主体」を暗黙のモデルとする思考によって思考不可能のものとなる」。この観点で、これまでの「憑依や巫女性などの異能性や前近代という過去表象と結びつけるのではないやり方で読むことができるようになる」と述べる。これまでの、「巫女性」としての読みの呪縛を解く論といえよう。

浅野麗「石牟礼道子『苦海浄土　わが水俣病』への道―「水俣湾漁民のルポルタージュ奇病」から「海と空のあいだに　坂上ゆきのきき書より」への改稿をめぐる検証と考察―」[25]では、『苦海浄土―わが水俣病』の「サークル村」、「熊本風土記」に

発表された初出と、初刊の改稿に注目する。それまでの井上洋子論や、茶園梨加による学会発表[26]での改稿をめぐる先行研究に対し、改稿によって「〈水俣病〉および〈水俣病患者〉をめぐる言説がどう変わったのか、という歴史的検証に向けて、「どのような問題設定が可能になるか、その前提を整えるため」のものである。詳細な異同の確認と共に、「「言葉の協働」の仕組みを探っていきたい」とする浅野は、「《奇病》では存在せず《海と空》に現れる「私」に着目することで、〈聞くこと〉あるいは〈みること〉の出来る「私」の立ち位置をめぐる力学が浮き彫りになったと思われる」、と論じている。

第二節　問題設定と作品書誌

本章では『苦海浄土』が、共同性のなかで編まれた作品である点において再評価を試みたい。そのためには、いま再び『苦海浄土』の成立過程を確認する必要がある。前節で見たように、改稿過程を論じたものに、井上洋子（「石牟礼道子初期短歌のころ（四）―『苦海浄土』へ―」、「ガイア」一九九三年七月）であった。しかし、「石牟礼は「奇病」の改稿過程をとおして、患者に対する自己の立ち位置の修正を何度か行っているが、このことも詳しく検討されねばならない」[27]状況であった。さらに、浅野麗によって、改稿過程を踏まえたうえでの、「ゆき女聞き書」の「私」の立ち位置の読解がなされている。

このように改稿過程については、これまでの先行研究でも言及されてきたが、初刊で掲載されていた写真の問題など、考えておきたい問題点が依然存在する。作品が、文学かルポルタージュかといった二分法がなぜ問題視されてきたのか。それは、同時代における受容のなかでいかなる働きをもつものだったのだろうか。

『苦海浄土―わが水俣病』の初出は、一九六〇年一月に発行された「サークル村」掲載の「水俣湾漁民のルポルタージュ　奇病」と、一九六五年一一月から六六年一一月まで「熊本風土記」に発表された「海と空のあいだに」である。一九六九年一月に講談社より初刊が、一九七二年一二月に文庫が刊行された。二〇〇四年には、『全集』と『新装版　苦海浄土　わが水俣病』が刊行されている。

一九六〇年一月　「水俣湾漁民のルポルタージュ　奇病」、「サークル村」第三巻第一号

一九六五年一一月～六六年一一月　「海と空のあいだに」、「熊本風土記」

※「熊本風土記」新文化集団、一九六五年一一月創刊

「海と空のあいだに」が掲載されたのは、創刊号、第二号（六五年一二月）、第三号（六六年一月）、第四号（六六年二月）、第七号（六六年六月）、第八号（六六年七月）、第九号（六六年八月）、第一一号（六六年一一月）である。よって、石牟礼の「「熊本風土

記」創刊とともに稿をあらため、同誌欠刊まで、遅々として書きつづけられた。」（「あとがき」、『苦海浄土―わが水俣病』講談社、一九六九年一月）という記述と、渡辺の「昭和四十年十二月から翌四十一年いっぱい、私が編集した雑誌「熊本風土記」に連載された。」（「石牟礼道子の世界」、『苦海浄土―わが水俣病』一九七二年一二月）という記述には、若干の訂正が必要となる。終刊は第一二号（六六年一二月）であり、前号の第一一号が最後の掲載となっている。

一九六九年　一月『苦海浄土―わが水俣病』講談社

一九七二年一二月『苦海浄土―わが水俣病』講談社文庫
※ 渡辺京二による解説「石牟礼道子の世界」が加えられる。

二〇〇四年　四月『石牟礼道子全集・不知火』第二巻、藤原書店

二〇〇四年　七月『新装版　苦海浄土　わが水俣病』講談社文庫
※ 原田正純による解説「水俣病の五十年」が加えられる。

この他、『苦海浄土―わが水俣病』とテーマが類似するものとして、「舟曳き唄」[28]、後に『潮の日録』[29]に収められる「とんとん村」[30]、「松田富次君とラジオ」[31]、『日本残酷物語　現代篇Ⅰ　引き裂かれた時代』[32]の「水俣病」がある。本章では、単行本化に直接繋がっていく「奇病」「海と空のあいだに」を主に扱う。また本章では、断りのない限り「苦海浄土」本文の引用は、『新装版　苦海浄土　わが水俣病』（講談社文庫、二〇〇四年七月）に拠り、以下、『苦海浄土』と記すこととする。

第三節　物語の構成・語りの特徴

『苦海浄土』は医学資料や新聞記事などの資料と、登場人物の語りがほぼ交互に登場するという構成になっている。また、時間軸に沿って記されたものではない。このプロットをストーリーに並べなおすと、次の年表のようになる。作品の第三章、第四章では、人物の語りに多くの頁が割かれている。

一九五九（昭和三四）年
五月　坂上ゆきを見舞う
九月　安保条約改定阻止国民会議第七次水俣市共闘会議の様子
一一月　陳情と漁民暴動

一二月　三〇日　見舞金「契約書」締結

一九六三（昭和三八）年
　秋　山中九平を見舞う
　暮　桑原史成水俣病写真展

一九六四（昭和三九）年
　秋　江津野杢太郎一家を訪れる
　※　作品冒頭の語り手の位置

一九六七（昭和四二）年
　九月　二二日　園田直厚相水俣入り
　九月　二七日　新日本窒素江頭豊社長、患者家族訪問

一九六八（昭和四三）年
　一月　一二日　水俣病対策市民会議発足
　八月　三一日　新日本窒素第一組合「恥宣言」
　九月　一三日　水俣市主催　水俣病死亡者合同慰霊祭

語りの比重が大きい坂上ゆきと杢太郎と爺さまの部分を、作品のほぼ中心に据えなおしていたことが分かる。本来ならばあり得ない重病患者の伸びやかな語り（ゆき女）と、患者の家族（杢太郎の爺さま）の心情を酒で酔った自由な語りとして表現している部分は、読者の胸をうつ。この二つの部分が作品の核となっており、他の水俣病に関する歴史的事実が周囲に配置されている構成となっている。

第三章の「ゆき女きき書」の部分は、「サークル村」に発表した「奇病」と対応する。初出でルポルタージュと名付けられていた「奇病」では、そのほとんどが女性患者の語りである。この対象の語りを全面に採用している方法は、森崎和江の「スラをひく女たち」と類似している。第五章で見たように、「スラをひく女たち」もまた、その初出の一部が「サークル村」であった。掲載誌「サークル村」において集団創造としての聞き書きの方法が議論の俎上にあったことを考えれば、そのような掲載誌の特徴を反映しているといえる。

作者の石牟礼は作品の成立について、次のように述べていた。

本稿の一部は一九六〇年一月「サークル村」に発表、同年「日本残酷物語」（平凡社刊）に一部。後、続稿をのせるべく一九六三年「現代の記録」を創刊したが、資金難のため、チッソ安定賃金反対争議特集号のみに止まり、一九六五年、「熊本風土記」創刊とともに稿をあらため、同誌欠刊まで、遅々として書きつづけられた。原題『海と空のあいだに』である。[33]

『苦海浄土』は一九六〇年頃から一九六九年頃までに書き継がれてきたテキストである。この九年間のなかで、初出と初刊、文庫化に至る過程で、何が削除され、何が加えられたのか。

第四節　一九五〇年代の記憶の消去
―「サークル村」と「苦海浄土」

まず、「サークル村」発表の「奇病」と、それに対応している単行本「苦海浄土」第三章「ゆき女きき書」の比較をおこないたい。

初出「奇病」では、「熊本医学会雑誌」から引用された資料を挿入している。それには次のように記されている。

病例　第一例　杉田　28才女、職業漁業／発病年月日　昭和31年7月13日（「奇病」）

これが、単行本化の過程で、水俣地方の猫に関する資料に変わっている。

本症の発生ト同時ニ水俣地方ノ猫ニモ、コレニ似タ症状ヲオコスモノガアルコトガ住民間ニ気ヅカレテイタガ（後略）

『苦海浄土』（講談社文庫、一六一頁）

その代わりに、「熊本医学会雑誌」からの資料は、初刊、文庫版では、第一章「四十四号患者」のなかで使用されている。ただし、次のように、「病例」としてあがった人物の名が「杉田」から「山中」に変更されていく。

病例　第一例　山中、二十八歳女、職業漁業
発病年月日・昭和三十一年七月十三日

これは、第一章の主要人物である山中九平の姉さつきに関する資料として用いられていることから、作家が初刊として編むにあたり意図的に行ったものだと言える。また、初出、初刊ともゆきの年齢は「四十の方に近」いとなっていた。初出「奇病」の文脈を考えると、読者は坂上ゆきの語りに挿入される資料の「杉田」なる女性患者が、語り手と同一人物であるかのように読む。だが、記された年齢が異なることで、読者に混乱を与えかねない表記となっていた。

また、初刊で登場する坂上ゆきの解剖資料は、初出にはない。初出では離婚し旧姓の西方（にしかた）ゆきに戻ることはなく、死亡するところまで描かれていない。西方という名字は、さいほうとも読める。「西方」浄土へ行く、つまり初刊『苦海浄土』で初めて死亡したことが描かれるのである。

ゆきの語り自体も、初出と初刊では異なっている。以下の部分は、初刊では削除された部分である。

うちが気狂いのときはえらい騒動じゃったげな。ジェット機がきゅーんと行こうがな、もうおしまいたい。トラックの音でも駄目じゃった。くくられた手ば頭の上あげて、その手ごと頭を病室の隅に突っこんで、ぼろのせて、部屋の隅から出てきよらんじゃった。看護婦さんがなんぼ、もう大丈夫ちゅうても、出てくるもんな。ジェット機は一日一

ぺん通る訳じゃなかで、空襲のごたる気色じゃったつな。あの頃は朝鮮で戦争のありよったげな。雨の降る日はわりとジェット機通らんやろ、今度は荷物まとめたい、水俣帰るけん、五百円はいよー五百円はいよーち泣きながら寝巻びりびりひきさいて、トランクくくって、舟にのるちゅうて、じいちゃんにせがみよった。トランク隠すと、隣のベッドの自動車トラックおっとって、大学病院の廊下ば綱つけて行ったり来たりしよった。（「奇病」）

「ジェット機は一日一ぺん通る訳じゃなかで、空襲のごたる気色じゃったつな。あの頃は朝鮮で戦争のありよったげな。」というように、朝鮮戦争の記憶が語られている。

うち達はときどきどこそこから見舞ばもらうとばい。会社の労働くみやいの人達も見舞ばくれらした。もんに有難かこつち思うとると。そるばってん妙な気がするとばい。こげん世間が会社の廃液じゃなかろかち騒ぐようになっても、会社側の人達はうち達の有様ばまだ一ぺんも見に来らっさん。（略）奇病のもんな、金もらうげな、国からもらい、会社からもらいするなら、替わって奇病になろうごだる、ちいうお人もあるげな。ほんなこて、替わって奇病になろうち思うとらすやろか。幽霊の手つきして両手さし出して震える真似して、飼い殺しは良かばい、ちいうて、ほんなこて奇病になっても良かち思うとらすとやろか。

ここでは、会社に対する批判の言葉が綴られている。語り手は「うちの最初の亭主も戦死じゃった。二番目は炭坑で、びっしゃげて死んだ。あそこは毎日ごろごろじゃろ。三番目はうちらにまわってきた。人間の元値は下るばっかいたい。」と、炭坑に言及してもいる。これら、戦争や炭坑、水俣病患者としての会社への思いは、次のように綴られていく。

戦争で死ぬとも、炭坑で死ぬとも、ふつうのことじゃもん。奇病で死ぬとも仕様んなかとじゃろか色々おもうばい。会社の社長さん達がふつうの病気で死なしても新聞に太か棒ば引いてしらせてある。うち達は猫と一緒じゃばってん、死んだ死なんは問題じゃなか、多勢で見物に来て、親兄弟にも見せとうなか恥かしか有様ば立ってみろ、座ってみろ、歩いてみろちゅうて、かあっとなるのを、写真に撮って、奇病になってどんな御気持ですか、ちよそ行き言葉で云われてピカピカ光るマイクさしつけられても、馬車で曳きされん程の胸の内のひと言もいえやせん、よけい痙攣が見苦しゅうなるばかりたい。漁民が乱暴した炭坑が騒いだちゅうて悪人あつかいじゃが、よう考えて見ればそげな風になるようわざと誘いこんでから取りあげるのは、四方八方からだまし打ちに合いよるような気のしてくるとばい。

朝鮮戦争の記述は、一九五〇年代半ばの炭鉱労働者によるサークル誌で頻繁に登場していたものと共通する問題意識である。この、炭坑についての記述では、坑内事故など、詳細な記

述が多い。同時に、マスコミや企業に対する批判の言葉が頻出する。坑内で働く者たちに突きつけられた不条理。それは、死と隣り合わせの労働を考えたときに、その命の重みを軽視するかのような会社側（資本）の対応であった。一九五八年には、筑豊炭田の失業者数が約七〇〇〇人に達するほど、石炭産業は斜陽化し、中小炭坑を中心に閉山に追い込まれていった。そのなかで、働く者たちは職場を失い、自らの存在価値を改めて問い続ける日々が続いていた。

こうした坑内労働者をめぐる状況は、水俣病患者の境遇と重なる部分がある。会社側から命の価値を「見舞金」としてランク付けされ、充分な補償金、謝罪が受けられない現状。原因究明を怠り、隠蔽し続けた月日を考えると、命の価値が軽視された炭坑労働の実情と類似する。そこからは、石牟礼や上野が語った「棄民」という言葉が浮かんでくる。

「奇病」は、同時代の労働と公害を巡る問題を見事に読み合わせ、共に考える磁場を作り得た作品である。つまり、もともと炭坑労働者によるサークル運動を母体として創刊されたのが「サークル村」であった。そのような掲載雑誌の意図に沿った内容となっていること。そして、「奇病」を読むことで、同人たちは自らの周囲の問題が、他者の問題と接続する契機を与えられる可能性をもっていたことが分かる。

だが、単行本として編むにあたり、水俣病患者であるゆきが、炭坑労働や企業批判を饒舌に語る部分は削除されていく。このことをどのように考えれば良いのだろうか。

ゆきの語りが変化したと同時に、その語りを支える枠組みもまた変化していた。「奇病」では医学資料の後に、「ここではすべてが揺れている。ベッドも天井も床も扉も、窓も、窓、窓の向うの山もそれは揺れる気流だった。」と、ゆきの病室の描写から物語が始まる。しかし、それが単行本では、「三十四年五月下旬、まことにおくればせに、はじめてわたくしが水俣病患者を一市民として見舞ったのは、坂上ゆき（三十七号患者、水俣市月ノ浦）と彼女の看護者であり夫である坂上茂平のいる病室であった。」とあるように、坂上ゆきを「わたくし」が訪問する過程が描かれるようになる。

石牟礼は、イバン・イリイチとの対談で次のように述べている。

> 『苦海浄土』では、その世界を書くことによって、私自身も水俣病そのものを追体験したわけです。人類がはじめて体験した、誰もしなかった体験でしたし、このことを徹底的に考え、作品を書くことによって人類の終焉・終末、人間の心の衰滅をみました。被害民たちをとり巻く情況の中にそれがよくみえました。そして、終末のただ中に置かれていても人間というのはなおかつ荘厳であるということを知りました。[34]

石牟礼は、水俣病を書く作家である一方で、補償闘争、水俣病闘争の実践運動にかかわる自身の立ち位置を模索していた。作品を書くことで作家は、「人類の終焉・終末、人間の心の衰滅」を感じると言う。石牟礼が主観的に語るこれらの創作過程

での気付きは、共感できうるものである。しかし、そういった作家の言葉の一方で、改稿過程を追うことでどのようなことが可視化できうるか、を考える必要があると考える。石牟礼の言葉を借りれば、私達読者自身が作品を通して、水俣病を追体験する必要がある。作家が「追体験」というものがどのような変遷をたどっていくのか、もう少し見ていきたい。

第五節　「熊本風土記」と「苦海浄土」

では、もう一つの初出である「海と空のあいだに」と初刊の違いは何であったか。

初出掲載雑誌「熊本風土記」の編集は、渡辺京二が担当していた。渡辺は「海と空のあいだに」連載について、「なお、文庫版解説で私は「作品はほぼノートの形ですでに書き上げられていて、彼女は締切りごとにそれに手を加え原稿化しているのだと推察した」と書いているが、これは私の推察が誤りで、「ゆき女きき書」の部分のほかは、締切に追われての全くの新稿だった由である。」[35]と語っている。この、ほぼ毎月書き継がれていく連載と、初刊の対応を次に確認したい。初刊の第四章までに対応している。「→」以下が対応する初刊の箇所である。

・「海と空のあいだに」第一回
（創刊号、一九六五・一一）
→　第一章　椿の海　山中九平少年

・「海と空のあいだに」第二回　ある老漁夫の死
（第二号、一九六五・一二）
→　第一章　椿の海　死旗

・「海と空のあいだに」第三回　昭和三四年一一月二日朝
（第三号、一九六六・一）
→　第二章　不知火沿岸漁民　舟の墓場／昭和三四年一一月二日（途中まで）

・■「海と空のあいだに」第四回　昭和三四年一一月二日のこと　（第四号、一九六六・二）
→　第二章　不知火沿岸漁民　昭和三四年一一月二日（第三回の続きから）／空へ泥を投げるとき（途中まで）

・■「海と空のあいだに」第五回　坂上ゆきのきき書より
（第七号、一九六六・六）
→　第三章　ゆき女きき書　五月／もう一ぺん人間に（途中まで）

・■「海と空のあいだに」第六回　坂上ゆきのきき書より（承前）　（第八号、一九六六・七）
→　第三章　ゆき女きき書　もう一ぺん人間に（続きから）

・「海と空のあいだに」第七回　海底の神々
（第九号、一九六六・八）
↓　第四章　天の魚　九竜権現さま

・■「海と空のあいだに」第八回　海底の神々　その二
（第一一号、一九六六・一一）
↓　第四章　天の魚　海石

ここで注目したいのは、「海と空のあいだに」で写真が掲載されていたことである。■を付けている回が、写真掲載のあった部分である。掲載写真は、いずれも桑原史成による一九六五年に刊行された『写真集水俣病』[36]からの転載であった。

第四回　「胎児性水俣病、首がすわらず歩けない」
第五回　（夫婦で漁をする写真）、説明なし、典拠のみ
第六回　「水俣病患者の手」
第八回　（食事中の家族、老人と少年）、説明なし、典拠のみ

連載第四回掲載の写真には、典拠と「胎児性水俣病、首がすわらず歩けない」というキャプションが付されている。第五回では、ゆきによって、夫婦での漁の様子が語られることから、それに対応した写真が掲載される。第六回目では、典拠とともに、「水俣病患者の手」というキャプションが付けられている。杢太郎と爺さまの話が記された第八回には、典拠のみのキャプションと、食事中の家族、老人と少年の写真が挿入されている。

桑原のその後出版された写真集を参考にすれば、第八回以外は作中人物のモデルの写真ではない。だが、水俣で撮られた桑原の写真を掲載しているこの連載は、水俣病の被害の様子を伝えるためのルポルタージュとしての要素が強い構成となっていた。

第六節　「ルポルタージュ」から「文学」作品へ

これまで、「奇病」に記載され、後に削除された主な箇所として、①朝鮮戦争の記憶、②会社（チッソ）批判、③炭鉱の労働の記憶、④マスコミおよび企業、社会批判があった。これらは、「奇病」が発表された「サークル村」の意向に沿ったものであった。さらに、それらの箇所が削除されることによって、漁師としてのゆきが前掲化され、そのことによって、より水俣の漁師としての共同性を憧憬する作品となったといえる。

さらに、「海と空のあいだに」では桑原の写真、そしてキャプションが付されることにより、よりルポルタージュとしての要素の強い構成であったことを述べた。

こうした初出から初刊への変更は、その帯にも反映されている。一九六九年一月の一刷の帯では、「水俣病の悲惨と荒廃を直視　海底より湧く声なき声のうめき　人間性のきらめきを捉える／この恐るべき現実！／いわれなき死を宣告され　未だ紺碧の不知火海に立ち迷う漁民たちの霊にかわり　怒りと鎮魂の

祈りをこめて　現代の恥部〈水俣病〉の真相を明かす凄絶な記録！」と記されていた。それが、六刷となると、「全マスコミ絶賛！現代日本の恥部を抉る話題の傑作ノンフィクション！／公害を告発する注目の書／人間の生命に加えられた耐えがたい汚辱―公害という名の恐るべき犯罪への怒りと祈りをこめた告発の記録！」に変えられる。また、一〇刷では、「全国から憤怒と感動の便り殺到！／水俣の実態と怨念を伝える痛恨の記／公害を告発する衝撃の書／（※以下、六刷後半部分と同一）」という変遷をたどる。一刷から六刷への移行にともない、帯裏の文章も変化している。六刷では、第一回大宅壮一ノンフィクション賞選考委員のことばが掲載されるようになっていた。「開高健氏＝患者と添寝せんばかりにして九州方言の話しことばで書きつづった部分に抜群の迫力がある。／臼井吉見氏＝（略）ノンフィクションの本格的な秀作だ。」といった評価が記されている。つまり、これらの選考委員のことばに呼応するように、表面の文句も変化したのである。

しかし、帯の言葉に共通するのは、「現実」や「真相」、「記録」、「ノンフィクション」「実態」「告発」といった言葉である。それは、虚構を含んだ文学作品としての性格とは程遠い言葉であった。では、これらの評価はなぜ記され、受容されたのか。

そこには、初刊に写真が掲載されたことが深く関わっている。桑原史成による二三葉の写真である。これは初出「海と空のあいだに」よりもはるかに多い枚数の写真が載せられたのである。写真にはいずれもキャプションが付けらている。例えば、「山中九平少年」、「煙草をふかす坂上ゆき」、そしてゆきのモデルとなった人物の痙攣発作が撮られた写真、「爺さまと杢太郎」の写真などである。初刊刊行の四年前、桑原は『写真集水俣病』のなかで、ゆきや杢太郎のモデルとなった人物を写真に収め、解説では、実名を記していた。つまり、写真集が刊行された一九六五年には、川上タマノという実名で写真を撮られた人物が、一九六九年の『苦海浄土』初刊では、作中名の坂上ゆきとしてキャプションをつけられ、読者に提示されたのである。

読者は作中の人物名が付された写真の人物を、登場人物と同一化しながら読む。そのうえで、人物の聞き書きが読み進められる。人物の語りは、写真の人物本人がそのままを語ったかのように受容されていく。たしかに、写真が掲載されれば、水俣病患者の生活の実態を画像で確認することができ、水俣病被害をより「正確に」伝えることが可能となる。しかし、物語とともに掲載されていることを考えると、人物のイメージが固定されすぎてしまっていると言えるのではないだろうか。

一九七二年の文庫化にともない、写真はすべて削除されることとなった。石牟礼は、次のように述べている。

> 第一部は、改稿の時間的ゆとりのまったくないまま出版の運びとなり、以来そのことがかなしくて、恥じ入ることこの上もなかったけれど、このたび装をあらため、文庫本にして下さるに及び、心地悪かった箇所をいくらか手直しできる機会をえた。[37]

桑原の写真削除については明記されていない。また、そもそ

も初刊にも桑原への謝辞がないことから、写真掲載、キャプションを付記したことは出版社の意向だと推測できる。

この、実在する人物／創作上の人物と、作家、そして読者の距離の取り方はいかにして成されていくのか。写真が初刊で掲載された人物の一人、坂上ゆき、実名村野、旧姓川上タマノについて他資料を交え確認したい。

村野タマノは、一九七〇年一一月一四日にＲＫＢ毎日放送にてテレビ放送された『苦海浄土』に登場した。ディレクターは、森崎和江の「まっくら」をもとに番組を作成した木村栄文である。石牟礼自身も原作者として参加、画面上に登場する。台本を見ると「うちとけた村野さん　笑顔で御前と語り合う　苦しい歳月に耐えてきて、ふかい情感をたたえ、その表情、つきぬけた明るさ」と説明が記されている[38]。村野はその他に、ＮＨＫの番組にも登場した人物である。水俣病の原因が新日本窒素による排水だと政府見解が出される前の一九五九年一一月二九日放送の「日本の素顔　奇病のかげに」や、タマノに焦点を当てた「村野タマノの証言」といった番組がそれである。

メディアに登場していたタマノについて、作家は作品以外のところで言及していた。一九七六年八月に村野が亡くなった際に、水俣病を告発する会発行の機関紙「水俣―患者とともに」に、次のように寄稿している。

「水俣に嫁にくる、ずっとずっと前、炭坑の坑道を上ってみたら夜があけていて、その朝あけの青い空に「Ｂ29のなあ、まっ白かＢ29が、えらいしこの数、飛んでゆきよってなあ、もう、きらきらきらきら光って、美しかも美しか。バクダン落とし来よるちゃ、とても思われんかった。炭坑ん、穴ん中から、這いあがったばっかりやったき」／（略）／なんだかおかしそうに笑っているうちに涙がにじみ、彼女は、何事かに耐えていた。水俣病だけではないすべてに。」[39]

ここでは、村野タマノの人となりが紹介されていく文脈で炭坑で働いていたという記述が登場している。かつての炭坑の記憶を回想する部分は、先に確認したように初出「奇病」の語りと類似する。その部分は、まさに「村野タマノ」本人の語りとして存在した部分だったであろう。しかし、改稿をとおして、炭坑の語りは削除され、村野タマノは、坂上ゆきの語りとして再構成されたのである。

しかし、初刊で実際の川上タマノの写真を掲載し、「坂上ゆき」と解説が付けられれば、作品として大きな矛盾が生じる。初刊から文庫化の改稿過程で桑原史成の写真が削除されていく。このことは、「苦海浄土」がルポルタージュではなく、虚構を含んだ作品として受容されるために重要なプロセスであったのである。そのように考えると、以後たびたび引用されることとなった渡辺京二の次の言葉は、別の意味を持って響いてくる。

はたして、本書が講談社から発行されると、世評はにわかに高く、その年のうちに第一回大宅壮一賞の対象となった。

彼女はそれを固辞したが、そのことがまたジャーナリズムの派手な話題となった。しかも、時は折りから公害論議の花ざかりである。『苦海浄土』はたちまち、公害企業告発とか、環境汚染反対とか、住民運動とかという社会的な流行語と結びつけられ、あれよあれよという間に彼女は水俣病について社会的な発言を行なう名士のひとりに仕立てられてしまった。『苦海浄土』がジャーナリズムの上で評価されるだろうことを疑わなかった私にしても、こればかりは予想の外に出ることであった。（略）／石牟礼氏はこのような事態の展開（茶園注―その後続いた水俣病をめぐる裁判闘争のこと）に、つとめてよくつき合って来たといってよい。それは彼女の責任であったわけであるが、そういう経過の中で、彼女にある運動のイメージがまとわりつき、彼女の著作自体、公害告発とか被害者の怨念とかいう観念で色づけして受けとられるようになったのは、やむをえない結果であった。／しかし、それは著者にとってもこの本にとっても不幸なことであった。そういう社会的風潮や運動とたまたま時期的に合致したために、このすぐれた作品は、粗忽な人びとから公害の悲惨を描破したルポルタージュであるとか、患者を代弁して企業を告発した怨念の書であるとか、見当ちがいな賞讃を受けるようになった。告発とか怨念とかいう言葉を多用できるのは、むろん文学的に粗雑きわまる感性である。それは文句なしにいやな言葉であり、そういう評語がこの作品について口にされるのを見るとき、その誕生に立ち合ったものとして、私はやりきれない思いにかられる。本書が文庫という形で新しい読者に接するこの機会に、私は、本書がまず何よりも作品として、粗雑な観念で要約されることを拒む自律的な文学作品として読まれるべきであることを強調しておきたい。／実をいえば『苦海浄土』は聞き書きなぞではないし、ルポルタージュですらない。ジャンルのことをいっているのではない。作品成立の本質的な内因をいっているのであって、それでは何かといえば、石牟礼道子の私小説である。[40]

渡辺は、その「作品成立の本質的な内因」として『苦海浄土』が聞き書きでも、ルポルタージュですらなく、私小説なのだ、と断言している。仮に、現在一般的に考えられている聞き書きやルポルタージュの方法を採るならば、人物の語りが大幅に変更されることは考えられない。だが、「ゆき」の語りは、初出での朝鮮戦争や、炭鉱労働に関するものが削除されていくのである。それらは、石牟礼が先の引用「八月の海の道　村野タマノさんを悼む」で綴っているように、おそらくモデルとなった村野の実体験であっただろう。だが、削除されてしまえば、初刊（第四章）の語り手「ゆき」はもはや村野（川上）タマノの聞き書きでも、ルポルタージュでもない。石牟礼が事実を元に創作した「ゆき」という人物である。しかし、ここでの大きな矛盾は、そのような創作の人物であるにもかかわらず、初刊では実際のタマノの写真が使用されている点である。初刊での『苦海浄土』の位置は、一つの表現としてバランスを欠いていると言わざるを得ない。

ゆえに、以降、桑原史成の写真が掲載されないテキストが流通したことは、作品にとって「幸いなこと」であっただろう。つまり、渡辺の言葉を借りるなら、初刊が「著者にとってもこの本にとっても不幸なこと」であった。だが留意したいのは、渡辺が「不幸な」理由を「公害告発とか被害者の怨念とかいう観念で色づけして受けとられるようになった」ことに見ている点である。果たしてそうであろうか。

ここでの渡辺の言葉には、「文学」作品をルポルタージュ作品よりも高尚なものとして位置づける思いが垣間見えるのではないか。ある意味それは、論者をも含んだ読者の一種の願望を表す言葉である。だが、そうではなくて、むしろ理由となるのは、実際の患者達の写真が掲載されていたこと、ひいては帯の宣伝文句においてルポルタージュとして提示されることで、初刊はバランスの欠いたものとなっていたことに、その「不幸」の理由があったのである。

終

章

論者はこれまで、「サークル村」と、その周辺のサークル誌に発表された文学表現を読むことで、サークル運動と、そこに現れた表現の関連を明らかにすることを目的として論じてきた。他の先行研究が存在する中で、それでも論者がサークル運動について研究する理由は、集団と文学活動（書く行為）への強い関心があるからである。一九五〇年代から六〇年代に北部九州におけるサークル誌は、炭鉱を主とする土地に根ざした産業との関わりの中で、発刊されていた。論者には、土地の記憶が物語・ルポとして生成される場への強い関心がある。個人の行為として捉えられることの多い書く作業が、労働・生活の場で、集団の中で行われていたことに着目し研究を行ってきた。

第一部「サークル運動における文学の役割」では、三つの地域におけるサークル運動について論じた。第一章「日炭高松におけるサークル運動」では、「サークル村」創刊の母体となった日炭高松の文化運動を取り上げた。日炭高松には、主に①会社側が発刊した機関紙「日炭高松」、町役場の「広報水巻」、②公民館で行われていた句会や「文芸教場」、「蟻塚」、③労働組合のもとで作られた機関紙や、「労働藝術」から「月刊たかまつ」（「文芸誌たかまつ」）にいたるサークル誌が存在した。①②の一方で、③においては労働者自身がガリを刷って雑誌をつくり、他の文化サークルや、他地域のサークルとの交流を行っていた。そして、その交流が手紙の紹介、サークル誌の紹介、うたごえ運動での交流、他の炭鉱についてを題材としルポルタージュを書く、そして、問題を共有する、というように、徐々に交流の密度が深まっていったことが誌面から判明した。日炭高松の問題から、他の地域の問題へと繋がっていたことが分かる。特に③は、そのほとんどがガリ版刷り（謄写版、謄写印刷）のものであった。つまり、機関紙やサークル誌は、一方でガリ版という印刷方法に支えられていたことも忘れてはならない。これらのサークル誌ではたびたび「手紙」が紹介されていた。そこにはつねに読者が居り、応答があったのである。書き手が想定する読者は、同じ職場の労働者や家族たちであり、また他の地域の労働者、ときに職種の異なる労働者たちが主であった。サークル誌の交換によるサークル間交流のなかでは、名も無き書き手ではなく、名前を持った「作家」たちがいたのである。そこには、文学を分かち合う仲間が居り、作品が往還する場があった。各々の作品は暗いものであったり切迫した実情を描いたものもあるが、雑誌全体の印象からは、集団が閉じられたものではなかったことが分かる。それは手紙があり、通信があり、他サークルとの交流があり、開かれた空間があったからである。人と人との往還が、文化運動にとって大きなエネルギー源となっているといえるだろう。

第二章「文学サークルの展開と、その表現―「山田文学」の場合」では、山田文学サークルのサークル誌「山田文学」について論じた。「山田文学」は、三池闘争以降、広く歌われるようになった「がんばろう」を作詩した森田ヤエ子が所属していた文学サークルであった。森田や、おなじく同人であった詩人・木村日出夫は後に「サークル村」に参加するようになる。誌面に発表された詩作品は、故郷である筑豊の描写や、炭鉱労働の現実、さらには米軍による占領についての思いを綴ったもの

などが掲載されていた。なかには表現が単調であり、「炭鉱」を描く際の典型を超えるものではない作品もある。だが、武田武や木村日出夫の詩作品にみたように、炭鉱労働を描く際の典型を超える作品が確認できる。それらは、自らが炭鉱労働を引き受けて現実を乗り越えようとする言葉であった。そのような個々の活動を、サークル全体の向上へと繋がるよう、座談会、合評会を開催し議論を行っていた。「山田文学」が目指していたものは、労働組合の機関誌でも、商業誌でもなく、飽くまでもサークル誌としての活動であった。だが、「山田文学」は、労働組合幹部の批判ととれる文章を掲載したことにより、発行禁止となり、終息に至る。この、会社や労組とサークル間の軋轢は当時のサークル運動の特徴の一つであった。

第三章「労働運動のなかの文学―三井三池と文化運動」では、戦後労働運動におけるメルクマールとしての三池闘争を対象とした。三池における文化運動の諸相を踏まえながら、なぜ、「サークル村」に三池の労働者が参加していないのか、という点を端緒とし、三池内部と外部でどのように闘争が語られていたのかを論じた。第二章で「山田文学」を対象として考えた、サークルと労働組合との関係、軋轢について引き続き考察した章である。三井三池炭鉱においても文学サークルの痕跡は確認できる。特に一九五二年から五五年にかけては、サークルにおける表現の在り方として例えば朗読詩が創作されたように、集団創作が一つの鍵となっていた。また、労働組合の機関紙でも、うたごえ運動それ自体や、うたごえを題材とした創作の掲載をとおして集団としての表現のあり方を模索している。機関紙の特徴としては、例えば機関誌「みいけ」では、野間宏、佐多稲子の寄稿や、彼等が三池を訪れた際の記事が散見される点である。この、新日本文学会所属作家との対話をとおして、地元の文化運動家たちが活動に一層奮起したことが推察できる。佐多の言葉[1]に見たように、集団で創作活動を行う文化運動は、「自分というものが」「全体」との関係で広く正しくつかまれてい」なければ、破綻をきたすものであった。集団での創作活動の過程で必要とされたものは、「読み上げる」作業である。指名解雇反対闘争が「自分というものがここでは全体との関係で広く正しくつかまれ」ることを要したように、集団創作自体も個人と全体との関係を正確につかむことが必要とされた。当時、針生一郎が述べたように[2]、活動家層の基底に存在する、自らの思いを十分に論理化しえない多くの人々のエネルギーをいかに組織として止揚できるか、といった問題があった。そのためには具体的文化運動のプログラムが必要とされており、集団内部の矛盾をも抽出すべきと指摘されていた。つまり、自分たちの集団内部をも批評する力こそが必要であったといえるが、それは谷川雁が「ミイケはどこへ行ったか」[3]において述べたように、自分の所属する集団内部をも批評する力こそが必要とされていたのである。労働者たち自身による文化運動は、三池闘争のなかで労働組合に吸収されるかたちで存在していたのである。そこでは集団創作の方法が探られていると同時に、組織と個人の問題が未解決のまま存在していた。

以下の「第二部　サークル運動の内と外」では、集団としての創作という問題意識を内面化している具体的なあらわれとし

て、上野英信、森崎和江、石牟礼道子の作品を取り上げた。対象とした作品は、他者の主体を代行するかたちでの創作手法を採ったものである。

第二部第四章「上野英信「あひるのうた」におけるサークル運動と朝鮮人」では、上野英信による短編「あひるのうた」の分析をもとに、炭鉱とその周辺に存在した「アリラン租界」の関係、ひいてはサークル運動と朝鮮人問題について明らかにした。サークル誌に朝鮮人たち「他者」の存在が稀薄であることが当時の国民文化運動の特徴と繋がることを提起した。「あひるのうた」では、「アリラン租界」は炭鉱の周辺に位置し、炭鉱で働けなくなった朝鮮人と日本人が住んでいる場所として設定されている。「あひるのうた」が炭鉱内のサークル誌に発表されることを考えると、他の同人や読者からすれば自分たちの生活とは異なる空間が描かれており、読んだ者はある種の違和感を抱いただろう。当時、「祖国」や「国民」という言葉を用いて文化運動が行われていた状況を考えると、その想像の共同体から否応なく排除される在日朝鮮人の存在が立ち現れてくる。日本における在日朝鮮人運動は、日本共産党の指導の下にあったが、一九五五年の日本共産党の方向転換によって、「単一民族」への闘いへと転換していった。朝鮮人労働者の存在が結果的に前景化されえない国民文化運動の革新ナショナリズム的側面であったといえる。

紙芝居の小母さんが朝鮮人たちへの報復として紙芝居を今後見せないという手段をとるのは、「平和のうたごえ」とともにやってくる紙芝居＝「文化」を内にのみ提示する、つまり朝鮮人たちとの共有を拒む態度と読みとれることを指摘した。ツネは、「アリラン租界」に住む人々とは喧嘩をするが、炭鉱内の者とは決して喧嘩をすることはない。紙芝居をみせないことで、繋がりが無くなるのはむしろ「アリラン租界」と炭鉱内部との関係なのである。このような問題を抱えた物語が炭鉱内部のサークル誌に掲載され、労働者やその家族に読まれる時におそらく生じる、自分たちの姿が描かれていないという感情は、新たな「断層」の発見ともなりえたはずだった。上野英信が「あひるのうた」のなかで提示したのは、衝突することで統一を生むという後の「サークル村」の理論にも通じる、一つの集団の在り方だったといえるのである。そのような意味において、「あひるのうた」はサークル誌に掲載された作品ではあるが、同人達の生活、サークル運動の外に、目を向けよと訴える作品とも言えるのである。

第五章「森崎和江作品にみる聞き書きと詩―「まっくら」と「狐」の関連から」は、森崎和江の作品を対象としたものであった。同時代に「見事な観察者の目によってとらえられた、すばらしい記録」（河野信子）といわれた『まっくら』は、「サークル村」「無名通信」に初出を発表、聞き書きのかたちをとる。森崎の創作全体を見渡すためには、聞き書きとテーマを共有する詩作品の関連をみる必要があった。そこで研究の新たな試みとして、聞き書き『まっくら』とダイアローグ型の詩「狐」との類似性を指摘し、森崎の、対象との距離の取り方を考察した。森崎にとって聞き書きとは、学問的方法が確立されたものとは違う。話し手と場を共有することから始まる対話の一形態であ

った。聞きとったものをいかに編み直し、文字化するかは、聞き手の判断に委ねられる。その際、聞き手の立ち位置や自己の姿が唯一の物差しとなる。他の誰でもない話し手が、炭鉱での労働や生活をいかに、いま、ここで語るのか。聞き書きの場を共に創ったこの緊張感を引き連れて、聞き手は文字化する。「無名通信」の座談会で確認できたように、同人間の対話が、「まっくら」での聞き書きの方法や、詩「狐」の表現に影響を与えていった。その方法は、違う立場の人間が、対話し、分かり合う、という安易な結末を導くものではない。「狐」の桐江と伯母が分かり合えないこと、「まっくら」で元女坑夫と書き手である森崎が一致していないことは、単一の表現者としての主体を解体し、複数性での表現を可能たらしめている。更に、再刊の過程で作品を改稿し続けたことは、その時々の自分自身をも、複数性の一要素として織り込んでいく行為であったといえる。一九六〇年代の森崎の「対話」を軸とした表現のあり方は、聞き書き、詩、散文のかたちをとり、展開されていった。「まっくら」「狐」『第三の性』を一連の女性対話の作品群として捉えることができる。『第三の性』での新たな到達点は、これまでの女性の多様性という問題意識を保ちながらも、さらにその地点から脱却する。「何もない」ことを肯定的に捉えなおす思考の転換は、『第三の性』では、表現方法を掴む女の姿を描くことに新たな可能性を見出したところにあった。

第六章「石牟礼道子『苦海浄土―わが水俣病』成立の過程」では、第五章で採用した改稿の作業を石牟礼道子の「苦海浄土」において考えたものである。前章で考察した、初出雑誌と後の単行本への改稿の問題を、作家個人の表現活動の変容のなかで考えるのではなく、発表媒体の変化と、一つの作品として世に発行される際の問題として捉えることを試みた。「サークル村」の存在がいかに石牟礼道子の創作過程に影響を及ぼしたのか、その過程を明らかにした。初出「奇病」に記載され、後に削除された主な箇所として、①朝鮮戦争の記憶、②会社（チッソ）批判、③炭鉱の労働の記憶、④マスコミおよび企業、社会批判があった。これらは、「奇病」が発表された「サークル村」の意向に沿ったものであった。さらに、それらの箇所が削除されることによって、漁師としてのゆきが前掲化され、そのことによって、より水俣の漁師としての共同性を憧憬する作品となったといえる。さらに、「海と空のあいだに」では桑原の写真、そしてキャプションが付されることにより、よりルポルタージュとしての要素の強い構成であったことを述べた。また、後に文庫化に伴って掲載される渡辺京二の解説（「私小説」として評価したもの）がいかにして成り立ったのか、ひいては後の評価がいかに成り立ったのかを考察した。

本章以降に掲載している資料編は、まず、A「『月刊たかまつ』解題・総目次」である。これは、第一章で論じた日炭高松のサークル誌「月刊たかまつ」の解題と総目次である。上野英信が中心同人であった「月刊たかまつ」は、後に「サークル村」刊行の母体となった雑誌である。総目次データベース化により、雑誌の変遷を明らかにしている。次に、B「『山田文学』目次」は、第二章で論じた山田文学サークルのサークル誌「山田文学」の目次である。最後のC「『辺境』・『兄弟』解題・総目次」は、

井上光晴が編集代表であった雑誌「辺境」とその後継誌「兄弟」の総目次と、解題である。「辺境」は、上野英信、山口昌男、森崎和江、石牟礼道子、三島由紀夫、永山則夫、埴谷雄高などが執筆している。誌上では戦後日本が抱えた、戦争責任、公害、差別などの問題を取り扱っており、それらが文学の問題領域でもあったことが指摘できる。一九五〇年代の戦後文化運動との繋がりが確認できる、その後の雑誌として取り上げている。

今後の課題として、戦後文化運動、サークル運動で捉え切れなかった事象をいかに言説化できるかという問題があると考えている。その一端を、資料編で紹介する「辺境」・「兄弟」が担ったとも言えるだろう。「辺境」・「兄弟」は、一九七〇年代に水俣病、土呂久ヒ素公害、在日問題、基地問題、戦争責任などを問いながら、五〇年、六〇年代に捉えられなかった事象を前景化している。

第二部で取り上げた上野英信、森崎和江、石牟礼道子については、今後も様々な観点から捉え直すことが可能となるだろう。七〇年代の上野は、筑豊・炭鉱を軸としながらも、その外へと関心が移っていった。南米へ移住した坑夫たちを訪ねて南米へ行き纏めた『出ニッポン記』（潮出版社、一九七七年一〇月）、沖縄の山入端萬栄の足取りを追った『眉屋私記』（潮出版社、一九八四年三月）。そして丁度、『眉屋私記』と同時期に刊行が開始された、趙根在との共同監修『写真万葉録・筑豊』（葦書房、全一〇巻、一九八四年四月～八六年一二月）がある。五〇年代から書き続けてきた対象としての「筑豊」を、さらに広い視野で見、捉えなおす作業が上野の晩年であったといえる。七〇、八〇年代での各仕事を踏まえた上で、再度、五〇、六〇年代の仕事を捉えてみたい。

森崎和江については、第五章の最終節で触れたように『第三の性―はるかなるエロス』（三一書房、一九六五年二月）について考察を続けたいと考えている。その延長線として『からゆきさん』（朝日新聞社、一九七六年五月）を捉えてみたい。同時に、引き続き森崎の詩作品について、エッセイやテレビ脚本など他ジャンルとの関連をもとに、評価の捉え直しを行う必要も感じている。

石牟礼道子の《苦海浄土》は、第六章でも述べたように東日本大震災による福島第一原子力発電所の事故後改めて注目されている。《苦海浄土》のもつ物語の強度を今後も検討し続けていきたいが、他の作品、特に島原・天草ものとの関連も同時に視野に入れて考察を行っていきたい。というのも、石牟礼は、一九七一年一二月に川本輝夫をはじめとする水俣病未認定患者とともにチッソ東京本社に籠城した際に、島原・天草の乱を題材とした「春の城」執筆を思い立っているからである[4]。また、「島原の原城といえば、私にとってはただならぬところである」[5]とも述べている。石牟礼には近年の文芸誌発表作として、島原・原城跡が舞台の「戯曲　沖宮」（「現代詩手帖」二〇一二年一一月）と「戯曲　草の砦」（「文芸」二〇一二年一一月）がある。これらの作品が口述されることを前提とした戯曲であることは、本論で取り上げた朗読詩や森崎の放送詩「狐」とも関連する課題である。また、これまでの島原・天草もの（「春の城」等）との関連も気になるところである。《苦海浄土》と島原・

天草ものとの関連をさぐることで、石牟礼の創作活動をさらに広く捉えてみたい。それは、表現形態のあり方にも関わる問題だと考えている。先の戯曲とともに「狂言　紅葉の露」（「群像」二〇〇七年一二月）も発表しており、戯曲や狂言としての表現を採用している点についても考察の余地がある。その他、一九六八年から七六年に書かれた「最後の人」を『最後の人　詩人高群逸枝』（藤原書店、二〇一二年一〇月／全集第一七巻所収）として刊行している。創作の背景に常にあり続ける高群と、石牟礼の影響関係についても今後考えてみたい。

サークル誌の復刻が続き、美術館・文学館において関連の企画展が開催されるなど、戦後文化運動は近年あらためて注目を集めている研究テーマである。研究会の開催や雑誌の特集などをとおして、成果が集まってきている。その一方で、集団や運動を対象とするときに、そのなかに入ってこない「声」をどのように言説化できるかという問題が常に付きまとう。

例えば、二〇一三年五月に刊行された『鄭義信戯曲集』（リトルモア）がある。収録作品の一つ「パーマ屋スミレ」は昨年、新国立劇場で上演された。在日コリアンと日本人が住む「アリラン峠」を舞台として、ＣＯ患者とその家族の苦悩を描いている。中心的役割を果たすのは理髪店を営む高山（高）須美である。彼女は、第一組合とともにＣＯ法成立に尽力するが、実際に成立した法律は軽症患者の切り捨てを認めたものとなってしまう。組合長大村と須美の間の軋轢、日本国籍をとった須美の夫・成勲と、「北」へ行くことを決めたその弟・英勲との亀裂、ＣＯ患者の夫を殺めてしまう春美の苦悩……組合長の叫ぶ「がんばろう」という言葉が虚しく（喜劇として）響く場面が何度も登場する。

戦後の言説史のなかで、民衆の表現を基盤とする文化運動は、忘れられてきた言説の一つであった。しかしその運動のなかでも、言説化されにくい事象が存在する。例えば「パーマ屋スミレ」では成立したＣＯ法自体が、軽症患者を後景化する装置となっている。論者は、そういった言説の痕跡を探ることからはじめるしかないと考えている。「余白」を想像し、どれほど言葉にできるか。運動のなかに入ってこない言説との向き合い方も、問われているように思う。

資料編

A「月刊たかまつ」解題・総目次

「月刊たかまつ」は、一九五六（昭和三一）年一一月に創刊されたサークル誌である。発行元は、福岡県遠賀郡水巻町に所在していた炭鉱、日炭高松の文学・美術サークル協議会であった。労働組合教宣伝部の元に置かれたサークルであり、資金面で労組の援助を受けていた[1]。

掲載作品のジャンルは、詩、職場ルポ、創作、エッセイなどである。文学・美術サークル協議会というだけあって、千田梅二や、上田博、布川済らが担当した表紙、扉の版画作品なども目に鮮やかである。九号までガリ版であり、印刷は折尾印刷所（後に九州機関紙印刷所）が行っている。文字の形態や濃さが整い、非常に読みやすい誌面となっている。

掲載記事タイトルをいくつか挙げる。演劇サークルに所属していた早野暉雄の「つくし座とともに」（創刊号）、山崎喜与志[2]の創作「いのち」連載（創刊号―第一一号）、S生「映画評　わからない製作者の意図〃日本かく戦えり〃をみて」（第二号）、「大正鉱業労働組合歌〃夜あけの歌〃」（第二号、楽譜も掲載）、有吉富造「わが思い出の記」（第四号―第一〇号）、二木寿子「生活つづり方　風呂で」（第六号）、うたごえ運動の様子を記した井出貞三「ぜんざい会で希望がもてた」（第九号）、「あるスト中の日記―国上伸雄遺稿集より―」（第一〇号）、「誌上座談会　青年運動と文化運動の展望」（第一一号）などである。また、上野英信「『非常に大切な記録』」（第三号）、「散文詩　田園交響曲」（第四号）[3]、「ルポルタージュ一〇一日めの太陽―京の上労組のたたかい」（第八号）が掲載されているという点でも、貴重な資料だと言える。

組合部長である有吉富造や、主婦会文化部長の二木寿子など「いわゆる「組合のお偉方」」（第六号、「編集後記」）が寄稿しているのも、本雑誌の特徴である。また、他労組、他炭鉱とのつながりが見える記事に、岩田屋労組の「らくがき帖」（第七号）、宇部炭鉱の花田克己による「炭山（やま）の娘」（第七号）、大正鉱業中鶴炭鉱の大正文芸サークル（後、大正中鶴文学サークルに）、沖田活美「短歌　斜坑」（第一一号）などがある。千田梅二宅で文学・美術サークル懇談会も行われていた（第七号、三二頁）。

雑誌名を改題しながら一一号まで続くが、発行ペースは安定していたとは言いがたい。第五号の「編集後記」では、かつて「地下戦線」、「炭砿長屋」が五号で終刊をむかえたことを挙げながら、「正直なところこの月刊たかまつも、そろそろ息が切れかかっている」と述べていた。次の第五号は、四、五月合併号、第八号は七、八月合併号となっている。

「月刊たかまつ」は、同じ日炭高松の他サークルと連結しながら、他地域のサークルとも交流を行っていた。北部九州の一地方に、豊かな文化活動があったということを示していると言える。この文化とは、日本の近代化を支えた「炭鉱」が、生み出し得たものであったことには違いない。しかし、本誌は、庶民の豊かな炭鉱文化を賛美するのみではない。労働条件に対する不満や、企業に対する痛烈な批判がルポや詩のかたちで表現されている。

このような性格をもつ「月刊たかまつ」は、後の九州サークル研究会「サークル村」（一九五八年九月創刊）結成に繋がっ

ていく[4]。労働や生活を改善しようとして綴られた問題提起は、「サークル村」というさらに広い母体へと移行し、一九六〇年前後の労働闘争へと続く。この流れを鳥瞰的にみれば、その後の六〇年代後半から七〇年代にかけての市民運動、住民運動への方法的、理論的繋がりが見えるのではないだろうか。

なお、「月刊たかまつ」を含むその他の日炭高松における文化運動については、第一章で論じている。

凡例

一、本総目次は「月刊たかまつ」の内容を掲載された順序で、忠実に再現することをめざしたものである。

一、各号に付された「目次」は必ずしも掲載順ではなく、また本文の標題と表示が相違することもある。したがって、本総目次は各号の「目次」を集めたものでなく、本文標題をもとに作成したものである。ただし、本文標題に「創作」「詩」などの作品ジャンルの記述がない場合は、目次の情報をもとに付した。

一、号数表記については、第八号まで「□月号」と併記されている。本総目次では号数の後に（□月号）と付記した。また、発行年月日については、第六号のみ、「一九五七年五月　日」と記されており、発行日が不明である。そのため、第六号のみ、発行月までの表記としている。

一、標題・著者名は、本文表記に従った。ただし、明らかな誤記と考えられるものは目次に拠った。著者名はあえて表記の統一をはかっていない。短歌、俳句で作品数だけを示したものは無題を表す。また、「らくがき帖」については、署名、無署名が混在し投稿数も多いため、著者名は空欄とした。

一、連載記事での連載回の表記はあえて統一せず、本文表記のままとした。例えば、「創作　名づけ―いのち第四部―」（創刊号）、「創作　いのち（その六）」、（第三号）などである。

一、各項目の最後に、その作品・文書の掲載頁を表記した。頁数が付されていない場合には、頁数に()を付した。

一、雑誌名は、第九号より「文芸誌たかまつ」となる。また、雑誌形態は第九号までがB5版よりやや小さい縦二三五㎜、横一七〇㎜のガリ版刷り、第一〇号、第一一号がA5版の活字印刷である。

一、（＊）印は編者による注記である。

一、本資料に関しては、法政大学大原社会問題研究所と、上野朱氏にお世話になった。資料閲覧の便宜をはかって下さったことにお礼申し上げる。

「月刊たかまつ」

※第九号から「文芸誌たかまつ」に改題

発行所　日炭高松文学・美術サークル協議会

※第一〇号は、日炭高松美術文学サークル協議会。第一一号は、高松労組美術文学サークル協議会。

発行責任者　上田　博

※第二号は、編集発行責任者。第九号は、編集発行責任者は栗屋光教。第一〇号は、編集者はサークル誌編集委員会、発行責任者は栗屋光教。第一一号は、編集者は栗屋光教、平岡義人。

事務局　福岡県遠賀郡水巻町頃末日炭高松労組教宣部内

※第二号は福岡県遠賀郡水巻町日炭高松労働組合教宣部

印刷所　福岡県八幡市折尾松長崎折尾印刷所

※第二号は、表記なし。第四号は、福岡県八幡市折尾町長崎光明折尾印刷孔版部。第一〇号は、福岡県八幡市折尾町九州機関紙印刷所。第一一号は、八幡市黒崎町二丁目双羽印刷有限会社。

創刊号（一一月号）　一九五六年一一月一日発行

表紙絵・カット　布川済・上田博

扉絵　木版画「函待ち」　上田博

目次　(1)

職場ルポ
鍛工場　Y生　2—4
或日の事故　江夏茂一郎　5
落磐　渕上　八郎　6
詩
排氣　社見比健一　7
あなたの夢を　きよし・あが　7—8
水　きよし・あが　8
生きてれ　きよし・あが　8

子守歌　黒岩潔　9
朝　室田芳広　9—10
日中友好は前進する　室田芳広　10
ふるさとの歌　盛次幸一　10—11
竪坑　社見比健一　11
遠賀川頭にて　社見比健一　11—12
遠賀川　社見比健一　12
書をめざして　北一夫　12—13
よお！　北一夫　13—14
くらさのなかで　きよし・あが　14
つくし座とともに　早野暉雄　15—17
女房のこと　高野智　17
投書・ラクガキ・随筆
詩　社見比建一　18
（＊投書）井上／三坑々内ラクガキより／二支部GAN／古賀区一坑員／梅ノ木主婦　18—19
俳句（＊一二句）　和田和夫　19
郷土室
古老の語る高松むかしのいわれ　藤沢喜一郎　20—21
瀬戸の装飾古墳　ふなつ・つねと　22—24
川筋の郷土玩具をたずねて　境忠二郎　24—25
創作　名づけ—いのち第四部—　山崎喜与志　26—30
表紙絵について　布川済　31
扉絵（木版画）について　上田博　31—32
作品募集　（＊無署名）　32

第二号（一二月号）　一九五六年一二月一日発行

表紙絵・カット　上田博
扉　木版画「坑夫像」　布川済
目次　(1)
労働運動の前進のために組合員は教えている　松島朝久　2—3
職場ルポ
採炭夫の一日　福井克己　4—7
炭坑の三日規則　前田忍　7—8
らくがき帖　9—12
このらくがき帖について　編集部　12
随想
歯のぬけたモグラ　R生　13—14
函待ちの一時……　—版画「函待ち」によせて—

変わりゆく祖国　徳沢まこと　14
行列を作つている煙草買い　山村正夫　15
詩　南幸夫　16―17
おれの花嫁　あがきよし　18
結婚　あがきよし　18
ひとつき　社見比健一　19
「あなたは」　社見比健一　19
青年運動をどう進めてゆくか　H生　20―21
映画評　わからない製作者の意図　〃日本かく戦えり〃をみて　S生　22―23
季節の詩　ボタヤマ　（＊三井田川労組）　宮本正義　22―23
大正鉱業労働組合歌〃夜あけの歌〃　（＊作詞）北條正敏　（＊作曲）荒谷俊治　24―25
創作　いのち（六）（＊（五）の誤記）　山﨑喜与志　26―30
寒にたえる雑草の美―表紙絵の言葉―　上田博　31
坑夫の顔―扉・版画の言葉―　布川済　31
編集後記　（＊無署名）　32

第三号（一月号）一九五七年一月一日

表紙絵　千田梅二
扉　版画・カット　上田博
目次　(1)
新年の言葉　民主主義の柱　土屋正則　(2)
生活記録　私たちの棟内　S生　3―6
職場記録　『リミットを殺すな！』　杉家文吉　7―8
詩　一九五七年の祈り　星野ひかる　9
短歌　詠草（＊六首）　福井郁介　9
詩
人工衛星　泉清　10
火　泉清　10
杉　泉清　11

花　泉清　11
竹　泉清　11
専用列車　あがきよし　12
らくがき帖（続）―山の居酒屋の　13―16
『非常に大切な記録』　上野英信　17―21
片想い　G生　21―22
自由ということについて　八木善二　23
初夢　早野暉雄　24
創作　いのち（その六）　山﨑喜与志　25―29
編集後記　（＊無署名）　30

第四号（二月号）一九五七年二月五日

表紙絵　江籠隆則
扉　版画　布川済
目次
日本のうたごえに参加して　井手貞三　2―11
古賀句会作品抄
（＊三句）　斉藤一見　12
（＊三句）　川口虎月　12
（＊三句）　広島みのる　12
（＊三句）　吉田静波　12
（＊三句）　福田奏月　12
（＊三句）　井上六花　12
（＊三句）　上田ははき木　12
（＊三句）　内田圭風　12
（＊三句）　上田ひろし　12
らくがき帖　其の三　山の居酒屋の　13―16
わが思い出の記　第一回「炭砿というところ」　有吉富造　17―19
作品合評会のお知らせ！　月刊たかまつ編集部　19
詩・二篇
幸ちゃんとふた月　あが・きよし　20―21
仕事のうた　あが・きよし　20―21
散文詩　田園交響曲　上野英信　22―26
創作　いのち―其の七―　山﨑喜与志　27―33

第五号（三月号）一九五七年三月一五日

表紙絵　上田博
扉　版画　上田博
目次　(1)
わが思い出の記　第二回「坑内大火災」　有吉富造　2—5
扉・版画について　上田博　5
詩作品集
坑口の樫の木　山村正夫　6—7
坑口で　阿Q三平　7
春　社見比健一　8
労働のなかで　星野ひかる　8—9
手紙　社見比健一　9
ボタ山　日野幸介　10—11
坑夫　阿Q三平　11
さよなら正月　杉一平　11
まえがき　東平助　12
与四郎仏のこと　東平助　13—15
古賀句会作品抄
（＊三句）　斉藤一見　16
（＊三句）　川口虎月　16
（＊三句）　広島美野留　16
（＊三句）　吉田静波　16
（＊三句）　福山奏月　16
（＊三句）　井上六花　16
（＊三句）　花田かつみ　16
（＊三句）　上田ははき木　16
（＊三句）　上田ひろし　16
らくがき帖（その四）—ヤマの居酒屋の—　17—20
創作　いのち（其の八）　山崎喜与志　21—25
編集後記　（＊無署名）　26

第六号（四・五月合併号）一九五七年五月

表紙絵　上田博
目次
生活つづり方　風呂で　二木寿子　2—3 (1)
詩　痕（あと）　二木寿子　4
映画評「米」によせて　KAPPEI　5—8
詩　風の日に　上田博　8
らくがき帖　その5—ヤマの居酒屋の　9—16
詩二編
九人目のきょうだい　あが・きよし　17—18
家を建てる計画　あが・きよし　18
わが思い出の記　第三回「山経さんと青年たち」　有吉富造　19—21
与四郎仏のこと—第二話—　東平助　22—25
創作　いのち（其の九）　山崎喜与志　26—32
編集後記　（＊無署名）　32

第七号（六月号）一九五七年六月二五日

表紙絵　神田利行
目次
創作　ためいき　友松国彦　2—5 (1)
詩集
めざまし時計　（＊水巻中学校生徒）泉清　6
戸のすきま　泉清　6
雪　泉清　6
月　泉清　6—7
光　泉清　7

冬の夜　泉清　7
空　泉清　7
煙突　泉清　7―8
野原　泉清　8
月の光　泉清　8
やみの夜　泉清　8
散水車　泉清　8
らくがき帖　泉清　8
岩田屋デパート労働組合
同　臨時職員労働組合共編　9―12
わが思い出の記（第4回）　有給メーデーと職場闘争　有吉富造　13―16
サークル運動の課題（演劇サークルの巻）
これからの〝つくし座〟　早野暉雄　17―21
今月の作品―交換サークル誌より―
炭山（やま）の娘　花田克己　20―21
つくし座公演『光江帰る』をみて　上野英信　22―24
詩　二編
終着駅　黒岩きよし　25
五平太どん　黒岩きよし　25―26
創作　いのち（其の十）　山﨑喜与志　27―31
（＊案内）文学・美術サークル懇談会　（＊無署名）　32
編集後記　（＊無署名）　32

第八号（七・八月合併号）一九五七年八月七日

（＊表紙絵、無署名）

目次

創作　いのち（其の十一）　山﨑喜与志　2―7
ある日の客　千代　7
わが思い出の記（第5回）　有吉富造　8―12
労志会結成とビラ合戦
俳句（＊一〇句）　上田ははき木　12―13
ヤマの居酒屋の―らくがき帖（その6）
ルポルタージュ一〇一日めの太陽　上野英信　17―34
―京の上労組のたたかい―

第九号　一九五七年九月二五日

表紙絵　寺﨑　徳雄

カット　上田博・えごもりたかのり
目次　(1)
ぜんざい会で希望がもてた　井出　貞三　2―7
わが思い出の記（其の六）
　青年運動と沈黙のレコード・コンサート　有吉　富造　8―12
しぶい顔　葛城　市造　13―15
俳句　石松　弄涯　14―15
（＊二〇句）　百田三笠子　15
（＊一〇句）　15
作品合評会のお知らせ！　文芸誌〝たかまつ〟編集部　15
漫画　能さん　ケンカの巻　えごもりたかのり　16
小品　柿の木　加納勝義　17―18
表紙絵について　寺﨑徳雄　17
原稿募集！　（＊無署名）　18
戦争映画のウソ　室田芳広　19―21
受贈誌紹介
　「詩のつどい」／「火山脈」／「萌芽」／「三池文学」　21
詩
　素描　社見比健一　22
　パンがツバメのように　あが・きよし　22―23
　二人の妹に　湶順平　23―25
　幸ちゃんと私　あが・きよし　25―26
　糧　なかばやし・きねを　26
グラビア
　わんぱく小僧　杉本雄造　27
　店先にて　杉本雄造　28
随筆　通勤バス便乗記　二木寿子　29―31
俳句（＊一〇句）　井上果放　31
創作
　灰色の生　杉伸一　32―36
　いのち（十二回）　山﨑喜与志　37―41
編集後記　（＊無署名）　42

第一〇号　一九五七年一二月二五日

表紙絵　芦田順造
カット　上田博
目次
追悼文　国上さんの霊に捧げる　山﨑喜与志　2―3 (1)
座談会　一粒の麦萌えずば　国上氏を悼む
国上夫人／勝木一三／千田梅二／八木喜二／坂本学
工藤奈良雄／宮下明／今井夫妻／本誌編集部（司会）　4―6
あるスト中の日記―国上伸雄遺稿集より―　7―8
わが思い出の記（第8回）経営者反抗のとき
二十四年の労働協約（その一）　有吉富造　9―14
寄贈ありがとうございます
「芽生え」／「山野文学」／「ぼたはら」／「裸像」
「まきやぐら」／「断層」／「労働文化」／「月刊炭労」
「斜坑」／「福岡作詞作曲の会」／「舞台の青春」　10
高松労働歌応募作品(1)
（＊無題）　山垣弘子　12
（＊無題）　佐々木末治　12―13
たかまつ労働歌募集！　編集部　13
随想　故郷思うの記　平岡義人　15―16
俳句（＊一五句）　石松弄涯　16
詩
危機　二木寿子　17―18
基地　徳永和雄　18―19
詩　四編
人生　中村記念雄　20
夢　中村記念雄　20―21
虫の声　中村記念雄　21
秋　中村記念雄　21
ボタ山（＊エッセイ）
言葉／住宅／道路／食物　（＊無署名）　22
漫画　能さん　すもうの巻　えごもりたかのり　23
お楽しみ広場
主婦のページ　（＊無署名）　24―25
働らく人のお正月料理　志村まちよ　26―27
簡単な酒のさかな　（＊無署名）　27
子どものページ
狐の嫁入り（＊童話、宇部労組「ぼたばら」六号より）

創作　或る女（一）　河崎紫水　28―30
表紙の言葉　希望の夢（ホープ・ドリーム）　杉伸一　31―35
創作　いのち（第十三回）　芦田順造　34
作家杉浦明平氏来九！　山崎喜与志　36―41
あとがき　編集部　42
（＊無署名）　42

第一一号　一九五八年三月八日

（＊表紙絵、無署名）
目次
団体交渉
誌上座談会　青年運動と文化運動の展望　有吉　富造　1―3
香月一三／三浦隆男／三好久夫／溝口すみ子／早野暉雄／平岡義人（司会）／本紙編集部（記録）　4―10
俳句　古賀句会譚章
（＊四句）　井上果放　10
（＊三句）　川口庭月　10
（＊三句）　田上春眠子　10
（＊三句）　上田ひろし　10
（＊三句）　広島美野留　10
（＊三句）　斉藤一見　10
（＊三句）　池田白草子　10
（＊三句）　上田ははき木　10
詩
幼き人え　あが・きよし　11
原爆を使わないで下さい（＊「山田文学」より）　大江　将精　11―12
中学生詩集
散水車　いずみ・きよし　12
牛　いずみ・きよし　12
野良犬　いずみ・きよし　12
あられ　いずみ・きよし　12―13
ひまわり　いずみ・きよし　13
詩
汗　上田博　13
おれ等忘れない―東中鶴炭礦の出水に憶う―
（＊九採文学サークル誌「あしあと」第二号より）

創作　同窓会　丹孝太郎　13—14
コント　白い封筒　剛一平　15—21
映画のページ　剛一平　22
世界は恐怖する　（＊無署名）　23
オンボロ人生　（＊無署名）　24
マンガのページ
もっと低い姿勢でかくせかくせ　中村かめお　25
「お父ちゃんはどれ？」（＊「月刊炭労」より）　中村かめお　25
片足あげて（＊「月刊炭労」より）　内田毅　25

長屋太平記　中村かめお　25
職場日記　騒音　葛城市造　26—29
短歌　斜坑（＊二四首）　沖田活美　30—31
回想　一九五八年初春　平和まもる　32—35
学習の友について　（＊無署名）　33
創作　いのち（第十四回）　山崎喜与志　36—39
平和を守るため　野に山にうたごえよひゞけ（日本のうたごえ参加の記録）　日野幸介　40—52
詩　松の香　上田博　51
編集後記　編集子　53

B「山田文学」目次

「山田文学」目次

凡例

一、本目次は「山田文学」の内容を掲載された順序で、忠実に再現することをめざしたものである。ただし、一から八号、一一号、一二号、二四号、二八号、二九号は所在不明のため「不明」とのみ記した。また、三三号は労働組合から発行禁止の処分を受けたため現存していない。

一、各号に付された「目次」は必ずしも掲載順ではなく、また本文の標題と表示が相違することもある。したがって、本目次は各号の「目次」を集めたものでなく、本文標題をもとに作成したものである。

一、発行年月日については、奥付に明記されていない場合がある。その場合は前後の号や、誌上の表記から判断し、分かる範囲で記した。

一、標題・著者名は、本文表記に従った。ただし、明らかな誤記と考えられるものは目次に拠った。判読できない文字は「●」で表した。短歌、俳句で作品数だけを示したものは無題を表す。また、「らくがき」「通信」などの覧については、著者名は（　）表記とした。

一、各項目の最後に、その作品・文書の掲載頁を表記した。頁数が付されていない場合には、頁数に()を付した。

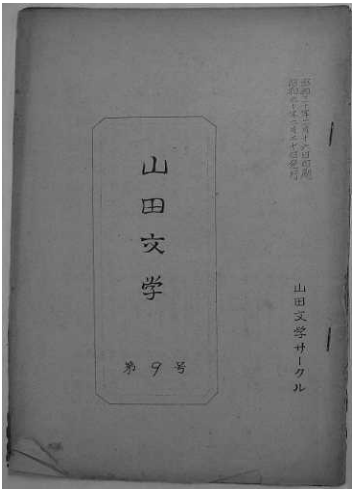
一、(＊) 印は編者による注記である。

一、本資料は、法政大学大原社会問題研究所に所蔵されている。資料閲覧の便宜をはかって下さったことにお礼申し上げる。

「山田文学」

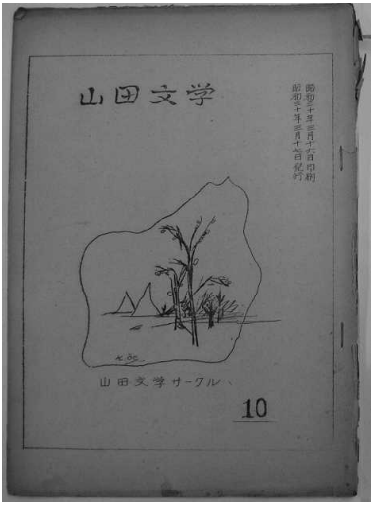
発行所　山田文学社
　福岡県山田市上山田三菱四区七三大江宅
発行責任者　大江一穂（代表者）、山田文学サークル研究会
※二五号からは大江将精（発行人）、木村日出夫（編集人）、三四号からは木村日出夫（発行者）。
※当初、発行代表者は大江であったが、発禁以降木村が代表者となる。
印刷形状　謄写印刷

九号　一九五五年二月二〇日発行



詩
詩（詩集『すばらしき人間群』より）　井上　光晴　1
短歌
坑木の蔭（一〇首）　清水　修一　2
小寒（五首）　前田　宏　3
案内　清水小児科医院　山田市短歌大会　3
（＊三月一三日第二日曜、正午より、大橋公民館、講師中村行利、演題「九州万葉・特に旅人と憶良について」）
詩
ちぎれた秩序の中から　武田　武　4
或る日の朝　武田　武　4
二十世紀　石神　雪鷹　5
断片抄（スタイル篇）　六十路八十八　6
断片抄（ニヒル篇）　六十路八十八　6
断片抄（苦悩篇）　六十路八十八　7
断片抄（現実篇）　六十路八十八　7
一人の妹に　池田　神蔵　8
まずしくとも　福垣内美鈴　9
限界　池田　神蔵　10
案内　二月研究会　10
（＊日時・二月二〇日午後一時、場所・三菱なるみ）
詩
うたごえの中から　村上八重子　11
老坑夫と僕　石野　鉄雄　12
星よ光りを永遠に　竹原　義美　13
僕はコーヒ作りに行くのです　大江　一穂　14―15
私の起点　木村日出夫　16
一月研究作品評　大江　一穂　17―19

一〇号　一九五五年三月一七日発行



＊表紙　大江一穂

目次

詩
愛の書（『ゲーテ格言集詩篇』より）　石野　鉄雄　1
女房　村上八重子　2
人形の抵抗　竹原　生　3
潮騒　3
筑豊炭田　大内　正照　4―5
らくがき　6
（一穂、日出夫、由紀雄、大内、八重子、竹原生）
表紙裏
詩
小雪　三木　一郎　7―9
〈人間〉　竹原　生　9
民謡シリーズその一　枝は栄える元木は枯れる　江島　子秋　10―13
詩
犬　福垣内美鈴　13
坑木　大江　一穂　14―15
燃えるぼた山　木村日出夫　16
冬とともに　岩本　修蔵　17
きびしい道（井上光晴、詩集『すばらしき人間群』より）　17
作家野間宏をかこんで　村上八重子　18―19

一一号　不明

一二号　不明

一三号　一九五五年　発行

＊表紙には「山田文化サークル」と記されている。
奥付は「山田文学サークル」。

もくじ

詩
友達え　福垣内美鈴　1
冨士をかえせ　村上八重子　2—3
或る無神論者の告白　山田　巌　2—3
初夏　武田　武　4
球体の隙間　竹原　生　4
表紙裏
斗い　大内　正照　5
神様、佛様　木村日出夫　5—6
折鶴　石神　雪鷹　7—8
暗い世界　大江　一穂　9—10
第3回九州詩人懇話会報告　11—12
（＊五月三日午前一〇時より、小倉市米町小学校講堂参加詩誌（「沙漠」「詩人」「黒紙」（小倉）、「鉄と花」（八幡）「詩科」「詩像」（福岡）、「山田文学」（筑豊）、「詩と真実」（熊本）、「心象」（大分）「繊維」「DON」「龍舌蘭」（宮崎）主な出席者　木原孝一（詩学）、三好豊一郎（荒地）、劉寒吉、織田隆一、麻生久、河野正彦、大島壽二、三島正弘、織坂幸治、宮本一広、堀川禧八郎、南潤吉、平田澄子、仙川竹生、（等約四〇名））
山田文学サークル会則

一四号　一九五五年　発行

＊詩特集
奥付に「（非売品）」と記載。

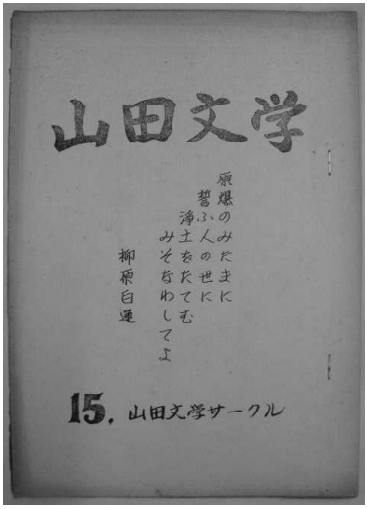
もくろく（＊目次）

原稿募集
（＊募集しているのは、創作、コント、詩・短歌・俳句、小曲・歌謡・川柳、ルポルタージュ、戯曲、表紙画・カット、写真・グループ短信。「山田文学サークルでは皆様のなかにひろく呼びかけることになりました　掲載作品には記念品を差上げたいと存じます」とある。）

詩
うたごえ　森　剛　1
（日炭山田グループ推せん）
誰が好きこのんで　木村日出夫　2―3
坂道　たけだたけし　4―5
白昼の奇術（Ⅰ）　大江　将精　6―7
古い城（Ⅱ）　大江　将精　8―9
測候所のある草原で　小川　雅正　10―11
五月に咲いたけど　大塚　忠　12―13
抹殺　石神　雪鷹　14―16
あとがき　M　(17)
（＊「十四号より部数を増加いたしました。他サークルへ贈呈、交流されたい方は最寄編集委員、地区委員に申し出て下さい。」）
案内　七月の研究会案内　(17)
（＊七月一七日予定、場所・三菱なるみ）
いただいた本　(17)
（＊「鉄と花」「黒紙」「熊本文学」「ドン」「国鉄文化」「つめごむ」（国鉄いいづか）「文学の友」「現代詩」）

表紙裏

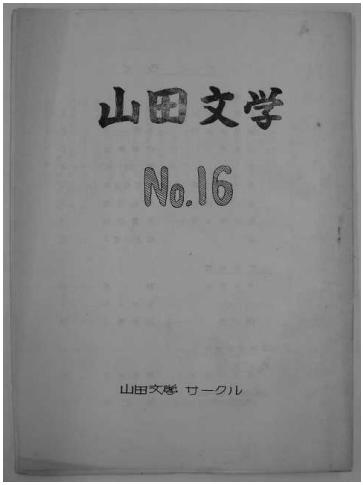
一五号　一九五五年八月



＊表紙に柳原白蓮「原爆のみたまに／誓ふ人の世に／浄土をたてむ／みそなわしてよ」を記載。

表紙について　表紙裏
（＊「充実いたしませんが平和特集号としたいもの
です」とある）
俳句
さゝやかな庭に（三句）　鎌倉　句鬼　1
詩
鏡　木村日出夫　2―3
人生の手術　竹原　義夫　4
火花　大内　正照　5
メタンガスと街
感情（日炭山田グループ推せん）　大江　将精　6―7
雷鳴（日炭山田グループ推せん）　小野　自由　8
小学生の作品　森　剛　9
詩　とり　川崎　義久　10
詩　金魚　S・N　10
つゞり方　おつかい　山本　晴美　10
山田文学の航跡と進路　木村日出夫　11―12
案内　(13)
新涼の研究会
（＊八月二一日午後一時より、大橋公民館）
おしらせ
（＊炭鉱のうたごえの作詞〆切八月末日、炭労文藝
コンクールは一〇月末日まで）
もくろく（＊目次）　(13)

一六号　一九五五年九月

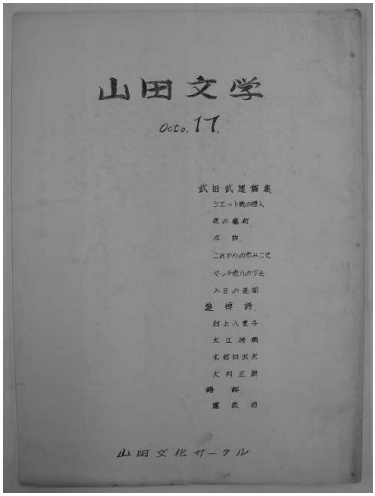


もくろく（＊目次）

詩
快晴の空に　秋山　静史　1
俺らの仲間　手島一二三　2
三番方　竹原　義夫　3
不安　武田　武　4―5
眞っ白な夜　木村日出夫　6―7
卓上会議　大江　将精　8―10
歌謡日本史（其ノ一）疾風川中島　江島　正利　11
詩
母　村上八重子　12

子供（小学生）の作品・詩
アメリカ　福　元　13
カニ　中村　久子　13
白バラ　石垣　博子　14
子供作品・俳句
（一句）　小川　14
（一句）　後藤　勇　14
（一句）　国生　一哉　14
（一句）　川﨑　義久　14
（四句）　西牟田久美子　14
（一句）　水城　憲夫　14
（一句）　内村　節子　14
散文
脇田の海で　筑紫　定光　15―16
批評
山田文学15号に贈る―読後感と批評めいたことなど―（八月三〇日記）　壇　政治　17―19
編集部だより　19

一七号　一九五五年一〇月



＊表紙に、目次を掲載。「山田文化サークル」と記載。

武田武遺稿集　武田　武　1―2
詩
ジェット機ノ侵入　武田　武　3―4
夜の魔術　武田　武　5―6
刃物　武田　武　7―8
これからの歩みこそ　武田　武　9―10
八月の昼間　武田　武　10
武田さんの死をいたんで　村上八重子　11―12
坂道（引用詩・一九五五年七月「山田文学」一四号所載）　武田　武　13―14
夕暮悲歌―武田武君の死を悼みて―　大江　将精　15―16
嵐のゆくえ　木村日出夫　17―19
嵐（引用詩・「山田文学」四号、一九五四年八月所載）　武田　武　19―20
或る風景（武田君へ）　大内　正照　21
詩四篇に想ふ（一六号評）　壇　政治　22
編集後記　23―24
寄贈誌一覧　24
（＊「まきやぐら」一四、一五号、「沙漠」一五号「詩科」七号、「現代詩」九月号、「ろんど」、「高松文学」一号）

一八号　一九五五年一一月

＊表紙に投稿者名を記載。

詩
団結　木村日出夫　1—2
坑夫の言葉　大江　将精　3—4
俳句
（一〇句）　鎌倉　句鬼　5
若竹会五人句集
（二句）　木村　静岳　6
（二句）　相良　鬼人　6
（二句）　真﨑　紅月　6
（二句）　如月　6
（二句）　柴田かつら　6
詩
嵐に寄せて　竹原　義夫　7
若き怒り　坂田　春義　8—9
民謡シリーズ（その二）恋をする
ならこう言ふ具合にしやさんせ　江島　子秋　10—14
詩
肉と紳士　木村日出夫　15—16
子供の詩
あり　力武　邦夫　17
大空　石垣　博子　17
とり　川﨑　義久　17
廊下　清水千代子　17
雨のマンボ　岡本　敏子　18
昼の光景　舟橋　節子　18
雲　木柳　伸二　18
子供の散文
黒板　佐藤よし子　19
ダリヤ　中村　久子　19
通信（「まきやぐら」栗森一同、炭労）　20—21
編集後記　21—22
案内
研究会案内　22

（＊一二月二〇日午後一時より、大橋公民館）
寄贈誌一覧
（＊「月刊炭労」九、一〇号、「詩科」八号、「伊豆詩人」「ろんど」「まきやぐら」）
山田文学サークル会則 22

一九号　一九五五年一二月

（＊山田文学サークルと会誌について　大江　将精
表紙裏）
（＊執筆者名一覧
表紙裏）
詩
色　伴　由紀雄　1
飛行雲　木村日出夫　2—3
日本の玄関に立って　大江　将精　4—5
酒盃　浦野　●　6—7
俳句
（一〇句）　鎌倉　句鬼　8
（一〇句）　楽天　9
短歌
山田市短歌十九人集
（二首）　田中　均　10
（二首）　三宅　●木　10
（二首）　千々石得介　10
（一首）　●畑　豊治　10
（二首）　平島　新　10
（二首）　石丸　朝子　11
（二首）　前田　宏　11
（二首）　柏原　豊子　11
（二首）　溝田　義明　11
（二首）　三村とき子　11
（二首）　渋谷ちづ子　12
（二首）　田代　年正　12
（二首）　瓜生きさ枝　12
（二首）　清水　修一　12
（二首）　平鍋　義雄　12
（二首）　大場あや子　13

（二首）　中　平　13
（二首）　中村　志郎　13
俳句
三菱六区女流句会三人集
（四句）　ゆか　14
（二句）　ふみえ　14
（四句）　山洞　14
歌謡日本史（その二）花の敦盛　江島　正則　15
詩
炭砿の友よ　香村　鹿男　15
女流俳句紹介（吾が俳諧手帖より）　田上　山洞　16
（三句）　ゆか　16
（一句）　美奈子　16
（二句）　はつね　16
（二句）　梅子　16
（一句）　芳江　16
（二句）　ふみえ　16
（三句）　壽賀子　16
（一句）　美壽子　16
詩の幻想を剪る—山田文学18号　壇　まさはる　17—18
詩作品読後感—
通信　18—19
（＊水口為和（「伊豆詩人」、舟木由岐（日鉄二瀬厚生課）、竹田有佐（カヴェルネ詩の会）　19
案内
十二月研究会通知
（＊一二月二五日午後一時より、大橋公民館）　19

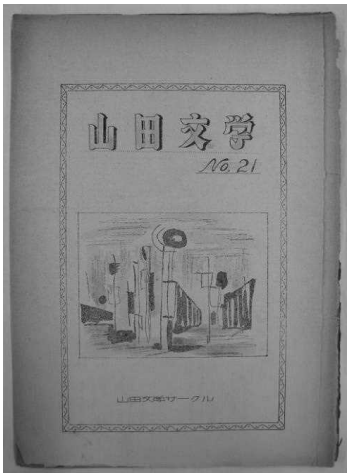
二〇号　一九五六年一月

＊表紙には「山田文化サークル」と表記。
執筆者名一覧を記載。

（＊「山田文化サークル」と会誌「山田文学」の紹介）　表紙裏
執筆者一覧
詩
キャップランプ　椎葉　寅生　1

戦艦大和　木村日出夫　2
眼　木村日出夫　3
俳句（近詠）
（七句）　近藤　楽天　4
（五句）　田上　山洞　5
野菊会作品集
（六句）　広瀬　ゆか　6
（六句）　冨美江　6
（四句）　容子　6―7
（二句）　静江　7
（二句）　芳江　7
（二句）　のり子　7
（一句）　美奈子　7
野菊会誕生
歌謡日本史その三　本能寺　田上　三郎　8
民謡シリーズ（其の三）こうしてこうすりゃ　こうなるものを　江島　子秋　9
史実物語
座頭池由来記　江島　子秋　10―17
通信　木村　拓治　18―19
案内　花田　克己　20
一月研究会通知　（21）
（＊一月●日午後一時より、大橋公民館二階）

二一号　一九五六年二月



楽譜
もえろボタ山　作詞・大江将精　作曲・いづみたく　表紙裏
詩
黒い沙漠（一九五五年・最後のデモに寄せて…）　森田ヤヱ子　1
貯金　M・O生　2
孤独な愛　T・H生　3
落磐　土田　末広　4
雨　醉夢　5
坑夫の妻　木村日出夫　6―7
生活のうた　大江　将精　8―9

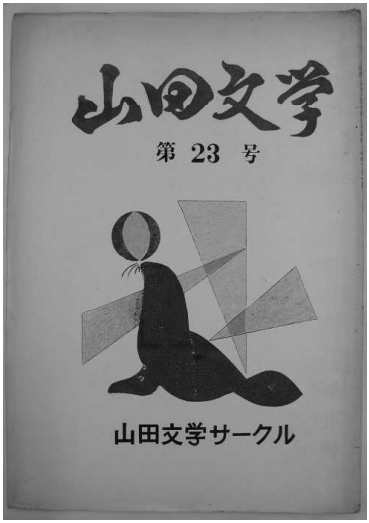
俳句
近詠（九句）　楽天　10
詩
雨　大内　正照　11
残雪の下から　仕画よしを　12
史実物語　城山　木村　拓治　13—14
座談会　15—21
総合座談　机をかこんで
（村上由紀雄（三菱上山田）、井上義行（三菱上山田）
木村日出夫（三菱上山田）、斉木●保（日炭山田）
土田末広（日炭山田）、大江将精（司会・三菱上山田）冷川●子（大場●●）、坂下忠（筑紫）、大内正照（木城）、坂下繁雄（木城）、森田ヤヱ子（記録・三菱上山田）
直面してゐる僕等の問題〜文芸講話、毛沢東著より〜　●・K　21—22
（＊山田文学サークル、会誌山田文学の紹介文）　大江　将精　22

二二号　一九五六年三月

（＊山田文学サークルと会誌について　大江　将精）　表紙裏
目次
詩
流れゆく生活　竹原　生　1
機械類　木村日出夫　2—3
かたつむりによせて　伴田　岐天　4
寂しい現実　滝下　吉将　5
あなたに見せたい　大塚　忠　6
想い出　はるを　7
文芸時評—山田文学21号の詩に就て—　壇　政治　8—15

詩評　山田文学19号・20号の詩に就て　壇　政治　16―(19)(19)
受贈一覧　(19)
（「詩科」「まきやぐら」「炭砿長屋」「カヴェルネ」「黒紙」「ろんど」「青春基地」「歯車」）
案内
三月研究会通知
（三月二二日午後一時より、大橋公民館二階）

二三号　一九五六年四月二二日



表紙　作者不明
カット　M・O

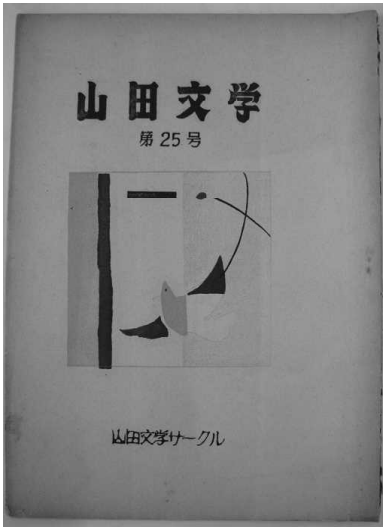
目次

巻頭詩　マヤコフスキーの格言　表紙裏
詩
私は十二才　山岸　義照　2―3
いけばな　森田八重子　4―5
道　椎葉　寅生　6―7
悪魔の女　大塚　忠　8―9
尻っぽ　木村日出夫　10―11
史実物語
鮭神社の伝説　木村　拓治　12―14
俳句
（五句）　近藤　楽天　15
（五句）　鎌倉　句鬼　15
小中学生の作品・詩
ボタ山　柿迫　繁行（下山田小六年）　16
たこ　平崎　隆司（旭町中二年）　16
ゆき　前田　恵子（小三年）　16
米　平崎　澄江（下山田小六年）　17
小中学生の作品・綴り方
おてつだい　寺岡　久志（下山田小四年）　17
私と貯金箱　市丸　恵（栄町小四年）　18
私の父母　中塚やす子（北中）　18
わたしと永沼としはるちゃん　いちまるみつる（栄町一年）　19

詩
ついに戦いは始められた　椎葉　寅生　20
いかり　黒石ちか夫　21
俺達は勝つ　木村日出夫　22
時評（22号の詩を読んで感じたこと）　壇　政治　23―26
（＊山田文学サークル、会誌について　27）
編集後記　木村日出夫　27
（＊「小中学生の作品は日炭下山田から送られて来たもの」、「三菱上山田労組の力強い支援、亦日炭下山田及び木城坑の資金カンパも漸く軌道にのり」った、とある）
案内
四月研究会案内
（＊四月●日午後一時より、日炭山田炭坑）
寄贈一覧
（＊「まきやぐら」「炭砿長屋」二号、「雄別文学」「現代詩」三月号）

二四号　不明

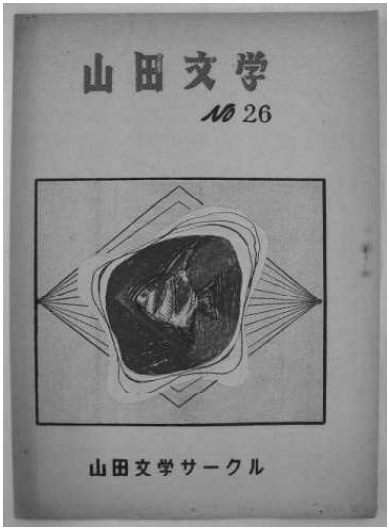
二五号　一九五六年六月　？



目次　1
巻頭詩
「スペインに」の一節　エリュアール　1
詩
小父さん　森田ヤエ子　2
屍体　石村　弘　3―4
集い　山岸　義照　5―6
白い体育館　竹永　安徳　7
心の夢　竹永　安徳　8
悦子　竹永　安徳　8
俳句

（当季雑詠・四句）　江口　和美　9
（雑詠・二句）　江口　和美　9
短歌
（四首）　柿迫　襄　10
詩
地上と地底　大内　正照　11―12
バンゴウ　木村日出夫　13―14
歌ごえサークルと文学サークル　木村日出夫　15―17
自分の立っている場所から書け　17―19
（六月合評会）
寄贈誌一覧　20
（＊「歯車」二五号、「まきやぐら」二二号、「裸像」五号、「現代文学」二号、「月刊炭労」七三号「あざめ」三号、「沙漠」六号「カヴェルネ」二六号、「伊豆詩人」一一号「黒紙」五号）

二六号　一九五六年七月　？



特集　各地サークル誌の作品

目次

巻頭詩
夜の断章　壺井　繁治　1
詩
屍体収容―ヒロシマの記憶に―　河田　圭助　2
（「群」三二号より）
杭―ロックアウト宣言の翌日に―　花田　克己　3
（「まきやぐら」二二号より）
ショウチュウ　山野てつを　4

（「裸像」五号より）
買物かばん　内藤　節次　5
（「カヴェルネ」二九号より）
柿迫襄氏の短歌作品をめぐって
―木村日出夫氏へ―　田中　均　6―7
詩
俺達は炭坑労働者だ　椎葉　寅生　8
僕の目ははなすことができない　坂下　忠　9
親子　竹永　安徳　10
ネオン塔　10
ほおづき　椎葉　寅生　11
俳句
（当季雑詠・五句）　江口　和美　12
（雑詠・二句）　江口　和美　12
詩
硬山　森　賢一　13
公傷　木村日出夫　14―15
編集後記　H・K　16
感謝状　三菱上山田砿業所労働組合　17
（＊三菱上山田砿業所労働組合から、山田文学サークルへの感謝状。「常に勤労者の文学としての発展に努力を傾注し」た、「創立十周年に当り金壱封を贈呈すると共に感謝の意を表します」とある。）
受贈誌一覧　17
（＊「谺」三一号、「カヴェルネ」二九号、「歯車」二六号、『まきやぐら詩集』）

二七号　一九五六年一一月

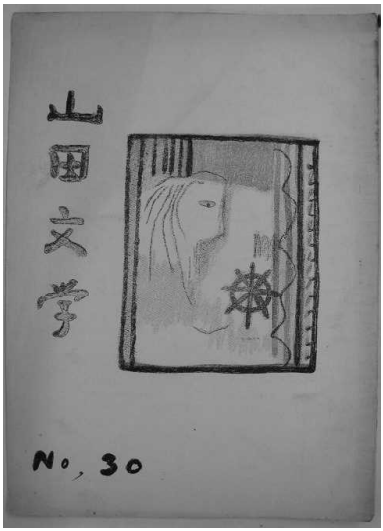
巻頭詩
「坑内の娘」の一節　松田　解子　(1)
詩
「なかまの作品」
嫉妬（「杙」七号より、福岡地方貯金局）　加藤婦糸子　2
断想（浮羽郡美住「青年団報」より）　樋口一二三　3

おれの手（「歯車」二八号より　北海道空知郡、歯車詩話会）　猪狩　茂樹　4
創作
ケガ　木村きよし　5―8
俳句
（四句）　江口　和美　8
詩
九州のうたごえ（＊一九五六年九月二三日の「九州のうたごえ」に参加して）　森田ヤヱ子　9
流れ　山岸　義照　10
古傷　山岸　義照　10
新しい道　山岸　義照　11
可愛いい赤ちゃん　矢本　節子　11
朝　竹永　安徳　12
フロ　竹永　安徳　12
入院請求書　きよこ　13
他人　木村日出夫　14―15
柿迫襄氏の短歌作品をめぐつて―田中均氏へ―　森田ヤヱ子　16―18
山田文学26号所載　田中氏の批判に就て　壇　政治　19―21
あとがき　H・K　21

二八号　不明

二九号　不明

三〇号　一九五七年一二月　？



目次　表紙裏
巻頭詩　壺井　繁治　1
挨拶　大江　将精　2―4
第二回文学サークル懇談会の批判
創作
夜ながの記　岩田ふく子　5―7

詩
人形　大江　将精　8—9
花と壺　大江　将精
風の吹く夜　森田ヤエ子　10
編物　森田ヤエ子　11
雨がやんだよ　山岸　義照　12
だく流の底で　伴　由紀夫　13
平行線　小池　正彦　14
卸　小池　正彦　15
廃坑　小池　正彦　16
光　小池　正彦　17
仕事に責任を　亀岡　重利　17
坑内　亀岡　重利　18
映画館の日曜日　田中　光枝　19
送別　田中　光枝　20
あわれみぶかい手　木村日出夫　21—23
坑夫と壁　木村日出夫　23—26
手記　津山　啓子　27—31
ノーズロースが悪かった　31—34
通信　M　34—36
（正田誠一、岡屋孝治）
あとがき

三一号　一九五八年二月

目次　1
らくがき
（大江将精、しいば、たゞし、伊豆清美、木村日出夫、小池正彦、梶原敏明、亀岡重利、井上、森田ヤエ子）　2
炭労文化講師として来山したルポルタージュ作家、杉浦明平に逢って　森田ヤエ子　3—5
詩
一本の違い　小池　正彦　5
あいつと俺と　椎葉　寅生　6
夢だったのか　亀岡　重利　7

今日の足あと　田中　光枝　8
宣伝ビラ　木村日出夫　9
握手　大塚　忠　10
季節風のふりまいた雪　森田ヤエ子　11
窓　小池　正彦　12
やみ　小池　正彦　12
蝿の季節近し　田中　光枝　13
こんな人間にするな　大江　将精　14—15
ノスタルジア　椎葉　寅生　16
くちづけのうた　田中　光枝　17
俳句
近詠（五句）　江口　和美　17
詩
硬山風呂　伴　由岐夫　18—19
まきやぐら　伴　由岐夫　19
私の太陽　長井　Y　20
私の心を　長井　Y　20
燈明　大塚　忠　21
誌上討論　山田文学の針路はどこ　田中　弘　21—23
会計報告書　担当者・森田ヤエ子　23
創作
妻を30円で売った話　西村　伍郎　24—28
青少年の不良化問題について　山口とき子　26—28
葉書詩集1号「編物」についての通信
（角田清、森一作、成田邦雄、穂波読書会、カヴェルネ詩会）　29—30
夜ながの記　西村　伍郎　30—32
「ノーズロースが悪かった」について　大江　将精　32—33
岩田ふく子　33—34
小池　正彦　34
椎葉　寅生　35—36
森田ヤエ子　36
編集後記　37

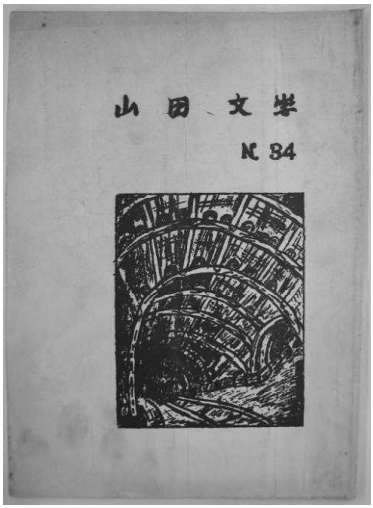
三二号　一九五八年四月

目次

想い出の記　第一回　銀杏の木の並木通り　岩田ふく子　1—5
詩
売店について　森田ヤヱ子　6—7
給料日　田中　光枝　8
Kの首—日展より—　田中　光枝　8—9
みんなで　白石　伊代　10
坑夫の妻は今日も思う　白石　伊代　10
恋の歌　石川　道子　11
四斗樽　小池　正彦　12
眠っている間　13
子供らと其の武器　小川　正　14
追憶への調べ　亀岡　重利　15
陥穽（ワナ）　大江　将精　16—17
その日の刑場　木村日出夫　18—19
創作
妻を30円で売った話(2)　西村　伍郎　20—23
批評
誌上討論　へそ曲りのたわごと　木村日出夫　24—28
小説の読み方について　西村　伍郎　28—31
あとがき　木村日出夫　31
原稿募集　32
通信　32—34
（奥野正男（北海道、三井美唄）、松田軍造（門鉄詩人）、神谷（福岡音楽センター）、杉浦明平）

三三号　（発禁）

三四号　一九五九年六月一日



巻頭言　（＊三三号の「発禁」について）　1
もくじ　2
手記
坑内では死にたくない！　松岡　保文　3—10
詩

盗炭　木村日出夫　11
ひろば　森田ヤエ子　12
手相　田中　光枝　13
おとうとに　田中　光枝　14
結婚えの招待　梶原　敏明・岩田　福子　15
ガス爆発　木村日出夫　16―17
重役視察　木村日出夫　18
無題　松岡　保文　19
シンワデハアリマセン　マツオカヤスフミ　20―21
山　松岡　保文　22
初夏のあし音　奥永　保　23―25
差別　やまぎしよしてる　25―26
ルポ　木村日出夫　27―31
くたばれ！三井山野　木村日出夫　32
あとがき

C「辺境」・「兄弟」解題・総目次

解題

「辺境」は、一九七〇年六月に創刊された井上光晴編集の雑誌である。第一次が一九七三年三月まで全一〇号（B５版）、続く第二次は一九七三年一〇月から一九七六年五月まで全四号（A５版）、第三次が一九八六年一〇月から一九八九年七月まで全一〇号（A５版）である。創刊時、季刊を予定していた「辺境」は、第二次では年一回発行のペースになっている。第三次には再び年三～四回発行となる。この第三次第九号が発行された翌月（一九八九年三月）、井上光晴は「兄弟」（A５版）という雑誌を創刊している。八九年七月には「辺境」第三次第一〇号（終刊号）、同年一〇月に「兄弟」第二号（終刊号）を発刊。つまり、井上は「辺境」第三次の終わり二号と、「兄弟」を同時期に編集していたことになる。編集人の意図が受け継がれた雑誌として「辺境」第一次～第三次とともに、「兄弟」の総目次も掲載する。

井上は、あえて「辺境」創刊の言葉を揚げていない。ただし、創刊の辞にあたる言葉が「編集後記」に綴られている。そこで井上は、「真実の文学はもともと心優しき叛逆者たちのものなのだ。誰か検閲者たちを顫えあがらせるような革命と性を描写する青年はいないか」と述べていた。（全文は、もう一人の創刊時編集人、深見勝の「編集後記」、「兄弟」創刊号の「編集後記」とともに後掲）。

創刊号の目次に続く口絵には、井上光晴による詩「銅鐸」「村」が掲載されている。二編の詩の間には、見開きで映画「地の群れ」のワンシーンの写真を掲載。炭鉱長屋と、その側を歩くチマチョゴリを着た女性、そしてその後ろを歩く人物たちを、遠くから捉えた写真である。ちなみに、同じ画像が、後に森崎和江の詩集『かりうどの朝』（深夜叢書社、一九七四年五月、装幀者は井上光晴）の口絵として採用されることになる。

執筆者は、上野英信、橋川文三、秋山清、三木卓、埴谷雄高、森崎和、石牟礼道子、亀井トム、山中恒、金時鐘、大西赤人、大西巨人、瀬戸内晴美（寂聴）、松原新一、野間宏、丸山豊、谷川雁（名著復刻）杉浦明平、岩橋邦枝、三島由紀夫（エッセイ「独楽」を発表）、永山則夫（第一次第三号に獄中ノート、作品を発表）などもいる。

では、実際にどのような記事が掲載されたのか。ここでは連載一覧を挙げることにする。

・上野英信「爆弾三勇士序説」（全三回、第一次創刊号、第二号、第四号）
・橋川文三「昭和維新試論」（全一〇回、第一次創刊号～第五号、第七号～第二次創刊号）
・渡辺広士「文学と戦後」（全七回、第一次創刊号～第七号）
・森崎和江「二つのことば　二つのこころ」（全五回、第一次創刊号～第五号）
・石黒健治「さまよえる日本人」（写真、全六回、第一次創刊号～第六号。順に、「精神病院」「おとぎの国」「おんなたち」「ふるさと」「家」「死に行く土地」。
・石牟礼道子「苦海浄土・第二部」（全一八回、第一次第二

号～第六号、第八号～第一〇号、第二次第二号～第三次第二号、第四号、第五号、第七号、第九号、第一〇号）

・永山則夫「永山則夫獄中ノート　無知の涙　金の卵たる中卒者諸君に捧ぐ」（全二回、第一次第三号～第四号）

・松浦玲「日本人にとって天皇とは何であったか」（全八回、第一次第四号～第八号、第一〇号～第二次創刊号、第二部は第三号）

・ユルゲン・リューレ（訳・内山信）「20世紀作家とコミュニズム　第一部　ドイツにおける〝文学と革命〟」（全三回、第一部第四号～第六号）

・北原泰作「賤民の後裔　わが半生の屈辱と反抗」（全七回、第一次第五号～第二次創刊号）

・亀井トム「狭山事件」（全一〇回、第一次第五号～第二次第四号）

・森崎和江「にほん文化誕生記」（全五回、第一部は第一次第七号～第九号、第二部は第二次第二号、第三号）。

・山中恒「ボクラ少国民」（全五回、第一次第八号、第一〇号～第二次第三号）

・熊沢京次郎「朕力忠良ノ臣民」（全三回、第一次第九号～第二次創刊号）

・内村剛介「ソルジェニツィンの幸福論」（全二回、第一次第一〇号～第二次第一号）

・石川次郎「さらば、ハイエナのきた村」（全三回、第一次第一〇号、第二次第二号～第二次第三号）

・石黒健治「AS-IT-ISNESS」（全九回、第三次第一号～第五号、第七号～第一〇号）

・関千枝子「もう一つの老後―母子家庭の場合　〝豊かな国〟の底辺を行く」（全三回、第三次第二号～第四号）

・井上光晴「小説の書き方」（全三回、第三次第三号～第四号、第七号）

・「竹内好の手紙（上）一九三六―一九五二―松枝茂夫・武田泰淳・家族宛／（下）一九三六―一九五二―松枝茂夫宛」（全二回、第三次第五号～第六号）

・亀井トム「狭山裁判探求（上）／（下）」（全二回、第三次第五号～第六号）

・佐江衆一「炎と泥の祭」（全五回、第三次第六号～第一〇号）

・川原一之（文）・川原由紀子（版画）「土呂久羅漢（上）／（中）／（下）」（全二回、第三次第九号～第一〇号）

・中山茅集子「かくも熱き亡霊たち（上／（中）」（全二回、「兄弟」第一号～第二号）

・山福康政（画と文）「昭和ガリ版屋物語」（全二回「兄弟」第一号～第二号）

・関千枝子「まつろわぬ人びと」（全二回「兄弟」第一号～第二号）

上野英信「爆弾三勇士序説」の連載は、既に前年に「夕刊フクニチ」に一部を発表していた。だが深見勝によれば、「今回、更に全面的に改稿し」連載するという（創刊号「編集後記」）。「連載約千枚で完結を予定している。」とも記しているように、

上野のこの連載は創刊当時から一つの目玉として予定されていたといえる。後『天皇陛下万歳』（筑摩書房、一九七一年一一月）として刊行されたが、「あとがき」によると結果として「改稿」するという案については、「井上光晴君に求められて季刊「辺境」に発表するにあたって、幾分の肉づけを試みるべく努めたが、「ひとたび固まったものは到底手なおしはきかないものだという教訓をえただけである。」と吐露している。

その他、森崎和江「二つのことば　二つのこころ」は、「辺境レポート」という欄において連載された。各々の回には副題があり、それぞれ「訪韓スケッチによせて」（第一次創刊号）、「与論島をめぐって」（第二号）、「活字のまえ・活字のあと」（第三号）、「浮遊魂と祖霊」（第四号）、「媒介者たちと途絶」（第五号）となっている。第七号からは「にほん文化誕生記」（全五回）の連載も担当した。

また、石牟礼道子「苦海浄土・第二部」が連載されたのも、この「辺境」であった。連載は、第三次第一〇号、つまり「辺境」第三次の最終号まで続くこととなった。この掲載分は、改稿の後、「苦海浄土　第二部　神々の村」として『石牟礼道子全集・不知火　第二巻』（藤原書店、二〇〇四年四月）に収録された。

以上挙げた三名に加え、第一次第二号に写真を発表する庄田明（庄田は日炭高松写真サークルに所属。『文化，資源としての〈炭鉱〉展「夜の美術館大学」・講義録』（企画・編集正木基、目黒区美術館、二〇一二年三月）にインタビューが掲載されており詳しい。）や詩人の山田かん、河野信子などは、九州サークル研究会「サークル村」元同人という共通点がある。第三次第二号では谷川雁の詩集「大地の商人」を「名著復刻」として取り上げていた。「辺境」は、「コンクリートの壁」である「検閲者たち」（＝体制側、多数派）に対し、「牙をたてる野鼠の群れ」（＝「私のなかの部落」「君のなかの部落」「読者のなかの村」、叛逆者、少数派）を創作の核に置いた。このことを考えると、「サークル村」で考えられていたことと幾分か共通点が見いだせる。

だが「辺境」は、単にそれのみで評価すべきでないことは以下の総目次を見れば一目瞭然である。永山則夫事件（永山則夫、井出孫六）、狭山事件（亀井トム）、連合赤軍事件（永田洋子、瀬戸内寂聴）、といった戦後の事件について当事者の声を掲載。戦中から続く問題として天皇制（松浦玲）、ヒロシマナガサキ原爆詩集（編・大原三八雄、山田かん）、土呂久ヒ素公害（川原一之、川原由紀子）などの取り組みもある。井上の具体的な創作の場であった文学伝習所も、第三次から「兄弟」にかけて特集をもっている。

連載一覧を概観すると、七〇年創刊でありながら、「大日本帝国」という国家の責任問題を、「現在」にも続く問題として再び問い直す問題意識が垣間見られる。「辺境」・「兄弟」が発刊されたのは、一九七一年～一九八九年であった。いま、この雑誌に目を向けることは七〇・八〇年代に井上光晴と執筆者たちがもった問題領域だけではなく、戦後を再び問い直す際の「眼鏡」を用意することである。この「眼鏡」には、「私のなかの部落」というレンズがはめられている。「部落」は創作過程で

訪れる対象であり、それ自体眼差される対象である。だが、それでもなお「私のなかの部落」なのである。他者の問題が、同時に自らの問題となり得ることに、常に意識的であろうとした雑誌、それが「辺境」・「兄弟」だったのではないだろうか。

これほどまでの雑誌が、近年本格的調査対象とされていないのはなぜなのか。「辺境」をまさに辺境へ追いやってしまわぬように、再考する場を創るために、総目次を掲載する。

【特集一覧】

「辺境」

第一次

・ソルジェニーツィン問題（創刊号）
・叛逆者たちの核（第二号）
・「天皇の世紀」を否定する（第六号／第七号／第一〇号）
・１９７１のスターリニズム（第六号）
・悪霊（第八号）
・竹内好（第九号）
・日本帝国主義の中国（第九号）
・文学は変革の名に値いするか（第一〇号）

第二次

・沖縄・日本列島の壊滅（第一号）
・わが人生の深淵（第二号）
・辺境レポート１９７６（第四号）

第三次

・連合赤軍事件の現在（第一号）
・文学伝習所とは何か（第一号）
・老後と医療の闇（第二号）
・現代演劇の先端（第二号）
・現代作家論（第三号）
・日本の暮らし（第四号）
・日中戦争（第四号）
・大衆芸能の世界（第五号）
・自分史あるいは他者の記憶（第六号）
（・追悼　上野英信　第六号）
・私の戦後文学（第七号）
（・本の特集　身近な本から時代を読む（第八号））
（・追悼　北山龍二（第九号））

「兄弟」

・《樺太＝サハリン》、いま遠く近く（第一号）
・北海道とわたしの仕事（第一号）
・〈都市の変容〉（第二号）

【資料①】　「辺境」第一次　創刊号　「編集後記」

私のなかにいくつかの部落がある、と何年か前に書いた。
―私は新しい小説を準備する時、必ずそれらの部落をたずね

るのだが、泥炭の波にあらわれる岸壁を歩いて行くと、きまってひとりの背の低い女に出会う。女はたいていキャベツを入れたような腹をかかえており、時には頭の白い赤ん坊を抱いていたりするが、私をみるといつも咽喉にかかった声で「こんな何もない所になにしにきたのですか」とたずねる。

なんでもない、ただきたかっただけだ、と私がこたえると、「金をくれるならおもしろい話をしてきかせるけど」と、女は私の腹をみすかしたようにいう。そして結局、私は女に金をやってしまうのだ。崩れた突堤の下で女は口からでた通りの順序で話しはじめる。

この部落は毎年一寸ずつ沈んでいくんですよ。海の底でもう三十年も炭を掘っとるもんだから海際に集っとる部落は自然そういうふうになるんです。満潮の時分、それまで石垣すれすれにきよった波がある年の夏、突然海べたの道路まで洗いよる。それで海べたに並んどった家は全部立退いたとですが、部落の高台の所まで波がくるにはまだ大分間があると思われたので、そこに立っとった家はずうっと商売をつづけとりました。

わたしが話をしとるのはまだ部落がつぶれない前のことだけどね。部落の高台で商売をつづけとった家の主人が、ある晩誰かに鉈で頭を割られたとです。はっきり鉈だといいきることはできんが、小さな刃物なんかじゃないことはわかっとった。柘榴のごと割れとったらしいからね。

商売をつづけとる家の主人が殺されてから、部落には妙なものがはやりだしました。どこの家でも兎を飼うようになったんです。一年飼えば仕入れた値段の二倍か三倍にふえるということだったが、ほんとのことをいえばみんな魔除けに飼っとったとよ。鉈で頭をぶち割られた事件があってから、ちょいちょい原因不明の小火があちこちにでる。一度も大事にならなかったが、兎を飼うとけば難を逃れられるというてね。女たちは臭い臭いというとったらしいが、火事になるよりはましだけんねえ。それで商売をしとった家の女たちは、男の相手ばかりじゃなくて、兎の相手までさせられとった。

私はこの女の話を『ゲツセマネの夜』に採用した。主人公である流英修が淫売屋の女に語った言葉としてである。流英修はさらに話の筋を自己流に変える。女のひとりが時分の飼っている兎小屋に火をつけ、その焼け跡から真赤な色をした十銭白銅や五銭白銅がざくざくとでてきたというのだ。『ゲツセマネの夜』の冒頭には、赤い百円銅貨を畳の上で意味もなくはじき回す女がでてくるが、むろん、その赤い銅貨と兎小屋の焼け跡から発掘された赤い白銅とは関連がなければならない。小説を作りだす私のイメージはこうしてだんだんとふくらんでいくのである。

雑誌『辺境』はまさしく、私のなかの部落を編集の核におく。もちろんそれは君のなかの部落、読者のなかの村でもあるのだが、自称前衛者たちの策謀に明け暮れる張子のごとき統一戦線を嘲笑しながら、コンクリートの壁にさえ牙をたてる野鼠の群れをふやしたいのだ。

あえて創刊の言葉を掲げなかったが、内容を点検していただくより仕方がない。よくもわるくもこれが私の編集した最初の

号であり、これから少くとも向う側にでて行こうとする根本の姿勢である。
　真実の文学はもともと心優しき叛逆者たちのものなのだ。誰か検閲者たちを顫えあがらせるような革命と性を描写する青年はいないか。

井上　光晴

▼既成品からほど遠い雑誌を作ろうと話合ってから発刊までに一年有半もかかった。ようやく創刊号を出すまでにこぎつけた。出航には時間がかかった。これからは運行表（季刊・年四回）にしたがって出航せねばならぬ。大事業だと覚悟している。
▼「辺境」はジャーナリストの間で、いろいろな解釈で紹介された。また紹介されてもいる。それらが、すべて「辺境」の一面を浮き彫りにしている。しかし、云いたりなさがある。「辺境」創刊号を見てくれ、それが「辺境」の答えである。
▼「辺境」は第一期十回を目途にしている。「何々文学」が何号、何周年を迎えている、と云って感激しあうのも意味ないこと。その時、すでに隙間風がふきぬけている。それよりも、自分自身の生命存在を燃焼し切ってしまうことの方がよっぽど意味あることだろう、どんなかたちにしろ。「辺境」が生命存在を燃焼し切ってしまうことを唯一最善のこと、と考えている。
▼なお、上野英信氏の「爆弾三勇士序説」は昨年「夕刊フクニチ」にその一部を発表したものである。今回、更に全面的に改稿「し、連載約千枚で完結を予定している。
▼「辺境」第2号は企画も終わりました。**8月中旬**に刊行します。

深見　勝

【資料②】　「兄弟」創刊号　「編集後記」

井上光晴

　季刊文芸誌『兄弟』を発刊する意図を、去年の秋、私はすでに明らかにしています。
「この際、〈風土と芸術〉の葛藤をとことんまで見極めたい。地方文化の本質的な表現を、書き手と読者を通じてあらわにしたい。……」（群像・八八年十月号）
　中央への通路、東京を中軸にした文壇へのステップとしての地方誌や同人誌がこれまで多すぎました。作者紹介欄で「芥川賞候補三回」などと持ち上げられ、そういう意味のない「価値」がそのまま地域の序列に結びついたり、仲間の書き手を文壇へ送るのが自分たちの仕事だと「編集後記」に臆面もなく記されたりする閉ざされた「社会」のなかで、地方の文学芸術はようやく衰弱し、卑小化してきたといえるでしょう。
　むろん例外はありますし、根差すものに根差した地方のグループを即座に幾つもあげることができます。しかし、おしなべていえるのは、それらのすばらしき人間群がつねに少数派であるという事実です。
　北海道の風雪にさらされたきびしい情熱を支えとし、九州、沖縄との連帯を望む『兄弟』は決して中央の文芸界に従属しま

せん。われわれの野望は大きな、ゆるぎない「辺境」に生きる思想の樹立です。

一九八九年三月

総目次

凡例

一、「辺境」第一次～第三次、「兄弟」の各号について、号数・発行年月日と、各記事のタイトル・執筆者・掲載頁を挙げた。

一、本総目次は「辺境」の内容を掲載された順序で、忠実に再現することをめざしたものである。

一、「辺境」第一次は季刊である。

一、各号に付された「目次」は必ずしも掲載順ではなく、また本文の標題と表示が相違することもある。したがって、本総目次は各号の「目次」を集めたものでなく、本文標題をもとに作成したものである。ただし、本文標題に「創作」「詩」などの作品ジャンルの記述がない場合は、目次の情報をもとに付した。

一、標題は本文表記に従った。

一、連載記事での連載回の表記はあえて統一せず、本文表記のままとした。

一、各記事は原則として本文の通りに配列したが、特集の記事など、ひとつのまとまりをなしているものは、そのまとまりを示す表題をゴチックで記したあとに、一字分下げてまとめて揚げた。

一、各項目の最後に、その作品・文書の掲載頁を表記した。

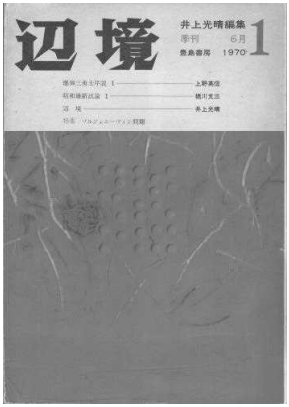
一、＊印は編者による注記である。

「辺境」第一次

編集者　井上光晴
発行者　岡田富朗　深見勝
＊第三号以降は、深見勝のみ
印刷所　工友会印刷所
＊第三号以降は、株式会社工友会印刷所
製本所　今泉誠文社（※第四号から表記あり）
発行所　豊島書房（東京都千代田区神田小川町三ノ二二東京古書会館内）
＊第三・四号は、辺境社（東京都千代田区神田神保町一ノ二六満容ビル三階
＊第五号は、辺境社（茨城県取手郵便局私書箱第一〇号）
＊第八号以降は、辺境社（茨城県取手市大字台宿三六　一の二〇の三〇三）

発売所　勁草書房（東京都千代田区神田駿河台二ノ三ノ五）
（＊第三号から表記あり）
＊第八号以降は、勁草書房（東京都文京区後楽二の二三の一五）
定価　七〇〇円
＊第七号以降は七五〇円
判型　B5版

創刊号　一九七〇年六月一日



表紙・目次・カット　斎藤義重

題字撰　大石巧芸
詩　銅鑼　井上光晴　口絵
写真　映画「地の群れ」より　口絵
詩　村　井上光晴　口絵
爆弾三勇士序説〔1〕　上野英信　12―87
昭和維新試論〔1〕　橋川文三　88―103
詩　風と土のけぶり　秋山清　104―105
雲脂　秋山清　106―107
泥田　秋山清　108―109
ぶなの樹に　大場康二郎　110―111
春三月　大場康二郎　110―111
我が荒地　清水昶　112―113
部屋　三木卓　114
エッセイ
キルケゴールの墓　埴谷雄高　115―118
わが辺境観　竹内好　119―121
写真
さまよえる日本人　その1　精神病院　石黒健治　122―130
辺境レポート
二つのことば　二つのこころ　訪韓スケッチによせて　森崎和江　131―139
ひらひら……　平岡敬　140―144
評論

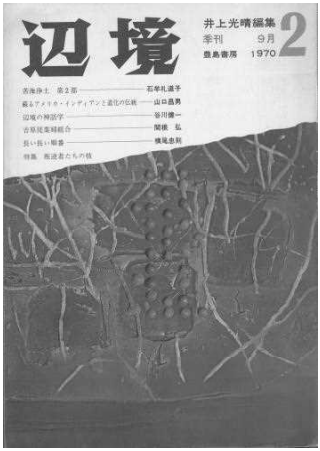
アメリカ小説の現代性　橋本福夫　145―152
文学にとって戦争とは何であったか　文学と戦後Ⅰ　渡辺広士　153―167

特集　ソルジェニーツィン問題

ソルジェニーツィン像　シドゥール（木村浩所蔵）　168

詩集「仲間はずれ」より　エベルト・パディリャ　訳・段定人
　去っていくもの、それはいつも子供ら　169―170
　仲間はずれ　170―172
　老いたる詩人たち、老いたる先生たち　172―173
　君は文学に拠って耐える　ソルジェニツィンへ　174―184
ソルジェニーツィンの周辺　内村剛介　185―191
密林と地下道の思想　木村浩　192―199
戯曲　安井侑子
　きぬという道連れ　秋元松代　200―217
創作
　銃器店へ　中井英夫　218―237
　欄外日記　長谷川四郎　238―248
　エレボス　ロバート・ハンター　249―264
　エレボス　解説　山口一信　264
辺境　井上光晴　265―287
編集後記　井上光晴　288

第二号　一九七〇年九月一五日



表紙・目次・カット　斎藤義重
題字撰　大石巧芸
巻頭詩「階級」　井上光晴
写真　庄田明
詩　深傷への眠り　黒田喜夫
苦海浄土・第二部　葦船の章　石牟礼道子　口絵　12―17
　18―34

蘇るアメリカ・インディアンと道化の伝統　境界・禁制・侵犯　山口昌男　35―62
辺境の神話学　柳田学と折口学　谷川健一　63―81
詩　挽歌（連作）　岡本潤　82―88
エッセイ
独楽　三島由紀夫　89―91
爆弾三勇士序説〔2〕　上野英信　92―109
昭和維新試論〔2〕　橋川文三　110―121
写真　さまよえる日本人　その2　おとぎの国　石黒健治　122―130
評論
戦後における近代主義　文学と戦後Ⅱ　渡辺広士　131―147
書評　未知なる《もの》の予感　埴谷雄高『闇のなかの黒い馬』　白川正芳　148―150
特集　叛逆者たちの核　151
朝鮮少年詩篇集成　呉林俊　152―157
三池監獄囚徒使役の記録　田中直樹　158―172
大正行動隊　河野信子　173―183
辺境レポート　二つのことば　二つのこころ
与論島をめぐって　生のはじまり・死のおわり　森崎和江　184―191
僧悪論序説　伊東守男　192―201
ジャズとロックとの断絶から結合へ　植草甚一　202―209
創作
吉原従業婦組合　関根弘　210―263
墓地　宗左近　264―280
祭りを追う男　畑山博　281―298
枯れ竹藪にかぶきけり　富士正晴　299―308
長い長い順番　横尾忠則　309―333
編集後記　井上光晴　334
深見勝

第三号　一九七一年一月二〇日

表紙・目次・カット　斎藤義重
題字撰　大石巧芸

写真　北井一夫　口絵
辺境レポート
写真　徴用被爆者　重田雅彦　7―14
掲載されぬ「三島由紀夫の死」と「国を守るとは何か」　井上光晴　16―23
評論
水の楽器　わが〈法廷〉　佐々木幹郎　24―33
無知の涙　永山則夫獄中ノート　34
解説　永山裁判と獄中ノート　無知の涙　井出孫六　35―40
永山則夫獄中ノート
金の玉子たる中卒者諸君に捧ぐ　永山則夫　41―81
詩
太平洋の墓地　メレヨン島地誌抄　中野嘉一　82―84
ソルジェニツィン文学の核　中本信幸　85―96
昭和維新試論〔3〕　橋川文三　97―108
裸の意識と観念の喜劇　文学と戦後Ⅲ　渡辺広士　109―125
写真　さまよえる日本人　その3　おんなたち　石黒健治　126―134
辺境レポート　二つのことば二つのこころ
活字のまえ・活字のあと　森崎和江　135―142
苦いスチェビ　韓国の徴用被爆者　平岡敬　143―154
〝シャモ系〟日本人　小笠原克　155―162
グリンゴ　M・ルーメーカー　訳・山口一信　163―178
解説　179
遍歴のはてに　立川洋三
情意の航跡　小寺和平　180―227
戯曲　七人みさき（テレビ・ドラマ）　秋元松代　228―270
苦海浄土・第二部　葦船の章　さくら　さくら　石牟礼道子　271―303
編集後記　井上光晴　304―309
深見勝

第四号　一九七一年四月二〇日

表紙・目次・カット　斎藤義重
口絵写真　北井一夫
本文写真　ヘノヴェス　東京画廊提供

写真　叛逆者の砦　北井一夫　口絵　12―15
叛乱へ　井上光晴
ショート・ショート
善人は若死にをする　大西赤人作品集　大西赤人　16
Time，you old Gypsy-Man　17
善人は若死にをする　17―19
計画　19―21

帰ってきた宇宙船　21―23
永遠の差別　23―24
ゴザンス・ブーム　24―26
刺激　26―28
寒波　28―31
回帰する時間　31―34
いつか来た道　34―36
ある一家　36―37
コンピューター0001　37―40
理想の国家　40―43
注油　43
船長殉死　44―47
夏休み　47―48
生き残った男　48―51
いやな相手　51―53
宇宙船オオスミ　53―56
狂気の時代　56―57
風疾る書物の季節　新宿から新宿へ　八木忠栄　58―61
詩
日本人にとって天皇とは何であったか　62―70
序説　国家と「天皇制」と　松浦玲
永山則夫新獄中ノート　無知の涙
金の卵たる中卒者諸君に捧ぐ　永山則夫　71―101
連載評論1

20世紀作家とコミュニズム　第一部　ドイツにおける〝文学と革命〟　ユルゲン・リューレ　訳・内山信　113　102—112
訳者のノート
評論
詩の言語と小説の言語　森川達也
『青年の環』詩論　松原新一
自由と存在と可能性の文学　文学と戦後Ⅳ　渡辺広士　125　114—124
写真　さまよえる日本人　その4　ふるさと　138—154
爆弾三勇士序説〔3〕　石黒健治　155—163
昭和維新試論〔4〕　上野英信　164—175
苦海浄土・第二部　神々の村　橋川文三　176—182
辺境レポート　石牟礼道子　183—189
野外食い歩きの記　杉浦明平　190—197
二つのことば　二つのこころ　浮遊魂と祖霊　森崎和江　198—206
佐世保橋を渡れ　矢動丸広　207—214
新ノアの洪水　訪中日録より　河野信子　215—227
抱擁　土方鉄　228—252
赤字屋　安城栄典　253—273
T市・雪による終焉　三枝和子　274—299
天上界の自由　私版西遊記　大井廣介　300—325
編集後記　井上光晴　深見勝　326

第五号　一九七一年七月二〇日

表紙・目次・カット　斎藤義重
本文写真　北井一夫
詩　崖　小野十三郎　8—13
評論
殺児論　松永伍一　14—38
辺境レポート

狭山事件　部落差別の呪縛　ミステリー物件
　連続自殺の謎に挑んで　亀井トム　39―66
わが孤島　松本健一　67―75
連載評論2
　日本人にとって天皇とは何であったか　松浦玲　76―95
　Ⅰ　政権・朝廷・国体　橋川文三　96―108
昭和維新試論〔5〕　石牟礼道子　109―119
苦海浄土・第二部　神々の村
忘れられてよいのか・三池　灰原茂雄　120―130
　三池の半未亡人たち　若松沢清　131―148
　誇り高き男の踏切日記
写真　さまよえる日本人　その5　家　石黒健治　149―158
辺境レポート
　二つのことば　二つのこころ　媒介者たちと途絶　森崎和江　159―166
　お国の情け　松永英美　167―175
　母の死　酒井真右　176―184
　ある学長の判決記事から　清水昭三　185―195
　朝鮮案内地図　昭和十二年版　呉林俊　196―205
　ロマン派の行動　ジョルジュ・シムノン論の一章　作田啓一　206―215
連載評論2
　20世紀作家とコミュニズム
　第一部ドイツにおける〝文学と革命〟
　ユンゲン・リューレ　訳・内山信　216―233
　美とエロスと天皇制　文学と戦後V　渡辺広士　234―244
　賤民の後裔　わが半生の屈辱と反抗　北原泰作　245―263
　浅草コレクション　その1　沢田正二郎　関根弘　264―277
　幸福な場所　吉良任市　278―295
　希望という標的　富岡多恵子　296―313
　革命派の牧師作家　沖野岩三郎のこと　小田切秀雄　314―321
　編集後記　井上光晴　深見勝　322

第六号　一九七一年一〇月二五日

表紙・目次・カット　斎藤義重
写真　さまよえる日本人
終章　死に行く土地　石黒健治　7―14
静かな生活　作家の仕事Ⅰ　井上光晴　16―19
特集　「天皇の世紀」を否定する
北一輝　唯一者とその浪漫的革命　松本健一　20―52
朝鮮人のなかの〈天皇〉遅れてきた一朝鮮人　呉林俊　53―97
連載評論3　日本人にとって天皇とは何であったか
Ⅱ前近代の民衆思想と天皇　松浦玲　98―123
賤民の後裔　わが半生の屈辱と反抗　連載2
第一章　出生と運命　北原泰作　124―138
詩　腐蝕する暦日の底で　山田かん　139―149
苦海浄土・第二部　神々の村3　石牟礼道子　150―158
写真　穴　三里塚報告　三留理男　159―166
辺境レポート
他人くたばれ　われ繁昌「鹿島」におけるわれわれの教訓とは何か　石川次郎　167―179
暗黒圏の使者・老刑事の妄執　続狭山事件　亀井トム　180―196
海女の変容　1971・対馬　河野信子　197―204
変形の日常　高野斗志美　205―212
特集　1971のスターリニズム
一九七〇年代のスターリニズム　フォークロアへの回帰が前進であるという逆説。レーニンの内在批判　内村剛介　213―228
光と闇の宴　ミハイル・ブルガーコフの世界　安井侑子　229―238
連載評論3
20世紀作家とコミュニズム
第一部ドイツにおける〝文学と革命〟　ユルゲン・リューレ　訳・内山信　239―248
滅亡・風景・知識人　文学と戦後Ⅵ

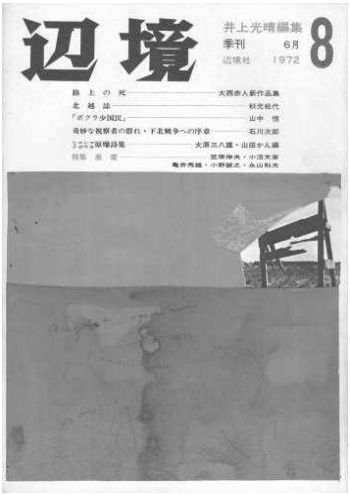
二十世紀文学としての現代文学　渡辺広士　249―260
わが帰郷　坂田昂　261―267
流れのほとり　江崎誠致　268―281
人民をわすれたカナリアたち　三木卓　282―296
編集後記　永山則夫　297―305
さまよえる日本人　終章　死に行く土地　井上光晴　深見勝　石黒健治　306
裏表紙裏

第七号　一九七二年三月一日

グラビア　中川誠雄
カット・レイアウト　斎藤義重
絵　山下菊二
写真　三池の今日と明日　中川誠雄
三組の花嫁　ヨーロッパ紀行　埴谷雄高
特集「天皇の世紀」を否定する
詩　ガタルカナル戦詩集　吉田嘉七　18―39
北風列車　阪口涯子　40―48
あーまたこの二月の月かきた　小笠原克　50―71
殺された三人
連載評論4　日本人にとって天皇とは何であったか　72―95
Ⅲ〝国のため〟をめぐって　松浦玲
にほん文化誕生記　口絵　8―17
Ⅰ《生む・生まれる》モノローグ　森崎和江　96―107
昭和維新試論〔6〕　橋川文三　108―117
詩　あんたコミュニスト？　永山則夫　118―121
「少年愛」の位相　稲垣足穂論　白川正芳　122―131
危機の意識とはなにか？　文学と戦後　最終回　渡辺広士　132―142
文学的飢餓状況　松本健一　143―151

賤民の後裔　わが半生の屈辱と反抗　連載3　北原泰作　152―172
第二章　幼少年時代
（「膏取り一揆」のノート　207頁の続き）　172
膏取り一揆　藤村欣市朗　173―207
辺境レポート
〝白〟への巨歩　犯罪の幻影化と謀略の実在化
狭山事件　その3　亀井トム　208―219
船が埋もれてある街　猪飼野雑感　金時鐘　220―226
皇居清掃奉仕団の涙　岡田さなえ　227―232
朝霞自衛官殺害事件の意味するもの　小沢博明　233―237
朝日ジャーナル　プレイボーイ　記者逮捕に対する訴え　柳田邦夫　238―239
三番出口　マイケル・ルーメーカー　訳・山口一信　240―254
トニオのブルース　林郁　255―285
わたしの赤ちゃん　井上光晴　286―293
編集後記　井上光晴　294

第八号　一九七二年六月二〇日



表紙カット　斎藤義重
写真　石黒健治　佐伯剛正
詩　一九七二年夏　井上光晴　8―10
ヒロシマナガサキ原爆詩集　編・大原三八雄　山田かん　大西赤人　11―28
路上の死　大西赤人新作品集　29
ある日曜日の午後　30
路上の死　30―32
松ちゃんとちっぽけ君　32―33

蝶の季節　33―34
二十一世紀に有り得るべき文芸上の随筆　35―36
フランス人形を下さい　37
二人の男　38―39
バート・ウェストの回心　39―41
無垢の笑い　42
薄荷ガムをどうぞ　43
生まれざりしならば　43―44
ある崩潰　44―45
Sorry，Wrong Number　45―48
空地にて　48―50
人にわが与うる哀歌　50―52
汚名　52―57
ボクラ少国民　山中恒　58―76
（広告『近代民衆の記録』　77）
朝鮮の声　渡辺広士　78―87
連載評論5
日本人にとって天皇とは何であったか
Ⅳ〝国のため〟をめぐって・再説　松浦玲　88―97
にほん文化誕生記〔2〕Ⅱ水中の墓　森崎和江　98―109
昭和維新試論〔7〕　橋川文三　110―117
特集悪霊
蒼ざめた夢象　日本悪霊考　笠原伸夫　118―126
ドストエフスキーの怨念　カルマジーノフをめぐって　小沼文彦　127―136
わからないおいうことからはじめて　亀井秀雄　137―143
愛か―無か？　永山則夫　144―151
「暗殺の美学」への拒否　小野誠之　152―158
賤民の後裔　わが半生の屈辱と反抗　連載4
第三章　青年時代の思想遍歴　北原泰作　159―175
苦海浄土・第二部　神々の村4　石牟礼道子　176―184
辺境レポート
奇妙な視察者の群れ　下北戦争への序章　石川次郎　185―199
最後の扉を打ちやぶれ―奥には完全犯罪と権力犯罪とがだき
あって潜んでいる―　狭山事件　その4　亀井トム　200―217
日本語を飲むということ飲まぬということ　呉林俊　218―227
向う側から来た人々　ネパールからの手紙　夫馬基彦　228―232
戯曲　ぼくらは生れ変わった木の葉のように　清水邦夫　233―247
ある娼婦の手記　匿名氏作　訳・山口一信　248―257
テレビ・ドラマ　北越誌　秋元松代　258―277
編集後記　井上光晴　278

第九号　一九七二年一一月一日

表紙　岩崎鐸
カット　斎藤義重

詩
うるしの芽　小野十三郎　8—9
現実といういやな言葉　10—11
また雨だよ　11—12
夕やけとギンヤンマ　12—13
中空のみち　13—14
特集竹内好

中国文学研究会結成のころ　竹内好　15—35
絶望の超克　川本三郎
日本浪漫派の自己否定　松本健一　36—43
光と闇　文学的想像力と〈全体〉としての世界　岡庭昇　44—52
にほん文化誕生記〔3〕Ⅲ朝毎に通ひましき　森崎和江　53—67
昭和維新試論〔8〕　橋川文三　68—79
賤民の後裔　わが半生の屈辱と反抗　連載5　北原泰作　80—88
第四章　軍国主義に抗して
写真　妊婦たちの明日　大石芳野　89—102
希望の共有　永山則夫獄中ノート　永山則夫　103—111
わが辺境　負性偏愛を撃破する　高橋康雄　112—122
辺境レポート　ウタリは何処へゆく　123—131
北海道旧土人保護法の周辺　三好文夫　132—140
桑原訴訟　平岡敬　141—145
〝地の群れ〟以後のナガサキ
忘却・潜伏から復活・返信への模索　鎌田定夫　146—152
人民と学者の共同立証—先行する大衆の彗眼について—
狭山事件　その5　亀井トム　153—173
現代〈開発〉　石川次郎　174—180
幻影の遠野　真壁仁　181—191
朝鮮の旅から　写真と文　松本昌次　192—201
特集　日本帝国主義の中国

朕カ忠良ノ臣民　熊沢京次郎　202—215
満州国と日本人—「満州」研究のために（序説）　安藤彦太郎　216—221
嗚呼「無我至純」　「満洲国」大同学院卒業生として　津久井信也　223—234
蠅の地獄　矢島輝夫　235—247
苦海浄土・第二部　神々の村5　石牟礼道子　248—256
編集後記　井上光晴　257

第一〇号　一九七三年三月一日

表紙・カット　岩崎鐸

百首歌　雄蘂変　塚本邦雄　8—15
昭和維新試論〔8〕　橋川文三　16—23
苦海浄土・第二部　ひとのこの世はながくして　石牟礼道子　24—32
特集　文学は変革の名に値いするか　33
ソルジェニツィンの幸福論　憫れむ幸福　内村剛介　34—49
悪魔のいない文学　中国近代リアリズム批判　中野美代子　50—62
名づけられぬものの怨み　マクベスの不安　岡庭昇　63—73
「怒れる若者たち」その後—ジョン・ウェインを中心として　高儀進　74—85
異国と言語—その志向的変容をめぐって　倉橋健一　86—95
革命的文学序説　河野信子　96—104
かくされた手を撃て—〈労働者文学の条件〉への疑問　高岡忠洋　105—112
プラハに生きる　チェコスロヴァキア・1972年　栗栖継　113—140
辺境レポート
さらば、ハイエナのきた村　六ヶ所村・1972　石川次郎　141—176
十字路の夜—展望は回想のうちに潜む—

狭山事件　その6　亀井トム　177―189
特集「天皇の世紀」を否定する
紀元八二千六百年　続・ボクラ少国民　山中恒　190―213
写真　中国報告　三留理男　214―220
朕カ忠良ノ臣民　連載2　熊沢京次郎　221―252
賤民の後裔―わが半生の屈辱と反抗　連載6
第五章　直訴という衝撃的な抗議　北原泰作　253―266
連載評論6　日本人にとって天皇とは何であったか
V　天皇の役割を顕在化させたもの　松浦玲　267―285
編集後記　井上光晴
深見勝　286

「辺境」第二次

編集者　井上光晴
発行者　深見勝
印刷所　工友会印刷所
＊第四号には、住所（工友会印刷所茨城営業所土浦市桜町一―一三野口ビル四〇二号）が記載。
発行所　辺境社（茨城県取手市大字台宿三六　一の二〇の三〇三）
＊第四号は、住所が（茨城県西茨城郡友部町旭町一一四―二一）となる。
発売所　勁草書房（東京都文京区後楽二の二三の一五）
定価　六九〇円
＊第二号より七〇〇円。
判型　A5版

創刊号　一九七三年一〇月一五日

表紙　斎藤義重
本扉　山下慶助
本文カット　市村修
グラビア　サクロモンテ・グラナダ
水路　大石芳野　2―7
母と父〈連載〉第一部　父の死　井上光晴
動揺記〈連続射殺魔〉　本多勝一　8―29
永山則夫　30―66
〈広告　集成社・文芸単行本　67〉
ヴェニスの肉塊　丸山真男論　松本健一　68―83
ソルジェニツィンの幸福論・2　内村剛介　84―93
わらいと幸福
日本人にとって天皇とは何であったか・7　松浦玲
天皇ヒロヒトの軍隊観　橋川文三　94―103
昭和維新試論〔10〕　104―117
ボクラ少国民・その3　山中恒　118―148
われら　大日本青少年団　熊沢京次郎　149―169
朕力忠良ノ臣民　完結
賤民の後裔―わが半生の屈辱と反抗・7〔第六章〕　北原泰作　170―188
衛戍刑務所の受刑兵
辺境レポート
狭山事件・その7　亀井トム　189―199
追込み　差別権力は何と何を隠そうとしたのか？
泣き虫学級　北林正　200―214
特集　沖縄・日本列島の壊滅
ヤクルト配達人のことなど　わが沖縄経験　佐木隆三　215―225
石油戦争の中の金城湾　高嶺朝一　226―233
組みこまれての疎外　触れるもののなやみ　牧港篤三　234―243
村と愛に関する私記　清田政信　244―251
古代琉球の神々と精神性　勝連敏男　252―261
小さい天皇たち　太田良博　262―273
沖縄県民と自衛隊　野里洋　274―282
在沖縄米国陸軍・端慶覧部隊第五四九需品科中隊元軍曹（E4）

黒い訣別〔創作〕　ダン・バラズ　283—292
編集後記　訳・高嶺朝一　星雅彦　293—334
井上光晴　335—336

第二号　一九七四年六月三〇日

表紙　斎藤義重
目次・写真構成・カット　市村修
写真　個人的ヨーロッパ　石黒健治
詩　一九七四年夏　井上光晴　2—4
特集　わが人生の深淵　5
毛沢東思想とヤマギシズム幸福学園　新島淳良　6—25
世外　瀬戸内晴美　26—57
さわやかな欠如
にほん文化誕生記／第二部　森崎和江　58—69
創作　苦海浄土　第二部　石牟礼道子　70—80
詩
下北戦争　その終章　続さらば、ハイエナのきた村　石川次郎　81—99
辺境レポート
狭山事件・その8
脅迫状は誰がさし入れたか?—犯行の発見時における「石川アリバイ」と「犯人切りかえ」の同時的成立について　亀井トム　100—115
付審判請求から抗告へ
一九七四年三月下旬現在の大西赤人問題　大西巨人　116—128
禁忌と自由—一九七四年ソ連における文学状況　中本信幸　129—145
日本少国民文化協会　ボクラ少国民　山中恒　146—182
何という「無意味な死」　四宮俊治の遺された三冊のノート　183—210
創作　深淵　大西赤人　211—222
戯曲　いぇろうあんちごうね　特別攻撃隊スターダスト　菅孝行　223—258
創作　雪物語　石黒健治　259—279

編集後記　井上光晴　280

第三号　一九七五年四月一〇日

群像　絵　大里宏峻
表紙　斎藤義重
クレバスの中の政治と文学　井上光晴　2―16
日本人にとって天皇とは何であったか　第二部　松浦玲　17―31
　生きている大日本帝国　朴寿南　32―47
途上の夢　48―64
苦海浄土　第二部　その10
　ひとのこの世はながくして　石牟礼道子　65―）
（広告　文芸季刊誌すばる
地球の土台が揺らぐとき　ソルジェニーツィンとわたくしたち　山西英一　66―92
黙狂する人間　川西政明　93―109
差別の矮小化　ことば告発の闘いについて　土方鉄　110―118
現実に開かれた精神　75年の文学　松原新一　119―133
ボクラ少国民　その5
　撃チテシ止マム　山中恒　134―187
にほん文化誕生記　第二部　その2　鮭神信仰　森崎和江　188―204
続さらば、ハイエナのきた村
　下北戦争　その終章　石川次郎　205―222
辺境レポート
　甲山学園事件　私は、絶対に殺していません！　沢崎悦子　223―236
　「抹殺」を許すな　甲山学園事件における権力との闘い　西定春　237―245
　甲山学園事件　上野勝　246―249
狭山事件　その9「両側の矛盾」の探求
　自己矛盾の発見こそ相手に打ち勝つ第一歩　亀井トム　250―284
詩　躍る男（編集後記）　井上光晴　285

第四号　一九七六年五月一日

表紙／本扉／カット　横尾龍彦

春　Wiosna　ブルーノ・シュルツ　訳・工藤幸雄　10—59

「人員」と「人民」についての考察　ポール・グッドマン　訳・鷹井和彦　60—74

専制天皇制は七世紀に終った　銃を持した女帝まで　佐々克明　75—82

特集　辺境レポート１９７６　83

無知の悲劇　狭山事件１９７６　構成・土方鉄　84—116

石川一雄獄中アピール

解説　権力犯罪を糾弾する石川一雄　土方鉄　117—122

辺境レポート

自白はこうしてつくられた　〝無知の悲劇〟—狭山事件　青木英五郎　123—178

狭山事件・その10（11）

部落史と〝狭山〟をつらぬく視点の変革　亀井トム　179—199

埋めつくせぬ文字　徴用被爆者の一九七五・秋　桑名靖治　200—223

もうひとつの昭和史　北上山系に生きた人々　田中義郎／塚田博康／陸口潤　224—253

苦海浄土　第二部　ひとのこの世はながくして　その２　石牟礼道子　254—264

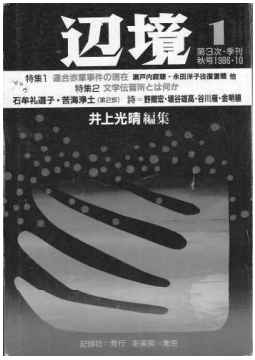
編集後記

詩　一九七六年春　井上光晴　265—267

「辺境」第三次

編集者　井上光晴
発行所　株式会社記録社
発行者　庄幸司郎
（東京都中野区中野五―二四―一六中野第2コーポ二〇一号
発売所　株式会社影書房（東京都豊島区駒込九〇九号）
＊第二号から株式会社影書房（東京都豊島句駒込一―三四―二昼クレスト駒込九〇九号）。
組版・オフセット印刷
形成社印刷株式会社（制作入野正男）
（東京都新宿区水道町三九番地）
本文印刷　萩原印刷
＊第二号から組版・本文印刷は新栄堂、オフセット印刷は形成社となる。
製本　今泉誠文社
＊第七号から若戸製本社
定価　一五〇〇円
判型　A5版

第一号　一九八六年一〇月一日



表紙・目次構成　竹内和重
本文カット　松本進介

筑豊・万葉の旅―アリラン峠の巻　上野英信　2―4
詩四編　野間宏
「空虚」の囲われ者　5―6
花弁の夜　6―7
栄光の霞　8―9
葬い鳥　9―10
苦海浄土（第二部）―花ぐるま　石牟礼道子　11―23
特集　連合赤軍事件の現在
大谷恭子弁護士の最終弁論（抄）　24―44
控訴審判決を前にして　植垣康博　45―50

瀬戸内寂聴・永田洋子＝往復書簡　瀬戸内寂聴　50―61
永田洋子への手紙　瀬戸内寂聴　61―78
（広告　集英社　79）
詩　不能　谷川雁　80―81
生活の茫然と衝撃―小熊秀雄・小林秀雄・中野重治と現在　小田切秀雄　82―97
「心」の力―現代と文学　大橋健三郎　98―121
いま戦後文学とは何か　中野孝次　122―130
ルポ・老人病院　安田陸男　写真・田邊順一　131―141
東大から沖縄へ―技術の退廃を見て　宇井純　142―152
先人はいなくとも、今は―若者とインドといのち　森崎和江　153―164
マルク航海記　鶴見良行　165―192
グラビア＋文　AS-IT-ISNESS　①ケイロ―ホームの昼食　石黒健治　193―202
詩　木霊　埴谷雄高　203
ブルーノ・シュルツ『書物』　訳・工藤幸雄　204―218
金明植詩集『帝国の首枷』
帝国は　果たして　このままでいいのか―民衆解放一九八五　新井優　219―256
ルポ・棄老―その今日的現象　257―265
名著復刻　再び「紅楼夢」について　杉浦明平　266―269

特集　文学伝習所とは何か
辺境の季節　松本太吉　270―272
九年目の無念さ　伊藤伸太郎　272―274
前橋文学伝習所　片山泰佑　274―276
私の視点　和田伸一郎　277―278
自由　真砂友子　278―280
昭和五十二年夏　西村しず代　280―282
伝習所と自分　吉田典子　283―284
テントは崎戸の海の色か　中山茅集子　285―287
わが内なる伝習所　遠矢政行　287―289
小説の心遊ばせる日々へ　赤谷正樹　289―291
学校　秋沢陽吉　291―293
想像力を鍛える　坂本次郎　293―295
一九八六年早春日記　河内愛子　295―297
文学伝習所、上海へ　脇川直彦　297―299
十年かけて　高橋佑子　299―301
砂　井上光晴　302―311
編集後記　井上光晴　312

第二号　一九八七年一月一日

表紙・目次カット　竹内和重
本文カット　松本進介

詩五篇　小野十三郎　2—5
明治のすき焼　5—8
さしかえ幻燈　8—11
川どめ　12—13
まちがった国で　14
時間はまだある

特集1　老後と医療の闇
もう一つの老後—母子家庭の場合　関千枝子　15—43
〝豊かな国〟の底辺を行く
死なせ方　医療の中でともに生きる者の生命を考える　副島洋明　44—63

棋士の叛乱　江崎誠致　64—78
『収容所群島』の周辺　木村浩　79—97
差別と文学　南アフリカの場合　土屋哲　98—109

特集2　現代演劇の先端
深夜の話—闇の中の妄想　蜷川幸雄　110—117
『こんな話』演出メモ　木村光一　118—121
戯曲　こんな話（原題 Sizwe Bansi is Dead）
エイフル・フガード
ジョンカニ
ウィンストン・ヌツショナ　共作
訳・木村光一
グラビア＋文　AS-IT-ISNESS ②植物の城　石黒健治　122—160
ある無名戦士の肖像　小樽、多喜二の盟友　小笠原克　161—170
ヒロシマ・ナガサキ・サセボ
一九八六年八月のノートから　鎌田定夫　171—186
李ハルメ　金容権　187—205
生活誌　206—213
百姓　草野実馬　214—218
峡暮らし　草野ふさえ　219—224
（広告　集英社　225）
詩集『大地の商人』上木事情　丸山豊　226—229
名著復刻　大地の商人　谷川雁　230
商人　230

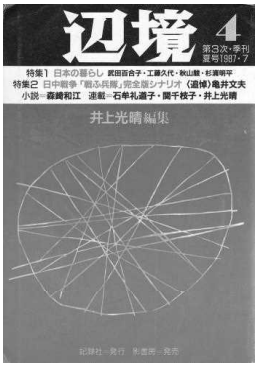
母　231
毛沢東　231—232
故郷　232
丸太の天国　232—233
革命　233—234
異邦の朝　234
人間A　234—235
晩夏郵便　235—236
東京へゆくな　236
漁夫の読書　236—237
請願　237—238
隊へ　238
破産の月に　238—239
あれたちの青い地区　239—240
原点が存在する　240—243
新鋭創作
凍える魂　河野修一郎　244—283
暗渠　松本太吉　284—304
苦海浄土　第二部—花ぐるま（二）　石牟礼道子　305—311
編集後記　井上光晴　312

第三号　一九八七年四月一日

表紙・目次カット　竹内和重
本文カット　松本進介
詩
帰宅すべき時刻に　丸山豊　2—3
蛇の話　岸本マチ子　4—5
特集　現代作家論
継走者による「埴谷雄高」論　池田晶子　6—18
（広告　集英社　19）
金時鐘論　塩野実　20—40
鎖国社会は身体を剥奪する—村上春樹現象なるものについて　岡庭昇　41—55
第三世界の映画　岩波ホールの上映作品を主にして

恋愛論　高野悦子　56―67
歴史のクレバスの中で―熊沢光子の場合　岩橋邦枝　68―75
寿ドヤ街の断面図　山下智恵子　76―85
獄中記　佐伯輝子　86―95
グラビア＋文　AS-IT-ISNESS ③ヨーロッパ冬　荒井まり子　96―126
三十五歳の断想　石黒健治　127―136
即身詩集―栗生楽泉園の文学　文・カット　渡部敏行　137―150
新鋭創作　編・村松武司　151―175
白い道　木下史高　176―208
影　伊藤伸太郎　209―225
二月に　吉田典子　226―243
連載②〝豊かな国〟の底辺を行く―母子家庭の場合　関千枝子　244―263
小説の書き方(1)　井上光晴　264―303
「中国へ病院をおくる運動について」―編集後記にかえて―　井上光晴　304―305

第四号　一九八七年七月一日



表紙・目次カット　竹内和重
本文カット　松本進介
特集1　日本の暮らし
七月の日記　武田百合子　2―6
（広告　集英社　7）
現代食卓考　工藤久代　8―25
団地通信　秋山駿　26―64
渥美折立日記抄　杉浦明平　65―71
小説
うぶめ飛ぶ頃　森崎和江　72―123
現代文学の問題
―磯田光一『左翼がサヨクになるとき』をめぐって

宮内豊　124—134
グラビア＋文　AS-IT-ISNESS ④ニュー遺跡　石黒健治　135—144
特集2　日中戦争
再録シナリオ　亀井文夫「戦ふ兵隊」完全復刻版
土本典昭／協力・瀬川順一、楠木徳男
日本ドキュメントフィルム／写真協力・東宝　145—172
追悼・亀井文夫
亀井文夫の〝埋葬〟者はだれか　土本典昭　173—180
真実貧困時代の映像代書人—知られざる亀井文夫　楠木徳男　181—198
人びとの国境—アムール断想　林郁　199—210
そらもう、かってにせ！　と言うわな
—この私の戦争責任とはなにか　彦坂諦　211—226
名著復刻
詩集『星座の痛み』　野間宏　227—250
野間宏処女詩集『星座の痛み』について　篠田浩一郎　250—253
死刑に抗して　益永利明　254—268
益永君のこと　荒井まり子　268—270
（広告　『写真集　作家の肖像』影書房刊　271）
連載3　苦海浄土（第二部）花ぐるま（三）　石牟礼道子　272—283
連載③　もう一つの老後—〝豊かな国〟の底辺を行く　関千枝子　284—312
小説の書き方(2)　井上光晴　313—327
編集後記　井上光晴　328

第五号　一九八七年一〇月一日

表紙・目次カット　竹内和重
竹内好の手紙（上）一九三六—一九五二　2—61
—松枝茂夫・武田泰淳・家族宛
特集　大衆芸能の世界　62—73
暗闇の芸能　村崎義正

筑豊『芝居』考　松本太吉　74―101
大衆演劇のメッカ―嘉穂劇場
筑豊文学伝習所（上尾由憲・坂本次郎・仲山博實・松本太吉／写真・樋口司朗）　102―110
グラビア＋文　AS-IT-ISNESS ⑤花やしき　石黒健治　111―120
特集　大衆芸能の世界
佐賀にわか師・筑紫美主子の道
西村しず代／取材協力　写真撮影・山田きみ子／インタビュー・山田きみ子、赤木喜美代／愛仙寺ルポ・岡野まゆみ、山田きみ子／観客の声採集・道井民平、辻洋子／ビデオ・副島篤子　121―147
歴史の教訓―すこし―アーノルド・トインビーに学んだことなど　竹之内静雄　148―168
開業日記―わたしが這っている精神医療の道　赤石本二　169―200
アンジェイ・ワイダ―今日ここでの真実を求める勇気の軌跡を追って　工藤幸雄　201―241
狭山裁判探求（上）―連続的敗北と立直しの道　第二次再審請求だけでよいのか　亀井トム　242―263
創作
波うちよせる家　遠矢徹彦　264―301
宇宙への、小さな階段　脇川直彦　302―316
連載４　苦海浄土（第二部）花ぐるま（四）　石牟礼道子　317―331
編集後記　井上光晴　332
書評特集　原稿募集　「辺境」編集部　332

第六号　一九八八年一月一日

表紙・目次カット　竹内和重
創作
炎と泥の祭　連載第一回　佐江衆一　2―47
影踏み　簾内敬司　48―83
自動ドア　中山茅集子　84―98

特集　自分史あるいは他者の記憶
プロキノの頃　小森静男　99―107
私のふるさと徳の山
―ダムに沈む村の一九八七年十一月終わり　増山たづ子　108―112
張義均への手紙　新屋英子　113―117
みんなとともにあろうとした父へ
―みんなに背を向けた娘から　白井愛　118―124
ヒヨコを育てながら　徳江元雄　124―127
〝魚湧く海〟白保と共に　楠山忠之　127―131
「うちなびかせられぬ」民　伊藤ルイ　131―134
半戦中派時代の自分史―戦争と農村と　西成辰雄　135―140
島田敬一―築地小劇場周辺　田村悟史　140―146
めぐりあういのちの輪　チカップ美恵子　146―150
'69ｉｎ大阪　東條真理子　150―153
自分史　日高暢子　153―157
大道ミュージシャン　片井雲子　157―160
追悼　上野英信
写真　ありし日の上野英信さん　本橋成一　161―168
【再録1】天皇制の「業担き」として　上野英信　169―176
【再録2】わがドロツキストへの道　上野英信　176―181
硬山の麓の青春―回想の上野鋭之進　植田和雄　182―186
もうひとつの顔　真尾悦子　187―188
さようなら！　上野英信さん
その日まで　えと文　山福康政　189
どの場所から、どうつき合うのか…　二宮善宏　190―192
―上野英信先生のこころ　本橋成一　193―194
〝長い旅〟へ　裘昭　194―195
買いにきた男　井上光晴　195―198
竹内好の手紙（下）一九三六―一九五二
―松枝茂夫宛　梶山盛夫　199―227
中国戦線従軍医の記録
（広告　『写真集　作家の肖像』）　267
中野重治と現代　228―266
―漱石・柳田国男につながる「新しさ」の線において　杉野要吉　268―288
狭山裁判探求（下）―糾弾の最高形態としての高松事件回顧
狭山の正常化を味方がさえぎる悲喜劇　「解放の神学」は
何をもたらすか？　亀井トム　289―319
編集後記　井上光晴　320
書評特集　原稿募集　「辺境」編集部　320

第七号　一九八八年五月三〇日

表紙・目次カット　氏原忠夫

武田泰淳　戦地からの手紙　一九三七―一九三九
―竹内好・松枝茂夫宛　2―12

特集　私の戦後文学

来訪者達　梅崎恵津　13―19

日常　梅崎史子　20―23

椎名麟三、晩年の断片　森禮子　24―27

野間宏とわたし　岩崎邦枝　28―36

埴谷雄高・『構想』のころをめぐって　久保田正文　37―43

廃墟の啓示―私と戦後文学　日野啓三　44―51

文体への接近　木下史高　52―56

花田清輝論―巨大なる集団的思考　武隈喜一　57―61

長谷川四郎氏と『シベリヤ物語』　福島紀幸　62―67

私にとっての土屋文明　片山泰佑　68―71

《啞》の叫ぶ声―山川精詩集『哈爾賓難民物語』　小笠原克　72―78

読み手の変容―戦後文学と現代　篠田浩一郎　79―83

意志の署名―スタイル、について　高野斗志美　84―107

解体感覚と全体志向―戦後文学の断絶と持続　大橋健三郎　108―125

（広告　安江良介『孤立する日本』影書房刊
グラビア＋文　AS-IT-ISNESS ⑥地上げとヌード　126―）

アビンジャー村の野外劇　石黒健治　127―136
E・M・フォスター
訳・藤田省三

短歌　137―152

ボストンバッグは膝に乗せ
男と女の試み（二九首）
うしろの正面（一八首）
時にブランコ（七首）
風のうちそと
都市の雨（一〇首）　藤岡巧　153―159

乾燥花（一〇首）　勝瀬澄子　160―163
まぼろしのパン（一〇首）
創作
納期　和田伸一郎　164―173
魂という薬　嶋田和子　174―180
（広告『写真集　作家の肖像』影書房刊　181）
魂の力（連作２）　簾内敬司　182―218
炎と泥の祭　連載第二回　佐江衆一　219―244
連載５　苦海浄土（第二部）人間の絆　石牟礼道子　245―251
小説の書き方(3)　井上光晴　252―274
上告理由書（一九八七年一二月一七日）韓国の獄中から
人間理性、民主主義、法治主義の勝利を、徐俊植の勝利を固く信ずる　徐俊植　275―291
編集後記　改題・徐京植　井上光晴　292

第八号　一九八八年一〇月一五日

表紙・目次カット　氏原忠夫
本文カット　てるしま・やすひろ
詩　二十歳の空　岸本マチ子　2―3
創作
呉清源の称号　江崎誠致　4―17
（広告　『朝鮮戦争の起源』シアレヒム社刊　18）
戯曲　悪路王と田村麻呂　三幕　定村忠士　19―62
―荒蝦夷不二の火影
創作
連作３　菩薩花　簾内敬司　63―110
グラビア＋文　AS-IT-ISNESS ⑦　祭が消えた秋　石黒健治　111―120

創作
炎と泥の祭　連作第三回　佐江衆一　121—147
痴人の日記・三日間　渡部敏行　148—162
清話　無責任な農産物輸入自由化　橋本盛作　163—167
レポート
白い太陽—特別養護老人ホームを訪ねる　西村しず代　168—178
本の特集　身近かな本から時代を読む
公のことばと私のことば　彦坂諦　179—188
『乃木希典』に寄せて　横川澄夫　188—192
渡辺清の〈遺産〉　森馨子　192—196
森川久美の漫画はスゴイ！
子どもの目に映った戦争　中矢誠　196—198
『あのころはフリードリヒがいた』を読んで　小島清孝　198—203
柳条の橋　河内愛子　203—207
森の思想　大輪盛登　207—211
資料としての『白鯨』　浜口尚　211—213
刺す娘、狂う娘　東條真理子　214—218
〝ふつうの人〟と〝ふつうでない人〟のあいだ　大木三輪　218—221
永遠の肖像　長神漢　221—223
昭和民衆絵草子—自然普通の人間交流条件を描く手仕事　船木拓　223—226
227—230
忘れない写真　西井一夫　230—235
つきぬけた〝明るさ〟が滲みでる　楠山忠之　235—239
どんづまりからの〝回生の旅〟　渡辺知樹　239—243
〝公害〟を記録する視点　佐藤譲美　243—245
戦中・戦後の記録を
—戦争の狂気と酷薄が風化しないために—　坂圭介　246—249
肉の重み　住連木政司　250—251
「黄色い河口」は少年を組織する　秋沢陽吉　251—255
歴史のなかの「真理」　入野正男　255—258
『文学伝習所の人々』火の巻を読む　片山泰佑　258—266
住みにくい時代の個のきしみ　河野修一郎　266—269
魂の無限への飛翔—白井愛『悪魔のセレナーデ』によせて　寺岡秀人　269—276
忘れがたく、離れがたく　太田昌国　277—280
自由席　近松秋江の風貌　鈴木康之　281—287
（広告　安江良介『孤立する日本』影書房刊　288—）
採録シナリオ　TOMORROW 明日
原作・井上光晴／脚本・黒木和雄、井上正子、竹内銃一郎／監督・黒木和雄　289—317

編集後記　井上光晴　318

第九号　一九八九年二月二八日

表紙・目次カット　氏原忠夫
本文カット　てるしま・やすひろ

詩
ちょっと待った―ゆく風の挨拶―　大益牧雄　2―8
創作詩集
ベストカップル　志水真樹　9―30
写真館のある通り　吉田典子　31―46
海の声　日野範之　47―86
スニの墓　磯貝治良　87―105
みかえり阿弥陀　谷口潮　106―122
究極の逆転優勝　せつふみみつ　123―129
途中下車　河内愛子　130―145
まとわりつく輪とその一部　野羽一雄　146―164
追悼　北山龍二
遺稿　ハリネズミ　北山龍二　165―175
ココリアの残紅
北山君のこと　河内愛子　175―192
グラビア＋文　AS-IT-ISNESS ⑧　昭和最後の正月　193―194
石黒健治
土呂久羅漢（上）　文・川原一之　195―204
はん画・川原由紀子
土呂久羅漢1　笑観音　佐藤ハルエ像　205
土呂久羅漢2　虫喰地蔵　靄野クミ像　206―220
土呂久羅漢3　夢繋不動尊　佐藤正四像　220―234
自由席　離別の長春停車場―中国吉林省長春市・東北師範大学研究生・鄭京淑嬢への手紙　滝沢秀樹　235―247
（広告『兄弟』）　248―253
ドキュメンタリーの鉱脈・亀井文夫の生涯
―その追いつづけたカメラの眼　楠木徳男　253―254
シャモはシサムになれるか　254―296

チカップ・伊賀美恵子　297—311
炎と泥の祭　連載第四回　佐江衆一　312—330
連載6　苦海浄土（第二部）人間の絆（二）　石牟礼道子　331—339
二十四日の金曜日—「編集後記」にかえて—　井上光晴　340

第一〇号　一九八九年七月三一日

表紙・目次カット　氏原忠夫
本文カット　てるしま・やすひろ
日記　1949-1951　橋川文三
橋川文三の「日記」について　井上光晴
日記　3
追悼　林南寿先生　永山正昭　4—104
グラビア＋文　AS-IT-ISNESS ⑨アメリカ「平成元年」　石黒健治　105—126
仏教思想・左翼運動・戦後文学
対談　埴谷雄高・瀬戸内寂聴　127—136
土呂久羅漢（下）　文・川原一之　はん画・川原由紀子　137—158
土呂久羅漢4　魚遊仙人　佐藤三代士像　159
土呂久羅漢5　痒痒行者　佐藤高雄像　160—173
土呂久羅漢6　流離天女　富高コユキ像　174—187
「諒闇」の社会的構造（再録）—「昭和元年」の新聞から　藤田省三　187—200
「明日」の映画監督への私信　神馬亥佐雄　201—221
生きる情熱と文学の質
対談　黄皙暎・井上光晴　聞き手「辺境」編集部　222—225
創作戯曲　景清　船木拓　226—240
連載七　苦海浄土（第二部）　実る子　石牟礼道子　241—261
炎と泥の祭　連載5　佐江衆一　262—275
私評『中国還魂紀行』庄幸司郎著　山川精　276—304
305—307

井上光晴さんとの三〇年
―『辺境』にかかわっての個人的回想と謝辞　庄幸司郎　308―320
詩　長い溝―『辺境』終刊に際して―　井上光晴　321―323
第三次季刊『辺境』一～一〇号総目次　324―328

「兄弟」

季刊　文芸誌「兄弟」
編集代表　井上光晴
発行所　株式会社影書房（東京都豊島句駒込一―三四―二昼クレスト駒込九〇九号）
兄弟事務局（函館市元町二三―一一越中谷方）
発行者　松本昌次
本文印刷　株式会社新栄堂
装本印刷　形成社印刷株式会社
製本　若戸製本社
定価　一五〇〇円

創刊号　一九八九年三月二五日

表紙装画装丁　司修

詩　わが函館―「創刊のことば」に代えて　井上光晴　2―5

夜の階段風燈火　埴谷雄高　6―7

特集1　《樺太＝サハリン》、いま遠く近く

国会における《サハリン残留朝鮮人問題》　8

第百十二回国会衆議院内閣委員会議録第五（抄）

（一九八八年四月一四日）

質疑・衆議院議員五十嵐広三／答弁・外務大臣宇野宗佑

外務省アジア局長藤田公郎ほか　9―26

インタビュー　五十嵐広三氏に聞く―サハリンに遺棄された

朝鮮人　聞き手・小笠原克　27―39

本庄陸男の《樺太》素材作―朝鮮人像に添って　小笠原克　40―72

白き蝶　短歌五十首　管野美和子　73―75

かくも熱き亡霊たち（上）―樺太物語　中山茅集子　76―113

仕事とあそび　原田康子　114―117

噂　小檜山博　118―120

詩

八角三尾―ぼくのハーモニカと即興詩「兵征元年」　江原光太　121―123

幻の者　野間宏　124―125

ひとり異をたてる…―新転向時代と戦前の民衆転向

「性」の浄化に向けて問うこと　塩野実　126―136

幽鬼からの脱出―「金魚」と「幽鬼の街」をめぐって　大河内昭爾　137―147

ニュー・オーダー　音楽界の不安定な権威　松本進介　148―157

（広告　文・イラスト　松本進介　158―159）

昭和ガリ版屋物語①　画と文　山福康政　160

黒しぐれ―坪野哲久を悼む　澤田誠一　161―168

交錯のある配列―伊藤整・ヘミングウェイ・ジョイス　野坂幸弘　169―172

いかに《現実》を描くか―鶴彬と秋山清　坂本幸四郎　173―179

劇としてのフォーネー　高野斗志美　180―190

詩

哈爾賓難民物語　山川精　191―209

消えた農機具　山田伍市　210―219

特集2　北海道とわたしの仕事

鍊場―でめんとりの回想　西野精　220―223

馬たちを忘れない―「原野にとぶ橇」のこと　加藤多一　224―233

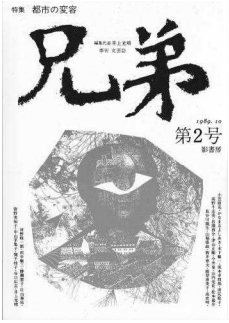
中国の作家に学ぶ　神谷忠孝　234―236

答　米坂ヒデノリ　236―237

なぜ、北海道なのか―自分史的に　かなまる・よしあき　238―239

ふしぎな出会い―安益泰の「愛国歌」をめぐって　工藤久代　240―241
小説　木下順一　242―244
莢果　木宮節子　245―260
フルコース　吉井よう子　261―275
谿　吉田典子　276―300
九月　関千枝子　301―315
まつろわぬ人びと　連載1　316―339
（広告　340―343）
編集後記　井上光晴　344

第二号　一九八九年一〇月二五日



表紙装画装丁　司修

特集〈都市の変容〉
座談会　都市を読む　小笠原克／かなまるよしあき／木下順一／坂本幸四郎／田尻聡子／司会・高野斗志美　2―35
変容の構造と想像力　岩淵啓介　36―52
船とトンネル　ポート・テン　今井泉　53―62
私と青函連絡船　坂本幸四郎　63―71
原発と〈忘郷〉の海―中島みゆき「吹雪」に　山内亮史　72―87
絶えられないほどの苦痛を買いにゆこう　文・イラスト　松本進介　88―89
詩
駅、詩の全行はすべて異教である　底意の町にて／チャーチルという町／皇族駅／泉という駅／狐の鼻という寒い駅／プルーストの非実在の町／さらば、プラハ中央駅よ／カルカッソンヌ霧駅　長谷川龍生　90―128
昭和ガリ版屋物語②　画と文　山福康政　129―136
詩
北の痛感　春へ／藻琴山／ニセコ・アンヌプリ／箪笥／冬の壺／暗澹地方　新井章夫　137―144
隔離の園の子どもたち(1)―ハンセン病患者児童の作品を読む　能登恵美子　145―179

白い花　高史明　180―196
風塵記　河野修一郎　197―221
掘り出し物語　田中順三　222―251
闇の中の白い顔　木下順一　252―274
短歌
祭りにあらねど（二九首）　勝瀬澄子　275―277
友へ（二九首）　片山泰佑　278―280
ああ〃サハリンへ行く〃日本人
対話　管野美知子／小笠原克　281―296
連載　かくも熱き亡霊たち（中）―樺太物語　中山茅集子　297―329
まつろわぬ人びと(2)　関千枝子　330―345
同人雑誌評　高野斗志美　346―359
小熊秀雄の遺したもの　谷口広志　360―363
編集後記　井上光晴　364

注

■序章

1　筑豊炭坑労働者文芸工作集団、第一号（一九五三年五月一五日）～第五号（一九五四年三月一〇日）

2　日炭高松文芸学習会、第一号（一九五六年一月一日）～第五号（一九五六年五月一五日）

3　創刊は、日炭高松文学・美術サークル協議会（第一〇号は、日炭高松美術文学サークル協議会、第一一号は、高松労組美術文学サークル協議会）、一九五六年一一月、終刊は第一一号（一九五八年三月八日）。また、第九号からは「文芸誌たかまつ」と改題されている。

4　創刊は一九五九年八月、終刊は二〇号、一九六一年七月。

5　三一新書、一九六五年二月

6　いいだもも「原点はどこに存在するか―田舎政論家の詩論風の手紙―」（「文学」一九五九年九月）

7　眞鍋呉夫「炭鉱労働者の文化運動―行動と思想のサケメ―」（「文学」一九五九年九月）

8　九州サークル研究会、第一巻第一号（一九五八年九月）～第四巻第六号（一九六一年一〇月）

9　「日本近代文学」二〇〇七年五月

10　「思想の科学」第五次、第一一五号、一九七一年四月

11　思想の科学研究会編、平凡社、一九七六年六月

12　「思想」二〇〇一年一一月

13　「思想」二〇〇五年一二月

14　不二出版、二〇〇六年六月

15　『復刻版『ヂンダレ・カリオン』別冊』不二出版、二〇〇八年一一月

16　『『東京南部サークル雑誌集成』解説・解題・回想・総目次・索引』不二出版、二〇〇九年七月

17　原爆文学研究会、二〇〇九年一二月

18　「日本文学」二〇〇七年一一月

19　河出ブックス０２３、二〇一〇年一二月

20　「『人民文学』解説・解題・回想・総目次・索引」不二出版、二〇一一年八月

21　『文化，資源としての〈炭鉱〉展』目黒区美術館、二〇〇九年

22　『文化，資源としての〈炭鉱〉展』目黒区美術館、二〇〇九年

23　『肉体のアナーキズム　１９６０年代・日本美術におけるパフォーマンスの地下水脈』（grambooks　二〇一〇年九月）

24　『北海道大学文学研究科紀要』二〇〇八年一一月／後、『『サークル村』と森崎和江』に収録。

25　「市史研究　ふくおか」第四号、二〇〇九年二月二八日

26　青弓社、二〇一三年七月

27　水溜真由美「炭鉱におけるサークル運動の展開―文学サークルを中心に（前／後）」（「国語国文研究」一三三号、二〇〇七年一〇月／一三四号、二〇〇八年三月／後、『『サークル村』と森崎和江』に収録）に詳しい。

28 人形・勢満雄、撮影・菊池利夫
29 監修上野朱・本橋成一、朗読青木美香、編集公文健太郎
30 「サークル誌めぐり」、「日本鉱脈（サークル誌月評）」
31 未来社、一九五三年
32 河出書房、一九五二年
33 角川書店、一九五五年
34 三一号、一九五八年二月
35 「編集室から」日炭高松文学サークル、創刊号（一九五五年七月）
36 「新しい文学の方向―野間宏氏を囲んで―　大牟田各文学文化団体座談会」（「炭鉱地帯」二号、三池炭鉱労組、一九五五年三月）
37 国上伸雄遺稿集『地底の手記』日炭高松文学サークル、一九五八年二月より
38 機関紙「みいけ」六一二号、一九六〇年二月二一日
39 一九六〇年六月
40 『九州・福岡のうたごえの半世紀・記念誌』（編集発行記念誌編纂呼びかけ人会議、後援九州のうたごえ連絡協議会、二〇〇六年一〇月）に拠った。
41 一九五七年一一月
42 「第一回筑豊文学サークル懇親会に出席して」（「あしおと」一号、一九五七年一一月）
43 「あとがき」（「山田文学」二七号、一九五六年一一月）
44 例えば、第二章で取り上げる文学サークル誌「山田文学」三三号は、労働組合幹部批判の文章を掲載したことによって「発禁」処分となる。「山田文学」については、第一部第二章を参照。
45 高田佳利「サークル運動の停滞を破る」（「思想の科学」一九五九年七月）
46 一九五八年九月、未来社から創刊された。創刊時の編集人は、編集委員、木下順二、西郷竹彦、竹内実、益田勝美、宮本常一、吉沢和夫。
47 日高六郎「大衆論の周辺―知識人と大衆の対立について―」（「民話」第六号、一九五九年三月／七号、一九五九年四月）
48 谷川雁「工作者の死体に萌えるもの」（「文学」一九五八年六月）によると、「生活語で組織語をうちやぶり、それによって生活語に組織語の機能をあわせ与えること―それが新しい言葉への道である。（略）大衆と知識人のどちらにもはげしく対立する工作者の群……双頭の怪獣のような媒体を作らねばならぬ。彼等はどこからも援助を受ける見込みはない遊撃隊として、大衆の沈黙を内的に破壊し、知識人の翻訳法を拒否しなければならぬ。すなわち大衆に向っては断乎たる知識人であり、知識人に対しては鋭い大衆であるところの偽善の道をつらぬく工作者のしかばねの上に萌えるものを、それだけを私は支持する。そして今日、連帯を求めて孤立を恐れないメディアたちの会話があるならば、それこそ明日のために死ぬ言葉であろう。」とある。
49 国分一太郎「労働組合とサークル―せまい見聞から―」（「文学」一九五九年一〇月）によれば、「労組内文化サークルの活動がにぶっていく原因は」、「労組幹部がスケジュール闘争

にひきこまれて、文化サークルのめんどうを見られなくなったという事情」など複数考えられる。「そこへ経営者側のHRはいっそう活発になってくる」、「会社側のHRとリクリエーション工作は積極化してきた。会社側のサークル育てがいちじるしくなってきた。よく言われるように、会社の公認サークルのようなものすら生まれかけてきた」という。つまり、会社側が主宰するサークル運動へと移行していった側面があった。

50 一九五九年六月

51 例えば田中巖「〈戦後サークルの歴史と問題〉文学サークル―四年間の収支決算書―」（「文学」一九五九年一〇月）には、「大衆とつながろうとすることでつながるのではなく、大衆と断絶することによってその断絶の痛みでつながる。そういった二面性、思想的な変革がどうしても必要であった。（略）内部の統一によって外部の敵と戦わなければならない労働組合・前衛党は機能的にみるならば戦闘組織である。これに対して、内部の深い対立によって前衛的思想とオルガナイザーを生みだすサークルは、生産組織であると考えられる。」と述べられている。

52 吉本隆明「海老すきと小魚すき」（「民話」第一二号、一九五九年九月）

53 「谷川雁論」（「思想の科学」一九五九年一二月）

54 「戦後民衆論ノート」（『遊撃の思想―長征の途上にて―』行路社、二〇〇〇年五月）

55 出席者は、大屋ふく代、河野信子、重幸子、谷本澄子、豊原怜子、中村陽子、森崎和江、原田幸枝

56 「サークル村」に六回（一九五九年七月～一九六〇年四月）にわたり連載。後に『まっくら―女坑夫の聞き書き』（理論社、一九六一年六月）として刊行。

57 「サークル村」第三巻第一号、一九六〇年一月。『苦海浄土―わが水俣病』（講談社、一九六九年一月）として刊行。

■第一部

■第一章

1 「九州・山口サークル地図（その一）」（「サークル村」第一巻第四号、一九五八年一二月二〇日）、「（その二）鹿児島県加世田市の部」（第二巻第一号、一九五九年一月二〇日）、「（その三）熊本県の部」（第二巻第二号、一九五九年二月二〇日）、「（その四）大分県の部」（第二巻第三号、一九五九年三月二〇日）、「（その五）佐賀・長崎の部」（第二巻第四号、一九五九年四月二〇日）によると、全部で二〇四のサークルから「組織加入でなく個人加入の原則」（「創刊宣言さらに深く集団の意味を」、「サークル村」第一巻第一号、一九五八年九月二〇日）に則り参加者が集っている。これほど大多数のサークルが当時九州、山口各県には存在していたことが分かる。

2 「創刊宣言　さらに深く集団の意味を」（「サークル村」第一巻第一号、一九五八年九月二〇日）

3 水溜真由美「炭鉱におけるサークル運動の展開―文学サークルを中心に（前）（後）」（「国語国文研究」第一三四号、

北海道大学国語国文学会、二〇〇八年三月）に詳しい。

4 『増補水巻町誌』二〇〇一年六月、一頁

5 『増補水巻町誌』一八頁

6 「炭鉱夫が炭鉱夫の生活を書くということ」（「九大日文」九号、二〇〇七年三月三一日）

7 九州大学記録資料館産業経済資料部門に所蔵されている。

8 福岡県遠賀郡水巻町　九一

9 誌面上部欄外には「日炭高松新聞」と記載されている。ここでは、『平成十七年度水巻町歴史資料館企画展「水巻の炭鉱とその暮らし」』（水巻町歴史資料館、平成一七年九月）の記述を参照して機関紙「日炭高松」と表記する。

10 『平成十七年度水巻町歴史資料館企画展「水巻の炭鉱とその暮らし」』より。この機関紙「日炭高松」は、「プランゲ文庫新聞コレクション石炭産業関連資料集成」において、二〇〇号（一九四六年六月一〇日）から二五七号（一九四九年九月一五日）まで（欠号は、二一一号、二一三号、二一六号、二二三号、二三八号）を、現物は、九州大学付属図書館記録資料館産業経済資料部門に一二号（一九三七年六月一五日）から五九号（一九三七年八月一日）、二〇六号（一九四六年一〇月一日）から六四〇号（一九六九年九月一九日）（但し欠号あり）が所蔵されている。

11 いわゆる炭鉱長屋、炭住。「鉱員社宅は、一棟6～8軒の棟つづきの長屋で二階建てでした。二階建ての炭住はめずらしく、ハーモニカ長屋とも呼ばれていました。」（『平成十七年度水巻町歴史資料館企画展「水巻の炭鉱とその暮らし」』）

12 『平成十七年度水巻町歴史資料館企画展「水巻の炭鉱とその暮らし」』より。

13 坂口博「『サークル村』創刊前夜」『復刻版サークル村　別冊』不二出版、二〇〇六年六月九日

14 これら、高松文化連盟の詳細については、例えば有馬学が「戦時期日本の文化・運動・地方」（『九州という思想』松本常彦・大島明秀編、花書院、二〇〇七年五月一〇日）で述べているように、戦前の大政翼賛運動との繋がりのなかで捉え直す必要があるように思われる。この点については、稿を改めて論じたい。

15 九州大学記録資料館産業経済資料部門に二九号（一九五一年三月一日）から二四〇号（一九六七年一二月一日）まで欠号が多いが所蔵されている。

16 九州大学記録資料館産業経済資料部門所蔵の日炭高松における機関紙綴りには、一九五八年から一九五九年の機関紙がファイルされている。

17 発行責任者大石溢美、編集責任者馬場春一

18 発行責任者森安照喜、編集責任者杉原・茂谷

19 発行人星子勲、編集責任者有吉富造、発行所日炭高松労働組合、印刷所双羽印刷有限会社、製本所伊美製本所

20 創刊号のみ、編輯・発行・印刷温雅荘文化部、一九四八年七月一〇日発行

21 第一号（一九五三年五月一五日）～第五号（一九五四年三月一〇日）、発行所筑豊炭坑労働者文芸工作集団（福岡県遠賀郡水巻町吉田高松労組一支部内）、発行責任者黒井修、編

集責任者上野英信

22 第一号（一九五六年一月一日）～第五号（一九五六年五月一五日）、発行所日炭高松文芸学習会（福岡県遠賀郡水巻町片山区弥生町第一高松炭砿内国上方）

23 創刊号（一九五六年一一月一日）～第一一号（一九五八年三月八日）、日炭高松文学・美術サークル協議会、発行編集責任者上田博、事務局福岡県遠賀郡水巻町頃末日炭高松労働組合教育宣伝部。第八号は日炭高松労働組合文学美術サークル協議会。第九号から「文芸誌たかまつ」という名称に。第九号は編集発行責任者栗屋光教、第一〇号は発行所日炭高松美術文学サークル協議会、編集者サークル誌編集委員会、第一一号は発行所日炭高松労組美術文学サークル協議会、編集者栗屋光教・平岡義人。

24 発行所高松文学サークル（若松市浅川区三頭）、印刷所小田謄印社（八幡市黒崎神原町二）、一九四七年一一月

25 ただこの点については並行していた可能性も捨てきれない。

26 坂口博『『サークル村』創刊前夜」にも指摘がある。

27 紹介文として「東見初炭砿でガス燃焼があり八人の仲間が死んだ。この死をいたむ作品を中心に今迄発表してき（た）作品で構成詩まきやぐらをつくった。」とある。

28 「〃せんぷりせんぢが笑った〃につぐ問題作！／ひとくわぼり／黒田藩の暴政にしいたげられた農民の苦しみと反抗を史実で画くえばなし」と記述されている。

29 事務所は戸畑市に所在していた。

30 この座談会を開催するにあたり労働組合教宣部から各文化団体へくばられたビラ「『眞空地帯』の野間宏さんを囲む／座談会、開催のよびかけ」には、以下のように記されている。

「私たちは今、皆さんにすばらしいおしらせをしたいと思います。それは、突然有名な「眞空地帯」の作家、野間宏さんが来る二月二十日（日曜日）にこの筑豊（高松）にやってこられるということです。／私たちは今、苦しい生活と平和の希いがおびやかされており、毎日を不安な気持でおくつております。／この中で私たちは何とかして少しでもいゝから、みんながしあわせになりたい。戦争のない住みよい世の中にしたいという希望をもっていろ〳〵な活動をやっております。私たち働くものの文学うんどうもその一つではないかと思います。（略）／そこで今度の野間さんの来られるのを機会に文学を愛好する人も、又そうでない人でも私たちの職場のこと、サークルのこと、社宅のことなどいろ〳〵な話をもちよってこの集りを盛大なものにしたいと思います。／この座談会の準備のため左記のとおり実行委員会を開きたいと思いますので、このよびかけをうけとられた団体はその近くの団体へ、又、このよびかけをうけとられた方はあなたの最も親しいお友達に、一人でも多くの人におしらせくださるようお願いいたします。／／野間宏氏歓迎座談会実行委員会／一、とき　二月十五日午後六時／一、ところ　日炭高松労組本部会議室／一九五五年二月十一日／日炭高松労働組合／教宣部長高野智／日炭高松青年婦人会議／議長庄田明」

31 「一九五四年」となっているが、このビラは、文面から野

間の座談会の後のものであるので「一九五五年」の誤りだと思われる。

32　一九五三年春、杵島炭鉱の中島博明を中心に「窓」が発行されている。当時日炭高松と杵島炭鉱労組は交流があったようなので、この「窓」のことかと思われる。同人は二〇人余りで、三〇年初めまでに一二号を出しているようである（『佐賀の文学』、新郷土刊行協会、一九八七年）。中島博明は後に「サークル村」にも参加している。

33　鶴見俊輔は、「サークル村」の批評を「中央公論」の「地下水」の覧に掲載するつもりであることや、雑誌を読んだ一つの不満として、「サークル内の人間関係がもっと」ぶつかりあわなければ「創造的人間関係とはなり得ない」と綴っている（「サークル村」一巻三号、一九五八年一一月、表紙裏「消息」覧）。一方、山代巴は「山口県中で最も農民の自主組織のある」山口県玖珂郡とサークル交流を行ったところ、「山口県では東部の二郡三ケ所」との交流を目標としていることなどを伝えている（「サークル村」二巻三号、表紙裏「消息」覧、一九五九年三月）。

34　福岡県遠賀郡水巻町頃末

35　福岡県八幡市折尾町長崎

36　坂口博『サークル村』創刊前夜」

37　上田博氏への聞き取り（二〇〇八年八月二三日）による。

38　田村紀雄＋志村章子編著、新宿書房、一九八五年三月二〇日

39　第一号の森本ひろし「青年よ祖国のために！」（一九五三年五月一五日）、第三号の「ヤマの童心は訴える！―小・中学生の作文集―」（一九五三年八月一日）、第四号のもりもとひろし「ゴーホームヤンキ！」山崎喜與志「硬山」（一九五三年一二月一五日）

40　金子徳好は、上野英信と実際に会っている。「九州にオルグに派遣された時、福岡で『海峡』という文芸同人誌を発行していた青年と交流したことがある。ガリ版印刷で、表紙は多色刷だった。きたない事務所で名刺を交換したが、上野英信という青年だった。十年後、彼のルポが世にでた時は嬉しかった」（『ガリ版文化史―手づくりメディアの物語』）。

41　日本機関紙協会の綱領には、「一、日本機関紙協会は、戦争と虚偽の宣伝とたたかい、真実を守りぬくために闘う。／一、日本機関紙協会は、平和と独立、生活と権利を守る民主的言論の育成強化のために闘う／一、日本機関紙協会は、国民的宣伝戦線統一のために闘う。」とある。「この綱領にそって、結成当時は、まず労組や民主団体機関紙の用紙かくとくの運動をおこなった。当時は、商業新聞だけに公定の安い紙が配給され、労組や民主団体機関紙は、高いヤミの紙を使わざるをえなかった。そして、この運動は成功した」（『宣伝活動入門』金子徳好、森一作共著、日本機関紙協会、一九六八年八月一五日）。

42　日炭高松においては、『日炭高松組合十年史』（日炭高松労働組合、一九五九年五月一日）の編集を担当。

43　森一作氏への聞き取り（二〇〇八年一一月一三日、二〇日）による。森は西日本新聞社勤務時代に同職場にいた谷川雁を

知る。一九四七年、編集部にいた五人が「編集権侵害」という名目で解雇。当時組合の書記長は谷川、森は教宣部長だった。後に谷川から「サークル村」を創るという話を聞き参加することになる。

■第二章

1　森田ヤエ子『この勝利ひびけとどろけ―荒木栄の生涯』（大月書店、一九八三年一二月）、一七九―一八〇頁

2　なお、うたごえ行動隊とのやりとりのなかで、他に、「くろがねの男のこぶしがある」の「こぶしがある」をラレラシラソと作曲していたが、皆の意見を取り入れ「大衆工作の結果」、ラレドララソと変更になった（『この勝利ひびけとどろけ―荒木栄の生涯』一八二頁）。

3　森田ヤエ子（旧姓村上）は、新潟県南魚沼郡湯沢町に一九二七（昭和二）年に生まれた。三歳の時、父が死去、母が再婚し二人の女児を産む。継父は鉄道工事の下請業者で、岩手県内の花巻や遠野で育つ。一九四三年、一五歳の時に継父が信濃川水力発電所の工事現場で事故死する。指宿海軍航空隊の弾薬庫を請け負っていた継父の友人を頼り、母、弟、妹達とともに同年一一月、鹿児島県指宿に移り住む。以上、森田ヤエ子の来歴は『この勝利ひびけとどろけ』や、ちくほう女性会議編『ちくほうの女性たちの歩み』（海鳥社、二〇〇〇年三月）、「川筋気質・人とドラマ〈8〉森田ヤエ子さん・筑豊」（『西日本新聞』一九九〇年三月一五日）、「炭鉱（ヤマ）の歌が聞こえる　荒木栄と森田ヤエ子」〈1〉～〈3〉（『西日本新聞』二〇〇七年三月三〇日～四月二日）を参考にした。

4　三菱労組より二百円の原稿料を貰っていた。一三号発行当初は、「村上幸夫氏の活動により山田地区労への働きかけをやったところ山田地区労の手持ち金が千円満たぬと聞かされて呆然となってからは、山田市議会文教部への働きかけも一頓挫を来し」た。（木村日出夫「山田文学の航跡と進路」、「山田文学」一五号）また、水溜真由美『『サークル村』と森崎和江―交流と連帯のヴィジョン』（ナカニシヤ出版、二〇一三年四月）には「九州の文学サークル代表者会議の報告によると（略）全額組合負担」（四八頁）とある。

5　木村日出夫「山田文学の航跡と進路」（「山田文学」一五号）より。

6　「山田文学」一四号掲載の「原稿募集」より

7　注5に同じ。

8　松原新一『幻影のコンミューン―「サークル村」を検証する』（創言社、二〇〇一年四月）、一〇二頁

9　「サークル村」第三巻第三号、一九六〇年三月号

10　「サークル村」第二巻第六号、一九五九年六月号

11　「サークル村」第二巻第一一号、一九五九年一一月号

12　「サークル村」第一巻第二号、一九五八年一〇月号

13　武田武は、一九五五年九月二九日に、「目の上の腫物の手術の結果が悪く脳え来て」亡くなる（一七号「編集後記」）。一七号は、武田武遺稿集となっている。

14　同号掲載の「表紙について」には以下のように記されている。「この歌は去る八月六・七・八・日と広島の爆心地の近

くに於いて催された原水爆禁止世界平和大会に出席された国鉄代表の島本藤子さんの報告からいたゞいた歌です／柳原白蓮さんの歌はほんとうに有がたく　なつかしいものです／一瞬のうちに五萬の生命を奪った　ヒロシマ。ノーモアナガサキ／十年前の怒りと　最近のビキニの死の灰に　あらたな　にくしみと悲しみのうたごえやまず　平和を願ふ人々のこゝろは　日に日に高まって来ています　原子戦争反対の署名は　もはや　五〇〇万人をこえています／こゝに柳原白蓮さんの歌をかゝげ　尊い犠牲者に　こゝろからなる追悼をおくり充実いたしませんが平和特集号としたいものです。」

15　上野英信の原爆に関する表現について書かれたものに、坂口博「解題　散文詩　田園交響曲」（『原爆文学研究』七号、二〇〇八年一二月）、「「原爆文学」探査⑨上野英信『黒い朝』」（「原爆文学研究」九号、二〇一〇年一二月）がある。後者で坂口は、同行者の発言として書かれた「まるでヒロシマだ」は、「英信の直観である可能性が高い。そして、問題は炭鉱事故と広島原爆の犠牲者が似ていることにあるのではない。（略）そのように、原爆をおのが身に引き受けることで、炭鉱を生きていこうとした人間がいたことだ。これは、生涯を貫く課題になった。」と述べている。

16　同時に、「ヒロシマの図」という表現から、各地で巡回展が行われていた丸木位里と丸木俊の《原爆の図》（巡回展については岡村幸宣「「原爆の図」全国巡回展の軌跡」、「原爆文学研究」八号、二〇〇九年一二月に詳しい。）のイメージが松岡の中にあったのかも知れない。ただし、《原爆の図》で描かれている被爆者が、松岡の言うように、所謂「悪鬼さながらの形相」だと言えるかは疑問が残る。

17　本名は木村寅夫。一九二六（大正一五）年二月二一日、朝鮮慶尚南道に生まれる。旧制中学卒業、三菱鉱業坑夫。一九五四年五月から詩作を始めて、「山田文学」同人、「沙漠」会員となる（『沙漠詩集〈1957 年版〉』現代社、一九五七年一月より）。また、三菱上山田労組棹取職場支部文芸同好会刊行のサークル誌「微風」創刊号（一九五八年八月か？）に掲載された木村の「「微風」発刊を祝して」によれば、「僕は軌道夫だ。僕は、いつもレールをしくのが商売だ」とある。「炭車の前途に、二本の平行線をはって行く」。棹取は、軌道夫が「炭車に向って、二本の平行線の交わる地点を求めよと、永遠にとけぬ謎をなげかけている張本人」と表現している。

18　中村卓美「木村日出夫ノート―サークルの詩と炭坑労働者」（『最初の機械屋』試行出版部、一九六五年一月）、初出は、「沙漠」二六号（一九五九年四月）である。

19　森田ヤエ子「柿迫襄氏の短歌作品をめぐって―田中均氏へ―」（「山田文学」二七号）

20　「第二回　文学サークル懇談会の批判」（三〇号）より。会は一二月一日中間町にて開催。「中でも詩人集団「砂漠」（ママ）、山口県より「まきやぐら」博多貯金局より「杙」の新しい参加グループを加へ益々多彩であった」。

21　当時のサークル誌ネットワーク上の中央誌（「人民文学」や「列島」など）とは違い、中央詩壇と結びついた雑誌のことである。二一号に掲載された総会座談の記録（「机をかこ

んで」）では、木村や大江が「中央詩壇で有名になつたこと」にも言及されている。木村は、「つまりタテの線にのみはしりその間に最も大切なまわりの人々と、横のつながりを見失つてしまつたといふわけです」と述べている。ここでの中央詩壇とは、木村の作品が掲載されていた「現代詩」のことだと推察される。「木村さんや、大江さんがいい詩を書き、中央詩壇で有名になつたと言うことは、サークル全体にとつて発展しなかつたように思ふ。」（村上）／井上「たしかにそう思ふけれどそれについて今後一歩下つてもらつては困る。抜きんでていた人はこのまま伸びてほしい。」などの言葉が記録されている。

22　明確な「答え」が示されることは無かったが、一つの「方法」として、毛沢東「文芸講話」からの言葉が提示されている。引用は、注17の総会座談「机をかこんで」の後に掲載された（「直面してゐる僕等の問題」―文芸講話、毛沢東著より―）。「人民は普及されることを要求するが、それとならんでまたゝかまることをも要求し、年ごとに、また月ごとにたかまることを要求する。この場合、普及は人民のあいだにおける普及であり、向上もまた人民の向上である。そして、このような向上は、富にういた向上ではなく孤立した向上ではなくて、普及というものを基礎にした向上である。」「われくはすべての革命的な文学者芸術家が大衆とつながり大衆をえがき、みづから大衆の忠実な代弁者となることによつてのみ、彼らの活動が意義をもつのだといふことを彼らに告げなければならない。」などの言葉である。引用は、「H．K」という表記から木村日出夫によるものと思われる。「山田文学」が直面している、普及と向上という問題を抜き書きしてみた、早くこの書を読んでいたら戸惑いはしなかっただろう、とある。

23　木村日出夫「発禁その後」（「サークル村」二巻二号、一九五九年二月）

24　三菱労組が文学サークルに資金援助できたことは、その従業員数と出炭量の多さも関係しているだろう。昭和三二年の山田市鉱業所別従業員数が最も多いのが三菱鉱業上山田鉱業所であり「職員、二一一名、労務者、一六〇三名、昭和三二年出炭量、二四八三三五ト」であった（『山田市誌』一九八六年三月）。

25　「再出発のために　第三回総会への参考資料」（「サークル村」三巻六号、一九六〇年九月一〇日）に拠る。

26　炭鉱のサークルと労働組合については、水溜真由美『『サークル村』と森崎和江―交流と連帯のヴィジョン』（前掲）に詳しく、「単にサークルが労働組合の下請け機関としてプロパガンダの機能を担った、ということではなく」（三七頁）かった。当時からも広く問題視されており、例えば福田玲三「サークルと労働組合　職場サークルの経験から」（「知性」一九五五年一一月）、緑の会文化サークル研究会『サークル運動』（大文社、一九六〇年三月）でも言及されている。

27　この詩は全文カタカナ表記である。以下一部を引用する。「トコロガ　ミツイヤマノロウドウクミアイ　ノ／クミアイチョウ　ト　シツコウブワ／カイシヤト　シツカトテオニギリ／ジミントウコウホノオウエンオヤツテイルノデス／モシ

ハンタイ　イギオトナエタリ／シヤカイトウアベコウホノオウエンオヤツタモノガイタラ／クビオキラレルコトニナルカラ／ソノツモリデイルヨウニ　ト／クミアイ　インニ　ハッピョウシマシタ」（謄写版のため、促音、拗音の表記が不統一である）。

28　木村日出夫「発禁その後」（『サークル村』二巻二号、一九五九年二月）に拠ると、その後の木村は、坑内で青年将校たちから、あんたの言っていた雑誌をおれたちの職場で発行しよう、と言われ「うぶ声」という雑誌を発行するにいたる。木村は半分を「山田文学」に、もう半分を「うぶ声」に捧げることを誓った、と綴っている。

29　森田ヤエ子『この勝利ひびけとどろけ』、一六五頁

30　森田ヤエ子『この勝利ひびけとどろけ』、二二二頁

■第三章

1　「創刊宣言　さらに深く集団の意味を」、「サークル村」第一巻第一号、一九五八年九月二〇日。

2　三井東洋高圧大牟田工業所文芸部機関誌、編集厚生課北原仁美、一九四八年六月。

3　発行所大牟田市有明町六九〈くろだいや編輯部内炭都文化クラブ〉編集兼発行人、大森淳義、一九四六年六月、第六号（一九四七年四月）は発行人が三池炭鉱労働組合となっている。一九四八年八月発行の第一二号をもって終刊。「その内容は創作・詩は勿論のこと、音楽・美術等と、一種の総合誌の観を呈した」『大牟田文化史・年表』三一七頁）。

4　文芸同人誌、発行所双樹社、編輯兼発行者中島立雄、一九四六年一〇月、「翌22年12月1日、第3号が発行されるまで見届けているが、あとはどうなったであろうか」（『大牟田文化史・年表』三一八頁）。

5　発行所三池郡高田町渡瀬出海方、発行人出海渓也、一九四六年一一月、後に「桃源」と改題。同人に「当時立命館大学教授で歌人の国崎望久太郎も名を連ねている」（『大牟田文化史・年表』三一八頁。

6　熊本県荒尾市、編集発行人雪野一平、一九四七年八月。「13号まで続き、昭和24年1月終刊」。

7　「詩郷」改題、発行所三池郡高田村渡瀬〈詩郷社〉、編集発行人出海渓也、一九四八年三月

8　発行所大牟田市大字橘二四五新樹文学同好会、編集兼発行人、石田清明、一九四八年五月。「現九電、当時日肥筑支社の文学愛好者達が発行したもの」（『大牟田文化史・年表』三一九頁）。六号まで続いた。

9　熊本県荒尾市、一九五〇年三月。一九五一年三号で終刊。

10　発行所福岡県瀬高局区内太神九四三、二十世紀クラブ、編集人中島宏、一九五〇年四月。

11　発行所大牟田市原山町、三井三池鉱業所人事部厚生課〈三池文学会〉、編集発行人本吉進、一九五〇年四月。「前述の「緑地帯」より幅広く同人層も分厚くなっているが、一面から言えば、三井三池鉱業所内（後に人事部労働課）の発行で、ある意味では、福利厚生的な趣きもあったであろう。でも、全市的に同人も網羅され」（『大牟田文化史・年表』）た、とい

う。

12 熊本県荒尾市、一九五〇年五月。「翌26年7月まで9号続いているが、メンバーは前述の「貝群」と重複している」（『大牟田文化史・年表』三二二頁）。

13 発行所大牟田市原山町、編集発行人中島立雄、一九五二年四月。

14 発行所大牟田市有明町四八文化タイムス社内、編集人出海渓也、発行人小宮市太郎、一九五三年二月、創刊号のみ。

15 吉村三生方、一九五三年八月。

16 発行所大牟田市大字田隈二六四、編集兼発行人武藤泰春、一九五五年九月。新日本文学大牟田支部の機関誌として発足した。

17 発行所大牟田市鳥塚町一六五、編集兼発行人乾健太郎（本名黒田久太）、一九五六年九月。同人は「すべて市内の中学教師」（『大牟田文化史・年表』三二四頁）。

18 発行年月日など不明。「佐賀より洋画家の皆島万作を慕ってやってきた中村邦が、ヤング達を集めて主宰した雑誌であった」（『大牟田文化史・年表』三二四頁）。

19 発行責任者、平野隆良、一九五七年四月。第三号（発行年月日不明）まで続いた。

20 発行所大牟田市汐屋町一八七、編集兼発行人福富鷹志、一九五七年七月。創刊号のみ。

21 発行所大牟田市大字三池六一四―二、編集人中村邦、発行人大佛辰雄、一九五七年八月。一九六〇年二月第七号まで発行、「塔」と合併。

22 発行所山門郡山川村尾野一六九〇、編集発行山下邦夫、一九五七年一〇月。

23 熊本県荒尾市、編集人山野真樹、一九六〇年七月。

24 編集兼発行人内田博、一九六二年三月。通号「第39号を同（1962）年8月15日発刊、以後は発刊を見ないようである」（『大牟田文化史・年表』三二九―三三〇頁）。

25 編集「反存在」同人、一九六六年四月。様々な文芸誌が発刊されたが一九五五年以降では、「塔」と「三池文学」二つに安定したと見られている（『大牟田文化史・年表』三二六頁）。

26 「座談会　戦後三池の文学運動―内田博に訊く―」。出席者は内田博、武藤泰春、小宮隆弘、河口司、汾浩介、永江武一郎、藤川英明、古里俊雄であり、古里が速記を担当した。

27 「二一年後半、大牟田の全歌人を綜合したもの」（前掲「座談会」、内田談）、発行年月日などは不明。

28 内田によれば新日本文学会支部として出していたという（前掲「座談会」）。

29 「つどい」「抵抗線」これらの発行年月日、発行者などは不明。座談会によれば、ガリ版刷りの雑誌であったという。座談会では「新日文の支部機関紙、友の会の機関紙と云うことで出したのが芽生えじゃないのですか。その前が抵抗線でせう」という武藤泰春の発言もある。「芽生え」については、人民文学大牟田支局発行（内田博「座談会記事補足」前掲）であった。

30 「炭鉱地帯」、発行者三池炭鉱労組、創刊号（一九五五年

一月）、二号（一九五五年三月）。

31　発行年月日、発行者など不明。武藤泰春によると市役所発行のものであったという（前掲「座談会」）。

32　本論では戦後のみを取り上げたが、内田博を中心として昭和初期からの大牟田におけるプロレタリア文学運動はいずれ把握しておかなければならないだろう。また、戦後について言えば、内田は大西巨人や井上光晴とも交流があった。稿を改めて論じたい。

33　三池炭鉱労組三川支部外来一区連合会、一五号（一九五七年五月）、一六号（一九五七年七月）。以下、組合サークル誌発行年月日については、同様に確認できた号数のみ記入する。

34　三川鉱新港社宅（三池炭鉱労組）、発行者内山孝之助、編集者今田実光義、五号（一九五七年五月）、六号（一九五七年七月）。

35　大砂地域分会、一三号（一九五七年八月）。

36　三鉱労組三川支部、編集発行責任池田昭二、八号（一九五七年六月）、九号（一九五七年八月）。

37　三川鉱文学サークル、発行所大牟田市臼井新町一丁目、発行人北村瞳、編集人杉本一男、印刷所三鉱労組印刷工場、一号（一九五九年一月）。

38　三池労組俳句サークル、発行所熊本県荒尾市緑ヶ丘弥生町二六棟三池労組俳句サークル円虹の会、編集発行田中未草、印刷外井秋穂、一〇四号（一九六一年六月）。

39　組合の文芸誌については、『大牟田文化史・年表』では全て網羅されていない。法政大学大原社会問題研究所での調査の結果本文記述のサークル誌を確認できた。

40　水溜真由美「炭鉱におけるサークル運動の展開―文学サークルを中心に」（前）（後）（「国語国文研究」一三三、二〇〇七年一二月／一三四、二〇〇八年三月）を参照。

41　大牟田地方労働組合評議会の略。総評の下部組織で大牟田市と荒尾市にあり、それぞれ「大地評」「荒地評」と呼称している（「みいけ」前掲、一〇頁参照）。

42　「原爆の図」巡回展については、岡村幸宣「「原爆の図」全国巡回展の軌跡」（「原爆文学研究会」八号、二〇〇九年一二月）に詳しい。岡村によれば、大牟田市では一九五二年一二月五日に吉田早苗・野々下徹による「原爆の図」の巡回展が開催され、来場者は約二七〇〇〇人であった。

43　出海の紹介に即して挙げていけば、同年一二月には中国映画「白毛女」の無料上映会、五三年一月には映サ協の「市民映画コンクール」、二月には劇団「カチユーシヤ」公演（社会タイムス主催）、炭労自主製作映画「女ひとり大地を行く」上映にあたり製作スタッフの来牟と座談会、メーデー前夜祭では、黒崎地方の民謡と踊り、劇団はぐるま初公演「乞食の歌」、表現座や労組演劇部の演劇、製作所の職場合唱団のコーラス、映画など労働者自らの手による祭典が行われた。これを機に、文化連絡協議会が作られるようになる。（出海渓也「魂の解放をうたう文学を―さいきんの大牟田の文化運動をめぐつて―」、「文学ひろば」創刊号、五―六頁）。

44　「魂の解放をうたう文学を」、六頁。

45　一九五三年一二月二七日、闘争は組合側の勝利に終わる。

46　出海渓也「集団創作の可能性について」（「炭鉱地帯」創刊号、八頁）によれば、この詩は松尾晴輔（三池炭鉱）武田千秋、松田利勝（三池合成）坂本越朗（東圧）木下梅晴（手鎌部落）平野恵子（映画サークル）と出海渓也で創作したものだという。

47　タブロイド版、大半が四面構成、週刊、約二万部発行、一部約二円五〇銭、配布方法は「全組合員対象。集団社宅（約一万名）は三輪車にて家族に配布。その他は職場にて配布、残余は対外的に配布」。また、編集スタッフは、「編集部長と書記一名が中心となる」。「昭和二十二年いらい印刷工場を本部内に自家経営」し製作していた（「みいけ」三池炭鉱労働組合、一九五九年二月を参照。この「みいけ」は、機関紙「みいけ」とは異なり、冊子状のもの）。

48　「みいけ主婦会」は機関紙「みいけ」同紙面上に掲載。機関紙全体の四面目に「みいけ主婦会」が掲載されることが多かった。

49　『九州・福岡のうたごえの半世紀・記念誌』編集発行記念誌編纂呼びかけ人会議、後援九州のうたごえ連絡協議会、二〇〇六年一〇月二七日を参照。

50　「一九五〇年代における炭鉱労働者のうたごえ運動」、「北海道大学文学研究科紀要」二〇〇八年一一月。水溜の論文は、うたごえ運動の実態を把握する上で重要な先行研究である。九州と北海道の炭鉱を事例として挙げながら、中央合唱団、労働組合、地域におけるうたごえサークル運動を踏まえ、たごえ運動が活発化したプロセスを論じている。また、うたごえ運動が労働運動と特に関係の深い運動であり、団結強化のために果たした役割が大きいことを指摘している。大牟田のうたごえ運動についても詳しく述べられている。

51　機関紙「みいけ」第六〇〇号（一九五九年一〇月二二日）では、「みんなで立上ろう　安保改定反対で文学者は発言する」と題し、大江健三郎「独立と自由」と中野重治「再び誤るな」を掲載している。これは、同年一〇月一五日に行われた「新日本文学会の安保改定反対の夕講演会」での発言を集録したものであった。

52　機関紙「みいけ」第六〇九号、一九六〇年一月三一日。

53　サークル誌「炭鉱地帯」第二号（三池炭鉱労組、一九五五年三月一〇日）の「新しい文学の方向―野間宏氏を囲んで―　大牟田各文学文化団体座談会」（「炭鉱地帯」第二号、発行三池炭鉱労働組合本部内炭鉱地帯文学会、編集発行人北村千麻夫、一九五五年三月）には、当日の様子が記録されている。座談会は一九五五年二月一五日夜、大牟田地方労働組合評議会の会館二階で行われた。野間宏は、他にも上野英信が働いていた日炭高松（遠賀郡水巻町）も訪れており、やはり座談会が開かれていた（第一章を参照）。また、長崎芽だち文学サークルでは、同五五年二月一一日午後六時から引地町労働会館にて、「講演と映画」と題し、「講士（ママ）」に野間を迎え、映画「真空地帯」の上映が行われた（当日の「会員券」による。資料を提供して下さった上野朱氏にお礼申し上げます）。なお、長崎芽だち文学サークルについては、楠田剛士「山田かんとサークル誌」（「原爆文学研究」八号、前掲）、「長

崎戦後サークル誌「芽だち」総目次」（「九大日文」一五号、二〇一〇年三月）を参照。

54　「闘いを本にしたい　佐多さんを囲んで懇談　宮原」、機関紙「みいけ」第六〇八号、「みいけ主婦会」一九六〇年一月二四日。

55　「三池コンミューン」、「新日本文学」一九六〇年九月。

56　前掲「坑」一号、一九五九年一月。

57　森崎和江は「辺境レポート　二つのことば　二つのこころ　与論島をめぐって　生のはじまり・死のおわり」（初出「辺境」第一次第二号、一九七〇年九月）のなかで、「三池炭坑における六〇年の闘争は、三池に移住していた与論という小宇宙のなかに、分裂をもたらした。（略）三池労組に残る者、第二組合へ移る者が出たし、それがほとんど親戚縁者関係となる人々であったから、その傷は大きかった。人々はこの階級意識を軸にした分裂にふれることを、彼ら集団内でのタブー化して、その第二の与論を守ろうとしている」と述べている。移住労働者たちに対し行われていた差別はもちろんのこと、労働組合に対する一つの批判として捉えることができる。また、谷川雁に至っては、「昭和初年までここでは囚人労働が行われていたし、また沖縄に接する与論島の出身者がある種の区分された意識をもって密集している居住地もある。このような深部に滞留している土着的エネルギーと擬似市民主義とが一定の微妙な間隔を保ちながら無葛藤に共存していたのが三池の団結の内容であった。もしこの双方が単に情念的に対立するならば三池労組の統一はさらに早い時期に崩壊していたであろうし、またこの断層をそのままにしているかぎり、統一の実体がきわめて形式的な限界にとどまるのも当然であった。」（「定型の超克」、『民主主義の神話―安保闘争の思想的総括』現代思潮社、一九六〇年一〇月）と批判的に述べている。

58　水溜真由美「谷川雁と三池闘争　「定型の超克」を中心に」、『KAWADE　道の手帖　谷川雁』二〇〇九年三月。

■第二部

■第四章

1　発行所は福岡県遠賀郡中間町（現・中間市）の九州サークル研究会、印刷所は九州機関紙印刷所、創刊時の編集委員会は、上野英信、木村日出夫、神谷国善、田中巌、谷川雁、田村和雅、花田克己、森一作、森崎和江。創刊号は一九五八年九月に発行、終刊となった第四巻第四号は一九六一年一〇月発行である。途中一九六〇年六月から八月まで休刊しており、休刊以前を第一期、再開された一九六〇年九月第三巻第六号から第二期とされている。

2　発行所・筑豊炭坑労働者文芸工作集団、発行責任者・黒井修、編集責任者・上野英信。第四号では、発行及び編集責任者・上野英信、第五号では、発行責任者・早野輝雄、編集責任者・上野英信。第一号は一九五三年五月、終刊となった第五号は一九五四年三月に発行。

3　本章では、「あひるのうた」の引用は初出に拠る。

4　初出の「あひるのうた」と、後に収録された『上野英信集

1　話の坑口』（径書房、一九八五年二月）では、多数の改変が確認できる。大きく内容が変化している箇所は無いが、初出で二箇所確認できるギリ少年に付された「異国の」という形容は、いずれも削除されている。

5　編集部による「おことわり」には、「カナづかいはすべて原文のまゝである。読者は改めてヤマの小供たちの作文能力の低いのに驚かされるかもしれない。何がその原因であるかは読者自ら考えてもらいたい。特に読解に苦しむような箇所は右横に（）でルビをふっておいた」とある。

6　子どもたちの作文は「A・戦争を題材としたもの」九編のほか、「B・米軍を題材としたもの」三編、「C・生活を題材としたもの」一一編、「D・その他」六編に分けられ掲載された。戦争反対の作文が多いなか、「すいがいのときアメリカはへりこぶたや舟で日本人をたすけてくれた。ぼくはアメリカが一ばんすきです。」（小学校五年生・男）という作文もある。その一方、同号で日本機関紙協会の森一作は、「感謝文」という記事を投稿している。これは、福岡県議会で水害の救援活動について米軍・保安隊へ感謝決議をするとの情報に対し抗議を行ったことを端緒としている。結局、議会は感謝決議をすることになったが、森は「たゞ一つの事実」の感謝文として、久留米医大生が濁流に流された母子を助けた話を「感謝文」として掲載した。

7　小熊英二は同書で「共産党は、日本は軍事的・経済的にアメリカ帝国主義に支配された半植民地状態にあり、日本の保守政権と大企業はアメリカに従属した買弁勢力・反民族勢力であって、共産党こそが真の愛国の党であると唱えた。この状態を打破するためには、階級闘争よりも民族独立を優先し、アメリカ資本に従属していない日本の民族資本家をもまきこんで、共産党を中心にした労働者・農民・民族資本の民族統一戦線をつくらねばならないとされた」とも述べている（五二五頁）。

8　李泳采「戦後日朝関係の初期形成過程の分析―在日朝鮮人帰国運動の展開過程を中心に―」（「立命館法学」二〇一〇年五・六号（三三三・三三四号））によると、「翌年1月、日本共産党中央委は「在日朝鮮人運動について」という新しい方針を提示した。それは「在日朝鮮人に日本革命の一軸を任せようとする意図的な行為は明白に間違ったことであった」といい、10年以上維持してきた、日本共産党による在日朝鮮人運動の指導方針を自ら根本的に否認するものであった。」という。

9　「荒波」は、現在二号のみを確認している。編集発行責任者・李協。全二一頁。詩作品を多く掲載している。梁祐直による詩「真実は必ず勝つ―若松事件の判決を前にして―」や、地下声人「ルポルタージュ　基地〝ＫＯＫＵＲＡ〟」のほか、「こどもの瞳」という頁では、若松小学校と福岡市の千代中学校の生徒が映画「郷土を守る人々」を観た感想を綴っている。この「郷土を守る人々」という映画は朝鮮民主主義人民共和国国立撮影所の一九五二年度の作品であり、朝鮮戦争下の朝鮮人民の闘争が描かれている。在日朝鮮映画人集団編集・発行の活字雑誌「朝鮮映画」第一号（一九五三年一二月）

でも特集が組まれ、あらすじや解説のほか、映画評論家の岩崎昶や北星映画企画部長の長谷川豊、詩人の許南麒らによる批評が並ぶ（朴慶植編『在日朝鮮人関係資料集成〈戦後編〉』第八号／第一〇号、不二出版、二〇〇一年二月、を参照）。

10　中島博明氏への聞き取り（二〇〇九年五月一二日）による。福岡県朝鮮人文芸同好会と他の文学サークルとの直接的な繋がりは未だ分かっていない。今後も調査を続け、稿を改めて論じたい。

11　発行人・中原登、編集・古河目尾文芸サークル、発行所・古河目尾労組教宣部

■第五章

1　本章で後にみていくように、「まっくら」は、初出、初刊、再刊と表題を変え、改稿を加えながら成立していく。そのため、作品の総称として呼ぶ場合には「まっくら」と表記し、単行本を表す際には『まっくら―女坑夫からの聞き書き』や、新装版『まっくら』といった表記をとることとする。

2　正田誠一『九州石炭産業史論』九州大学出版会、一九八七年四月

3　河野信子「たたかい、また、たたかう―まっくらによせて―」（『無名通信』二〇号、一九六一年七月）

4　加納実紀代　解説「Ⅱ〈無告〉の声を聴く」（『新編　日本のフェミニズム10　女性史・ジェンダー史』岩波書店、二〇〇九年二月）

5　佐藤泉「集団創造の詩学―森崎和江『まっくら　女坑夫からの聞書き』―」（『社会文学』三〇号、二〇〇九年六月）

6　同時に日本の女性労働の抱えた問題として敷衍する必要がある。女性労働を考えるにあたっては、井上光三郎『機織唄の女たち―聞き書き秩父銘仙史』（東京書籍、一九八〇年）、竹中恵美子編『女子労働論』（有斐閣、一九八三年五月）、ジャネット・ハンター『日本の工業化と女性労働―戦前期の繊維産業』（監訳・阿部武司、谷本雅之、有斐閣、二〇〇八年六月）などにみられるように、繊維産業における研究の層が厚い。これは、繊維産業に従事する女性の数が圧倒的に多かったことによる。他産業の聞き書きとの比較についてはその就労形態の相違を含め、稿を改めて論じたい。

7　第一回（「サークル村」二巻七号、一九五九年七月）、第二回（「サークル村」二巻八号、一九五九年八月）、第三回（「サークル村」二巻九号、一九五九年九月）、第四回（「サークル村」三巻二号、一九六〇年二月）、第五回（「サークル村」三巻三号、一九六〇年三月）、第六回（「サークル村」三巻四号、一九六〇年四月。この成立過程については、すでに佐藤泉も指摘している。

8　女性交流誌「無名通信」第一四号、一九六〇年一二月

9　リロン・らいぶらりいとして刊行。装幀の版画は千田梅二『炭坑仕事唄板画巻』（私家版、五〇部、一九五六年七月）による。また、カットは「サークル村」より転載されている。「サークル村」誌面と照合すると、上田博、千田梅二、阪田勝、葛克倹、黒田節子によるものと推察される。

10　表紙には森崎和江著、山本作兵衛画と明記されている。二

刷（一九七二年九月）は装幀がソフトカバーからハードカバーになる。また函のデザイン（山本作兵衛画）が縦描きとなり、カラーからモノクロとなる。

11　装幀は司修による。

12　佐藤泉は「集団創造の詩学―森崎和江『まっくら　女坑夫からの聞き書き』―」のなかで、初刊では、話し手の言葉よりも、その後の森崎のパートの文字が小さい活字で組まれおり、話し手と聞き書き主体の声に可視的な差異が与えられていたと論じている。

13　以下、煩雑にはなるが初出と初刊の対応を記しておく。初出「スラをひく女たち」第一回は、初刊『まっくら―女坑夫からの聞き書き』（理論社）では、第一話「無音の洞」として収録。第二回は第六話「セナの神さま」。第三回は第九話「地表へ追われる」。第四回は、第三話「棄郷」、第五、六回は第二話「流浪する母系」にまとめて編集。第六回の後半部分に、第五回の内容が四回に分けて挿入されているかたちとなった。また、「ヤマばばあ」（「無名通信」第一四号）の部分は、初刊では第七話「ヤマばばあ」として収録。その他の、初刊「はじめに」、第四話「灯をもつ幽霊」、第五話「のしかかる娘たち」、第八話「共有」、第一〇話「坑底の乳」、「あとがき」は書き下ろしである。『奈落の神々』に収録された「赤不浄」が再刊である新装版『まっくら』（三一書房）に追録されたのは、前述のとおりである。

14　「サークル村」二巻七号、一九五九年七月

15　『まっくら―女坑夫からの聞き書き』（理論社、一九六一年六月）、八頁

16　『同』、六六頁

17　『同』、一四九頁

18　『同』、一三三頁

19　『同』、一三四頁

20　元女坑夫に取材した聞き書きには、他に井手川泰子『火を産んだ母たち　女坑夫からの聞き書』（葦書房、一九八四年一一月）や林えいだい『闇を掘る女たち』（明石書店、一九九〇年一一月）があり、やはり綿密な調査のもとで編まれている。これらの文献と異なり、森崎は「まっくら」において、聞きとったものを何度も改稿している。

21　二〇一〇年一〇月一三日～一四日に福岡県宗像市（国民宿舎「ひびき」）で行われた、国際文化会館のプログラム「アジア・リーダーシップ・フェロー・プログラム（ALFP）」において森崎和江は、表現者としての立ち位置を尋ねられ、「詩人」である、と発言している（茶園梨加「外界と響きあう、ダイアローグとしての詩―森崎和江の詩を読む―」、「社会文学」三四号、二〇一一年六月）。

22　再録は、『さわやかな欠如』（絶版止揚版発行委員会、一九七一年一一月）、『かりうどの朝　森崎和江詩集』、『森崎和江詩集』である。初刊から再録への異同は、助詞の変動などであり、その内容自体の改変はない。参考として、初刊から再録への異同を記した詩「狐」の全文を載せる。

初刊……『ピポー叢書74　さわやかな欠如』（国文社、64・

9）
再録……
A『さわやかな欠如』（絶版止揚版発行委員会、一九七一年十一月）
B『かりうどの朝』（深夜叢書社、一九七四年五月）
C『森崎和江詩集』（土曜美術社、一九八四年八月）

「狐」

桐江
おばはん
みていておくれ
の
かたまりがどろりと割れる
とうちゃんは
うちが大便するくらいにもおもうとらん
伯母
みていてどうなる
桐江
屁のごともない
うちは
だれかにみてもらわな　せつなか
伯母
おれはどこへいくあてもありはせん
やま（BC炭坑）はつぶれて
後家のしごとはの（BC無）うなった
人の股ぐらのぞいているのが似おうとろう
桐江
そういわんでおくれ　おばはん
うちはなにしよるのかようわからん
狐のごたる（Bような）もんがうちの体にはいっとる
せつなか
狐をかきだしてもうちはうちじゃ（「も」後にBスペースあり）
はいっていてもうちはうちばい（「も」後にBスペースあり）
ほんに屁のごともないたいなあ
の
うちはなに（A何）をしよると？
茶碗に一杯の血をかきだ（A出）して
それでなにをしたというのじゃろう？
伯母
知ったことか
おまえは茶碗一杯の血だろうが
おれは五十年
ななつのときから坑内へさがって
おれはいっぱいひりだした
桐江
おれはおまえのように見てくれなんか（Bなんぞと）（Cなんかと）いいはせん

いう相手はおらんとばい
おれは石炭に
見ておれ見ておれといいながら
なんかいっぱいひりだした
茶碗いっぱいの血かい！
桐江
なにや！
茶碗いっぱいの血とあんたの五十年と　どこがどうち　がう
あんたがなにをしたとぬかすの（B「の」なし）
みてみ
こげなくされやまの（Bこんな　くされやまの）
やぶれ医者の
板ん間に
まいにちどがしこ（Bたくさん）のおなごの血が重っ
　とるの（BC「の」なし）
それがなにか（A改行なし）
あんたにわかっとるかの
伯母
わからんことはないばい
おれはわかっとる
桐江
よかたい
わかっとるいうても　それはあんた一人ががてんする
　ばかしじゃ
なんにもなりはせん
男は血がでりゃ金になる
とうちゃんは坑内で　じぶん（Bしぶん）で指を断ち
　おとして金をとる
金になる血と
金にならん血と
それはどこらへんでわかれると（Bの）かなあ
伯母
金になる血か
やす売りするな
売るな
ぜんぶ　ぶっかけろ
桐江
うちはあんたをうらんどる
あんたは五十年というばってん
なにかわからんもんをひりだ（A出）したというけれ
　ど
それでもそいつのゆうれいがあるやないか
化けもんのごと（Bような）ぼたやま（BCボタ山）
　が
そこにひっかけとるやないかね自分を
うちが太うなったころは
おなごは坑内にもいれてくれん
うちはどこへ行けばよかったの（Aかい）
どこへ入れればよかったのかい（Aこの一行なし）
うちは好いてもおらん男と遮二無二こすりあって

十二かいも　きだした
それだけがうちの現場じゃ
うちの現場には見えん狐がおる
おるのにない……
おるのにない　おるのにない　うちはそういいつづけた
それがなにかしりたくて
かきだせるだけかきだすとじゃ
あんたの幽霊とどこがどうちがうか
みせようとつれてきたんじゃ
伯母
おまえ　ちと（C傍点あり）まちがっとるばい
おれはゆうれいなんかにたよっとらん
人間につく狐というものは
そいつは首がない
おれはなにもないくらやみに入っていったおなごたい
たたき殺されるような穴んなかで
つるはしの柄についとるこぶくらいにもおもわれんま
五十年
けれど　そげな（BCそんな）こたあなんでもない
おれはなにもないくらやみを知った
知ってしまった
まっくらくらが
おれが行けばぱちぱち音たててかぶさる
おれはわかる　おまえの狐が
それはあのくらやみになっとらん
漬物桶のへしゃげたようなもんじゃ
桐江
ばかにするな
そげなやぶれもんとちがう
伯母
いやちがわん
桐江
おまえはそれを金光さんの鏡のごと　つるつるひかったもんだとおもいたいんじゃ
そんなもん（Cの）に作りかえてなんになる
そんなもんなら　いくらもこの世にころがっとる
桐江
裂けとるから宝たい
桐江
おばはん
そんなにつぎつぎにいわんでおくれ
おなごのしごとは
うちの股ぐらからつぶれておちる肉みたいなものとちがうの？
生んだのではなかろうが
使うたもんでもなかろうが
からだのなかに芽がはえて
それをじぶんでかっさらう

火をにぎりしめたごと
それがうちに　みつくとたい
そしてな
　みつかれたときになにもかもどっとかわる
あの変り目！
あれたい
あれだけがおなごを搾ったときのしずくとおもう
伯母
桐江のようなおなごの汁じゃろの
そんな汁を
蓮の葉の水玉みたいにきらきらしたもんとおもうな
手のひらにのせるな
そいつは　あのくらやみからつんぎれとる
人間はの
つるはしが石炭に火を噴（Ｂ嘖）かせたごと
人間というもんを生んどらん
生んどるもんかい
人間一匹うみましたというおなごでも男でもおったら
　つれてきてみい
おれがなにを生んだのか見せてやる

※　（Ａには※はなく、一行あき）

女一
いたた（Ｃか）った　ばかみたい　ああいたさ

女二
うち　うなりよったろ？
おかしかったろう？
女三
どうあろう
ふとうか声で
いたかあ！
とどならんの
伯母
そうそう　みんなふとうか声でうなれ
犬神さまじゃあ
女一
いやばい　犬神なんか縁起のわるい
犬神（ＢＣ犬）がほえれば坑内に非常がおこるばい
伯母
なにいいよる
今日はあんたたちの非常じゃろうも
ほえろ
ほえたててどこもかしこも非常をおこせ
桐江
非常であるもんの
おいわいばい
おなごだけが知っとる　おなごだけがさわっとる
生きるんでもない（ＡＢし）　死ぬんでもなし
生かすでもなく殺すでもなく

それでも
そこになにかあるとばい
かあっと　青空のように　ある
女たち
そうそう
ぽかあっとな　ぽかあっと
ああ
からだがすかっとした　腹がすいたわ
女一
いわい酒つめてきたよ
鯛の目玉をほらみてみい
たべよう
みんなでわけて
女たち
たべようや
みんなでわけて
のもうたい
みんなでわけて
女一
おなごは今日でなけりゃ腹いっぱいたべられん
それでも家んなかでくうわけにいくまいが
女二
ああ餓鬼やあんやつ（ＢＣおやじ）なんぞとわけるわけにいくもんの
女四
ありゃ　よかことがありよるばい
女一
あれ
もうようなったの
さんざ　うなりよったが
女四
ああ　おやかましゅうございました
女たち
あはは　ははは
あんたもかたれ（ＢＣおいで）　今日はいわいじゃ
腹いっぱい食うこともない
いつかまた石の河原で
いたかあ　とどなろうたい
さあ
今日の酒を
のもうたい
みんなでわけて

※　（Ａには※はなく、一行あき）

桐江
おばはん
みてみんの
うちたちはこれだけの
いや　これだけでもよか

いいけれどこれはなんの
伯母
おまえ　狐とか青空とか搾りしるとか粕とかなんとか
　かんとかいいよったろ
桐江
ああ
伯母
桐江
石炭のようなもんがどっさりあるとおもわんか
まだ人間の目に（ＢＣ人間に）みえていないところにの（Ｂ
Ｃ「の」なし）
おれは穴のなかで
なにもないまっくらをみてきた
それがどんなにかたくうつくしいもんか
おれにできたのはそこまでたい
おれは
あるものとないものの
さかいに立った
けれどもそのむこうに　もっとようけかくれとるもん
　がある
桐江
うちは
そんなにむこうにおるとじゃろうか
伯母
どうかいな
おまえ
ほんとうに　おる（Ｂおる、Ｃおる）のか？
ふらふらむこうからけつわって（ＢＣ逃げて）きたと
　じゃあるまい？
桐江
やっぱりおまえ一人でやれ
おれはみてやらん
死にようがたらんばい　おまえは
桐江
おばはん（Ａおばはあん）
みていておくれ
待っていておくれ
伯母
ごめんだね
どれ　昼ままどもく（ＢＣ食）わじゃこて

23　初出発表の一九六一年当時、森崎は三四歳。初刊は一九六四年の刊行、三七歳であった。つまり、森崎は偶然にも初刊で「狐」を発表した時、初出で記していた桐江とほぼ同じ年齢となる。

24　一九二八年の鉱夫労役扶助規則改正によって、女性鉱夫の深夜業と坑内労働が禁止となる。野依智子は「機械化による坑内労働からの排除と低賃金化が、女性鉱夫を「主婦」へと変容させていった」と論じている（『近代筑豊炭鉱における女性労働と家族　「家族賃金」観念と「家庭イデオロギー」

の形成過程』明石書店、二〇一〇年二月）。

25　似た表現が上野英信『追われゆく坑夫たち』（岩波書店、一九六〇年八月、一二五頁）にも登場する。Ｙさんという坑夫の聞き書きが記述されており、彼もまた「坑夫なんてツルバシの柄です。折れたが最後、ふりむきもされません」と語っている。

26　『まっくら―女坑夫からの聞き書き』理論社、一九六一年六月、二一頁

27　『同』、七九頁

28　山本作兵衛『新装版　画文集　炭鉱に生きる　地の底の人生記録』（講談社、二〇一一年七月／第一刷は一九六七年一〇月）、一〇五―一〇八頁

29　創刊は、一九五九年八月一日、終刊は一九六一年七月三〇日である。創刊、終刊については、森崎和江『闘いとエロス』（三一書房、一九七〇年五月）に詳しい。また、河野信子によって一九七〇年に活字で再刊され、各々を分けて第一次、第二次と呼ぶ場合がある。森崎は第二次には参加していない。第二〇号まで発刊され、毎号一〇から二〇頁の分量である。発行所は、第一、二号は「九州サークル研究会内・交流誌準備会」、第四号は「交流誌発行準備会」、第一四号は「無名通信編集部」、それ以外はすべて「九州サークル研究会内」。

30　この古賀の文章の後には編集部が付したと思われる以下の文が掲載されている。「のぶ子さんは、気管支拡張症で殆んど病床にあります。床の中で字を書くことも楽でなく、しかも最小限の自活をペンで支えようとしていらっしゃいます。会員の方々、個別な交流をして下さればと思います。」この後に、古賀の住所が記されている。

31　出席者は、大屋ふく代、河野信子、重幸子、谷本澄子、豊原怜子、中村陽子、森崎和江、原田幸枝である。

32　以上の引用は、座談会「女のことば―その開拓の方向について」（「無名通信」一九号）の森崎の発言に拠る。

33　例えば、御厨貴編『オーラル・ヒストリー入門』（岩波書店、二〇〇七年一〇月）、佐藤郁哉『フィールドワーク　増訂版』（新曜社、二〇〇六年一二月）、保苅実『ラディカル・オーラル・ヒストリー―オーストラリア先住民アボリジニの歴史実践』（御茶の水書房、二〇〇四年九月）など。

34　香月洋一郎『記憶すること・記録すること　聞き書き論ノート』（吉川弘文館、二〇〇二年一〇月）で述べられている聞き書きの考え方に共通点をみいだせる。

35　森崎がノートを交換していた人名についてはこれまで明らかになっていないが、『第三の性』の律子の病状や発言の中身、文体、また「無名通信」誌面などから参照すると、「狐」の感想を投稿した古賀のぶ子であることが推測される。

36　水溜真由美は、『第三の性』が異性愛を前提としており、同性愛のケースが周辺的なものとして想定されていると言わざるを得ないが、伝統的なジェンダー概念を強化するような仕方で意味づけられるわけではないことを指摘している。（「森崎和江　第三の性」、『戦後思想の名著50』平凡社、二〇〇六年二月）。

37　『第三の性―はるかなるエロス』八章、四五頁

38 『同』一四章、一一三―一一五頁
39 『同』二一章、一七四頁
40 『同』二二章、一七八―一七九頁

■第六章

1 全一七巻、藤原書店
2 藤原書店、二〇〇九年四月～二〇一〇年三月
3 河出書房新社、二〇一一年一月
4 朝日新聞出版、二〇一二年八月
5 河出書房新社、二〇一二年三月
6 『〈3．11フクシマ〉以後のフェミニズム―脱原発と新しい世界へ』御茶の水書房、二〇一二年七月
7 『苦海浄土』講談社文庫、解説、一九七二年一二月
8 「日本近代文学」二〇〇九年一一月
9 雄山閣、一九八二年一月
10 れんが書房新社、一九八五年七月
11 藤原書店、一九九二年一月
12 創言社、一九九四年四月
13 佐藤泰正編『フェミニズムあるいはフェミニズム以後』笠間書院、一九九一年一月
14 「群像」一九九七年六月
15 「社会文学」二〇〇一年六月
16 「サウンドスケープ」二〇〇一年五月
17 「文学と環境」二〇〇三年一〇月
18 「文学と環境」二〇〇六年九月
19 「国際文化学研究　神戸大学国際文化学部紀要」二〇一二年九月
20 彩流社、二〇〇四年七月
21 水声社、二〇一〇年七月
22 北田暁大、野上元、水溜真由美編『カルチュラル・ポリティクス1960/70』せりか書房、二〇〇五年一二月
23 「早稲田大学教育学部学術研究　国語・国文学編」二〇一〇年二月
24 「敍説」Ⅲ―9、二〇一三年三月
25 「敍説」Ⅲ―10、二〇一三年九月
26 「石牟礼道子『苦海浄土―わが水俣病の改稿をめぐって』二〇一〇年度日本近代文学会秋季大会、二〇一〇年一〇月二四日、於三重大学
27 井上洋子「展望　森崎和江・石牟礼道子研究の現在」「日本近代文学」二〇〇九年一一月
28 一九五九年頃執筆、未発表、『石牟礼道子全集・不知火』第一巻（二〇〇四年七月）所収
29 葦書房、一九七四年
30 一九五九―六〇、執筆。後、『石牟礼道子全集　不知火第一巻』（藤原書店、二〇〇四年七月）に収録。
31 『熊本日日新聞』一九六四年一二月一一日
32 平凡社、一九六〇年一一月
33 石牟礼道子「あとがき」（『苦海浄土―わが水俣病』講談社、一九六九年一月
34 石牟礼道子＋イバン・イリイチ対談「「希望」を語る―小

さな世界からのメッセージ―」河野信子・田部光子『無劫の人―石牟礼道子の世界』藤原書店、一九九二年一月、vi頁

35 「地方誌編集者の出会い―石牟礼道子著『苦海浄土―わが水俣病』―」、『本の誕生―編集の現場から―』日本エディタースクール出版部、一九八一年九月

36 三一書房、一九六五年三月

37 「改稿に当って」、『苦海浄土―わが水俣病』講談社文庫、一九七二年一二月

38 「村野タマノ　旧姓川上タマノ　五十六才」の録音された語り（RKB毎日放送『苦海浄土』台本、放送日時、一九七〇年一一月一四日午後四時から四時五五分）

39 石牟礼道子「八月の海の道　村野タマノさんを悼む」（水俣病を告発する会発行機関紙「水俣―患者とともに」第八五号、一九七六年八月二五日）

40 「石牟礼道子の世界」、『苦海浄土―わが水俣病』講談社文庫、一九七二年一二月

■終章

1 佐多稲子「力づよい主婦たちの闘い　三池の闘いをバックアップするもの」（機関紙「みいけ」第六一二号掲載「みいけ主婦会」、一九六〇年二月二一日）

2 針生一郎「三池コンミューン」（「新日本文学」一九六〇年九月）

3 谷川雁「ミイケはどこへいったか」（「別冊新日本文学」創刊号、一九六一年七月）

4 石牟礼道子「あとがき」、『アニマの鳥』（筑摩書房、一九九九年一一月→『石牟礼道子全集　不知火　第一三巻』藤原書店、二〇〇七年一〇月）

5 石牟礼道子「納戸仏さま―あとがきにかえて―」（『石牟礼道子全集　不知火　第一三巻』）

■資料編

A

1 第八号まで発行責任者（もしくは編集発行責任者）であった上田博によると、実際に雑誌をとりまとめていたのは上野英信であったという（二〇〇八年八月二三日に行った本人への聞き取りによる）。また、上田は「僕は労働組合員でした。組合からな、そういうサークル誌を出すためにはな、補助金もらうのよな。だから私が名義人だった」（「インタビュー　うえだ・ひろし」聞き手・ジャスティン・ジェスティー、徳永恵太、『‘文化’資源としての〈炭鉱〉展〈ヤマ〉の美術・写真・グラフィック・映画』目黒区美術館、二〇〇九年一一月）と語っている。

2 山崎喜与志については、茶園梨加「炭鉱夫が炭鉱夫の生活を書くということ―山崎喜与志作品はいかに読まれたか―」（「九大日文」九号、二〇〇七年三月三一日）を参照されたい。「月刊たかまつ」誌上で連載される創作「いのち」は、「月刊たかまつ」以前に日炭高松労組で発行されていたサークル誌「炭鉱長屋」において、三回まで発表されている。

3　坂口博による解題「上野英信「散文詩　田園交響曲」」（「原爆文学研究」七号、二〇〇八年一二月二〇日）を参照されたい。

4　『サークル村』へ直接繋がっていくのは、上野英信も散文詩やルポを執筆した『月刊たかまつ』である」（坂口博「『サークル村』創刊前夜」、『復刻版サークル村付録』不二出版、二〇〇六年六月）。

参考文献一覧

■序章

・「地下戦線」筑豊炭坑労働者文芸工作集団、第一号（一九五三年五月一五日）～第五号（一九五四年三月一〇日）
・「新しい文学の方向―野間宏氏を囲んで―　大牟田各文学文化団体座談会」（「炭鉱地帯」二号、三池炭鉱労組、一九五五年三月）
・「高松文学」創刊号、日炭高松文学サークル、一九五五年七月
・「炭鉱砿長屋」日炭高松文芸学習会、第一号（一九五六年一月一日）～第五号（一九五六年五月一五日）
・「山田文学」二六号、一九五六年七月
・「月刊たかまつ」（第九号から「文芸誌たかまつ」と改題）創刊号、日炭高松文学・美術サークル協議会（一九五六年一一月）～第一一号（一九五八年三月八日）
・「山田文学」二七号、一九五六年一一月
・「民話」創刊号、未来社、一九五八年九月
・「サークル村」九州サークル研究会、第一巻第一号（一九五八年九月）～第四巻第六号（一九六一年一〇月）
・「無名通信」創刊（一九五九年八月）～二〇号（一九六一年七月）
・機関紙「みいけ」六一二号、一九六〇年二月二一日
・「やまの音」二号、一九六〇年六月
・『共同研究　集団』思想の科学研究会編、平凡社、一九七六年六月
・幻灯（DVD）「せんぷりせんじが笑った！」（人形・勢満雄、撮影・菊池利夫／監修上野朱・本橋成一、朗読青木美香、編集公文健太郎、ポレポレタイムス社、二〇〇六年）
・『九州・福岡のうたごえの半世紀・記念誌』編集発行記念誌編纂呼びかけ人会議、後援九州のうたごえ連絡協議会、二〇〇六年一〇月
・「原爆文学研究会」八号、原爆文学研究会、二〇〇九年一二月
・新木安利『サークル村の磁場　上野英信・谷川雁・森崎和江』（海鳥社、二〇一一年二月）
・いいだもも「原点はどこに存在するか―田舎政論家の詩論風の手紙―」（「文学」一九五九年一〇月）
・石川巧「敗戦後の福岡における演劇・芸能復興年表」（「市史研究　ふくおか」第四号、二〇〇九年二月二八日）
・石牟礼道子『苦海浄土―わが水俣病』（講談社、一九六九年一月）
・井上洋子「『無名通信』をめぐって」（『復刻版　サークル村別冊』九州サークル研究会、不二出版、二〇〇六年六月）
・宇野田尚哉「『ヂンダレ』『カリオン』『原点』『黄海』解説」（『復刻版『ヂンダレ・カリオン』別冊』不二出版、二〇〇八年一一月）
・大沢真一郎「戦後サークル運動の到達点は何か―「サークル村」の展開過程に即して（集団の戦後思想史）」（「思想の

科学」第五次、第一一五号、一九七一年四月）
・大沢真一郎「戦後民衆論ノート」（『遊撃の思想―長征の途上にて―』行路社、二〇〇〇年五月）
・草笛健作「第一回筑豊文学サークル懇親会に出席して」（「あしおと」一号、一九五七年一一月）
・国上伸雄遺稿集『地底の手記』日炭高松文学サークル、一九五八年二月
・黒ダライ児「九州派　都市のなかの「民衆」」『肉体のアナーキズム　１９６０年代・日本美術におけるパフォーマンスの地下水脈』（grambooks　二〇一〇年九月）
・国分一太郎「労働組合とサークル―せまい見聞から―」（「文学」一九五九年一〇月）
・坂口博「『サークル村』創刊前夜」（『復刻版　サークル村別冊』九州サークル研究会、不二出版、二〇〇六年六月）
・坂口博「「サークル村」復刻の射程」（「日本近代文学」二〇〇七年五月）
・佐藤泉「共同体の再想像―谷川雁の「村」―」（「日本文学」二〇〇七年一一月）
・ジャスティン・ジェスティー、徳永恵太「千田梅二論」（『文化，資源としての〈炭鉱〉展』目黒区美術館、二〇〇九年一一月）
・高田佳利「サークル運動の停滞を破る」（「思想の科学」一九五九年七月）
・田中巖「〈戦後サークルの歴史と問題〉文学サークル―四年間の収支決算書―」（「文学」一九五九年一〇月）
・谷川雁「工作者の死体に萌えるもの」（「文学」一九五八年六月）
・谷川雁「サークル運動の現在地点」（「文学」一九五九年六月）
・谷川雁「観測者と工作者」（「民話」九号、一九五九年六月）
・谷川雁「政治的前衛とサークル」（「文学」一九五九年一〇月）
・谷川雁「反暴力」（「サークル村」第三巻第五号、一九六〇年六月）
・鳥羽耕史『１９５０年代―「記録」の時代』（河出ブックス　０２３、二〇一〇年一二月）
・中谷いずみ『その「民衆」とは誰なのか　ジェンダー・階級・アイデンティティ』（青弓社、二〇一三年七月）
・日高六郎「大衆論の周辺―知識人と大衆の対立について―」（「民話」第六号、一九五九年三月／七号、一九五九年四月）
・日高六郎「〈資料〉文化活動地方代表者会議における問題提起（三月二十九日）」（「文学」一九五九年六月）
・日高六郎「サークル的姿勢について」（「文学」一九五九年一〇月）
・松下博文「「はさまれる」思想―『サークル村』解説にかえて」（『復刻版　サークル村　別冊』九州サークル研究会、不二出版、二〇〇六年六月）
・松原新一『幻影のコンミューン―「サークル村」を検証する』（創言社、二〇〇一年四月）
・眞鍋呉夫「炭鉱労働者の文化運動―行動と思想のサケメ―」（「文学」一九五九年一〇月）

・道場親信「無数の「解放区」が異なる地図を作りだしていた時代」（『『東京南部サークル雑誌集成』解説・解題・回想・総目次・索引』不二出版、二〇〇九年七月）
・水溜真由美「同化型共同体の拒絶―森崎和江と炭坑」（「思想」二〇〇一年一一月）
・水溜真由美「森崎和江と『サークル村』―一九六〇年前後の九州におけるリブの胎動（戦後六〇）」（「思想」二〇〇五年一二月）
・水溜真由美「炭鉱におけるサークル運動の展開―文学サークルを中心に（前／後）」（「国語国文研究」一三三号、二〇〇七年一〇月／一三四号、二〇〇八年三月）
・水溜真由美「一九五〇年における炭鉱労働者のうたごえ運動」（『北海道大学文学研究科紀要』二〇〇八年一一月）
・水溜真由美『『サークル村』と森崎和江』（ナカニシヤ出版、二〇一三年四月）
・森田ヤエ子「炭労文化講師として来山したルポルタージュ作家、杉浦明平に逢って」（「山田文学」三一号、一九五八年二月）
・森崎和江『まっくら―女坑夫の聞き書き』（理論社、一九六一年六月）
・森崎和江『第三の性―はるかなるエロス』（三一新書、一九六五年二月）
・山口洋三「九州派とサークル村―その関係性をめぐるノート」『文化，資源としての〈炭鉱〉展』目黒区美術館、二〇〇九年一一月）
・吉本隆明「海老すきと小魚すき」（「民話」第一二号、一九五九年九月）
・吉本隆明「谷川雁論」（「思想の科学」一九五九年一二月）

■第一章

・「蟻塚」第一集、一九五一年三月
・「文芸教場」第二号、文芸教場新社発行、主幹・持永虹村、昭和四〇年二月一五日
・「日炭高松」第二〇一号、発行所日本炭鉱株式会社遠賀鉱業所、一九四六年六月二七日
・「日炭高松」第二〇四号、一九四六年八月二五日
・「日炭高松」第二〇五号、一九四六年九月一日
・「日炭高松」第二〇六号、一九四六年一〇月一日
・「日炭高松」第二〇七号、一九四六年一〇月一五日
・「日炭高松」第二一九号、一九四七年六月二〇日
・「日炭高松」第二一九号、一九四七年六月二〇日
・「日炭高松」第二三二号、一九四八年三月一〇日
・「日炭高松」第二四一号、一九四八年一〇月一〇日
・「日炭高松」第二四四号、一九四八年一二月一五日
・「日炭高松」第二五〇号、一九四九年四月一五日
・「日炭高松」第三二三号、一九五三年六月一五日
・「高松文學」発行所高松文学サークル、一九四七年一一月
・「高松文學」第二号、編集兼発行人松本信也、一九四九年一一月一五日
・「広報水巻」二九号、一九五一年三月一日

・「広報水巻」三一号、一九五一年四月五日
・「せいさんきょう」二号、五支部生産協議会、発行責任者柴崎弥一郎、編集責任者瓜生金男、一九五八年一二月三日
・「せいさんきょう」七号、一九五九年六月三日
・「さいたん」二八号、一砿採炭協議会、一九五八年一〇月一三日
・「さいたん」三六号、一砿採炭協議会、一九五九年七月一一日
・「さいたん」二〇号、第二支部採炭協議会、発行責任者大石溢美、編集責任者馬場春、一九五九年七月五日
・「さいたん」二一号、第二支部採炭協議会、一九五八年七月三〇日
・「さいたん」二二号、第二支部採炭協議会、一九五八年八月二九日
・「さいたん」二三号、第二支部採炭協議会、一九五九年一〇月九日
・「さいたん」二七号、一砿採炭協議会機関紙、発行責任者串田花王丸、編集責任者今田重雄、一九五八年九月五日
・「萌友」七号、日炭高松労組第一支部青年部、発行責任者吉住善明、編集責任者香月一三、一九五八年七月二五日
・「萌友」九号、第一支部青年部、発行責任者吉住善明、編集責任者香月一三、一九五八年一〇月二〇日
・「萌友」一九号、日炭高松労組一支部青年部機関紙、発行責任者吉住善明、編集責任者原野富士男、一九五九年七月二七日
・「創刊宣言　さらに深く集団の意味を」（「サークル村」第一巻第一号、一九五八年九月二〇日）
・「せいねん」四号、第四支部青年部事務局、発行責任者高橋利晴、編集責任者白石繁夫、木村和昭、一九五八年一〇月六日
・「せいねん」五号、第四支部青年部事務局、発行責任者高橋和晴、編集責任者白石繁夫、木村和昭、一九五八年一一月四日
・「せいねん」一〇号、第四支部青年部事務局、発行責任者高橋利晴、編集責任者白石繁夫、油布己千夫、一九五九年八月
・「せいねん新聞」二〇号、日炭高松労組第二支部青年部、発行責任者三浦隆男、編集責任者岸本明、一九五八年一一月一五日
・「しくり」五号、日炭高松労働組合第二支部　仕繰協議会職場機関紙、発行責任者植木弘、編集責任者高木方男、一九五八年一二月一日
・「しくり」一一号、第二支部仕繰協議会機関紙、発行責任者植木弘、編集責任者樋口安太郎、一九五九年七月三一日
・「せいさんきょう」二号、五支部生産協議会、発行責任者柴崎弥一郎、編集責任者瓜生金男、一九五八年一二月三日
・「事務協」一号、発行責任者二木宗興、黒河晃、一九五八年
・「萌友」一五号、日炭高松労組一支部青年部機関紙、発行責任者吉住善男、編集責任者原野富士男、一九五九年三月一七日

・「萌友」一八号、日炭高松労組第一支部青年部機関紙、発行責任者吉住善明、編集責任者原野富士男、一九五九年六月二七日
・「しくりしんぶん」一七号、一支部仕繰協、編集責任者真方、編集責任者柴田、一九五九年三月二〇日
・「さいたん」三三号、一砿採炭協議会機関紙、発行責任者串田花王丸、編集責任者今田重雄、一九五九年三月二〇日
・「せいさん」四号、五支部生産協議会、発行責任者柴崎弥一郎、編集責任者瓜生金男、一九五九年五月三日
・「せいさん」七号、五支部生産協議会、発行責任者柴崎弥一郎、編集責任者瓜生金男、一九五九年六月三日
・「坑外新聞」二号、発行責任者森安照喜、編集責任者杉原・茂谷一九五九年七月二六日
・「坑外新聞」三号、発行所不明、発行責任者森安照喜、編集責任者杉原・茂谷、一九五九年八月三〇日
・「どりる」八号、掘進協機関紙、発行責任者福田政弘、編集責任者夫富左沙男、一九五九年七月一六日
・「支部だより」一号、高松労組第一支部機関紙、発行・編集責任者第一支部執行部、一九五九年七月一八日
・「五朋」号数不明、五支部青婦会、発行責任者西岡渉、編集責任者坂本昇、一九五九年七月二〇日
・「さいたん」八月号、第四支部採炭協議会機関紙、発行責任者川島弘、編集責任者吉武勉、一九五九年八月
・「くっしん」一五号、高松労組第一支部、発行責任者松江安則、編集責任者坂本栄、一九五九年発行月日不明
・「労働藝術」創刊号のみ、編輯・発行・印刷温雅荘文化部、一九四八年七月一〇日
・「地下戦線」第一号（一九五三年五月一五日）～第五号（一九五四年三月一〇日）、発行所筑豊炭坑労働者文芸工作集団（福岡県遠賀郡水巻町吉田高松労組一支部内）、発行責任者黒井修、編集責任者上野英信
・「炭砿長屋」第一号（一九五六年一月一日）～第五号（一九五六年五月一五日）、発行所日炭高松文芸学習会（福岡県遠賀郡水巻町片山区弥生町第一高松炭砿内国上方）
・「月刊たかまつ」創刊号（一九五六年一一月一日）～第一一号（一九五八年三月八日）、日炭高松文学・美術サークル協議会、発行編集責任者上田博、事務局福岡県遠賀郡水巻町頃末日炭高松労働組合教育宣伝部
・「高松文学」創刊号、日炭高松文学サークル、発行所日炭高松労組内高松青年婦人連絡会議、編輯責任者鎌田勉、発行責任者庄田明、一九五五年七月一日
・当間嗣光「サークル誌めぐり」（「新日本文学」一九五六年一〇月号）
・『日炭高松組合十年史』日炭高松労働組合、発行人星子勲、編集責任者有吉富造、発行所日炭高松労働組合、一九五九年五月
・『佐賀の文学』新郷土刊行協会、一九八七年
・『増補水巻町誌』二〇〇一年六月
・『平成十七年度水巻町歴史資料館企画展「水巻の炭鉱とその暮らし」』水巻町歴史資料館、二〇〇五年九月

・『復刻版　サークル村　別冊』九州サークル研究会、不二出版、二〇〇六年六月
・「現代思想 十二月臨時増刊号　戦後民衆精神史」二〇〇七年一二月一五日
・『復刻版　ヂンダレ・カリオン』大阪朝鮮詩人集団、不二出版、二〇〇八年一一月
・有馬学「戦時期日本の文化・運動・地方」（『九州という思想』松本常彦・大島明秀編、花書院、二〇〇七年五月）
・いいだ・もも「原点はどこに存在するか―田舎政論家の詩論風の手紙―」（「文学」一九五九年一〇月）
・金子徳好・森一作共著『宣伝活動入門』日本機関紙協会、一九六八年八月
・坂口博「『サークル村』創刊前夜」（『復刻版サークル村　別冊』不二出版、二〇〇六年六月九日）
・高田佳利「サークル運動の停滞を破る」（「思想の科学」一九五九年七月）
・谷川雁「サークル運動の現在地点」（「文学」一九五九年六月）
・田村紀雄・志村章子編著『ガリ版文化史―手づくりメディアの物語』新宿書房、一九八五年三月
・茶園梨加「炭鉱夫が炭鉱夫の生活を書くということ」（「九大日文」九号、二〇〇七年三月三一日）
・日高六郎「〈資料〉文化活動地方代表者会議における問題提起（三月二十九日）」（「文学」一九五九年六月）
・日高六郎「サークル的姿勢について」（「文学」一九五九年一〇月）
・真鍋呉夫「炭鉱労働者の文化運動―行動と思想のサケメ―」（「文学」一九五九年一〇月）
・水溜真由美「炭鉱におけるサークル運動の展開―文学サークルを中心に（前）（後）」（「国語国文研究」第一三四号、北海道大学国語国文学会、二〇〇八年三月）

■第二章

・「山田文学」九号（一九五五年二月二〇日）、一〇号（一九五五年三月一七日）、一三号（一九五五年）～二三号（一九五六年四月二二日）、二五号（一九五六年六月）～二七号（一九五六年一一月）、三〇号（一九五七年一二月）～三二号（一九五八年四月）、三四号（一九五九年六月一日）
・『沙漠詩集〈1957年版〉』（現代社、一九五七年一月）
・三菱上山田労組棹取職場支部文芸同好会刊行のサークル誌「微風」創刊号（一九五八年八月？）
・「再出発のために　第三回総会への参考資料」（「サークル村」三巻六号、一九六〇年九月一〇日）
・『サークル運動』（緑の会文化サークル研究会、大文社、一九六〇年三月）
・『山田市誌』一九八六年三月
・「川筋気質・人とドラマ〈8〉森田ヤエ子さん・筑豊」（『西日本新聞』一九九〇年三月一五日）
・ちくほう女性会議編『ちくほうの女性たちの歩み』（海鳥社、二〇〇〇年三月）
・「炭鉱（ヤマ）の歌が聞こえる　荒木栄と森田ヤエ子」〈1〉

〜〈3〉（『西日本新聞』二〇〇七年三月三〇日〜四月二日）
・岡村幸宣「「原爆の図」全国巡回展の軌跡」（「原爆文学研究」八号、二〇〇九年一二月）
・木村日出夫「山田文学の航跡と進路」（「山田文学」一五号、一九五五年八月）
・木村日出夫「発禁その後」（「サークル村」二巻二号、一九五九年二月）
・坂口博「解題　散文詩　田園交響曲」（『原爆文学研究』七号、二〇〇八年一二月）
・坂口博「「原爆文学」探査⑨上野英信『黒い朝』」（「原爆文学研究」九号、二〇一〇年一二月）
・中村卓美「木村日出夫ノートーサークルの詩と炭坑労働者」（『最初の機械屋』試行出版部、一九六五年一月）
・福田冷三「サークルと労働組合　職場サークルの経験から」（「知性」一九五五年一一月）
・松原新一『幻影のコンミューンー「サークル村」を検証する』（創言社、二〇〇一年四月）
・水溜真由美『「サークル村」と森崎和江ー交流と連帯のヴィジョン』（ナカニシヤ出版、二〇一三年四月）
・森田ヤエ子『この勝利ひびけとどろけー荒木栄の生涯』大月書店、一九八三年一二月

■第三章
・「座談会　戦後三池の文学運動ー内田博に訊くー」、（第三次「三池文学」一六号、一九六七年一一月）
・「炭鉱地帯」創刊号、発行者三池炭鉱労組、一九五五年一月
・「炭鉱地帯」二号、一九五五年三月
・「いっく」一五号、三池炭鉱労組三川支部外来一区連合会、一九五七年五月
・「いっく」一六号、一九五七年七月
・「ていぼう」五号、三川鉱新港社宅（三池炭鉱労組）、発行者内山孝之助、編集者今田実光義、一九五七年五月
・「ていぼう」六号、一九五七年七月
・「かつら」八号、三鉱労組三川支部、編集発行責任池田昭二、一九五七年六月
・「かつら」九号、一九五七年八月
・「協風」大砂地域分会、一三号、一九五七年八月
・「坑」一号、三川鉱文学サークル、発行所大牟田市臼井新町一丁目、発行人北村瞳、編集人杉本一男、印刷所三鉱労組印刷工場、一九五九年一月
・「みいけ」三池炭鉱労働組合、一九五九年二月
・機関紙「みいけ」第六〇〇号、一九五九年一一月二二日
・「闘いを本にしたい　佐多さんを囲んで懇談　宮原」（機関紙「みいけ」第六〇八号、「みいけ主婦会」一九六〇年一月二四日）
・機関紙「みいけ」六〇九号、一九六〇年一月三一日
・「円虹」一〇四号、三池労組俳句サークル、発行所熊本県荒尾市緑ヶ丘弥生町二六棟三池労組俳句サークル円虹の会、編集発行田中未草、印刷外井秋穂、一九六一年六月
・『大牟田文化史・年表』発行大牟田文化連合会、編集大牟田

文化史・年表編集委員会、一九八六年七月
・『九州・福岡のうたごえの半世紀・記念誌』編集発行記念誌編纂呼びかけ人会議、後援九州のうたごえ連絡協議会、二〇〇六年一〇月二七日
・岡村幸宣「「原爆の図」全国巡回展の軌跡」（「原爆文学研究会」八号、二〇〇九年一二月）
・出海渓也「魂の解放をうたう文学を―さいきんの大牟田の文化運動をめぐって―」（「文学ひろば」創刊号、一九五三年二月）
・出海渓也「集団創作の可能性について」（「炭鉱地帯」創刊号、一九五五年一月）
・きたむら・ちまを「「文学サークル」のこと」（「坑」一号、一九五九年一月）
・楠田剛士「山田かんとサークル誌」（「原爆文学研究」八号、二〇〇九年一二月）
・楠田剛士「長崎戦後サークル誌「芽だち」総目次」（「九大日文」一五号、二〇一〇年三月）
・谷川雁「定型の超克」、『民主主義の神話―安保闘争の思想的総括』現代思潮社、一九六〇年一〇月
・茶園梨加「戦後サークル誌にみる文学の役割―北部九州のサークル誌①　日炭高松―」（「九大日文」一三号、二〇〇九年三月）
・針生一郎「三池コンミューン」（「新日本文学」一九六〇年九月）
・水溜真由美「炭鉱におけるサークル運動の展開―文学サークルを中心に（前）／（後）」（「国語国文研究」一三三、二〇〇七年一二月／一三四、二〇〇八年三月）
・水溜真由美「一九五〇年代における炭鉱労働者のうたごえ運動」（「北海道大学文学研究科紀要」二〇〇八年一一月）
・水溜真由美「谷川雁と三池闘争　「定型の超克」を中心に」（TKAWADE　道の手帖　谷川雁』、二〇〇九年三月）
・森崎和江「辺境レポート　二つのことば　二つのこころ　与論島をめぐって　生のはじまり・死のおわり」（「辺境」第一次第二号、一九七〇年九月）

■第四章

・「荒波」二号、福岡県朝鮮人文芸同好会、編集発行責任者李協、一九五四年発行か？
・「国民文化会議と国民文化全国集会」（「国民文化」第一号、国民文化会議機関紙、一九五八年八月）
・青木信美「あひるのうた」（「地下戦線」第五号、一九五四年三月）
・李泳采「戦後日朝関係の初期形成過程の分析―在日朝鮮人帰国運動の展開過程を中心に―」（「立命館法学」二〇一〇年五・六号（三三三・三三四号））
・『上野英信集1　話の坑口』径書房、一九八五年二月
・上原専六「〈挨拶〉サークルに世界的視野を」（第一〇号、一九六〇年五月）
・小熊英二『〈日本人〉の境界』新曜社、一九九八年一〇月
・鎌田定夫「五〇年代記録運動と上野英信―筑豊とナガサキで

—」(『追悼　上野英信』上野英信追悼録刊行会編集、裏山書房、一九八九年一月)
・川原一之『闇こそ砦　上野英信の軌跡』大月書店、二〇〇八年四月
・姜竣『越境する近代４　紙芝居と〈不気味なもの〉たちの近代』青弓社、二〇〇七年八月
・鈴木常勝『紙芝居がやってきた！』河出書房新社、二〇〇七年二月
・千々和英行「差別の国日本・その一・朝鮮人　韓国の友への手紙」(「サークル村」第三巻第一号、一九六〇年一月)
・西川孝一郎「前夜祭から」(「やまの音」第八号、発行人中原登、編集古河目尾文芸サークル、発行所古河目尾労組教宣部、一九六一年七月)
・朴慶植編『在日朝鮮人関係資料集成〈戦後編〉』第八号、不二出版、二〇〇一年二月
・朴慶植編『在日朝鮮人関係資料集成〈戦後編〉』第一〇号、不二出版、二〇〇一年二月
・林えいだい『強制連行・強制労働　筑豊朝鮮人坑夫の記録』現代史出版会、一九八一年一二月
・林えいだい『地図にないアリラン峠—強制連行の足跡をとどる旅』明石書店、一九九四年七月
・山口勲『ボタ山のあるぼくの町　山口勲写真集』海鳥社、二〇〇六年四月

■第五章

・「無名通信」第一四号、一九六〇年一二月
・「無名通信」第一八号、一九六一年五月二八日
・「無名通信」第一九号、一九六一年六月三〇日
・井手川泰子『火を産んだ母たち　女坑夫からの聞き書』葦書房、一九八四年一一月
・井上光三郎『機織唄の女たち—聞き書き秩父銘仙史』東京書籍、一九八〇年
・上野英信『追われゆく坑夫たち』岩波書店、一九六〇年八月
・香月洋一郎『記憶すること・記録すること　聞き書き論ノート』吉川弘文館、二〇〇二年一〇月
・加納実紀代　解説「Ⅱ〈無告〉の声を聴く」(『新編　日本のフェミニズム10　女性史・ジェンダー史』岩波書店、二〇〇九年二月)
・河野信子「たたかい、また、たたかう—まっくらによせて—」(「無名通信」二〇号、一九六一年七月)
・佐藤郁哉『フィールドワーク　増訂版』新曜社、二〇〇六年一二月
・佐藤泉「集団創造の詩学—森崎和江『まっくら　女坑夫からの聞き書き』—」(「社会文学」三〇号、二〇〇九年六月)
・正田誠一『九州石炭産業史論』九州大学出版会、一九八七年四月
・ジャネット・ハンター『日本の工業化と女性労働—戦前期の繊維産業』監訳・阿部武司、谷本雅之、有斐閣、二〇〇八年六月
・千田梅二『炭坑仕事唄板画巻』私家版、五〇部、一九五六年

七月
・竹中恵美子編『女子労働論』有斐閣、一九八三年五月
・茶園梨加「外界と響きあう、ダイアローグとしての詩―森崎和江の詩を読む―」（「社会文学」三四号、二〇一一年六月）
・野依智子『近代筑豊炭鉱における女性労働と家族　「家族賃金」観念と「家庭イデオロギー」の形成過程』明石書店、二〇一〇年二月
・林えいだい『闇を掘る女たち』明石書店、一九九〇年一一月
・保苅実『ラディカル・オーラル・ヒストリー―オーストラリア先住民アボリジニの歴史実践』御茶の水書房、二〇〇四年九月
・御厨貴編『オーラル・ヒストリー入門』岩波書店、二〇〇七年一〇月
・水溜真由美「森崎和江　第三の性」（『戦後思想の名著50』平凡社、二〇〇六年二月）
・森崎和江「スラをひく女たち」第一回（「サークル村」二巻七号、一九五九年七月）、
・森崎和江「スラをひく女たち」第二回（「サークル村」二巻八号、一九五九年八月）
・森崎和江「スラをひく女たち」第三回（「サークル村」二巻九号、一九五九年九月）
・森崎和江「スラをひく女たち」第四回（「サークル村」三巻二号、一九六〇年二月）
・森崎和江「スラをひく女たち」第五回（「サークル村」三巻三号、一九六〇年三月）
・森崎和江「スラをひく女たち」第六回（「サークル村」三巻四号、一九六〇年四月）
・森崎和江、放送詩「狐」（「無名通信」第一七号、一九六一年五月二五日）
・森崎和江『まっくら―女坑夫からの聞き書き』理論社、一九六一年六月
・森崎和江『さわやかな欠如』国文社、ピポー叢書74、一九六四年九月
・森崎和江『第三の性―はるかなるエロス』三一新書、一九六五年二月
・森崎和江『闘いとエロス』三一書房、一九七〇年五月
・森崎和江『まっくら―女坑夫からの聞書き』現代思潮社、一九七〇年八月
・森崎和江『さわやかな欠如』絶版止揚版発行委員会、一九七一年一一月
・森崎和江『奈落の神々　炭坑労働精神史』大和書房、一九七四年四月
・森崎和江『かりうどの朝　森崎和江詩集』深夜叢書社、一九七四年五月
・森崎和江『からゆきさん』朝日新聞社、一九七六年五月
・森崎和江『まっくら』新装版、三一書房、一九七七年六月
・森崎和江『風　森崎和江詩集』沖積舎、現代女流自選詩集叢書②、一九八二年九月
・森崎和江『森崎和江詩集』土曜美術社、日本現代詩文庫12、一九八四年八月

・森崎和江『地球の祈り』深夜叢書社、一九九八年五月
・森崎和江『ささ笛ひとつ』思潮社、二〇〇四年一〇月
・山本作兵衛『新装版　画文集　炭鉱に生きる　地の底の人生記録』講談社、二〇一一年七月／第一刷は一九六七年一〇月

■第六章

・『日本残酷物語　現代篇Ⅰ　引き裂かれた時代』平凡社、一九六〇年一一月
・RKB毎日放送『『苦海浄土』台本』放送日時、一九七〇年一一月一四日午後四から四時五五分）
・「水俣―患者とともに」第八五号、水俣病を告発する会、一九七六年八月二五日
・新井豊美『苦海浄土の世界』（れんが書房新社、一九八五年七月）
・井上洋子「石牟礼道子初期短歌のころ（四）―『苦海浄土』へ―」（「ガイア」一九九三年七月）
・井上洋子「森崎和江・石牟礼道子研究の現在」（「日本近代文学」二〇〇九年一一月）
・井上洋子「「ゆき女きき書」成立考―石牟礼道子とフェミニズム―」（佐藤泰正編『フェミニズムあるいはフェミニズム以後』笠間書院、一九九一年一月）
・石牟礼道子「水俣湾漁民のルポルタージュ　奇病」（「サークル村」第三巻第一号、一九六〇年一月）
・石牟礼道子「海と空のあいだに」（「熊本風土記」新文化集団、創刊号（一九六五年一一月）、第二号（一九六五年一二月）、第三号（一九六六年一月）、第四号（一九六六年二月）、第七号（一九六六年六月）、第八号（一九六六年七月）、第九号（一九六六年八月）、第一一号（一九六六年一一月）
・石牟礼道子『苦海浄土―わが水俣病』講談社、一九六九年一月
・石牟礼道子『苦海浄土―わが水俣病』講談社文庫、一九七二年一二月
・石牟礼道子『潮の日録』葦書房、一九七四年一二月
・石牟礼道子『新装版　苦海浄土　わが水俣病』講談社文庫、二〇〇四年七月
・石牟礼道子＋イバン・イリイチ対談「「希望」を語る―小さな世界からのメッセージ―」（河野信子・田部光子『無劫の人―石牟礼道子の世界』藤原書店、一九九二年一月）
・『石牟礼道子全集　不知火』全一七巻、藤原書店、二〇〇四年四月～二〇一二年七月
・『石牟礼道子詩文コレクション』全七巻、藤原書店、二〇〇九年四月～二〇一〇年三月
・石牟礼道子・藤原新也共著『なみだふるはな』河出書房新社、二〇一二年三月
・池澤夏樹編『世界文学全集Ⅲ―04　苦海浄土』河出書房新社、二〇一一年一月
・伊藤洋典「風景への帰属、あるいは帰属の風景」（「熊本法学」二〇一一年三月）
・岩岡中正「共同性のパラダイム転換―石牟礼道子と共同性の

回復―」（「熊本法学」二〇〇〇年六月）
・岩岡中正「石牟礼道子における存在の回復―対立から和解へ―」（「熊本法学」二〇〇八年一二月）
・岩淵宏子「表象としての〈水俣病〉―石牟礼道子の世界―」（「社会文学」二〇〇一年六月）
・岩淵宏子「原発事故と水俣病―石牟礼道子『苦海浄土―わが水俣病』から」（『〈3．11フクシマ〉以後のフェミニズム―脱原発と新しい世界へ』御茶の水書房、二〇一二年七月
・金井景子「「償い」を問う―「水俣病」と石牟礼道子『苦海浄土』の半世紀」（「早稲田大学教育学部学術研究　国語・国文学編」二〇一〇年二月）
・川村湊「風を読む　水に書く　1　潮の橋の上で―石牟礼道子論」（「群像」一九九七年六月）
・桑原史成『写真集水俣病』三一書房、一九六五年三月
・河野信子、田部光子『夢劫の人―石牟礼道子の世界』（藤原書店、一九九二年一月）
・佐藤泉「『苦海浄土』のさまざまな「栄耀栄華」―「聞き書」の主体とはだれであるのか」（「敍説」Ⅲ-9、二〇一三年三月）
・下村英視『もうひとつの知　石牟礼道子に導かれて』（創言社、一九九四年四月）
・高橋源一郎『非常時のことば　震災の後で』朝日新聞出版、二〇一二年八月
・高橋勤「ことばの近代　石牟礼道子における文学と風土」（「文学と環境」二〇〇三年一〇月）
・野田研一、結城正美編『越境するトポス―環境文学論序説』（彩流社、二〇〇四年七月）
・羽生康二『近代への呪術師・石牟礼道子』（雄山閣、一九八二年一〇月）
・松家理恵「石牟礼道子の魂と記憶の風景」（「文学と環境」二〇〇六年九月）
・松家理恵「空間の経験としての風景：イーフー・トゥアンから石牟礼道子へ」（「国際文化学研究　神戸大学国際文化学部紀要」二〇一二年九月）
・水溜真由美「石牟礼道子と水俣―ゆらぐ〈共同体〉像」（北田暁大、野上元、水溜真由美編『カルチュラル・ポリティクス1960/70』せりか書房、二〇〇五年一二月）
・結城正美「〈風土の肉声〉―石牟礼道子『苦海浄土』のサウンドスケープ」（「サウンドスケープ」二〇〇一年五月）
・結城正美『水の音の記憶　エコクリティシズムの試み』（水声社、二〇一〇年七月）
・渡辺京二「石牟礼道子の世界」（『苦海浄土』講談社文庫、解説、一九七二年一二月）
・渡辺京二「地方誌編集者の出会い―石牟礼道子著『苦海浄土―わが水俣病』―」（『本の誕生―編集の現場から―』日本エディタースクール出版部、一九八一年九月）

■終章

・石牟礼道子『春の城』（初出原題「春の城」、「高知新聞」一九九八年一月二十七日～一二月八日、「熊本日日新聞」一

九九八年四月一七日〜一九九九年三月一日、他五紙に連載。→『アニマの鳥』（筑摩書房、一九九九年一一月）→『石牟礼道子全集　不知火　第一三巻』藤原書店、二〇〇七年一〇月）
・石牟礼道子「狂言　紅葉の露」（「群像」二〇〇七年一二月）
・石牟礼道子『最後の人　詩人高群逸枝』藤原書店、二〇一二年一〇月
・石牟礼道子「戯曲　沖宮」（「現代詩手帖」二〇一二年一一月）
・石牟礼道子「戯曲　草の砦」（「文芸」二〇一二年一一月）
・『石牟礼道子全集　不知火　第一三巻』藤原書店、二〇〇七年一〇月）
・『石牟礼道子全集・不知火　第一七巻』藤原書店、二〇一二年七月
・上野英信『出ニッポン記』潮出版社、一九七七年一〇月
・上野英信『眉屋私記』潮出版社、一九八四年三月
・上野英信・趙根在共同監修『写真万葉録・筑豊』葦書房、全一〇巻、一九八四年四月〜八六年一二月
・『鄭義信戯曲集』リトルモア、二〇一三年五月
・森崎和江『からゆきさん』朝日新聞社、一九七六年五月

■資料編

A

・「インタビュー　うえだ・ひろし」聞き手・ジャスティン・ジェスティー、徳永恵太（『，文化，資源としての〈炭鉱〉展〈ヤマ〉の美術・写真・グラフィック・映画』目黒区美術館、二〇〇九年一一月）
・坂口博『『サークル村』創刊前夜」（『復刻版サークル村付録』不二出版、二〇〇六年六月）
・坂口博「解題　上野英信「散文詩　田園交響曲」」（「原爆文学研究」八号、二〇〇八年一二月二〇日）
・茶園梨加「炭鉱夫が炭鉱夫の生活を書くということ―山崎喜与志作品はいかに読まれたか―」（「九大日文」九号、二〇〇七年三月三一日）

B

・「山田文学」九号（一九五五年二月二〇日）、一〇号（一九五五年三月一七日）、一三号（一九五五年）〜二三号（一九五六年四月二二日）、二五号（一九五六年六月）〜二七号（一九五六年一一月）、三〇号（一九五七年一二月）〜三二号（一九五八年四月）、三四号（一九五九年六月一日）

C

・「辺境」第一次創刊号（一九七〇年六月一日）〜第一〇号（一九七三年三月一日）
・「辺境」第二次創刊号（一九七三年一〇月一五日）〜第四号（一九七六年五月一日）
・「辺境」第三次創刊号（一九八六年一〇月一日）〜第一〇号（一九八九年七月三一日）
・「兄弟」創刊号（一九八九年三月二五日）、第二号（一九八九年一〇月二五日）

・『文化，資源としての〈炭鉱〉展「夜の美術館大学」・講義録』企画・編集正木基、目黒区美術館、二〇一二年三月
・上野英信『天皇陛下万歳』筑摩書房、一九七一年一一月
・『石牟礼道子全集　不知火　第二巻』藤原書店、二〇〇四年四月
・森崎和江『かりうどの朝』深夜叢書社、一九七四年五月

謝辞

本論文は、二〇一三年九月に九州大学大学院比較社会文化学府に提出し、二〇一四年三月に博士（比較社会文化）の学位を得た博士論文である。

論文提出にあたり、多くの方々にお世話になった。論者が、九州大学大学院比較社会文化学府修士課程に入学してからご指導を賜った松本常彦教授には、これまでの約八年間、様々なかたちでお世話になった。ひとつひとつの演習発表、学会発表でのご指導や、各論文について、論者の考えを否定するのではなく建設的な意見をくださった。それらは、いつも刺激的なご指摘であった。博士論文として提出するにあたっては、主査として、お忙しいにもかかわらず、各先生方への通知、事務手続きなど、貴重な時間を割いてくださった。また、副査である比較社会文化研究院の波潟剛准教授には、修士課程より指導教官団になっていただいた。日本国内の問題だけでなく、研究テーマが東アジアという大きな枠組みで考えたときに、いかなる意議を持つのか考えるようになったのは、波潟先生のお陰である。副査・鏑木政彦准教授には、主に博士後期課程での授業をきっかけに、指導を賜った。政治思想史について門外漢の論者の考えは、あまりにも稚拙であったと思う。にもかかわらず、快く受け入れて下さった。学外からは、北海道大学の水溜真由美准教授、早稲田大学の鳥羽耕史准教授に副査になっていただいた。水溜先生は、論者がこれまでサークル運動について研究を始めてから、最も影響を受けた先行研究者である。戦後文化運動研究会などでご一緒し、ご指導を賜ってきた。常に水溜先生の後ろ姿を見、追いかけてきた日々だったように思う。同様に鳥羽先生にも研究会を通してご指導を受けたが、特に日本近代文学研究においてサークル運動の研究がどのような意議をもつのかを考えるにあたり、先生のご論考から多くの示唆を受けた。以上、主査、副査の先生方に心からお礼申し上げる。

研究の道を進んだのは、西南学院大学時代の恩師である斎藤末弘名誉教授のお陰である。進路を迷っていた論者に、研究者としての生き方もあることを教えて下さった。当初から研究テーマは変更したが、それでも研究者になりたいという気持ちは変わらず、続けてこれたのは、斎藤先生のお言葉のお陰である。論者が戦後のサークル運動について研究するようになったのは、坂口博氏（元創言社編集人／現・火野葦平資料館館長）がおられたからである。それまで自分の故郷である筑豊について、ネガティブなイメージしか持ち得なかったが、坂口氏から「サークル村」について教示を受け（二〇〇六年三月三日のことだったと思う）、研究対象とすることで自分のなかにある筑豊の地図が更新されたように思う。坂口氏には、その後も第三期サークル村、そしてその後継である筑豊・川筋読書会を通してご指導を賜った。資料についてのアドバイスだけでなく、当事者の方々も紹介してくださった。その

ようにしてお世話になった方として、上野朱氏、上田博氏、大野隆司氏、加藤重一氏、村田久氏、森崎和江氏がおられる。また、森一作氏にも貴重なお話を伺った。上田氏、村田氏、森氏は既に亡くなられている。今後も研究を続けることで、恩返しができればと思っている。

以上の他に、重複はあるが、戦後文化運動合同研究会、第三期「サークル村」、筑豊・川筋読書会、批評理論研究会、比較社会文化学府の松本・波潟ゼミの皆様にもお世話になった。資料閲覧の面で、九州大学記録資料館産業経済資料部門、法政大学大原社会問題研究所、水俣病相思社・歴史考証館、熊本学園大学水俣学現地研究センター、福岡市総合図書館、熊本県立図書館などには便宜をはかっていただいた。また、二〇〇八年四月から二〇一一年三月まで、日本学術振興会特別研究員（ＤＣ１）として特別研究員奨励費の助成を受けた。記して御礼申し上げる。

二〇一四年三月

茶園　梨加

初出一覧

（博士論文としてまとめるにあたり、それぞれ加筆訂正をおこなっている。）

序章　戦後文化運動の成果と課題―北部九州の炭鉱におけるサークル運動と同時代評価を中心に―（「近代文学論集」第三九号、日本近代文学会九州支部、二〇一四年二月）

第一章　戦後サークル誌にみる文学の役割―北部九州のサークル誌①　日炭高松―（「九大日文」一三号、九州大学日本語文学会、二〇〇九年三月）

第二章　文学サークル誌の展開と、その表現―「山田文学」の場合―（「敍説」Ⅲ―10、二〇一三年九月）の前半部分にあたる。

第三章　労働運動のなかの文学―三池と文化運動―（「立命館言語文化研究」第二二巻第二号、立命館大学国際言語文化研究所、二〇一〇年一一月）

第四章　北部九州におけるサークル運動と朝鮮人―上野英信「あひるのうた」が提起する問題―」（「近代文学論集」第三五号、日本近代文学会九州支部、二〇〇九年一一月）

第五章　森崎和江作品にみる聞き書きと詩―「まっくら」、「狐」を中心に―（「社会文学」第三七号、二〇一三年二月）

第六章　石牟礼道子『苦海浄土―わが水俣病』成立の過程の過程（口頭発表「石牟礼道子『苦海浄土―わが

水俣病』の改稿をめぐって」（二〇一〇年度日本近代文学会秋季大会　於・三重大学、二〇一〇年一〇月二四日）／「研究動向　石牟礼道子」（「昭和文学研究」第六七集、二〇一三年九月一日）をもとに、新たにまとめたものである。）

終章　書き下ろし（一部、「後記」（「敍説」Ⅲ―10、二〇一三年九月）と重なる。）

資料編

A　「月刊たかまつ」総目次（「九大日文」一六号、九州大学日本語文学会、二〇一〇年一〇月）

B　文学サークル誌の展開と、その表現―「山田文学」の場合―（「敍説」Ⅲ―10、二〇一三年九月）の後半部分にあたる。

C　「辺境」（第一次～第三次）・「兄弟」総目次と解説（「敍説」Ⅲ―8、二〇一二年六月）